

カレン族の社会・文化変容

— タイ国における国民形成の底辺 —

飯 島 茂 著



東南アジア研究双書 5

序

アジアの社会に関心を持ち始めてから、早十年以上の年月が過ぎ去った。この間にも、地理的にも学問的にもいろいろとさまよって歩いてきた。そのなかで、曲りなりにも、このような仕事をまとめあげることができたのは、京都大学における数多くの先生、先輩、友人などの御指導や御鞭撻に負うところが大きい。とりわけ、本研究を可能ならしめたのは、東南アジア研究センターの奥田東、岩村忍、相良惟一前所長、猪木正道（現防衛大学学校長）、本岡武、石井米雄教授の御高導と御助力の賜物である。また、東南アジア研究センターの第一次五カ年調査研究計画で、苦楽をともしした鳥取大学渡部忠世教授、広島大学矢野暢助教授、京都大学水野浩一、坪内良博助教授、前田成文助手などの皆さんの御助言や御協力を忘れることはできない。なかでも、石井米雄教授と坪内良博助教授には拙稿に御批評をいただき、御啓発いただくこと大であった。

また、拙稿がこのような形で活字になることができたのは、東南アジア研究センターの市村真一所長の御配慮によるものである。

一九六八年末から一九七〇年初頭にかけての苦悩に満ちた大学紛争のなかで、とにかく本書の原稿を完成することができたのは、当時農学部長事務取扱の激務に服されていた、柏祐賢京都大学名誉教授の御指導や御激励があったからである。また、同じ研究室にいた竹士伊助講師や祖田修助手の御厚意も忘れることはできない。

さらに、京都大学人文科学研究所における社会人類学研究班の研究会で、筆者をいろいろと啓発し、学問的刺

激を与えてくださった梅棹忠夫京都大学教授、岩田慶治大阪市立大学教授、川喜田二郎前東京工業大学教授、米

山俊直京都大学助教授をはじめとする、何人かの方々にも負うところがおおきい。

また、タイ国側とのパイプ役になってくださったユネスコ国内委員会伊藤良二事務総長、相良憲昭氏にも、ひとかたならない御助力を賜わった。

さらに、調査をおこなったタイ国においては、国家研究会議、内務省公共福祉局、文部省教育技術局、Chiang Mai 大学、タイ国ユネスコ国内委員会などの皆さんに、いろいろとお世話になった。なかでも、General Netri Khemayodhin, Dr. Prasert Nanagara, Messrs. Charoon Vongsayanha, Prasit Dhitsavath, Vichit Phiyarom, Wanat Phruksasri, Chart Kalayanitra, Ranjuan Intrakhamhaeng, Kiat Kosainsuntorn, Dr. Sanoh Dhamgrongartma の皆さんに御協力をいただいた。

調査地のあった Mae Hongson 県 Mae Sarieng 郡と Lamphun 県 Ban Hong 郡においては、郡役場の方、町の人たち、調査村である Hui Topa, Hui Kani, Ban Hue Dok のカレン族の皆さんの友情や厚意なしには調査研究は不可能であった。とくに、筆者の単調で、しつこい、質問の繰り返しに、きわめて忍耐強く答えてくれた村の人たちに対しては、感謝の言葉もない。これらの素朴な友人たちとの心暖まる交流の数々は、とくに杯をくみかわした楽しい酒宴とともに、今日でもなお、筆者の脳裏からは去らないのである。

また、調査の過程では、Mr. & Mrs. Tongkham Songsaeng, Messrs. Supamit Ariwongse, Yongyouth Radhasantikul, そして、不幸交通事故でこの世を去った Mr. Chamrats Sivichai にもたいへんにお世話になった。

また、原稿をまとめ校正をする段階では、現在の勤務先である東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究

所の岡正雄所長とロンドン大学 School of Oriental & African Studies の Christoph von Fürer-Haimendorf 教授ならびに先輩や同僚の皆さんが与えてくださった自由な研究時間がなければ、作業はもっと困難であったと思われる。

本書の出版に当たっては、創文社社長久保井理津男氏の御厚意がなければ、海外出張中にお引き受けいただけなかったであろう。校正その他出版関係については同社の出版部の皆さんならびに京都大学東南アジア研究センターの水野浩一助教授、橋本由生枝さんなどの方々にお世話になった。

また、本研究の現地調査ならびに文献調査を可能ならしめたのは、京都大学東南アジア研究センター、フォー財団、アジア財団、ならびに関西経済研究センターの御援助の賜物である。

最後に、私情を述べることを許されるならば、生まれて間もない娘を一年間もの間、快くあずかってくれた両親、現地で苦勞を共にしてくれた妻の昌子、内地で辛抱強く待ってくれた娘の由佳などの犠牲や協力を忘れることはできない。

以上の関係者や諸機関のほかにも、本書の作成に当たって、お世話になった方々のお名前は数多く、書き尽くすことはできない。それらすべての方々に対して、拙著の出版に当たり心からなる感謝の気持を表わしたいと思う。

一九七一年六月 ロンドンにて

飯 島 茂

目次

序

はじめに

第一章 概況

第一節 東南アジアの山と平野

A 東南アジアの自然と文化

B 大陸部東南アジアにおける山と平野の住民

C タイ国北部地方における山地民と平地民

i 山地民(二) ii 平地民(一九)

D 山地カレン族と平地カレン族

第二節 カレン族とその分布

A カレン族について

B 分布

第三節 Mae Sarieng 地方について

目次

A	自然条件	三
B	社会的条件	三三
i	一九世紀の状態(三四)	
ii	Chulalongkon 時代前後の状態(三六)	
iii	第二	
iv	戦後の概況(四六)	
v	現状(五〇)	
iv	次世界大戦までの状態(四五)	
要約――	一	三三
第二章	カレン族の家族と親族	五
第一節	家族	五
第二節	結婚	六
第三節	親族	六
要約――	二	七一
第三章	カレン族の村落構造	七
第一節	Hti Topa ― 山地カレン族の村落	七
A	焼畑農業と自給経済	七
i	焼畑農業の類型と分布(七三)	
ii	カレン族の焼畑農業(七九)	
iii	焼畑農	
iv	経済生活(八四)	
B	社会組織	九〇

	i	血の原理(九〇)	ii	政治的リーダーシップ(九七)	
第二章		Hii Kani 村—平地カレン族の村落			一〇五
	A	水田農業のエコロジ—と経済生活			一〇五
	i	水田農業のエコロジ—(一〇五)	ii	市場経済の影響(一一三)	
	B	社会組織			一一五
	i	土地の原理(一二五)	ii	政治的リーダーシップ(一二九)	
要約—三					一三三
第四章		伝統的宗教と儀礼			一三六
第一節		農耕儀礼			一三六
	A	山地カレン族の焼畑農業に関する儀礼			一三九
	B	平地カレン族の水田農業に関する儀礼			一四三
第二節		集団の秩序に関する儀礼			一四四
	A	家神、Bjha と家族儀礼、Ore			一四五
	B	Hii K'cha Ko K'cha の神と Talutaphadu 儀礼			一五九
要約—四					一六四
第五章		村落構造と宗教における変容			一七七

第一節	村落構造の変化	一七〇
第二節	伝統的宗教の変化	一七三
A	“家族儀礼” Ore の変化	一七四
i	“仏壇、Dapo の導入 (二五)	
ii	Chakasi 儀礼について (二七)	
B	Hiri K'cha Ko K'cha の神における社会・文化的性格の変化と村落儀礼 Talutaphadu の発生	一七六
C	Ore 儀礼と Talutaphadu 儀礼の関係	一八〇
第三節	“大きい伝統” との接触	一九三
要約	一五	二〇一
第六章	国民形成による社会・文化変容の促進	二〇四
	——教育と行政の影響——	
第一節	内務省による Tribal Research Centre の設立と山地民に対する仏教の布教活動	二〇五
A	Tribal Research Centre の設立	二〇五
B	仏教の布教活動	二二二
第二節	初等教育の導入	二二八
A	国境警察などによる僻地の学校	二二八

B 文部省によるカレン村の初等教育	三〇
要約一六	三四
第七章 国民形成の指標	三五
——言語問題を中心に——	
第一節 Hti Kani 村をめぐる諸言語	三六
第二節 Hti Kani 村における諸言語の相関関係	三三
要約一七	三五
結語	三七
付録	
一 ビルマにおけるカレン族小史	三七
二 東南アジアにおける焼畑農業	三九
文献目録	三九
索引	一〇

カレン族の社会・文化変容

——タイ国における国民形成の底辺——

はじめに

1 研究課題

現在、世界の各地で国民国家の形成が急速に進行している。なかでも、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの新興諸国においては、いわゆる国民形成 (nation-building) の努力がかさねられて、その傾向が促進されている。このような社会・政治現象に対しては、少なからぬ社会科学者、とくに政治学者が中心になって研究がおこなわれ、数多くのすぐれた労作を生み出している。⁽¹⁾

この問題に関する現在までの政治学者による接近は、おもに、中央政府を中心とする視点からなされたものが多いような印象を受ける。そこで、本稿においては、それとまったく逆の視野から、国民国家が形成されようとしている場合、村落レベルのような国家の底辺で、どのような問題が発生し、また、どのようなメカニズムによって、それが進行するかということについて、筆者なりの記述分析をおこなってみよう。

国民国家の形成という社会・文化変容の過程には、大別して、“自然”で“自生的”な変化と“人工的”で“他生的”な変化との二つの側面が存在している。

ここで、本研究においては、タイ国西北部の Mae Hongson 県 Mae Sarieng 郡に住んでいるカレン族を中心にして、その社会・文化変容の過程を追ってみようと思う。それにより、タイ国における国民国家の形成や国民

形成の底辺に横たわっている現実を知るとともに、変化のメカニズムを解明するつもりである。

この社会・文化変容を別の言葉で表現すると、カレン族における「自己完結性」の高い「部族的」(tribal)な社会や文化が、どのように変容をとげながら、都市や国家などの「外界」と、しだいかかわりあいを持つようになり、「農民的」(peasant)な社会や文化に再編成されていくかを知るためである。このような変化の過程は、一面、カレン族の「農民化」(peasantization)として把握することができるが、同時に、カレン族という山地民系の民族集団の「平地民化」(plains emulation)とも呼ぶことができる。

なお、本書の構成であるが、第一章は導入部分であり、第二章は山地カレン族と平地カレン族に共通している社会組織について概観する。第三章から第五章までは、カレン族の「自生的」変化について記述し、第六章においては、中央政府による国民形成の努力を中心にした、「他生的」かつ「指導された変容」(directed change)変化に言及することにしよう。さらに、第七章においては、国民形成の指標として、言語問題に接近をこころみることにする。

(一) 例えは、Deutsch (1963) "A Selection of Recent Works on Nation-Building" pp. 132-50 参照。

2 研究方法

ある民族集団や地域社会の社会・文化変容の過程を研究する場合に、およそ三種類の方法が考えられる。すなわち、その第一は、ある一定の民族集団や地域社会を選定して、それらをかぎり長期間にわたって追跡調査して、通時的(diachronic)な観察をおこなう方法である。第二は、まず現在の社会や文化を直接観察により研究をおこない、ついで年寄りの記憶や古い資料などをたどりながら昔の生活様式を調べ、両者を比較研究する方法である。

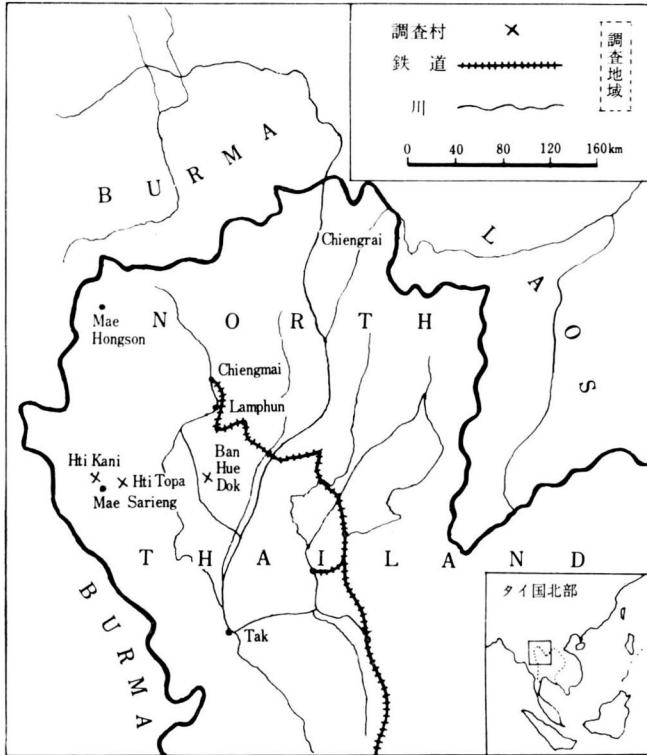


図1 タイ国北部

第三は、地理的に異なる立地をしている、相対的に“発展”した社会や文化と相対的に“発展の遅れた”社会と文化を比較研究することによって、一連の社会・文化変容の過程を知る方法である。

筆者は本稿においては、第二の方法に第三の方法を加味して、カレン族の社会・文化変容の過程をたどり、その展開のメカニズムを説明しようと思う。すなわち、山地カレン族の村 Hti Topa において、第二の方法により、かれらの社会・文化変容の流れを知り、つぎに平地カレン族の村 Hti Kani においても同様な方法を用いて、かれらの社会・文化変容の文脈をとらえた。そして、最後には第三の方法によって両者の比較をおこなって、カレン族の社会・文化変容に接近し、その全貌を把握しようとしたのである。

このような研究方法によっては、この地方におけるカレン族の歴史

が完全に再構成されるとは思われない。また、タイ国のカレン族に関しては、この国が独立国であった関係で、ビルマにおけるカレン族の場合とは異なり、植民地官吏や宣教師が残した資料が十分に存在していない。そのために、カレン族の歴史が資料的に再構成されることもあまり期待できないと思う。しかしながら、現在筆者が用いている研究方法によって、カレン族が、ある社会・文化類型から他の社会・文化類型へ変化していくメカニズムはある程度解明できると考えられる。本稿においては、このような主旨のもとに、筆が進められる。

なお、この論文の基礎になったフィールド・ワークは一九六三年三月から一九六四年四月、さらに一九六四年一月から一九六五年七月にかけて、合計二一カ月間にわたっておこなわれたものである。調査対象になった村は、*Mae Sarieng* の町の東方約二〇キロメートルほどの所にある山地村 *Hi: Topa* と *Mae Sarieng* の町の西北郊外二キロメートルほどの所にある平地村の *Hi: Kani* である。これら両村はスゴー・カレン族 (*the Sgaw-Karens*) の村落である。

なお、補足的には一九七〇年五月から六月にかけての二カ月間におこなわれた現地調査の資料も使用した。その調査の対象となったのは *Ban Hue Dok* と *Chiangmai* 南方約八四キロメートルのハイウェイ沿いにあるポー・カレン族 (*the P'wo Karens*) の村落である。いずれにせよ、三カ村とも、村人たちのプライバシーを守るために、本稿においてはすべて仮名を使用した。

第一章 概況

第一節 東南アジアの山と平野

A 東南アジアの自然と文化

東南アジアは自然的にも文化的にもきわめて多様性に富んでいる。ビルマの北端には東南アジア最高峯で、東ヒマラヤ山脈に属しているカカルボラジの雪山がある。また、中国の雲南省に發する山並みはビルマのシャン高原、ラオス北部とヴェトナムの山岳地帯へと続き、ここでは亜熱帯的大陸性気候のもとに、照葉樹林帯が發達している。このあたりは、われわれ日本人がもっている東南アジアの自然というイメージからはほど遠い。

また、それときわめて対照的な自然的景觀はマレーシアからインドネシア、フィリッピンにかけての海岸地方や島嶼である。十分、かつ較差の少ない気温と恵まれた降雨のおかげで、熱帯的海洋性気候のもとに熱帯性降雨林が卓越し、われわれの東南アジアに対するイメージの中心をかたちづくっている。

以上のような地理的多様性と同時に、この地方は文化的多様性の面でもきわめて顕著である。たとえば、組織宗教の面からみると、北ヴェトナムの大乗仏教、ビルマ、タイ国、ラオス、カンボジャ、南ヴェトナムの小乗仏教、マレーシアとインドネシアのイスラム教、さらにはフィリッピンにおけるカトリック教と枚挙にいとまがな

また、言語についてもきわめて多様である。東南アジアの言語を大掴みに分類すると、シナ・チベット語系 (Sino-Tibetan) 、モン・クメール語系 (Mon-Khmer) またはオストロアジア語系 (Austroasiatic) 、そしてマラヨ・ポリネシア語系 (Malayo-Polynesian) またはオストロネシア語系 (Austronesian) の三大語族からなっている。もっとも、これまでいわゆるタイ語族 (Tai) として、シナ・チベット語系に分類されていた語族は、近年の研究によると、⁽¹⁾ 別個の集団として分類しなおされて、タイ・カダイ語系 (Tai-Kadai) として呼ばれるようになった。そのため、最近の出版物においては、東南アジアの言語を四集団に大分類するものが現われてきている。⁽²⁾ いずれにせよ、これら諸語族をさらに詳細に分類していくと、そのやり方によっては、東南アジアの言語は数十、あるいは数百に分類されることになる。

以上のように、東南アジアにおける文化的諸要素を分析していくと、われわれの目につくのは、もっぱらその地方における文化的多様性である。しかしながら、真実は果たしてそうなのであろうか。

このように東南アジアについて、多様性だけを強調するのは事実の一面しか物語っていないのである。たとえば、家族構造、女性の地位の高さ、アニミズム、生産技術の性質⁽³⁾ などは東南アジア諸国の共通点として、文化的基礎を形成していると考えられる。この点、アメリカの文化人類学者 Robbins Burling 教授がきわめて明確かつ簡潔に述べているので、ここに引用しておくことにしよう。

「このように共通の特徴がひろく分布していることは、東南アジアの多様性の底に、統一性が横たわっているという印象を与えている。ところが、逆説的にいうと、この地域の多様性こそが決定的な統一性をもたらしているのである。

東南アジアのいずれの国にも山地民と平地民がいて、それぞれの生活様式の差異——時には抗争——がわれわれのこの地域にたいする理解の整理を助ける鍵になるのではなからうか。東南アジアにおけるいかなる国家をとってみても、相対的に同質的で、多数の人口からなっている平地民がその中核をなしている。この種の平地民は単一の主要な言語を話し、世界宗教の一つに帰依していて、集約的な水田稲作に生活は依存している。ところが、いずれの国も山地民という少数民族をかかえていて、かれらはきわめて異質的なものである。山地民は雑多な言語を話し、かれら自身の政治的統一性はない。それに、近年に至るまでは、平野部とはほそぼそとした政治的紐帯以上のものもっていなかった。山地民は通常焼畑農業をおこなっていて、平地民に比べると、仏教徒、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒になる速度がきわめて緩慢である。⁽⁴⁾」

- (1) Benedict (1942)
- (2) LeBar *et al.* (1964)
- (3) Burling (1965) p.2
- (4) Burling (1965) p.4

B 大陸部東南アジアにおける山と平野の住民

ところで、大陸部東南アジアにおける山地民の文化と平地民の文化については、岩田慶治教授がたいへんに示唆に富み、要領をえた説明を展開している。山地民における「閉じた文化」と平地部に住んでいる大民族の「開いた文化」を対比させながら、説明をおこなっている。このような情況はまさに本論文の舞台になっているタイ国、とりわけその北部地方の状態にそのまま妥当するので、ここに引用することにしよう。

第一章 概況

「文化の山地型、つまり〈閉じた文化〉においては、文化の諸要素が互いに求心的に関連しあい、積分的に相互

依存を高めながら全体としての緊密さをましてゆく。そこでは、①文化は高度に様式化しひとつの型をつくりあげる。伝統を重んじ、バックボーンを尊び、独特の文化を築きあげてゆく。②したがってそこでは文化の特異性が強調され、とくに他の民族文化との差別意識がつよい。民族固有の服装を尊び、民族としての制服愛好者である。しかも、そのデザインはきわめて複雑で、時として装飾過剰におちいり、文様の固定化、ぎごちなさがみられる。③保守的で現状維持の態度がつよく、その文化は過去に指向性をもつ。価値基準はあくまで過去の栄光の時代におかれている。④かくして当然ながら、彼らの文化内容は一方において、一樣化、規格化への傾向がつよく、他方、相互の差別感がつよい。また、政治的には統制の原理が優越している。⑤心理的に、また宗教的には非寛容、排他的で、他の信仰ないしひろく生活様式をうけ入れることが少ない。あるいはこれをうけ入れるならば従来をの宗教をすててしまわねばならない。

これに対して平地型ないし「開いた文化」における文化統合は、①様式化への傾向はよわく、むしろ文化の機能的展開を特色としており、その場、その状況に応じて文化の組成を機能的に調整してゆく。そこでは有用性、効用が尊重され、便宜主義が力をえている。②文化の特異性ないし独自性はないして尊重されることはない。伝統的な服装は何の抵抗もなしにシャツとズボン、ブラウスとスカートにかえられ、古風な民家はたちまちにトタン屋根にふき替えられてゆく。文化はここでは伝統の旗じるしのまわりに結びついたものではなく、有効性の尺度によって何度も測り直され、組み替え可能なものとなっている。③伝統主義、保守主義はここでは現実主義にとつてかえられ、調和、均衡の原理、バランス・オブ・パワーの原理が支配している。また、系譜にもとづくタテのつながりに対して、同世代感覚にもとづくヨコの連繋が強調されている。孤高を持することは愚かなことであり、力関係を巧みに利用することが最上の保身延命の策である。したがって商業、とくに仲介商業は彼らにと

ってきわめて魅力ある生活手段である。また、この点に関する彼らの才能も並々ではない。④彼らの文化はかくして一様性、規格性に欠け、その場に應じてさまざまな変異をしめす。同一村内の一方にカヤ葺きの豪壮な家があるかと思えば、他方には総竹づくりの鳥小屋のような家もあるといった具合である。時として彼らの文化は開拓の様相をしめすことがある。⑤宗教的には彼らは寛容であり、日本におけると同じくシンクレティズムをその重要な特質としている⁽¹⁾。

では、このような「閉じた文化」を持った山地民と「開いた文化」を持った平地民は本稿が取り扱おうとするタイ国北部において、どのように分布し、また共生しているのであろうか。それではつぎにこれを具体的にみることにしよう。

(1) 岩田 (1967) pp. 410~11

C タイ国北部地方における山地民と平地民

i 山地民 Bangkok の Don Mueang 空港を発って、はじめてタイ国北部の都 Chiangmai に向かう者にとって、まず驚くことは中部タイ平原が平坦なまま果てしなく続くことである。飛行機の窓から見えるものは水田、また水田の連続であり、さらにその間をへびのようにくねりながら、かつ色の水をゆうゆうとたたえている川の流れである。そこには、われわれの求めようとしている山地民のすみかになりそうな丘陵の影すらもない。

概況 Bangkok 出発後一時間余りして、やがて Lampang に着こうとする寸前から、待望の山がわが眼下に現われだす。ふと気がつくくと、Maenam Chao Phraya の広大な沖積平野に見られた、川の流れにそった散村的な人家はもはやそこには見当たらない。目につくのは、山間の平坦部に寄り添うように作られている集村的な平地民の

村落である。また、時にはみどり一色の山岳地帯には、げのような焼畑の跡が目に入ると、その付近には必ずといってよいほど、山地民の家屋がまばらにちらばっている。このあたりから、タイ国における山地民の世界が開けてくるのである。

このタイ国北部地方一帯は伝統的には *Lannathai* と呼ばれ、自然的にも文化的にも中部タイ平原からはっきりと区別されている。かつては、*Chiangmai* を中心とするいくつかの王朝がさかえ、独特な文化と伝統を誇っていた。しかしながら、一九〇二年に *Chiangmai* 王朝が *Bangkok* の中央政府に合併されるに及んで、タイ国領土の一部として編入され、現在では十四の県(1)からなっている。この北部地方には南北の方向に山脈が走っていて、その高さは二〇〇〇～二五〇〇メートルにおよぶ。最高峰は *Chiangmai* 西南方数十キロメートルの所にある *Doi Inthanon* で、海拔二五一六メートルといわれている。しかしながら、山地民のすみかはおもに海拔一〇〇〇～一五〇〇メートルの高原地帯が中心になっているように思われる。

一方、このような山岳地帯の間には南北方角に盆地状の平坦部がひろがっている。そのおもなものとして、北からあげると、*Chiangrai*, *Chiangdao*, *Chiangmai*, *Nan*, *Langpang*, *Prae* などの盆地が存在している。これらの盆地は北方の山岳地帯に源流を發している *Mae Ping*, *Mae Wang*, *Mae Yom*, *Mae Nan* の流域に發達したもので、そこではかつて大小さまざまな王朝の盛衰がみられたのである。

ところで、山地に住む住民については、平坦部住民に比べて、交通が不便だったり、定着性がひくかったりするため、なかなか実態は把握しにくい。従って、これまで多少断片的な記述や分析がおこなわれてきたに過ぎない。ただ、一応総括的にタイ国北部における山地民を扱ったものとしては、*Gordon Young* 氏による *The Hill Tribe of Northern Thailand* の初版が一九六一年に出版されている。この本の記述の一部にはいささか問題を

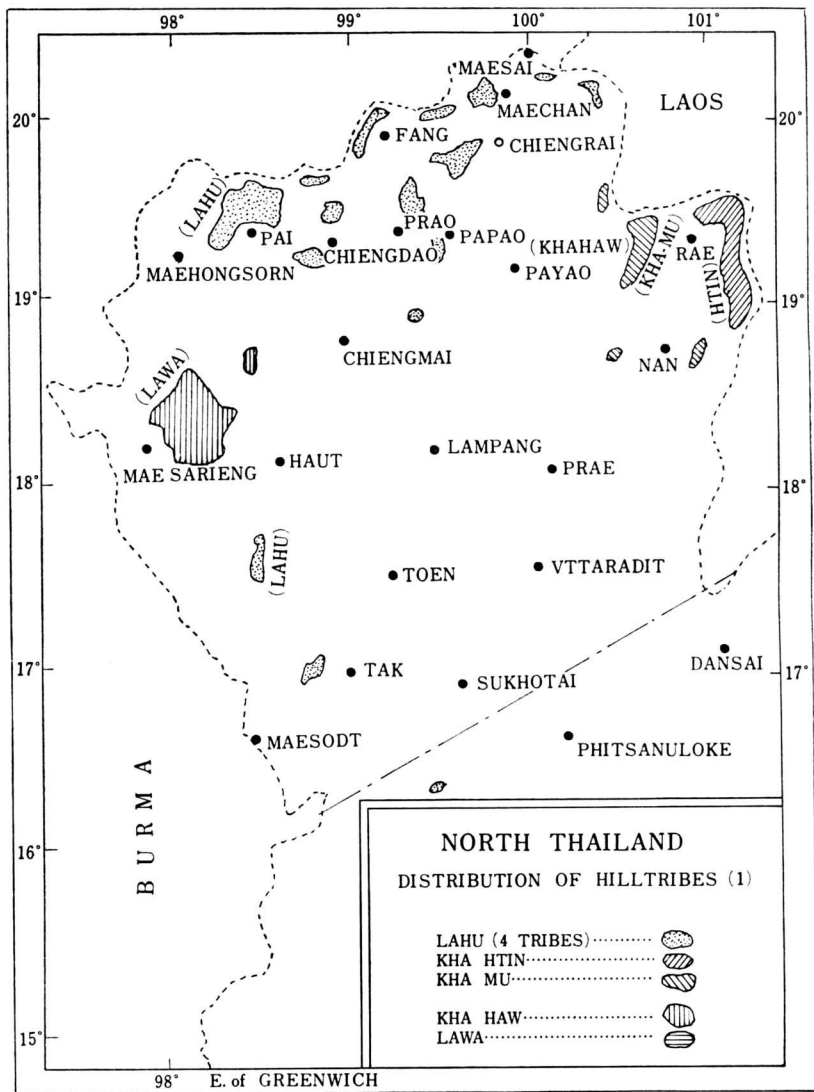


図2 タイ国北部の山地民の分布図(1)
Young (1962) xi

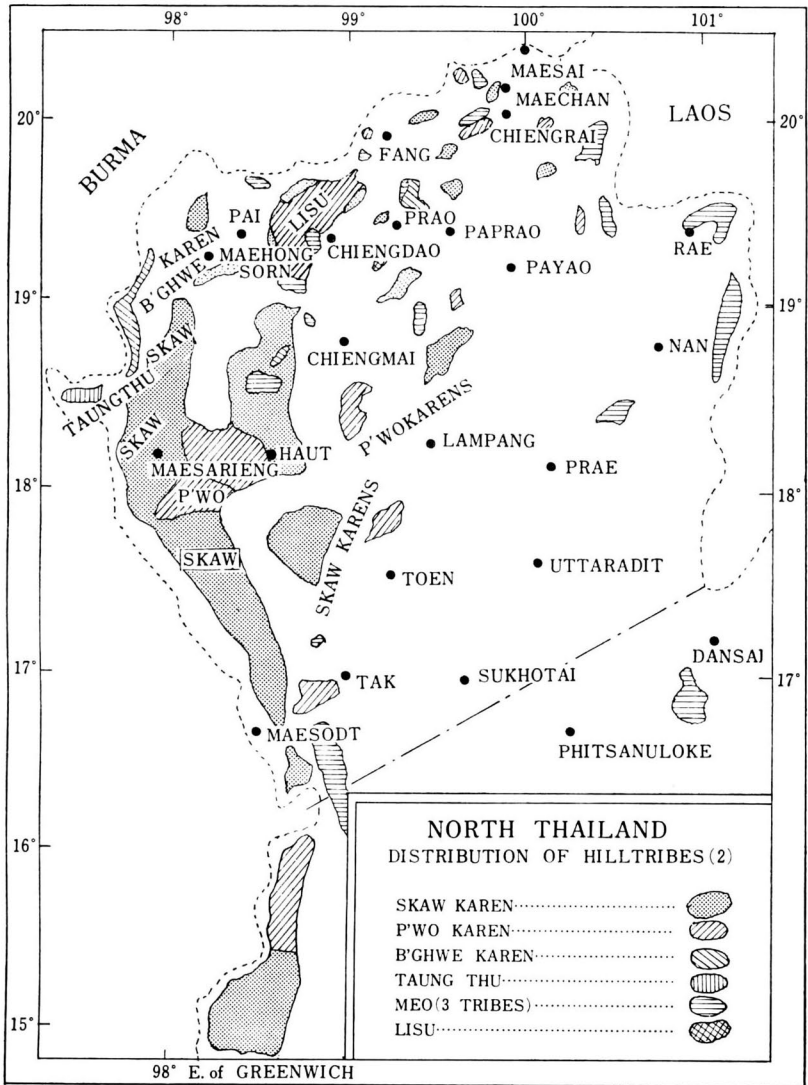


図3 タイ国北部の山地民の分布図(2)

Young (1962) xii

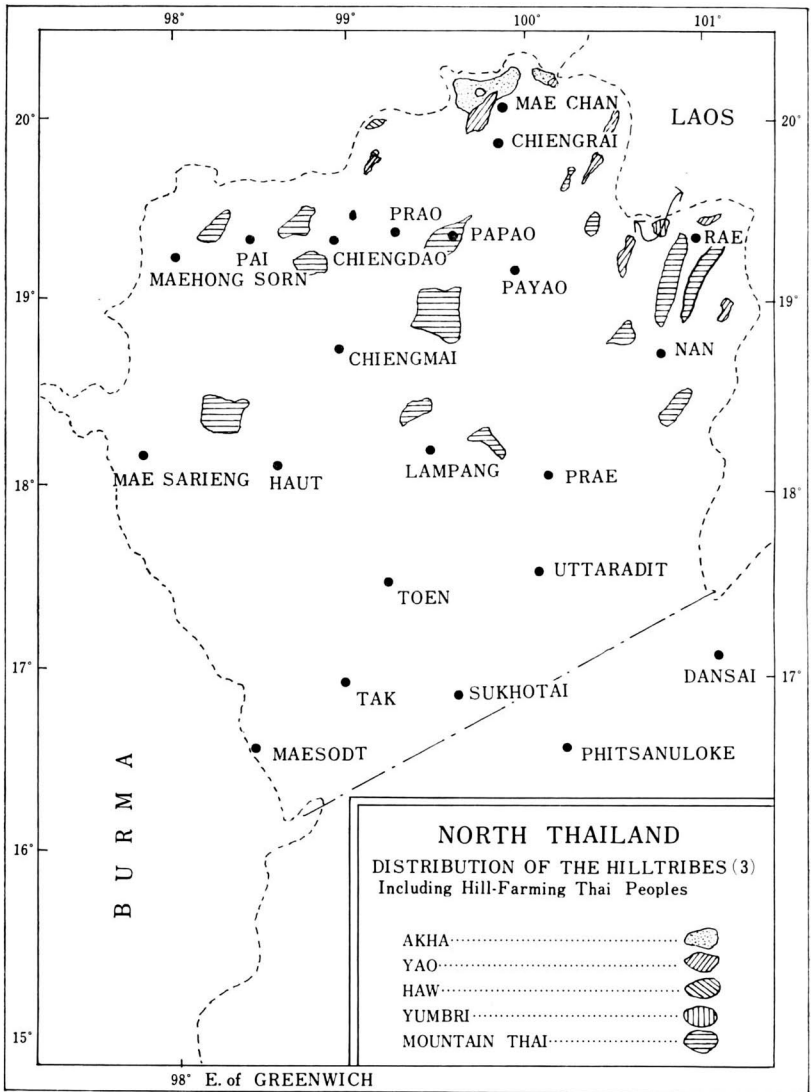


図4 タイ国北部の山地民の分布図(3)

Young (1962) xiii

感じない訳ではないけれども、前述のごとく、タイ国北部における山地民を総合的に把握している唯一の文献なので、これを典拠として要約しながら筆を進めることにしよう。⁽²⁾

a Yao 族 雲南からラオス北部の山岳地帯にかけてひろく分布している。その南端はタイ国北部にも及び、Chiangrai, Nan, Chiangmai 県に少数が到達している。かれらはけし栽培を含む焼畑による山地農業に従事して、そのほか豚や牛などの家畜の飼育をおこなっている。

b Meo 族 Yao 族と分布の範囲はほぼおなじであるが、タイ国においては Meo 族のほうがやや数がおおつ。亜族としては Blue Meo 族、White Meo 族、Gua M'ba Meo 族がいるが、それらは Nan, Chiangrai, Chiangmai, Tak, Prae を中心に Perchaboon や Pitsanulok の諸県に至っている。

ラオス国境寄りの人里離れた山岳地帯に住んでいる Meo 族は、Yao 族と同様にけし栽培を中心に、じやがいもなどを作りながら、豚の飼育をおこなっている。一方、タイ国領内でも南方に進出して、比較的タイ系平地民との接触をおおく持つようになっている Meo 族は、官憲の目を恐れて、けし栽培はおこなわない。その代り、豚の飼育などを中心に、比較的発達しているかれらの山地農業の技術を利用して、とうがらしとか野菜などの園芸的、農業に従事している。

c Lisu 族 分布の中心は中国の雲南省から北ビルマの Kachin 州にかけての山地にひろく住んでいる。タイ国におおつは Chiangmai, Mae Hongson, Chiangrai, Tak などの諸県に分布している。Lisu 族はおもにけし栽培に従事し、同時に豚や牛などの飼育をおこなっている。

d Lahu 族 ビルマの Shan 州の山岳地帯にもっともおおく住み、一部は雲南省にも分布している。タイ国におおつは Chiangmai, Mae Hongson, Chiangrai, Tak に分布し、Lisu 族と同様にけし栽培と牛豚などの

家畜の飼育をして生計をたてている。

e Akha 族 ビルマの Shan 州から西北ラオスの山地に分布しているが、タイ国においては Chiangrai 県の国境地帯の高地に住み着いている。かれらの経済はけし栽培によるところが大であるけれども、他のチベットの・ビルマ語系諸族よりも採取民的性格がよく、ジャングルで動物を捕ったり、植物性の食物を採取して生活している。

f Karen 族 Karen 族については、本稿の主要テーマであるために、本章第二節において詳しく述べるので、ここでは記述を割愛することにした。

g Austroasia 語系山地民 Kha Htin, Kha Haw, Kha Mu などの諸族はタイ国北部のラオス寄りの山岳地帯や僻地に住んでいて、陸稻、けし、茶、野菜などの栽培をおこなっている。そのほか、ラオス北部からタイ国北部にかけては Lawa 族がひろく分布しているが、かれらはいわゆる一般の山地民とおもむきごとにし、かなり昔から平野部に進出している。一説には北タイ族 (Tai Yuan, いわゆる Khon Muang) が Chieng-mai や Lamphun に王朝をぎぎく以前には、そのあたりに Lawa 族の王朝が存在したといわれるほどである。かれらは現在ではおもに Chiengmai や Mae Hongson 県に分布しているけれども、かなりの人数の者はタイ化して平地民になったとされている。

況 Austroasia 語族の一派と信じられている Yumbri 族は、別名 Phi Tong Luang すなわち「黄色い葉の精霊」として知られている。かれらはタイ国とラオスの国境沿いの Nan 県を中心に Chiengrai 県の一部にわたる山岳地帯のジャングルで、狩猟採取的な漂泊生活をおくっている。かれらはこのあたりではいちばん原始的な生活様式をいまなおいとなんでいると伝えられている。

以上、タイ国北部の山岳地帯に住んでいる山地民に焦点を合わせて、かれらの水平的分布について述べてきた。一般的にいつて、大陸部東南アジアにおいては、山地民の故郷が雲南、北ビルマ、北ラオスといったような北方に集中しているのと、地形的に山岳地帯が支配的なので、「北部においては、…山地民族の分布は濃密であり、南下するにしたがつてこれが粗となる。山岳民族、山腹・山麓民族、平地民族の雑居する北部と、平地民族のみの占拠する南部、こうした地域的性格が見いだされるであろう。もちろん、山地民族の種族的系統は地域的にそれぞれ相違している。」⁽³⁾

山地民は上述のような水平分布の差異のほかに、高度による垂直分布の相違も認められる。このような民族集団による垂直分布については、筆者がかつておこなったネパール・ヒマラーヤにおいては、諸要因のきわめて顕著な相関が見出された。⁽⁴⁾ここでは、標高による気候区分Ⅱ自然的環境と農牧を中心とする基礎経済、そのほかの生活様式、宗教の分布、従つてまた、民族集団の分布が驚くほど一致している。換言すると、ヒマラーヤ地方で筆者が見出した事実は、土地利用形態と民族分布とがきわめて深い相関関係をもつて、かかわりあつていゝうことである。

しかしながら、タイ国北部においては、山地民の垂直分布の法則性については、いまだにあまり明確な事実は十分に把握されていない。だが、全体としては、図5のように一定の分布のしかたをしていることは事実である。すなわち、ごく大掴みに言つて、タイ国北部における主要な山地民の垂直分布を見ると、海拔約一六〇〇メートル以上に住んでいる Lisu 族や Meo 族、一三〇〇メートル前後にゝる Akha 族、約一〇〇〇〜一五〇〇メートル付近に分布する Lahu 族を最高地に住む民族集団とすると、中位の高度にいるものとしては、約一〇〇〇〜一二〇〇メートルにかけて Yao 族と Lawa 族がいる。そのほかいちばん標高のひくい所に定着している山

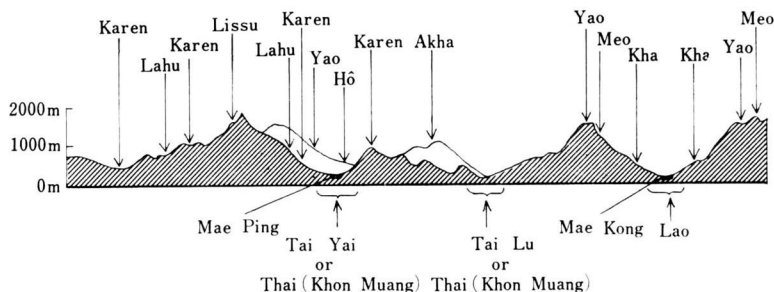


図5 タイ国北部とラオスにおける山地民の分布概念図 19°~20°Nにおける状況

岩田 (1966) p. 361 (一部の用語を修正)

地民としては、Kha Mu (Khamu), Kha Hin (Khatin), Kha Kaw (Kakaw) などのオストロアジア語系の諸族のほかに、本稿でこれから取り扱おうとしている Karen 族などがいる。これらの民族集団は海拔六〇〇~一〇〇〇メートルぐらいのところに分布している。

ii 平地民

タイ国における中央平原はもちろんのこと、北部地方の山岳に囲まれた平坦部の大部分はタイ族 (全体的には Tai もしくは中部タイ人に対してはとくに Thai を用いる⁽⁵⁾) によって占拠されている。タイ語族は、いうまでもなく、大陸部東南アジアにおける最大の民族集団であるといわれている。その総数はじつに三〇〇万人にも及ぶという。分布の範囲は北緯七度から二六度、東経九四度から一一〇度に及んでいる⁽⁶⁾。これを現実の地理的空間に置き換えると、北は中国の雲南省から廣西省チワン族自治区、海南島、西はインド領アッサム州、ビルマのカチン州からシャン州にかけて、さらに北ヴェトナム、ラオス、タイ国にまで及んでいる。

タイ語族はいろいろな亜族に分類されているけれども、全体的にみて、その言語的同質性はきわだっているといわれている。

ところで、タイ国はその国名ムアン・タイ Muang Thai, すなわち「タイ人の国」が如実に示すように、タイ族が中心になって、国家形成がおこなわれた国である。その主導権を握った民族集団は、いわゆ

るタイ人（以前はシャム人と呼ばれた）、すなわち、*コン・タイ Khon Thai* である。かれらは、本論文の文脈の主要な部分と関係のある北部地方の平地民の中核である北タイ人の *コン・ムアン Khon Muang*（文字通りには「町の人」とは区別されている）。

北タイ人はいろいろな点で、中部タイ人とは文化的差異が指摘されている。たとえば、もち米を食べる習慣、言語、仏教の様式、歴史的伝統などの相違があげられている。

それでは、北タイ人とはどのような民族集団なのであろうか。かれらがどのようにして、形成されてきたかという問題について、ふたたび岩田教授の示唆に富んだ分析とそれにともなう仮説を引用してみよう。

タイ語族全体としての社会・文化発展のなかで、*コン・ムアン* という北タイ人の位置づけが、きわめて明確に位置づけられていて、山地民と平地民との関係を知るうえでも興味深いのである。

「北部タイの古都 *チェンマイ Chiangmai*, *ランブーン Lamphun*, *ランパン Lampang*, *チェンライ Chiengrai* などを中心とする地域の住民は一般に *コン・ムアン Kon Muang (Khon Muang)* と呼ばれている。北部タイの地方人というわけである。ところでこの *コン・ムアン* のなかには北方から部族的なタイ族が南下混入してゆく。*タイ・ヤイ族 Thai Yai (Tai-Yai)* —— 正しくは *タイ・ヤイ族* のなかの *ニョー族 Nyo* ——、*タイ・ルー族 Thai Lu (Tai-Lu)* などがこれにあたり、かれらの社会には北方の故郷、すなわち *シャン* 高原と *雲貴* 高原における部族的な伝統がいまだに脈々と流れつづけているようである。かくしてタイ国においても北から南に部族的な *タイ*、地方的 *タイ*、国民的 *タイ* がほぼ帯状に配列されているとみることができ。

以上のごとき部族、民族の地域的配置をさらに動的に、いわば歴史的展開の様相をしめすものとしてみたものが図6である。ここで第一のステージは *インドシナ* 半島北部および *雲貴高原* における状況をしめす。ここではタ

イ諸部族、例えば黒タイ族、赤タイ族、白タイ族、ルー族、タイ・ヤーイ族などが周辺山地の非タイ系民族、例えば苗族 Meo、瑶族 Yao、リス族 Lisu、ロロ族 Lolo、カレン族 Karen、ラフ族 Lahu、ホー族 Hô などと対抗し、あるいは共存しながら地方的な一種の多民族社会を構成していたときである。ここでは周辺諸族にたいするタイ族の政治的・経済的優位は未だ十分に確立されていない。それどころか、かれらは時としてチベット・ビルマ系民族の支配下に従属していることもあったのである。次に第二のステージはタイ族のうち若干の種族、例えばタイ国のタイ・ヤーイ族、タイ・ルー族……などが河谷ぞいに南下し、互いに交錯し、一種の混合文化を形成しながら、地方的な社会・経済体制をつくりあげてゆく過程である。タイ族の平野展開にともなつて従前の部族的社会体制からの脱却とタイ族を中心として周辺異民族を統合した一種の種族階層的な社会体制が形成される。山麓や平野の要衝に地方町、地方都市を建設し——いわゆるチェン Chiang (町) の建設——、これら交易センターを育成しながら地方の統一をはかり、時には土侯国の成立をみたこともある。北部タイのコン・ムアン社会は以上のごとき経過をへて形成されたものと思われる。部族的統一にかわる地方的統一の時期といふことが出来るであろう。次に第三のステージは中央からの強い政治的・経済的影響にさらされて地方的差異が稀薄化し、統一されてゆく過程、地方人にかわつて国民が形成されてゆく過程である。……タイ国においてはチュラロンコン帝による政治・経済・社会・教育における革新的な企てのもとに大いに近代化が促進され、国民感情、国民意識の高揚をみた。問題はタイ国におけるナシヨナリズムの勃興ということであるが、ここではバンコクを中心とするタイ人、タイ語、タイ文化が標準的なもの、ひとつの典型として国の隅々に浸透しつつある……⁽⁸⁾ 以上のように、岩田教授によると、北タイ人、すなわちコン・ムアンのタイ国における位置づけがきわめて明確におこなわれている。

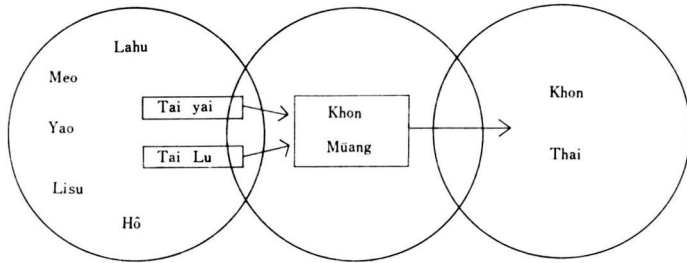


図6 タイ国における社会発展

注 岩田 (1964) p.6 より ただし、民族集団の呼称は本稿の用語にあわせる

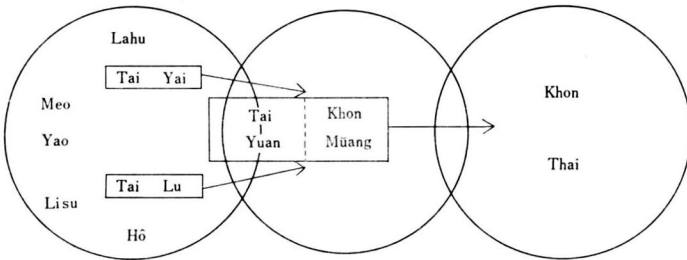


図7 タイ国における社会発展

注 岩田 (1964) p.6 第2図Aを筆者が修正する

そこで、筆者がこの論旨に付け加え、タイ族の歴史的発展の概念図6を修正すると、図7のようになるのではないかと思う。すなわち、コン・ムアンという「地方的タイ族」の母体については、同教授の説明では触れられていなかったけれども、いわゆるタイ・ユアン族 Tai Yuan がきわめて重要な役割を果たしているように思われる。

タイ・ユアン族は古くから Chiangmai を中心にタイ国北部地方一帯に分布していて、言語的にはタイ・ルー族やタイ・クーン族 Tai Khün と近縁の関係にあり、 Mae Khong 川以南のリンガフランカであるといわれている。岩田理論に従って理解すると、かれらは元来タイ・ルー族やタイ・ヤイ族のように、多分に部族的性格のつよい民族集団であったように思われる。しかしながら、かれらはかなりはやくから現在タイ国の北部になっ

ている地方の平坦部に進出し、地方的タイ族と化したと考えられる。従って、タイ・ユアン族はみずからメタモルフオーゼをおこなって、他の部族的タイ族にさがけて、コン・ムアンの母体となり、いわばタイ族の歴史的発展のこの段階におけるメルティング・ポットになったと思われるのである。

以上のような意味で、北タイ人は E. R. Leach 博士がビルマ北部のシャン人 Shan をえがいたの⁽⁹⁾と、まったくパラレルな状態であるといえよう。すなわち、Leach 博士はシャン人をいわゆる形質人類学的な意味での“人種”として把握することをしりぞけ、平坦部で水田稲作に従事し、仏教を信仰する生活様式をいとなみ、シャン語を話す者としてとらえている。それ故、シャン人の社会を成立させている最大の要素は環境であるとも述べている。

いずれにせよ、シャン人と同様に北タイ人はタイ国北部の平坦地で、もち米⁽¹⁰⁾を中心に水稻栽培をおこなっている仏教徒であり、北タイ語をなしている者として特徴づけられよう。かれらは焼畑農業を中心としてアニミズムを信仰し、種々な言語を話している山地民の“部族的”社会とはきわめて対照的な生活様式をいとなんでいるのである。

第一章 概 況

- (1) Chiengrai, Mae Hongson, Chiangmai, Nan, Lamphun, Lampang, Prae, Uttaradit, Loey, Tak, Sukhothai, Pitsanulok, Perchaboon, Kamphangpetch
- (2) Young (1961)
- (3) 岩田 (1966) p. 361
- (4) 飯島 (1961) pp. 101—13
- (5) タイ国北部におけるタイ族については、‘Tai’を用いることがおおい。しかし、慣例に従い、中部タイ人の場合には ‘Thai’ を使用する。
- (6) LeBar (1964) p. 187

- (7) チベット・ビルマ語族に属し、中国の雲南省を中心に、その分派はビルマ北部、ラオス北部にかけて分布している。
- (8) 岩田 (1964) pp. 5—7
- (9) Leach (1964) pp. 29—41
- (10) ラオスと同様に、タイ国北部はもち米地帯で、北タイ人のほとんどがそれを常食としている。しかし、Mae Srisiang の谷間に住んでいるタイ・ユアン系北タイ人は、例外的に、うるち米を常食にしている。

D 山地カレン族と平地カレン族

以上述べてきたような、山と平野における住民のきわめて対照的な生活様式というものは、ミクロな立場からみると、本稿の中心的テーマであるカレン族自体のなかにも見出すことができる。そこで、詳細な記述に先立ち、山地に住むカレン族と平地に定着しているカレン族の文化の微妙な差異についてインプレシヨニステックな見方をおこない、そこからさらに論を進めようと思う。

ではここで、比較的中立の立場にある教育を受けたカレン族の壮年の人に、山地カレン族と平地カレン族の目立った相違について述べてもらったことを要約してみよう。

- (1) 山地カレン族は大声で話をし、歩き方は、はやく動作はあらっばい。
- (2) 山地カレン族は食事を指で食べながら、あまり口をきかない。しかし、平地に住む連中は食事にはスプーンを使い、よくしゃべりながら食事をする。
- (3) 山地カレン族の娘は知らない人とはあまり長話をしないけれども、平地カレン族の娘はだれとでも平気で長話をする。

そのため、山地カレン族は平地カレン族を“道德的”とは思っていない。

(4) 山地カレン族は自分の食糧が十分でない場合でも、客には食事を出さなければならぬ。けれども、平地の連中はかならずしもそうはしない。このような山地カレン族の義理がたさが、かれらの貧困の原因の一つであるとさえいふ人もある。

(5) 平地カレン族はタイ系の平地民と同様に、人から品物をもらっても謝意を表わさない。それに、山地カレン族ほどお礼のことも考えない。

(6) 平地カレン族は「独立性」があるけれども、山地カレン族は相互依存的である。

(7) 山地カレン族は元来うるち米を常食にしているけれども、平地に移住すると、ところによっては北タイ人のように、もち米を食べるようになる。

(8) 平地カレン族は周囲に住んでいる平地民とおなじように、ばくちをする者がおおい。

(9) 平地カレン族は、周囲に警察の目が光っているために、儀礼のようなだいたいな時ですら、酒を自分で醸造することはできない。そのために、宗教儀礼をおこなうのにも、購入した酒をその目的に使用して、伝統的信仰生活をそこなっている。

以上のように、山地カレン族と平地カレン族をごく表面的に観察してみても、両者の間にはきわめて顕著な差異が存在するように思われる。このような両集団の相違は果たしてどのようにして形成されたのであろうか。それとも、かれらの「固有」の差異なのであろうか。

第一章 概 況

山地カレン族と平地カレン族を比較してみると、いちばん明白に分かることは、「閉じた社会」から「開いた社会」への展開であり、また換言すると、「部族」から「農民」への社会・文化変容の姿である。本稿においては、さらにこの点を詳細に、また具体的に掘り下げてみようと思う。



写真1 山地カレン族の少女

第二節 カレン族とその分布

A カレン族について

カレン族の分布している大陸部東南アジア、すなわちインドシナ半島の諸民族の歴史は北から南に向けての民族の移動の歴史であるといわれている。このような主張はドイツ・オーストリア系の「文化圏学説」の学者によって、ながくとなえられてきて、今日でもその系譜にある学者は、

ある者は公然と、ある者は潜在的にこの説を認めている。

もちろん、筆者自身は「文化圏学説」を踏襲する者ではないけれども、大掴みにいって、インドシナ半島における民族移動の主流が北から南の方向に向かって流れている事実を完全に否定するものではない。

本論文が取り扱おうとするカレン族もその範疇のそとにあるものではないようだ。カレン族の伝説によれば、かれらも大昔に北方から現在住んでいる土地に移って来たのだという。すなわち「カレン族の口伝はあきらまにかかれらがかならずしも現在住んでいる場所にはいたのではないということを示している。もっとも目につく物語はカレン族の伝説的な始祖である「Haw Meh Pa」についてである。かれは北方にある未知の国におおくの家族の者と住んでいた。そこでは畑が大きい、のししに荒らされた。その家父長(Haw Meh Pa)はそとに出て、いのししを殺した。しかし、息子たちがその死体を運びに行った時に、片方のきばがおれて、すりきれていたので、

一本しか見つけることができなかった。その老人(Htaw Meh Pa)はい、い、し、し、の、き、ば、で、く、し、を作った。ところが、それを使った者はすべて不老の力を得たので、一同がびっくりした。間もなく、この地方は人口が過剰になり、一行はあたらしく、ゆたかな土地を探しに出かけて行った。かれらはカレン語で“Hti Seh Meh Ywa”と呼ばれる川に来るまではいっしょに旅をした。ここで、老人は一族の者が貝を料理するのに長時間かけているのが我慢できずに、かれらがついて来られるように道しるべをつけると約束して、ひとりジャングルを通過して先に進んで行った。しばらくすると、中国人⁽¹⁾がやって来て、かれらに貝の肉を取り出す開け方を教えていった。そこで、食べ終わると、かれらは老人のあとを追ったが、かれ(Htaw Meh Pa)の切り開いた野生のバナナの幹がたいへんたかく芽をふいていたのを見出すだけであった。そのため、かれに追い付くことは不可能のように思われた。それ故、かれらはその周辺に定着した。家父長は魔力のあるくし⁽²⁾を持って旅を続けたいけれども、そのくし⁽³⁾は今日に到るまでふたたび発見されていない⁽²⁾。さらに、カレン族の間に代々歌いつがれてきている伝統的な詩(Hta)によると、カレン族の祖先は前述の Hti Seh Meh Ywa を南下して、三つの大河のみなもとに到達したという。それによると、「昔カレン族は三派に分かれて、Lolo Kio (Irawaddy) 川、Xo Lokio (Salween) 川そして Pwo Kio (Mae Khong) 川の三つの谷をくだって行った。かれらはちりぢりになったけれども、いつの日にか再会することもあらん」と伝えられている。

第一章 概 況

このように、カレン族も他の大陸部東南アジアにおける住民と同様に、伝説や伝統的資料を検討することによって、これまでたどってきた民族の歴史をさかのぼってみると、北方にその起源を持つことが推定される。しかしながら、Leach 博士やその説を踏襲している F. K. Lehman 教授が述べているように⁽⁴⁾、現在の東南アジアの住民の祖先がそのまま中国の一部から移って来たという仮説は神話であろう。山地民と平地民は現在住んでいる

場所における相互作用によって輪郭がつけられてきたのである。歴史、言語学、考古学や民族学関係の研究はこれら雑多な住民が、たしかに北方からやって来たことを明確に示しているけれども、今日われわれが知っている社会的・文化的単位としてやって来たのではない。そのため、今日ある特定の集団と一致することはありえないという。

以上述べてきたように、常識論はべつとしても、カレン族の祖先や故郷については科学的にはたどるすべもないので、本節においてはもっぱらかれらの分布に限って記述し、その後述べるカレン族の社会・文化変容の理解を助けることにしよう。

- (1) カレン語で中国人を意味する *Sr* とと思われる。
- (2) Marshall (1922) p. 5
- (3) *uta* ဝါယာ
- (4) Leach (1954), Lehman (1963) p. 11

B 分布

カレン族 (the Karens) という呼称の起源はビルマ人がかれらを *Kayn* と呼んでいた言葉が英語風になまったものであるといわれている。ビルマやタイ国においても、カレン族の呼称はいくつかある。すなわち、カレン族はみずからは *Pakanyo* または *Kanyo* と称している。これは他の山地民と同様に自分たちの民族集団を「人間」と呼び、他の民族集団と区別をしているのである。カレン族のことを北タイ人は *Yang* とか *Nyang*、中部タイ人は *Karieng*、Lahu, Lisu, Akha ʔ Ya' Meo ʔ Yan' Khannu ʔ Lawa ʔ Yang' Mon ʔ Kareang ʔ と呼んでいる。このうちカレン族の自称である *Pakanyo* をのぞくすべての用語は同系列のものと考えられる。

カレン族は通常シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) の一派として分類されているけれども、言語学上の位置はまだ確定していない。近年シナ・チベット語の分類に関しては、Robert Shafer 博士がカレン族を主要言語区分の Karenic とし、別のチベット・ビルマ語族におそらく属していると考えている。Jingpaw, Chin, Moso, そしてまた、Lisu のようにだいたいチベット・ビルマ語族に分類されている諸言語にはむしろ疎遠な関係にあるとしている。⁽¹⁾ 他の学者で、G. H. Luce 師のような人は、明らかにカレン語とチベット・ビルマ語族との間に密接な関係を見出ししている。⁽²⁾

カレン族はビルマ連邦共和国における現在のコーンレー州 (Kawthule) である旧サルween (Salween) 地区すなわち旧カレン州を中心に、タイ国、さらにラオスの一部にかけて分布している。ビルマにおいては、少数民族中最大の人口を持つ民族集団といわれている。一説には、ビルマ連邦の総人口約二七〇〇万人のほぼ一割弱を占めるともいわれている。しかし、他の説では、カレン族の全人口は約一五〇万人とも推定されている。⁽³⁾ しかしながら、カレン族の総人口は、ビルマ化することによって、仏教徒⁽³⁾ になってしまった集団を含むか否かによって、かなりの変動は避けられないであろう。

ところで、カレン族の分布地域であるが、ビルマに於ては、Prome, Henzada, Myaungmya, Bassein, Tongo, Shwegin, Pegu-Yoma, Salween, Tharon, Tavoy, Mergui, Moulmein などの諸地方に及んでゐる。

概況 タイ国に於ては、西北地方の Mae Hongson 県を中心に、北方や東方へは Chiangrai 県、Chiangmai 県をはじめ Lamphun 県や Lampang 県にもおよび、それに Prae 県と Nan 県にすこし、泰緬国境沿いに南方に向かつて Tak 県を通じて、Bangkok 西方の Kanchanaburi 県に至る地域に帯状に分布している。そのほか第一章 Chonburi, Chompon にも若干定着してゐる。

カレン族は、タイ国北部において、非タイ系住民としては華僑について第二位の人口をようしている。といっても、国民総人口三〇〇〇万人中わずかに〇・五パーセントの約十五万人前後と推定されている。もっとも、ビルマと同様、タイ国においても、平地に住んで仏教の影響を受けたカレン族は、たいていの場合タイ人として登録されるので、実際のこの数字はもっと増えることだろう。しかし、タイ国におけるカレン族の重要性は、経済的にも社会的にも、そしてまた政治的にもビルマのそれとは比較にならない。⁽⁴⁾

さらに、ラオスにおいても、カレン族はメコン川水系の北側に若干分布しているように伝えられているけれども⁽⁵⁾、その数は寥寥たるものと思われる。なお、現在でもカレン族問題では權威とされている Harry I. Marshall 師は、かつてカレン族がカンボジャにも分布しているといったが、この情報は未確認である。⁽⁶⁾

ところで、ひとくちにカレン族というけれども、これは単一の民族集団ではない。むしろ、いろいろな同系の言語グループの集まりと考えられよう。それは白カレン族と、赤カレン族の二種類に大別できるであろう。⁽⁷⁾ この区別は衣服の色からきたもので、あまり正確な民族集団の分類方法ではない。前者に属するカレン族としてはスゴー・カレン族 (the Sgaw-Karens) とポー・カレン族 (the Pwo-Karens) である。かれらはカレン族のなかで圧倒的に多く、ある学者はカレン族全体の人口の約七〇パーセントを占めていると推定している。⁽⁸⁾ 筆者が本稿で中心的に扱う民族集団はこのうちの主要グループであるスゴー・カレン族である。

後者の赤カレン族は Kaya とか Karenni 時には Bwé とか Bghai と呼ばれていて、そのなかには、Bré, Padaung, Yinbaw, Zayein などの諸族がいる。そのほか、南シャン州南部の山岳地帯には Taungthu という特別の一族がいることを指摘しておこう。

- (2) LeBar *et al.* (1964) p. 58
- (3) LeBar *et al.* (1964) p. 58
- (4) ビルマのカレン族については、「付録「ビルマにおけるカレン族小史」を参照されたい。
- (5) Sawhoo Shwe (1950) p. 138
- (6) Marshall (1945) p. 3
- (7) このような分類は、おもにタイ族などの他の民族集団によって、なされたものである。
- (8) Britanica (1968) p. 235

第三節 Mae Sarieng 地方について

A 自然条件

調査村がある Mae Sarieng 郡は、ミタイ国のシベリア、とらわれている Mae Hongson 県の南部に位置している。その中心地で、郡役場のある町は郡の名前と同様に Mae Sarieng と呼ばれている。

Mae Sarieng の町は北緯一八度一〇分、東経九七度五〇分に位置している。町の標高は海拔約三〇〇メートル余りで、盆地の中心にあり、周囲は比較的なだらかな丘陵地帯にかこまれている。しかしながら、谷を南北にうらぬいて Mae Yuan 川が流れているので、盆地は南北の方向に開けている。この Mae Yuan 川の流れはしばらく南下して、西に曲がり、そのままビルマとの国境を流れる Salween 川に流入している。

第一章 概況

気温は表1に見られるように、かなりの温度較差があり、一般的には熱帯大陸性盆地気候と分類されよう。一日の温度較差はとりわけ冬期にひどく、たとえば、一月におけるように、最高気温は摂氏三六・四度であるにも

表1 Mae Sarieng における年間気象条件

月 別		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年 間
		気 温	平 均	22.0	23.4	26.6	30.3	29.8	27.7	27.0	26.8	27.4	27.4	25.9
最 高	36.4		36.9	40.0	44.1	41.0	38.6	36.1	36.4	37.4	36.0	36.4	36.0	44.1
最 低	5.8		7.0	8.7	14.0	20.2	20.5	21.0	21.5	20.6	18.3	8.6	6.5	5.8
雨	降 水 量	14.5	9.1	10.0	41.6	150.5	217.9	177.2	270.1	194.5	101.0	33.0	6.0	1225.4
	降 雨 日 数	0.8	1.0	0.8	3.8	14.3	20.0	23.0	23.9	19.5	9.1	2.8	1.2	120.2

注) Thailand (1964) p. 5

かわならず、最低気温は実に五・八度まで低下して、われわれ日本人にとってはきわめてしのぎにくい気候である。

一方、年間降水量は平均一、二二五・四ミリメートルあるが、そのうち約九パーセントに当たる一、一一一・二ミリメートルの雨量は五月から一〇月にわたる約半年間に、ベンガル湾からビルマを通過して吹き寄せるモンスーンがこの地方にもたらすものである。そのため Mae Sarieng 地方にかぎらず、このあたりの泰緬国境一帯においては、生態型としては熱帯降雨林が形成されている。この点は Mae Hongson 県の南の Tak 県の中心部では八〇〇ミリメートルの降雨しがなく、熱帯林に覆われている平坦地とはきわめて対照的である。このように、Mae Sarieng 地方の気候は半年にわたるながい雨季とこれに続くみじかい冬、それに摂氏四四度余りにも上昇する三月から四月にかけての猛暑の夏によって特徴づけられている。

Mae Sarieng の町のすぐ郊外にある調査村 Hui Kani の気候はこれまで述べたような Mae Sarieng のそれと同じであるが、山地にある調査村の Hui Topa 村の気候はどうであろうか。これまで正確な統計資料がないので、はっきりしたことは言えないが、筆者の経験から類推してみよう。Hui Topa 村は Hui Kani 村からは直線距離でわずか二〇キロメートル余りしかはなれていないけれども、標高は七〇〇メートルほど高く、海拔約一〇五〇メートルもある。

そのため、平均気温ではすくなくとも摂氏二〜三度ひくめで、夏期はこの地方としては比較的しのぎよい。しかしながら、冬期には夜分の気温は低く、時には摂氏二〜三度にまで低下することもある。もっとも、基本的には熱帯性の気候であるために、冬でも日中は温暖で、摂氏二三〜二五度ぐらいのきわめて快適な気候である。

Hti Topa 村付近の雨量は Mae Sarieng 地方の平坦部とあまり差異はないと思われるが、おそらくはそれよりも多少おおく、年間降水量で、約一、三〇〇ミリメートル台ではないかと想像される。

(1) Amphoe の役場のこと。

B 社会的条件

Mae Sarieng 地方は、一九六四年タイ国北部の中心的⁽¹⁾都市である Chiangmai から Hod 経由で、約二〇〇キロメートルにわたる「ハイウェイ」が完成するまでは、この国のなかでも、もっとも孤立している地方であったといえよう。

この地方に唯一の飛行場が Mae Sarieng の町にあるけれども、その規模や整備が貧弱なために、タイ国国内航空の「新鋭機」である英国製のターボ・ジェット機 Avro は就航せず、時代物のダグラス DC 3 型旅客機が週に二回だけ、やって来るだけである。

このように、Mae Sarieng 郡のある Mae Hongson 県は、全体として、タイ国のほかの地方からはかなり孤立していて、この国の人がいみじくもいうように、「タイ国のシベリヤ」というのも、あながち誇張とは考えられない。

第一章 概況
しかしながら、タイ国においては、自然的にも、文化的にも、孤立していた Mae Hongson 県も、ビルマ側

との交流については、かなり昔から往復がはげしかったように伝えられている。すなわち、そのインデックスとして、流通していた貨幣一つをとってみても、第二次世界大戦以前には、インド・ルピーがビルマ国内と同様に一般に通用していたほどである。そこで、このような当地方の特殊事情を知るために、Mae Sarieng の町を中心に、Mae Hongson 県南部の歴史をここで簡単に振り返ってみよう。

Mae Sarieng 地方の歴史については、この地方の研究に従事している Peter Kunstader 博士も認めているように、「この地方における正確な歴史資料は驚くほど欠如している……」⁽²⁾といわれている。このように、タイ国側の歴史的資料はきわめて寥寥たるものであるけれども、手もとにある欧文の資料を使用して、往年の Mae Sarieng の姿をできるだけ再現することにとめよう。

ちなみに、付け加えると、Mae Sarieng 地方は、昔からシャム政府や Chiangmai 王朝の政治的影響下にあつたといっても、経済的にも、社会・文化的にも、きわめてビルマとの関係が深かったように思われる。従って、将来ビルマ側の資料を使用しての研究が進展して、Mae Hongson 県、従ってまた、Mae Sarieng 地方の歴史が解明されることが期待されているのである。

i 一九世紀以前の状態 Mae Sarieng の町とその周辺の地方については、これまでいろいろな名称が与えられてきた。たとえば、北タイ語では Muang Yuan とか Mae Yuan と呼ばれた。また、カレン族やビルマ人は Main Loongyee ともいっていた。この事実が示すように、この地方はこれまで種々な文化が錯綜し、歴史のなかで主役を演じてきた民族集団も何回か交代してきたように伝えられている。

前述したように、Mae Sarieng 一帯の歴史資料はきわめて貧弱であり、昔の姿を知るのにはたいへんに不便を感じている。しかしながら、最近になって、タイ国の人文・社会関係の研究もしだいに発展をして、このよう

な僻地の研究も本格的に着手されるようになった。すなわち、Kunstadter 博士とおなじ研究計画に従事している若手の文化人類学者 Charles F. Keyes 博士はきわめて興味深い研究をおこなっている。すなわち、かれは Mae Sarieng 地方の貧弱な歴史資料をフィールド・ワークによる直接観察にもとづく資料で補足しながら、伝統的なタイ族と諸部族間の関係を論じ、そのなかでこの地方の歴史的な推移を明確にしようとしている。

そこで、ここではそれを要約して、述べることにしよう。⁽³⁾

Mae Sarieng 地方に、大昔どのような人間が住んでいたかについては、明確には分からない。けれども、おそらくいちばんはじめには、今日のラワ族の祖先が住んでいたように思われる。Lamphun にラワ族の王朝があった時に、Mae Sarieng がその一部であったのもその証拠の一つではないだろうか。しかしながら、正確な歴史に関する資料は、Mae Sarieng にタイ語族が住むようになってからのことであるといわれている。

一三世紀の後半には、ユアン族 (the Yuans: 北タイ人のこと) がかれらの根城としていたタイ国北西部から移動を始め、各地を占拠した。かれらが Mae Sarieng にいつ到着したかははっきりしていないけれども、西暦一四四二年においては、Mae Sarieng が Lannathai のユアン王国の行政単位であった。

西暦一五五八年から一七七五年までの大部分の期間は、タイ国北部のほとんどはビルマの支配もしくは影響下にあった。しかしながら、Lannathai 王国が一九〇二年に Bangkok にあるタイ国政府に合併されるまでは、北東部地方はいぜんとして Lannathai 王国のもちにあつたことはいうまでもない。

第一章 概 況
Chulalongkorn 大帝 (一八六八—一九一〇年) の支配していた王朝は、当時東南アジアに進出していたフランスやイギリスの植民地主義に対抗するために、中央集権化をはかった。その一環として、Mae Sarieng 地方の役人は、それまで Chiangmai 王朝によって任命されていたけれども、Bangkok によって任命されるようになる。

かくして、一九〇二年には Mae Hongson 県がタイ国の行政下に入った。その当時は、Mae Sarieng が県庁の所在地であったけれども、やがて Mae Hongson にそれが移った。

Chulalongkon 時代になると、Mae Sarieng 地方をめぐる歴史の資料もある程度は存在している。まえにも述べたように、将来、ビルマ側の資料を利用して研究が進むと、さらに昔の Mae Sarieng の姿がはっきりえがき出されよう。もっとも、現在筆者の手もとにある西欧人による記録にもとづいても、当時の Mae Sarieng の様子がある程度はうかがい知ることができよう。それに、この時代は本稿で取り扱っている Hti Topa 村の山地カレン族がまだ long house⁽⁴⁾に住んで、焼畑農業に従事していた時でもあるし、また平地カレン族の村落である Hti Kani 村が形成される過程にあった頃である。従って、その頃の Mae Sarieng 一帯の環境がどのようなものであったかを知ることが、カレン族の社会・文化変容の過程に接近するために重要な事柄であろう。

ii Chulalongkon 時代前後の状態 Mae Sarieng の町は、もともと古代の王国 Yonzaleen の跡に建てられたものである。その Yonzaleen の史跡が、Mae Sarieng の町のどこに位置していたかという点については、いろいろ伝えられているが、大体二説に要約することができよう。Coloquhoun 氏は「約四分の三時間ほど北西の距離に」あるといい、また、Hallet 氏は「町の南東約一マイルの所に位置している」という。

一説によると、「Yonzaleen は旧 Pegu 王朝の一部であったが、とおい昔に Talain (Mon) の王女が Zimmé (Chiengmai) の王に持参金としてもたらしたものである」という。一方、Lamphun の年代記によると、Yonzaleen は「四〇〇人の Talings (Mon) と Peguans (Mon) とともに、Pegu の王 Thoo-the Thoma が、一一八九年に娘が Lampoon (Lamphun) の王にとつぐ時、持参金として与えた⁽⁵⁾」とされている。

その遺跡は Coloquhoun 氏によると、「そこはいまや大木におおわれている。かなりの規模のある壁や掘割の

名残りは容易に跡をたどることができると言う。しかしながら、Coloquhoun 氏にやや遅れてこの地を訪問した Hallet 氏によると、つぎのように述べられている。古代都市 Yain Sa Lin⁽⁷⁾ は「堀や溝でそれぞれ囲まされたり、分割されていた。今日では大木の林におおわれているその領域は Main Loongyee のものよりもおおきいけれども、目に見える古代の遺跡はなかった。ちいさな仏塔とこわれた寺院はあたらしいものであり、その地域の一部を占居して、耕作をおこなっている村人が近年建設したものである。その都市は段丘に位置して、西側の壁は川の浸食によって、流失している。⁽⁸⁾」

Main Loongyee 地方は「ビルマから Chiangmai⁽⁹⁾ シャムへの戦争通路が横切っていて、侵略者の大群が通りぬけてきた。それに加えて、独立国 Karenni⁽¹⁰⁾ から来る人さらいの通路にもしばしばなっていた。」そのため、国土の荒廃が目立ち、人口がきわめて希薄であった。すなわち、「イギリスが Maulmain (Moulmein) を併合後三年たった一八二九年に、Richardson 博士が Main Loongyee をおとすれた時には、町はまったく荒れ果てていた。山地民のほかには、八カ村にわずか二百戸の家屋があっただけであった。町自体の跡にはわずか一〇戸から一二戸があっただけである。」⁽¹¹⁾その後、「一八三六年には、Hmine Long-gyee⁽¹²⁾ の町には二〇戸の家があったけれども、われわれ (Coloquhoun 氏たち) が訪問した時には (一八七六年)、二百戸に増加していた。」⁽¹³⁾

概況
とついで Main Loongyee の町を中心とした一帯の村落数や人口について触れてみると、Hallet 氏が森林業者たちから聞いた情報によると、「Meh Nium⁽¹⁴⁾ 川とその支流の流域において、町を含めると、三三三のラワ族の村、四六のカレン族定着村、一一のシャン人の村の名前が得られた。ラワ族の村の平均は四二戸あり、シャン人の村は三六戸の家屋がある。森林業者の誰もが Meh Ngor の谷で働いていないので、そこにある定着村は除かれてゐる。」⁽¹⁵⁾

そこで、Hallet 氏が推定するのには、「一戸に住んでいる人間の平均数は七人で、自分のリストにある定着村については一万三千人以上いて、それ以上の野性カレン族がいると確信している。わたしのリストにない定着村を数に入れると、Meh Nium の谷の全人口は三万人をおおきく割らないであろう⁽¹⁶⁾」という。

Hallet 氏が役人に尋ねてみると、「シャム人の（首席）代理のいうのには、村々のリストや人口のセンサスはないけれども、この地方には少なくとも三千人のチェンマイ・シャン人、⁽¹⁷⁾四千人のラワ族、スゴー、ポー、ショー（Sho）の部族からなる五千人の定着カレン族がいるという。代理は Karen Yain（野性のカレン族）の数については推定できなかったけれども、かれらはきわめて多数である。代理の推察ではシャン人や定着カレン族に關しては、（前述の）森林業者の説明とびたりと符合しているけれども、ラワ族は代理の考えているよりは二倍も多くいた。⁽¹⁸⁾」

いずれにせよ、このような記述からみて、Mae Sarieng 地方一帯において、現在から一世紀ほど昔には、定着している平地カレン族のほかに、周囲の山岳地帯には、漂泊的生活様式を維持している山地カレン族がかなりの数いたことが想像される。おそらくは、本研究において調査対象となった Hti Topa 村の山地カレン族もこの範疇に属していたのであろう。

一方、Hti Kani 村は山地から平地に移住してきたカレン族によって、形成の途上にあつたと考えられる。

ところで、まえにも述べたように、この地方はタイ国側とビルマ側の政治的ならびに民族的な葛藤^{かつどう}に巻き込まれたために、しばしば社会的不安定におちいったように伝えられている。たとえば、Hallet 氏のいうには、「一八七〇年に Cushing 博士がこの町を通りぬけた時に、ビルマのシャン人、すなわち現在のイギリス領のシャン人やカレニー族たちが、この地方に援助の手をさしのべるように希望していた。また、シャムのシャン人やわが森

林業者たちは六カ月間も町に閉じこもっていて、自衛可能な大集団の時以外はそとに出ようとはしなかった。九年から一〇年間も続いたこのような敵対意識は、わたくし (Hallett氏) が行く四年前に停止し、その地方は回復のきざしが見えていた⁽¹⁹⁾といわれている。

さらに、その後間もなく Mae Sarieng を訪問した G. J. Youngusband 氏は当時の町の模様をつぎのように述べている。「町の大部分は長さ約七〇〇歩、幅約四〇〇歩ほどのだ円形の垣根によって囲まれている。すこしばかり軍事評論家風を吹かしているわたしの兵卒は、この種の築城を侮蔑しきっていた。住民の鶏がさまよい歩くのをさまたげるのに役立つのが唯一の効用であると、かれは考えたのであった。この判断にはたしかに若干の正当性があった。なぜならば、垣根は一二フィートも高く、どんなことをしても、守備隊は垣根越しもしくはそれを通して銃をうつことはできないからであった。」⁽²⁰⁾

さらに、当時の Mae Sarieng の町の様子については、Coloquhoun 氏がやや立ち入って、次のような報告をしている。「町の通りはベルシャ井戸から揚水した水で、清潔に保たれている。家々は居心地がよい。しかしながら、軒先はすべて地上数フィートに達するほど深い屋根を持っているので、室内は暗くなっている。それはこの地域の降雨がひどいから必要であるとは思えない。なぜならば、聞くところによると、(ここは) 西方の地方よりも降雨が少ないことを知っているからである。家の端にはベランダになっている入口がある。入口のまえには装飾用であり、かつ人目を避けるのに役立つ花の鉢が置かれている。」⁽²¹⁾ さらにまた、Hallett 氏は Mae

第一章 概況

Sarieng の町の様子を、多少異なった角度から描いている。すなわち、「町はほぼ整形をしている平行四辺形で、南北一七四〇フィート、東西一〇五〇フィートにわたり、四面全部が柵で囲まれていた。」⁽²²⁾ それは Hineboay から九二マイル離れており、海拔六三五フィート、平野からの高さ一五フィートの段丘の上にある。北の方は Men

Salin (Mae Sarieng) 川と Meh Nium (Mae Yuam) 川の合流点になっている。

(そこには) おもに、チェンマイ・シャン人が住んでいて、二つの僧院がある。他のチェンマイ・シャン人の町のすべてと同様に、秩序があり、ごさっぱりとした独特の雰囲気だだけよっている。そのシャン人の家は一樣に南北に面していて、木の葉や草で屋根がふいてある場合には、そのはしはきれいにそろえられている。道はうまぐ作られていて、両側に溝があり、よく手入れがゆきとどいている。町の責任者の規律はきびしく、家屋や柵をめぐらしてある庭のそとに物を積みあげるとは許されていない。水道は Meh Salin 川の上流からひかれて、町中に分配されている。このシャン人の国における農業の大部分は灌漑溝によっておこなわれ、それによって町の周辺においては、米の二期作がおこなわれている。

郊外(の集落)は町の北西に位置していて、柵のそとに一〇四戸の家がある。それらの大部分は立派な建物で、チーク材で作られていて、おもに森林業者や英領のシャン商人が住んでいる。ビルマ人の森林業者の Thigongs、すなわち親分が北方郊外に建てた三軒のビルマ風の僧院と一つの仏塔があり、いま一つの僧院が建設中であつた。⁽²³⁾

僧院について、Coloquhoun 氏はさらにつきのように書いている。「町のなかには一つだけ僧院(Kyoung)がある。しかし、郊外には仏塔をかこんで、僧院の大集落がある。町のなかの(僧院)に入ると、壁にはあらうばい絵画がえがかれ、デザインは大胆であつて、風格はなくはなかつた。僧院のいくつかは一人の老僧(Poongee)が管理していたけれども、かれの道徳はたかいものではなかつた……」

ここの僧侶たちは北部ビルマの住民とはことなり、入信の時にはおなじような誓いをたてながらも、仏陀の熱心な信者ではない。かれらの行状は……昔の僧侶のそれよりもルーズでさえあつた。かれらは見たところ、あら

ゆる男の道楽に關係して、一般的にいつて、飲み、打つ、買うを破廉恥におこなつていた。かれらは住民を掌握していないし、全般的には町の人に軽蔑されている。」⁽²⁴⁾

ところで、この地方はタイ国においては、僻地であるにもかかわらず、かなり昔のシャム時代から、ゆるい形体ではあるが、ある種の行政が Bangkok から及んでいた。たとえば、Haller 氏は泰緬国境にすでに五むねからなる検問所があったことを報告している。⁽²⁵⁾ また、かれはシャム政府の影響力がこの地に及んでいる証拠として、つぎのような記述も残している。すなわち、「待ちくたびれたアメリカのバプティスト派の David Webster 師は小役人が手を貸してくれるのを待っているかわりに、カレン族から直接に象を雇おうとした。しかし、カレン族は庄政者の怒りを買うのを恐れ、また手を貸すのを恐れて、雇われようとはしなかった。」⁽²⁶⁾ この当時における「首長は *Myotsa* (town-eater) の称号を持つていて、管轄区域は *Mentum* (Mae Yuam) 川の谷全域に及んでいた。」⁽²⁷⁾ この *Myotsa* (もしくは *Myosa*) はビルマ語であるが、おそらくこれはタイ語の *Kin müang* (文字通り、国を食べる者の意) という地方長官を *Coloquhoun* 氏のビルマ人従者か、土地の人がビルマ風に説明したのではないかと考えられる。ちなみに付け加わえると、その地方長官の性格はダムロン親王のつぎのような記述によく現わされている。すなわち、「私が北部地方を視察したときに出会ったそれぞれの国の *Chao müang* (国主||地方長官) は、いずれ劣らぬ家柄の正しい者ばかりであったが、大半がその国の出身者に限られている。(中略) バンコクに住む役人には、地方勤務を望む者がなかった。それというのも前述したような(中央政府が地方の行政費をいっさい負担しない「食邑 (*Kin müang*)」)制度の下にあっては、(赴任者は)なによりもまず自分の生活の確立に心勞しなければならなかったからである。他所から赴任した役人は、自ら必要な資金を調達して持参するか、あるいは赴任先の有力者の婿にでもならぬかぎり生きて行くことさえおぼつかなかった。まして

Chao miang を補佐する Kromkan 以下の属吏にいたってはなおそのことであつて、先々の Khahabodi (名望家) の中から選任する以外には手はなかつたのである。⁽²⁹⁾」

このように、地方長官は中央政府よりまったく地方行政費というものが与えられていないので、かれに付与された徴税権などを活用して、歳出をまかなわなければならなかつた。そのために、地方機関の規律はかならずしも十分とはいへなかつたようである。たとえば、Coloquhoun 氏は警察についてはつぎのように書いている。

「この町には約五〇人の巡査が駐在して、地区の治安維持に当たつてゐる。かれらのおもな仕事は見たところではベテルナツツをかんだり、タバコをすつたり、寝てゐることであるように思われる。これ以上規律のない部隊は見たことがなかつた。訓練のために、ラッパ代りにかねが使用されてゐた。⁽³⁰⁾」このように、官憲の側に秩序や規律が欠如してゐたにもかかわらず、「住民の態度は通常温和で、秩序があり、官憲とほとんど紛争をおこしたことはなかつた」という。もっとも、その背景として筆者の直接観察したところでは、現在でも Mae Sarieng の住民の中心である北タイ人、シャン人、カレン族、ラワ族のような諸民族集団はきわめて温和かつ平和的な人々であることを指摘しておく必要がある。

ところで、当時の Main Loongyee における経済であるけれども、灌漑による水田稲作農業がおこなわれていたといわれているが、「大部分の人が林業労働に従事しているために、住民の需要をまかなう農業が十分ではない。そのために、米を Chengmai から輸入している」と伝えられる。

一八二九年に、Richardson 博士が Main Loongyee にやって来た頃には、「当時はチーク材に手がつけられていなかつた。主要な輸出品として、毎年二千から八千頭の黒牛が、馬やすず、棒状ラックと交換するために、Karennee 国に送られていた。七頭の牡牛は若い男一人、八一〇頭の牡牛は若い女一人と交換された。また、

最高級の牡牛は五シリングした。」⁽³¹⁾といわれる。いずれにせよ、いま述べたように、Main Loongyee 帯におけるチーク材の伐採は一九世紀の初頭においてはまだおこなわれていなかった。しかしながら、一九世紀後半にはいると、Hallet 氏も書いているように、「Main Loongyee の人たちはチーク材で食べているといわれ、チークの商業がかれらの生計をささえていた」⁽³²⁾と思われる。また、同氏は続けて、「泰緬国境にある Thungyeen の谷の森林からは、長年にわたって、多量のチーク材が運び出されてきた。シャム人は材木一本につき五ルピーの税金を六ルピーにあげた。そのため、一八八四年におけるこの財源からの歳入は二〇万ルピーにもなった。シャム、Karenee や Shan 州におけるほかの森林のように、わがモールメン・ビルマ林業会社によって二六〇頭もの象が森林で働かされていた。」⁽³³⁾

以上のような、簡単な記述からも分かるように、一九世紀後半の Main Loongyee ではチーク材の伐採を中心に、かなりの規模で林業が発展していたことが考えられる。一方、そのために、この地方では農業生産が順調にのびていなかったことが想像されるのである。すなわち、Hallet 氏は Main Loongyee にビルマ側から到達した時に、つぎのような記述を残している。「……すべての物は Maulmain (Moulmein) の価格の二倍もしくはそれ以上であった。また、食べられそうな物はなにも手に入らなかった。牛を屠殺しないで、牛肉は入手できない。露店では鶏もあひるも売られてはいないけれども、カレン族がもたらした鶏やあひるが家々で飛びまわっていた。玉ねぎ、豆、からし菜、かぼち、だけが買うことのできる野菜のすべてであった。かれら(使いの者)は卵と干し魚とうすっぱらいパンを持って帰って来た。」⁽³⁴⁾このように、この地方では食糧が十分になく、その価格もかなりたかいものであったようであった。

第一章 概 況

ところで、Mae Yuam 川の流域の山岳地帯の奥には、かなりの山地カレン族が住んでいたことが想像される

が、それについては Hallet 氏は「Thoungyeen を離れてから、われわれは若干のカレン族のグループに会ったけれども、村落は見たことがなかった。それはかれらが主道から離れた所に家を建てているからである」と述べている。さらに、「Karen Yain —— 野性でおくびょうなカレン族 —— は他の村（定着村）をあわせたのとおなじぐらいの数の住民はいるけれども、これらの村落は暫定的に建設されたもので、同じ所に一二年留まるだけなので、正確な数字はえられなかった⁽³⁵⁾」としている。

なお、定着しているカレン族の間には、すでにこの時にキリスト教の宣教師の布教活動が開始されていたと伝えられ、Mae Sarieng の「外側に横たわるちいさな村は白カレン族の村で、アメリカの宣教師の活躍によって、急速にキリスト教に吸収されている⁽³⁶⁾」といわれているが、これはおそらくは現在の Ban Pon 村のことについて述べているのだろう。だが、今日になってみると、宣教師の活動に比べて、キリスト教は、カレン族の間ではビルマのような植民地状態の国の場合とちがって、あまり普及しなかったようである。

ところで、最後に、当時の Mae Sarieng 一帯における自然について触れよう。本稿で扱っている山地カレン族の村 Hti Topa がある Mae Sarieng の「谷の東側の岳陵地帯には虎、象、大鹿、鹿、野牛、猪がたくさんいる。さいはジャングルのひくい草地にいる。一方では猿、きじ、野鶏もおおかった。丘陵地帯は熱帯松、ぼだい、樹やビルマ人の森林業者がまだ伐採する価値があるとは考えていないちいさいチークでおおわれていた。山脈の高い所やその崖はすばらしい松林でおおわれている。

Himine Long-gee (Main Loongyee) の川は雨季には三〇〜四〇フィートに達し、町の近隣の低地では大部分が浸水する。数カ村が平野に散在していて、水田や畑地を除くと、全地域は牛の広大な飼育地である⁽³⁷⁾と述べている。このように、当時の Mae Sarieng の自然には、人為的な香りはまだあまりつよくなく、山地には野

性動物が群がっていたようである。また、Mae Sarieng の谷間の平坦地も、大部分は草地になっていて、その一部を除いては、水田化がほとんど進んでいなかったように思われる。そのような情況は、このあたりの当時の社会環境とともに、調査村の Hti Topa や Hti Kani の過去を考えるうえで、見逃すことができない重要な点ではないかと思われる。

iii 第二次世界大戦までの状態 Mae Hongson 地方で、県庁所在地が Mae Sarieng より Mae Hongson の町へと移転し、同時にこの地方がタイ国の正式の県として編入されたのは一九〇二年のことである。このようにして、Mae Sarieng はタイ国の一つの郡 (Amphoe) として発足し、タイ国内務省が郡長 (Nai Amphoe) を任命し、中央から派遣するようになった。

だが、この時代になっても、タイ国政府は山地民の問題にはあまり深入りをしていなかった。それは「戦前においては、タイ国政府が、広義ではおなじタイ族の成員に属しながらも、中部タイ人とことなつた伝統を踏襲している平地民に対する支配をまだ確立する過程にあつたからである。」⁽⁸⁹⁾

ところで、タイ国北部が Lannathai 王朝の手から Bangkok のタイ国政府の手に移つた頃から、Mae Sarieng 地方がビルマとの経済関係をふかめたことを指摘しておこう。⁽³⁹⁾ すなわち、この地方のチークの森林は、Bombay-Burmah Corporation という会社によって伐採がおこなわれ、Mae Yuan 川などを使って、主流の Salween 川などに搬出して、ビルマの Maulmein (Moulmein) 港に送られた。その量はきわめて莫大なものであつたことは、すでに述べた通りである。かくして、Mae Sarieng においては、インド・ルビーが日常の貨幣として流通し、今日でもなおその残りの銀貨が山地民の装飾品として使われている。言語の点でも、この地方のユアン語 (北タイ語) と並んで、多少ビルマ語が使われていた。現在では、その後の国際情勢の変化によって、Mae Sarieng の

町では、ビルマ語をおおやけに使用することをはばかるような雰囲気があるけれども、土地の人は夜になると、ラジオをひねり、このあたりでいちばんよく聞こえるラングーン放送を聞きながら、笑い声をたてているのを一度ならず目撃した。

このような Mae Sarieng の経済的・文化的背景のもとに、町と関係を持っていたカレン族はどのような立場にあったらうか。Keyes 博士によると、「Mae Sarieng における Bombay-Burmah Corporation の労働力の中核を形成しているカレン族は、このようにしてビルマ系とモン系、ある時はビルマ系もしくはモン系の諸文化を代表している者と直接的に接触するようになった。なぜならば、これらの文化を持った人たちがかれらの支配人であったからである。かくして、六十年ばかり昔に、Mae Sarieng におけるカレン族の平地村で建立された最初の仏教寺院はビルマ風に作られ、かつ最初の住職としてビルマ人の僧侶をえたことは驚くにあたらない⁽⁴⁰⁾。」「チーク産業の形態は、一九三〇年代の初期に、Bombay-Burmah Corporation が去ってからあまりはつきり

とした変化はおこらなかつた。Bombay-Burmah のもとで、以前支配人をしてきたビルマ人やモン人(そして、すくなくとも一人のスゴ・カレン族)は独立した代理人として仕事を続けた。チークはいぜんとして Rangoon に送られ、支配人はビルマ語を話し、労働力はなおカレン族のものであった。この形態は、この地方でチークの商業が停止する第二次世界大戦まで続いた。そして、一九四〇年代末期にタイの会社が森林で仕事をする独占権を獲得するまで、再開されることはなかつた⁽⁴¹⁾。』

iv 戦後の概況

やがて、Lampang 市に本店を置いている Phansit 木材会社が Mae Sarieng 一帯のチーク材の伐採に当たりだした。その当初はビルマ側に出荷していたが、諸般の事情で、しだいにタイ国側にチーク材を搬出するようになった。その必要から、Hod から Boluang 高原をぬって Mae Sarieng までの百キロメートル

表2 地方別による商品の価格差

商 品 名	単位	Chiengmai の価格	Mae Sarieng の価格	山村での 価格
ズボン	1本	9	15	15
シャツ	1枚	8.5	15	15
スポーツシャツ	1枚	13	15	25
ネックレス	10本	4	—	9
ネックチーフ	1枚	5.8	7	9
薬 (Yak-pun)		0.5	1	1
白糸	10本	40	50	60
赤糸・黒糸	10本	40	50	60

注 1963～64年ならびに1964～65年の現地調査による

ル以上にわたり、道路が建設されて、HodとChiengmai間の道と連結された。この道路の本来の目的は、いま述べたように、チーク材の搬出が主目的であったけれども、Mae Sariengに与えたその派生的効果はきわだっていた。道路が存在しなかった以前には、Mae Sariengの町一帯の住民は、すこしまとまった品物を購入する場合には、ビルマ領のPapunにまで行っていた。それでも、徒歩でHodまで六日前後もかかっていたことを考えると、Papunへの道は、約四～五時間ほどで、土地の人がバスと呼んでいるトラック便が一日に何本か往復している。メートルの道程を、約四～五時間ほどで、土地の人がバスと呼んでいるトラック便が一日に何本か往復している。

そのため、Mae Sariengの事情にかなりの変化が現われた。相当な規模の市場のある「都会」と接触を持っていても、人間がその間を徒歩にたよって連絡するか、せいぜい象や馬を輸送の手段として利用しているうちは、地域社会に与える都市や市場経済の影響は、わずかなものであった。たとえば、道路が完成する以前においては、地域による商品価格の格差は表2に見られるように、かなりのものである。いわんや、ビルマ側への国境が開かれていた時でも、タイ国側はもちろんのこと、ビルマ側も道路らしい道路がなかった。従って、当時においては、この地方の住民が一部の農産物を除いたほとんどの消費物資の物価高にいかにも悩まされていたかが十分に想像できる。

しかるに、最近のMae Sariengのように、Chiengmaiから消費物資を積み、また、Mae Sariengから農産物を積み出すトラック便が毎日何本も発着し始めると、物価に変動が現われる。残念ながら、手もとは表2のように、消費物

資の地域格差を示す資料がないので、道路の開通により、その格差がどのように変化しつつあるかということを示すことができないけれども、最近の物価の変動について、二、三の例をあげて、その傾向を示すことにしよう。たとえば、民衆の日常生活に不可欠な塩は、かつては大皿いっぱいが一バーツ（約一八円）であった。だが、トラック便が定期的に通うようになると、価格は半減して、五〇サタン（約九円）になった。もちろん、そのほかかんずめなどの消費物資の価格も同様である。それに対して、Mae Sarieng 周辺で生産されている米は、もみが石油かんずめといっばいで一〇バーツ（一八〇円）だったものが、今日では三五バーツ（六三〇円）に上昇し、とうがらしでも一キログラムが五バーツ（九〇円）だったものが、一〇バーツ（一八〇円）と倍増した。そのほかの商品も全体として販路が開けた農作物は騰貴し、Chiangmai から流入する工業製品を中心にした日用品は供給が安定して、価格は低下しつつある。

以上のような道路自体が Mae Sarieng とその周辺部の住民に与えた影響のほかに、道路建設がもたらした波紋も見過ごすことはできないであろう。すなわち、この道路工事にはかなりの数の周囲の住民が働いた。とりわけ、Bojuang 高原の西端の Mae Ho 一帯には、おおくのカレン族が住んでいるので、かれらが道路建設に果たした役割はすくなくない。たとえば、「地方事務所にある数字によると、一九六七年には、四三六頭の象がこの地方にいた。その地方の数字と Phansit 会社で働いている象の数（一七九頭）と比較すると、一九六七年においては Mae Sarieng の象全体の四一パーセントが会社で働いていた。全部ではないにしても、Phansit 会社で働いていた象のほとんどはスゴー・カレン族の所有になるものと想像される。なぜならば、親方や象使いはすべてスゴーであったからである。この数字から、スゴー・カレン村の相当数が Phansit 会社とならんかのかかわりあいを持ったと想像される。」⁽⁴²⁾

このほか、Keyes 博士に Keyes, Phanasi 木材会社の果たした積極的役割としては、山地カレン族の間などに、仏教儀礼を持ち込んだことや、家父長的経営により、米の廉売とか前払いなどをしたこと、時にはタイ人の管理職の者がかれらの税金や選挙に関する相談にもつたりしたことなどである。そのほか、かつてのチーク産業で用いられていたビルマ語もしくは北タイ語をタイ語に置き換えた。このように、Phanasi 木材会社は、タイ国の国民形成を考えるうえで、かなりプラスの役割を果たし、山地民に対して、平地民もしくは平地文化について目を開かせたことは疑いない事実であった。ところが、その一方で、タイ人もしくは北タイ人労働者が道路建設の過程で、多量に Boluang 高原に流入したために、いささかマイナスの機能を果たしたことも事実であった。たとえば、道路付近のカレン族の村人がいうのには、道路建設のために、水田が無通告のまま突然破壊され、ひどい時には田植が終了した時にやられた者もいる。しかも、それに対する補償はほとんどおこなわれなかつたのである。また、水牛の盗難増加も最近の顕著な傾向であるといえよう。従来は、Mae Ho 一帯でも、年間せいぜい二、三頭前後の水牛が盗まれただけであった。しかも、付近によそ者がいなかったもので、犯人はすぐにあがったのである。しかし、一九六三―六四年にかけての約一年間には、Hi Topa 村のように、道路工事現場からはなれた所に位置している村落でも、四頭の水牛を失ったという。さらに、その周囲の五カ村では、一年間に一〇頭ほども盗まれたとこぼしていた。そのほか、水路が破壊されたり、婦女子の一人歩きができないなどいろいろな問題があり、カレン族にかなり平地民に対する不信感をつのらせたことも事実である。

概況 いずれにせよ、このように道路建設の功罪はいろいろあるけれども、その経済的、社会的効果は時の経過とともに、残された禍根をすこしずついやしてゆくことであろう。

第一章 概況

それでは、最後に Mae Sarieng の現状について、簡単に述べることによって、本節を閉じることにしてしよう。

V 現状⁽⁴³⁾

全人口は一九六六年二月現在で三八、四四〇人で、そのうち男性は一九、一九二人、女性は一九、二四八人である。総戸数は七、一三三戸あるので、一戸当たりの平均人数は約五・二人である。

総人口のうち山地民の占める割合はきわめてたかく、カレン族は二三、六一九人で比率にして六一・四パーセント、ラワ族は二、四二二人で六・三パーセントにのぼる。このように、Mae Sarieng 郡の総人口三八、四四〇人中じつに六七・七パーセントに当たる二六、〇三一人が山地民系の住民であることは、タイ国のなかでもこの地方のきわだった特徴であるといえよう。

全人口の三二・三パーセントに当たる六、四〇九人のそのほかの住民、すなわち平地民の大部分は、シャン系の北タイ人、コン・ムアンの中核になっているタイ・ユアン人それにトンスー・カレン族、ビルマ人になっている。

一九世紀に Colouhoun 氏や Hallet 氏がえがいた Mae Sarieng 地方とはことなり、この地方はすでにチーク産業が峠を越え、住民の大半は水田農業と畑作によって生計を立てている。Mae Sarieng, Ban Kat, Mae Lanoi などの村のような平坦な所で、灌漑可能な所では一部で二期作がおこなわれている。水田の総面積は一五、四三〇ライ(二四、六八八平方キロメートル)といわれ、その約一〇パーセントほどの面積で二期作がおこなわれているという。

畑作物としては、ココナツ、ピーナツ、ねぎ、にんにくなどがあるが、一般に種類があまりゆたかではない。そのほかの産物はあまりないために、住民の所得はタイ国において、比較的所得のひくい北部地方のなかでもいちだんと低所得になっているようである。一人当たり月収は約一五〇バーツ(約二、七〇〇円)以下であるといわれている。しかし、実際の所得水準はこれよりもひくいのではないだろうか。

いずれにせよ、以上述べてきたように、Mae Sarieng 地方は地理的に「タイ国のシベリア」であるだけではなく、社会的にも経済的にも「タイ国のシベリア」としての性格がよかつたように思われる。だが、まえにも触れたように、道路の完成により現在おこりつつある変化は急激である。このような変化は、この地方に住むカレン族の今後の社会・文化変容を考えるうえで、きわめて注目に値すると思われる。

- (1) 人口はわずか七万余りであるけれども、Chiangmai は Bangkok についで、タイ国第二の都市である。
- (2) Kunstader (1967) p. 640
- (3) Keyes (1968) pp. 9~10
- (4) 詳細には第三章第一節Bに述べている。
- (5) Colouhoum (1885) p. 34
- (6) Colouhoum (1885) p. 34
- (7) Yanzaleen とおなじ。
- (8) Hallet (1890) p. 35
- (9) 現在のビルマ連邦共和国 Kaya 州 (旧 Karenni 州)。ビルマが英領になってからも、ながく独立国の地位にとどまっていた。
- (10) Hallet (1890) p. 30
- (11) Hallet (1890) p. 30
- (12) Main Loongyee မြို့။
- (13) Colouhoum (1885) p. 39
- (14) Mae Yuan 川 မြို့။
- (15) Hallet (1890) p. 36
- (16) Hallet (1890) p. 37
- (17) 北タイ人もしくはタイ・ユアン人を指したものと思われる。

- (18) Hallet (1890) p. 37
 (19) Hallet (1890) p. 31
 (20) Younghusband (1888) p. 17
 (21) Colouquhoum (1885) pp. 41-42
 (22) 石井米雄教授によると、タイ国における町は、四方が堀もしくは柵で囲まれているのが原則であるという。
 (23) Hallet (1890) p. 32
 (24) Colouquhoum (1885) p. 42
 (25) Hallet (1890) p. 20
 (26) Hallet (1890) p. 20
 (27) Colouquhoum (1885) p. 35
 (28) タム語で、*Kin mizang* とは、町を食へる、の意味。
 (29) 石井 (1968) pp. 162-63
 (30) Colouquhoum (1885) p. 43
 (31) Hallet (1890) pp. 30-31
 (32) Hallet (1890) p. 32
 (33) Hallet (1890) p. 21
 (34) Hallet (1890) p. 34
 (35) Hallet (1890) pp. 36-37
 (36) Colouquhoum (1885) pp. 33-35
 (37) Colouquhoum (1885) pp. 39-40
 (38) Keyes (1969) p. 21
 (39) Keyes (1969) pp. 22~23
 (40) Keyes (1969) p. 24
 (41) Keyes (1969) pp. 24-25
 (42) Keyes (1969) pp. 29-30
 (43) この項目の記述に当たっては、石井米雄教授との討論におうところがおおきかった。

東南アジアの自然と文化は多様性にみちている。しかしながら、その底流には一つの共通の分母が存在しているように思われる。それは、おそらくは、山と平野ではなかるうか。すなわち、平野においては相対的に同質的で、多数の人口からなっている平地民がいて、かれらがそれぞれの国家の中核をなしている。かれらは集約的水稲作によって生活をささえ、主要な言語を話すとともに、世界宗教の一つに帰依している。一方、どの国も山地民という少数民族をかかえている。かれらは通常焼畑農業をおこなっていて、アニミズムを信仰し、雑多な言語を話している。それに加えて、山地民の間の政治的統一性がないだけでなく、国家との政治的紐帯も伝統的にはほそぼそとしたものであった。

以上のような山地と平野部に住んでいる原住民の生活様式の差異は、東南アジア全般にわたっていえるだけではない。タイ国においても、またミクロな見方をすれば、平地におけるカレン族と山地に住んでいるカレン族においても認めることができる。

カレン族については、ビルマのカレン族ほど多数ではないにしろ、タイ国でも一説には十数万人余りの人口をかかえているという。タイ国には約一二〇年ほど昔にビルマ側から移って来たと伝えられている。分布はおもに筆者が調査をおこなった西北部地方の Mae Hongson 県を中心に、タイ国北部の西半分におおく分布している。なお、西側の泰緬国境沿いには、ベルト状に、Bangkok 西方の Kanchanaburi の南方にまで分布している。

なお、本研究がおこなわれた Mae Hongson 県 Mae Sarieng 郡についてであるが、ここは、タイ国のシム

リア」といわれるほど、これまで自然的にも文化的にもタイ国のなかでは孤立してきたところであった。とりわけ、その傾向は、数年前に Mae Sarieng の町と古都 Chiangmai をつなぐ道路が完成するまでは、きわめて顕著であった。従って、Mae Sarieng 自体は経済的には、ビルマ領の Salween 川流域の方向を向いていたのである。しかるに、ここ十数年間は、Bangkok の中央政府における国民形成の努力によって、しだいにタイ国領として、面目を一新しつつある。このような Mae Sarieng 一帯の変化は、この付近に住むカレン族の社会・文化変容に影響をもたらさないとはいえずが、思われる。

第二章 カレン族の家族と親族

ある人類学者の研究によると、カレン族の村落を形成する基礎的社會組織として、母方居住的・母系制擴張家
族 (matrilocal matrilineal extended family) があげられている。⁽¹⁾

しかしながら、かれらの社會組織の実態は現実にとどのようなものであろうか。本節においては、山村 Hui To
pa と平地村 Hui Kani 村における調査資料を踏まえて、論じてみよう。

インドの Assam 地方において、ガロ族 (the Garo) の調査研究に従事した Robbins Burling 教授は「特殊
化した政治的・経済的諸制度が未発達な社會においては、他の社會ではもっと精緻化された機構が独占している
統治、生産、交換などの機能のかなりの部分を親族集團が担当している」ことを指摘しているが、これはなにも
ガロ族に限ったことではない。すなわち、本論文が扱っているカレン族においても、これと同様なことが妥当す
るように思える。カレン族の社會組織においても、家族を核とする親族集團がきわめて重要な役割を果たし、経
済的にも、社会的にも、宗教的にも、重大な機能を果たしている。

とりわけ、カレン族においては、氏族や半族 (moiety) などの発達が十分に見られないために、家族は最小の
社會單位を形成するとともに、最大の自律集團 (corporate group) ⁽³⁾ なのである。従って、カレン族の社會組織を
知るためには、まず、かれらの家族を中心に説明し、さらに、それを取り巻く親族の成り立ちについて触れよう

と思う。

第一節 家族

カレン族は、*Hi Topa* のような山村においても、*Hi Kani* のような平地の村においても、いうまでもなく、家族が居住形態、社会、宗教、経済などに関する基本的な単位である。かれらの家族は、理想的には、母方居住的夫婦家族 (*matrilocal nuclear family*) といわれている。普通は妻とその夫と未婚の子供たちが構成員の根幹をなしている。しかしながら、時には、娘の一人が結婚後も彼女の両親の家に留まることもある。また、そのような居住形態の変型として、両親の家のすぐそばに家を新築して、新生活を開始することもある。もちろん、このような基本的成員のほかに、一部の家族においては、母方の親族が同居する場合もある。

山地カレン族の場合には、かつて *long house* を持っていたので、各家族は *long house* のアパートメント状の部屋部屋の各一室を占居していたのである。しかしながら、今日では、山村においても、各家族は一戸の独立家屋を所有して、そこに住んでいる。

一方、平地村の場合には、村が設立されて以来 *long house* という村落形態をとっていなかったために、今日ではもちろん、独立した家屋に一世帯ずつの家族が住んでいる。

それでは、つぎに *Hi Topa* 村と *Hi Kani* 村における家族について、具体的に資料に当たってみよう。

表3に見るように、山地カレン族の村 *Hi Topa* においては、全戸数二五戸のうち六八パーセントに当たる一七戸の家族は核家族である。残りの家族のうち、全戸数の二四パーセントに当たる六戸がいわゆる最小拡張家

第二章 カレン族の家族と親族

表3 Hti Topa 村の家族形態

N F	17 戸	68.0%
Extended Family		
A) Minimal Extended Family		
N F+Wi Mo	5	20.0
N F+Wi Fa	1	4.0
B) Extend Family		
N F+Wi Mo+Wi Fa	1	4.0
N F+Wi Fa+Wi Br+他人	1	4.0
	25 戸	100.0%

注 表2の注と同じ

表4 Hti Kani 村の家族形態

N F	32 戸	68.2%
Extended Family		
A) Minimal Extended Family	(10)	(21.3)
N F+Wi Mo	2	4.3
N F+Wi Fa	1	2.1
N F+Da So	1	2.1
N F+Da Da	2	4.3
(N F+Wi BrDa Da)	1	2.1
N F+Hu Mo So	2	4.3
N F+Si So	1	2.1
B) Extended Family	(5)	(10.5)
N F+Wi Mo+Wi Fa	1	2.1
N F+Wi Mo+Wi Fa+WiBr	1	2.1
N F+Wi Br+Wi Si	1	2.1
N F+Wi Mo+Wi Br	1	2.1
N F+Wi Br	1	2.1
	47 戸	100.0%

注 表2の注と同じ NF:核家族

族 (minimal extended family) である。この最小核家族の大部分は、拡張家族 (extended family) が分解して形成されたのではない。むしろ、逆に、もともと夫婦家族であった所に、おもに、妻側の両親のいずれかが死亡した場合、残った者が単独に生計を立てることが困難になると、結婚した娘の家に同居するのである。

従って、山地カレン族の家族形態は、夫婦家族が全体の六八パーセントであり、この最小拡張家族二四パーセントを加えると、合計九二パーセントに達している。このように、山地カレン族の家族は、圧倒的に、夫婦家族型のもものが多く、拡張家族を形成することはまれである。

一方、平地カレン族の村 Hti Kani の場合を表4で見ると、村の全戸数四七戸のうち、三二戸が夫婦家族である。それはじつに六八・二パーセントに当たる。それに、全戸数の二一・三パーセントに相当する最小拡張家族

を除いた、³ 本来の⁴ 拡張家族は全体の一〇・五パーセントに過ぎない。従って、平地カレン族の間でも、山地カレン族と同様、夫婦型の家族形態が支配的であるといえよう。

また、家族構成の面から見ても、山地カレン族は一戸当たり平均四・四人であり、平地カレン族の一戸当たり平均四・七人とあまり大差はない。

以上のように、家族の形態や構成から見ても、山地にある *Hu Topa* 村と平地にある *Hu Kani* 村とは、基本的に差異がないように思われる。

いずれにせよ、カレン族における家族は、西ボルネオの *Iban* 族の場合と同様に、永続的な *corporation agree-*
gate であり、出生、養子縁組、結婚、死亡などによって、成員の構成に変化があるとしても、不動産や動産などの財産を共同に占有もしくは所有し、世代から世代へとそれらを伝えてゆく社会組織である。

また、カレン族の社会組織のいま一つの特徴としては、個人はある特定の家族の成員として生まれ、同時に一つ以上の家族に属することができないのである。ある個人は、自分の属している家族にだけ、ほぼ均分相続的原理にもとづいて、財産権を主張することができる。自分の生まれた家の財産に対しては、養子に行くか、死亡することによって、その権利を喪失するという。また、ある男子が結婚する相手の女性が土地などの不動産を持っているので、彼女の村へ婚出する場合にも、その男性は財産に対する権利を喪失する。

在村の子供たちは、既婚、未婚を問わず、両親もしくは片親が死亡するか引退した後、均分的な財産相続を受けるのである。

これまで、カレン族の家族について述べてきたので、次に結婚について触れることにしよう。

- (1) Kunstader (1966) p.650
- (2) Burling (1963) p. 71
- (3) 蒲生正男氏と村武精一氏による訳語を使用する。ピアッティ (1968) 参照。
- (4) Freeman (1960) p. 67
- (5) 両親の家に残り、老後の世話をする子供—多くの場合には末娘—は他の兄弟姉妹よりも、多少余分の財産相続を受ける。

第二節 結婚

ここでは、家族の形態を規定する結婚について述べることにする。

カレン族の結婚適齢期は、山地民としては、比較的高いように思われる。伝統的には、カレン族の間では年令を数える習慣が存在していない。そのために、カレン族には元来「年がない」ので、各人の年齢は正確に知ることができない場合がおおい。通常、男性は一八歳ぐらいになると、結婚の相手を物色し始める。女性もテイ・ン・エージャーの終りになると、自分の豚の飼育を始める。やがて、その豚を売却して、結婚資金の一部に当てる。そのため、女の子が、年頃になって、豚の飼育を始めると、村人たちは、彼女に向かって、「いよいよ、おむこさんが欲しくなったね…」などといって、からかうのを常としている。

ところで、求愛の方法であるが、つぎのような方法でおこなわれる。若い男がこれと思う女性を見つけると、かれは毎夜のように、彼女の村ないしは家に出むく。そして、家の近くで、弦楽器などを使って、一種のセレナーデをかんで、心のうちを伝えようと努力する。勇気があるか機会に恵まれると、男は女の家を訪問する。若い女性は、夜分は原則として、あまり出歩かず、家のペランダの所に出向くだけである。男がやって来ると、最初



写真2 カレン族の結婚式。村人が家神に祈りをあげ、新郎新婦は合掌する

は、女の親や兄弟姉妹なども、いっしょになっておしゃべりをしている。

けれども、かれらは通常気をきかせて、若い二人をヴェランダに残して、早目に屋内に引き取ることはいうまでもない。

若い二人の会話は、文明社会における時計のようなわずらわしいものにさまたげられることなく、夜半まで、楽しく続けられる。だが、未婚の男女の関係は、伝統的には、これ以上には進展をしない。それは、カレン族が性的な放埒さは「家神」をはじめとする神々の怒りをかい、それらのがちが当たるのを恐れているからである。従って、宣教師的表現によれば、カレン族はもっとも「道徳的な」民族なのである。しかしながら、カレン族のこのような伝統も、山地カレン族の間には妥当するけれども、平地カレン族においては、かなりの「乱れ」が観察される。山地カレン族によると、平地カレン族は「コン・ムアン（北タイ人）のように、性的にはふしだらである」という。

話をもとの求愛にもどすと、男は女の所に数カ月ないし

一年間ほどかよいつめ、同意が得られると、結婚の運びになる。

男性が相手の女性を見つける方法は、普通、家から離れて、働きに行つた先で、直接自分自身で見つける場合もあるけれども、時には兄弟姉妹や親戚の者が見つけて、推薦することもある。たとえば、ある男の兄が他村にむ、こ入りをしている時に、その村で良い娘を見つけると、弟に知らせることがある。しかしながら、それはわが国における「見合い」などは、いささかおもむきを異にしているようだ。基本的には、本人同士の自由意志によって、結婚するかどうかが決まされる。インフォーマントの一人によると、このような若い二人の結婚に対する希望や意志は、通常両親といえども、これをばむことはできないという。万一、それが認められない時には、二人は駈落ちすることも辞さないといわれている。

男性が女性の意中を確認すると、たいてい、両親とか兄弟、あるいは親類の者を立てて、いっしょに女の両親の所に結婚を申し込みに行く。女側が簡単に承諾を与えないような場合には、男側は村の *Sayya* ⁽¹⁾ や長老を通じて、ふたたびプロポーズをおこなう。この際、*Hi Topa* の山地カレン族の間では、とくに金を持参する必要はない。しかし、*Hi Kani* 村の平地カレン族の場合には、時として、千バーツから二千バーツにおよぶ、かれらにとつては巨額の金を用意しなければならないといわれている。

山地カレン族の結婚に当たっては、女側からも男側からも、結納金や持参金に当たるような金や物品の授受は見られない。一般的には、一種の招婿婚に近い形態をとることが多いので、男がせいぜい、一〜二頭の豚と数羽の鶏を用意して、結婚式に望む。それらのうち、一頭の豚と若干の鶏は、結婚式が最初におこなわれる女側の家に持参され、式とその宴会のために使われる。

結婚式をとりおこなう日時については、山地カレン族たちは、当人の便宜によって決められるけれども、平地

カレン族の場合には、*Sapa*のうら、ない、によって、吉日が決定され、式がおこなわれる。これは、“大きな伝統”である仏教を信仰しているタイ系平地民からの影響であろうか。

スゴー・カレン族の結婚式は、普通、二日から三日にわたって、おこなわれる。第一日目は、男性側が女性側の家にやって来て、“盛大な”結婚式をあげる。その夜、新郎は新婦の家で過ごし、次の日は新婦側の一族とともに生家にもどって、ふたたび“式”をあげる。これらの式に当たっては、新郎が用意をしておいた豚一頭と若干の鶏を提供し、宴会の料理の材料に当てる。

このようにして、一連の結婚式が終わると、新婦の夫婦は、伝統的には、女の家にと約三年間、男の家にと約三年間ずつ滞在して、双方の両親と生活を共にして、手助けをおこなうといわれる。ところが、このような慣習も今日になるときわめて“俗化”し、それぞれ一日だけ泊って、象徴的に、米つきや野良仕事の手伝いをおこなう。この後に、新婚夫婦は妻側の親と同居することもできるし、また、新居をもうけることも自由になる。

カレン族の結婚直後における、両親の家に滞在する習慣は、かれらの説明によると、「双方の両親が新郎新婦をこれまで養育してくれたことに對する返礼のため」であるという。

以上述べたようなカレン族の伝統的な結婚後の基本的居住形態は次のごとくである。

“matri-patri-local”
neolocal
matrilocal

このような結婚後の基本的居住形態は、平地カレン族においても、山地カレン族と同様に踏襲されている。しかしながら、これまで述べてきたように新婚夫婦の生家における“慣行的”滞在義務は、急速に形骸化してしまつた。かつては、それぞれの生家に約三年ずつ滞在し、両親の手助けをしたのに、今日ではまったく形式的に一

表5 山地カレン族の村 Hti Topa における
夫と妻の出身地

(A) 妻がこの村出身の場合、	村外からきた夫の出身地	
Mae Li	1	
Hue Panya	2	
Hue Dio	5	
Popaki	1	
Mae Ho	4	
Mae Lai	4	
Chepalebo	1	
Pachi	2	
Hanumai	1	
	21	(67.7%)
(B) 夫がこの村出身の場合、	村外からきた妻の出身地	
Hoe Ku	1	
Chepalebo	1	
Mae Ho	2	
	4	(12.9%)
(C) 夫も妻もこの村出身	4	(12.9%)
(D) 夫の出身地不明	2	(6.5%)
	31	

注 表2の注と同じ

全体の夫婦数の一二・九パーセントに過ぎない。しかも、そのうち二人の女性の出身地は、Hti Topa 村から、わずか二キロメートルほどしか離れていない、Mae Ho 村の出身である。

一方、平地カレン族の村 Hti Kani においては、表6に見られるように、全体で五五組の夫婦のうちで、四九パーセントに当たる二七組の夫婦が妻の出身地である Hti Kani 村に住んでいる。それに対して、夫がこの村出身で

日ずつだけ滞在する場合がおおい。これは前述のように、伝統的習慣の“俗化”であるとともに、同時にカレン族の成員の“個人化”の現われと理解されよう。

ところで、カレン族の結婚後の居住形態については、これまで、一般論を述べてきたので、ここでは具体例に触れてみよう。

Hti Topa 村の山地カレン族の場合には、例にもれず、男が妻方の村に行くことが多い。すなわち、表5に見られるように、村全体の三一組の夫婦のうち、六七・七パーセントに当たる二一組の夫婦の夫が、結婚後、他村からこの村に移って来ている。妻が村外から来て、夫の村である Hti Topa に住んでいるのは、わずかに四例で、

表6 平地カレン族の村 Hti Kani における
夫と妻の出身地

(A) 妻がこの村出身の場合, 村外からきた夫の出身地		
Kon Yuam	1	
Ke Kū	1	
Mae Salū	1	
Ban Sawek	1	
Mae Et' ki	3	
Ban Pon	2	
Mung Pai	1	
Mae Sapu	1	
Mae Puki	1	
Mae Han	3	
Mae Sama	1	
Mae Papai	1	
Mae Pan	1	
Wan Kam	1	
Umen	1	
Mae Poki	1	
Upoki	1	
Mae Hongson	1	
Mae Top	1	
Papun	1	
Huepe	1	
Laos	1	
	27	(49%)
(B) 夫がこの村出身の場合, 村外からきた妻の出身地		
Ta Kam(N. Thai)	1	
Kapā (")	1	
Mae Pan	1	
Mae Lang	1	
	4	(7.2%)
(C) 夫も妻もこの村出身		22 (40%)
(D) 夫も妻も村外		
夫 Mae Chan	1	
妻 Mae Poki		
夫 Ban Pamak	1	
妻 Mae Et' Ki		
	2	(3.8%)
	55	

注 表2の注と同じ

妻が他村出身である事例は、わずかに四組で、全体の七・二パーセントに過ぎない。ただ、山村の Hti Topa 村ときわめて対照的なのは、平地の Hti Kani 村においては、村内の内婚が全体の四〇パーセント、二二組に及んでいることである。これはおそらく Hti Kani 村の特殊性⁽²⁾、ならびに村の規模が山村よりも比較的大きいことも関係があるだろう。さらに、また、カレン族が平坦部では「多数派⁽³⁾」でないために、近隣の村から、カレン族の適当な配偶者が得にくいからかも知れない。

このように、山村の Hti Topa と平地村の Hti Kani における、結婚後の居住形態の静態的な数字をとってみても、その推移を知ることができない。しかしながら、大掴みにいうと、山地カレン族も平地カレン族も、静

態的には、母方居住的結婚形態が支配的であると考えられる。

次にカレン族の距離的に見た通婚圏について述べてみよう。表7にあるように、通婚圏の範囲は山地カレン族と平地カレン族の間ではかなり対照的であるといえよう。山村の *Hiti Topa* では、村内が全体の四四パーセント、歩いて二分の一の行程以内の村が二八パーセント、二分の一日から一日以内が五二パーセントになっている。すなわち、全体の夫婦のうちの九四パーセントが、配偶者を一日行程以内の比較的隣近のカレン村から得ているのである。

他方、平地カレン族の村落 *Hiti Kani* においては、村内婚が四一パーセントにのぼり、その割合はきわめて多い。さらに、通婚圏が二分の一の行程以内は一三パーセント、二分の一日から一日行程以内は二四パーセントになっている。このように、平地カレン族の間においても、たしかに、七八パーセントにおよぶ結婚において、配偶者が一日行程以内の村からやって来ている。しかしながら、残りの二二パーセントの婚姻の場合は、配偶者が二日以上じつに一〇日行程におよぶ遠方から、この村に婚入してきている。また、例外的には、一人の男がラオスから *Hiti Kani* 村の女性の所に婚入しているのである。しかも、さらに注目しているのは、本論文の他所でも論じたように、平地カレン族の村落においては、他民族集団との通婚もまれではないということである。この点は山地カレン族ときわめて対照的である。

以上述べてきた通婚圏や結婚の性質における山地カレン族と平地カレン族の差異は、いろいろと原因が考えられよう。その基本的なものとして考えられるのは、両者が接している外界の規模 (*scale*) の大きさと相関関係があるのではないかと想像される。すなわち、その根底には、山地カレン族と平地カレン族のエコロジーの差異、たとえば、コミュニケーションの便利の良し悪しも関係あるのではないだろうか。このような立地の差異にとも

表7 カレン族の山村と平地村における通婚圏

通婚圏 \ 村名	山 村 Hti Topa	平地村 Hti Kani
村 内	4 (14%)	22 (41%)
1/2 日	8 (28%)	7 (13%)
1	15 (52%)	13 (24%)
2	0	3 (6%)
3	2 (6%)	1 (2%)
4	0	2 (4%)
5	0	1 (2%)
6	0	0
7	0	1 (2%)
8	0	1 (2%)
9	0	0
10	0	1 (2%)
ラ オ ス	0	1 (2%)

注 1) 表2の注と同じ
 2) カレン族の1日行程とは、午前8時から午後4時の約8時間くらい。また、休息時間を考慮にいれて、山道で1時間平均4 km くらい歩く。

なう両者の情況の違いが、やがては社会的流動性の相違をもたらし、ついには「閉じた社会」と「開かれた社会」の差異にも通じるのではなからうか。

- (1) *Hito* と *スコー*、スコー・カレン族における「司祭者」を指す。
 (2) 未確認情報であるが、この村の村民は *Tain Table* という、カレン族社会における一種のアウト・カースト的集団に属しているといわれている。これは天然痘などの悪疫にかかった者、未亡人が母村から追放されてきた集団であるという。

第三節 親族

タイ国北部の Chiangmai 県の Hod 郡において、ポー・カレン族の調査をおこなった James W. Hamilton 博士は、かれらの社会組織においては、家族のつぎに大きな社会的単位としては母系親族集団 (matrilineage) をあげている⁽¹⁾。

また、まえにも触れたように、Mae Sarieng 郡において、スノー・カレン族の調査に長年従事している Kun-stadler 博士は、カレン族の社会は母系的 (matrilineal) であることを指摘している。⁽²⁾

ところが、その後、筆者が Mae Sarieng 郡の スノー・カレン族の調査をおこなうと、山村の Hi Topa においても、平地村の Hi Kani でも、かれらの親族組織の成り立ち方は、この二人のアメリカ人類学者の研究結果と多少異なった事実が判明した。

すなわち、図 8 の示すように、カレン族の親族呼称を見ると、Ego を中心として、兄弟と姉妹、ならびにかれらの配偶者については、違った呼称を使用しているけれども、そのほかの成員については、まったく左右対称的な親族呼称を持っていて、母方の場合もまた同様である。従って、カレン族の親族呼称は基本的にはエスキモ型で、Murdock 教授の分類によると、cognatic 型のうちでも双系的な範疇に属していると考えてよかろう。⁽³⁾

筆者自身の観察と分析のほかに、Oregon 大学の Theodore Stern 教授や Illinois 大学の Frederic K. Lehman 教授はカレン族が双系的傾向の社会組織を持っていることを確認している。⁽⁴⁾

このようなカレン族の親族呼称に加えて、かれらの間の権利、義務について観察してみると、親族組織の本質がいっそう明確になるであろう。

ある家で、父親が死亡した場合には、全財産は母親に帰属する。また、逆に、母親が死んだ場合には、家屋を除いた全財産が父親の物になる。その際に、家屋については、その家の主婦が死亡するとともに、完全に破壊するのが伝統的な慣習になっている。この慣習は、山地カレン族においてはきわめて厳格に守られている。このように主婦の死亡とともに、家屋を解体してしまう理由は、カレン族の説明によると、かれらの信仰のうえでは、その家における最年長の女性と、家神、Bgha ときわめて深いかわりあいがあるからだという。

話をここで本筋にもどすと、両親の死後は、全財産はすべて子供たちの間で均分的に分配され、相続がおこなわれる。もっとも、場合によって、両親のいずれかが死亡後、残された親が老齢のため働くことができず、一人で生活ができなくなると、末子、とりわけ末娘がその親の面倒をみることもある。従って、そのような事情を考慮にいれて、財産相続がおこなわれる場合には、末子が他の子供たちの相続分の「倍の額を取る」というインフオーマントもいた。もっとも、カレン族の村人がいう「倍の額」という数字にはあまり正確な根拠があるわけではない。ただ、末子は他の子供たちより、比較的多くの財産相続を受けることができるといった程度に理解した方がよからう。

それでは、以上のような財産相続に関する一般論を、さらに具体的に認識するために、実例を一つ示すことしよう。

カレン族は、家の財産を内部財産 *Tara tazo ladapo* と外部財産 *Talo taklesukuko* に大分別する。内部財産は家のなかにある「動産」が中心で、ケース・ボックス、皿、つぼ、布類、弓矢、火縄銃などである。このうち慣習的に、男子が相続することになっている弓矢とか火縄銃などを除くと、ほとんど大部分の内部財産は、その家に残る末子、とりわけ末娘が相続を受ける。しかしながら、田畑、水牛や象などの大型家畜を含む外部財産は、子供たちの間に均分相続がおこなわれる。もっとも、山地カレン族の場合には、焼畑に当てる森林などは伝統的には「相続する」必要は存在していなかった。だが、それも最近になって、占有権が強化されると、当然のことながら、占有権の「相続」という問題がおこってきている。しかも、焼畑候補地が不足しはじめている昨今においては、このような全体的傾向に拍車がかけられていることは間違いないようである。

また、まえにも触れたように、家畜のなかでも、象のようにきわめて長寿なうえ、その価格が高価である場合

には、簡単に頭数をそろえて、均分相続をすることが困難である。そのため、時によっては象の用役権だけを平等に分配し、世話は用役権の所有者が順番でおこなうことがある。また、用役権を分けることはせず、その象の用役によって、得られた金を、相続を受けた全員が平等に分配を受けることもある。

最後に、カレン族の親族の範囲について述べよう。

われわれ日本人が親族を一等親、二等親、三等親……などと分類し、相互における権利・義務関係の指標にしているように、カレン族においても、これと同じように親族を分類する方法がある。すなわち、*Dapudaweh*, *Dotkwa*, *Tadakra*, *Kedakra*, *Shadakra*, *Luidakra*, *Yedakra*, *Xudakra*, *Nuidakra*, *Kodakra*, *Kuidakra*, *Tachidakra* などと、各用語のかしらにカレン語の数字を付け加えて、言葉のうえでは親族の傘を無限に拡げてゆく。ところが、カレン族のように、双系的な社会組織を持っている民族集団においては、放置しておくことのような親族組織の傘が無限に拡散してゆく。そのため、このままでは親族集団としての社会的・文化的意味がなくなってしまう。従って、カレン族の説明によると、親族として、社会・文化的に意味があるのは、三等親、すなわち *Tadakra* 以内の成員だけで、その集団においては、原則として内婚がタブーとなっている。そのため、*Shadakra*, *Luidakra*, *Yedakra* 以上の分類上の親族は、一応、理念として、親族に留まっているといえよう。

(1) Hamilton (1963) p. 210

(2) Kunstader (1966) p. 650

(3) Murdock (1960) p. 14 なおカレン族は双系社会であるというよりは双系的であることを強調しておく。

(4) Lehman (1967) p. 115

要約一

以上、カレン族の家族、結婚、親族について記述をおこなってきたので、最後にこれを総括して、要約することにしよう。なお、本章の記述に包含できなかったものについては、ここで補足することにする。

(1) 核家族や最小拡張家族が支配的であり、原則として、末子(娘)相続的傾向が¹⁾つよく、また、結婚後は妻方の村に居住する場合が多い。

(2) 各家族とも、たいていの場合、独立した経済単位である。その単位を基礎として、山地カレン族においては陸稻卓越型の焼畑農業に従事し、平地カレン族は水田稲作農業をおこなっている。各家族とも、山村においては焼畑の対象となる山林の一定面積を¹⁾「占有」し、平地村においては、水田を所有している。

このような「不動産」のほかに、カレン族は、山村においても平地村においても、若干の水牛、豚、鶏などを所有している。さらに、山地カレン族にあっては、それに加えて象を所有している者もいる。だが、象は、長寿であるのと高価であるために、親族など何人かで共有している場合が多い。

(3) 家族は宗教儀礼の単位でもある。伝統的には、農耕儀礼をはじめとする、いろいろな宗教儀礼が家族を中心におこなわれている。

(4) カレン族は親族呼称の面から見ると、基本的にはエスキモー型である。また、かれらの社会・経済生活のなかでは、きわめて双系的な権利・義務の授受がなされている。このような意味から、全体的に見ると、カレン族の親族組織は双系的傾向が強いといえよう。

(5) 第四章第二節でも述べているように、カレン族の宗教生活のなかでは、このような双系の原理があまり機能していないようである。むしろ、ここでは母系的な傾向が強いことを指摘しておこう。すなわち、家

神、*Bjha* に対しておこなわれている「家族儀礼」*Ore* においては、母系親族集団がきわめて重要な役割を果たしている。*Ore* 儀礼においては、ある女性を中心に、母系の系譜上にある成員は *Dopuzeh* と呼ばれ、いかなる遠方に居住してしようと、いかなる事情があろうと儀礼に出席する義務を負うのである。

この *Dopuzeh* は第四章第二節の図18でも分かるように、ある家で老夫婦が生存している場合には、たとえ若夫婦が家族の経済を担う中核としての役割を果たしていても、かれらのうちでも夫の方は *Ore* 儀礼に出席することはできない。その儀礼に出席を許されるのは、老婆が死亡し、若夫婦の夫がその *Dopuzeh* の正式な成員として認められてからである。従って、*long house* 時代にあつては、*Dopuzeh* という母系親族集団からはみだした家族の成員のために、*Blo* と呼ばれる「共同の間」が存在し、*Ore* 儀礼の際にそこで儀礼の終るのを待ったという。

(6) 以上と同じコンテキストで付け加えなければならないのは、カレン族においては、ある家の主婦が死亡した場合には、これまで住んでいた家を、伝統的慣習に従って、破壊して、別の家を新築することになっている。このように、カレン族の社会・文化のなかには、「家神」と家と主婦を結ぶ目に見えない紐帯が存在しているように思われる。そのような意味からも、カレン族の社会組織は双系的であるとはいっても、その底流に母系的な要素があることも認識する必要があるだろう。

(1) このような土地について、山地カレン族は相続権は持っているけれども、村の成員以外に対して、処分権を持っていない。

第三章 カレン族の村落構造

第一節 Hi Topa—山地カレン族の村落

A 焼畑農業と自給経済

i 焼畑農業の種類と分布

焼畑農業は東南アジアの原住民にとって、重要な生業の一つである。焼畑は国々によって、いろいろな名称で呼ばれている。たとえば、フィリピンにおいては *Kainging*⁽¹⁾、ビルマでは *Tang ya* または *Ya*、マレーでは *Ladang*⁽¹⁾、中部タイ国では *Tham rai*⁽¹⁾、北部タイ国では *Ya hai* と呼ばれている。また、筆者が本稿で扱っているカレン族においては、*Xu* と呼ばれている。

タイ国北部の山岳地帯では、カレン族のほかに、アカ族、ラフ族、リス族、ミャオ族、ヤオ族などの山地民と一部の周辺部に住んでいる北タイ人によって、かなりの範囲にわたって焼畑がおこなわれている。

ところで、焼畑農業の研究に長年従事している地理学者の佐々木高明博士によると、東南アジアならびにその周辺部に分布している焼畑農業を分類すると、三つの基本的類型と二つの複合類型の五つに分けることができるという。

すなわち、図9に見られるように、第一に、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアなどの南太平洋島嶼部に

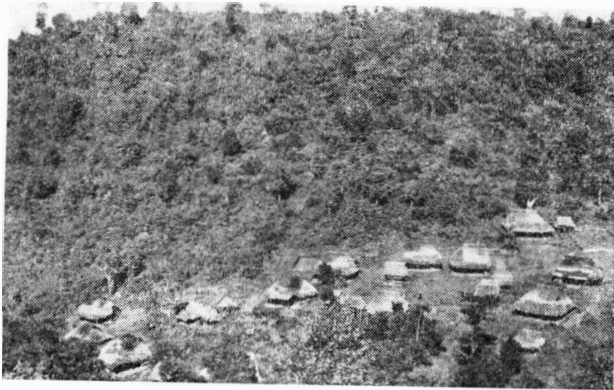
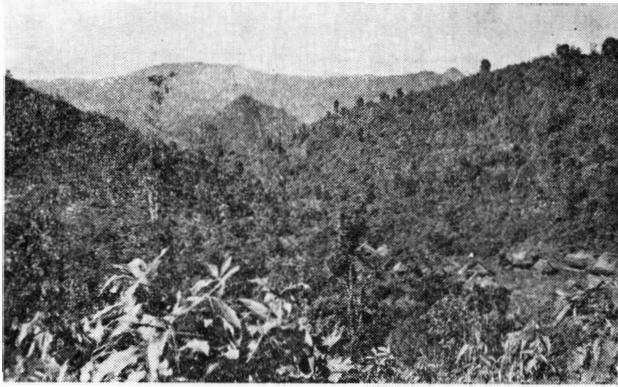
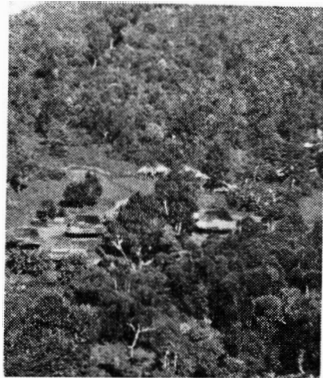


写真3 山地カレン族の村 Hti Topa の全景。Mae Sarieng の谷の向うに見える山並みはビルマ国境へとつらなる。



第三章 カレン族の村落構造



写真4 山地カレン族の家屋

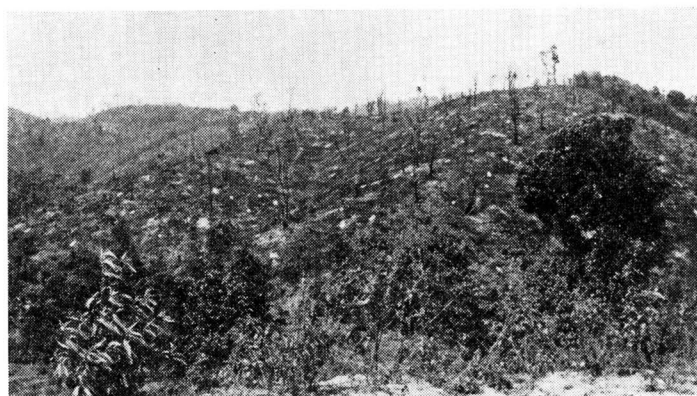


写真5 播種直前の焼畑

おける、熱帯降雨林でおこなわれている根菜型焼畑である。第二の類型は、ヒマラヤ、アッサムの山岳地帯から北ビルマ、中国南部、日本にかけての東南アジア北部周辺部山地における照葉樹林帯⁽³⁾でおこなわれている雑穀卓越型である。第三は、雲南省から台湾にかけての大陸部亜熱帯、暖帯の森林地帯(温量が低いと雑穀卓越型になる)における陸稻・雑穀型である。第四は、フィリッピンからインドネシア島嶼部における熱帯降雨林の陸稻・根栽型である。さらに、第五は、インドシナ半島の山岳地帯からマレーシアの島嶼部にかけての亜熱帯林もしくは熱帯林でおこなわれている陸稻卓越型である。

以上のように東南アジアとその周辺部の焼畑農業を類型に分類してみると、カレン族がタイ国西北地方でおこなっているのは明らかに第五の類型に属している陸稻卓越型焼畑農業である。



写真6 伐採した山腹に、火を放つ山地カレン族の若者



写真7 火縄銃の火薬を調合しているカレン族の壮年

第三章 カレン族の村落構造



写真8 焼畑に使われている掘り棒。昔は竹槍状の物を使用していた。



写真9 山地カレン族の焼畑における陸稲の収穫、黒い上衣は既婚の女。



写真10 伝統的には、カレン族の生活と象とは不可分のものである。

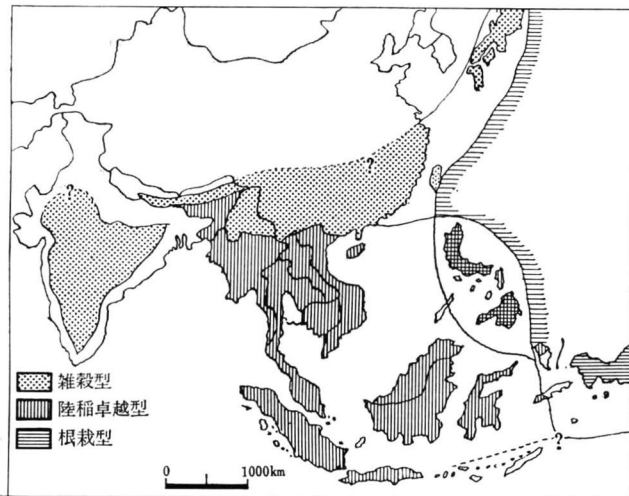


図9 東南アジアの作物構成の基本的類型

注 川喜田ほか(1967) p. 405 の佐々木の図より

ii カレン族の焼畑農業

そこで(き)に Hi: Topa 村のカレン族が、焼畑農業を現実にとのようにおこなっているか述べてみよう。

村人たちは、カレン暦の Teku (一月中旬～二月中旬)の末に山に入り、この年に焼畑をする候補地を物色する。カレン族は、長年の経験で二次林・三次林の再生のぐあいをみて、土壌の肥沃度がどのくらい回復したのかを知るのである。このようにして、焼畑候補地を決定し、Tape (二月中旬～三月中旬)から Lasa (三月中旬～四月中旬)の約二ヵ月間にわたって、その雑木や下草の伐採に当たる。その際、大木は切り倒すことなく、小枝と中枝ぐらいを落とすだけである。小さい木はもちろん切り倒す。その頃は乾季であるうえに、夏季に当たり、気温がきわめて高いために、伐採された草木は比較的短期間に乾燥してしまう。カレン暦の Denya (四月中旬～五月中旬)になると、村人は伐採した山腹の森林に火を放ち、山焼きをおこなう。その際に、カレン族は口笛を吹きながら、枯れた草木に火をつけてゆく。口笛を吹くのは風を呼ぶためであるという。この頃になると北部タイ国の風景は壮観である。平坦部を囲む山岳地帯は山焼きの煙で霞がかかったようになる。また、夜になると山々で野火が輝き、そのかもし出すあやしい雰囲気は「焼畑により山の神の魂を慰める」というカレン族の言葉が実感となる。山焼きをする場合、火が隣接している乾燥した森林に燃え広がらないように、十分な注意が払われる。しかしながら、カレン族のこのような努力が徒労に帰することもまれなことではない。広大な地域が、しばしば、雨によって火が消されるまで、何日も燃え続けることもある。⁽⁴⁾

山焼きの目的は、雑草や下草を焼却することにより、山腹を耕しやすくすることが第一の目的である。だが、同時に、山焼きの灰は肥料として作物の成育に役立つし、また、一時的にせよ、雑草やその種子、作物の病虫害を除去するのに有効である。なお、一回だけの山焼きで不十分な場合には、焼け残りの木や根を集めて、再焼却

をおこなうこともある。

このようにして、焼畑の準備が終わると、その一隅に竹造りの簡単な出作り小屋が建てられる。Lanwe（五月中旬～六月中旬）の月に入ると、初旬に陸稲の播種がおこなわれる。男たちが、畑に掘り棒⁽⁵⁾で、約三〇センチメートル間隔に浅い穴をあける。それぞれの穴には、女や子供たちによって、数粒ずつの陸稲の種子が播かれて、覆土される。その後、焼畑に施肥はまったくおこなわれない。この村の焼畑に使用されている陸稲の品種は、カレン語で *Bumbo* という黒色種、*Buki* という赤色種、*Bumbo* とどう黄色種の三種であるという。

Hi Topa 村の慣習として、*Sapya* である長老の R は、焼畑における播種にさきだし、みずからその年における第一番目の穴を掘る。これは焼畑農業が山地カレン族にとっては、経済活動であるのみならず、宗教生活の一部にさえなっているほど文化の核にからみあっているからであろう。

焼畑においては、陸稲の播種に当たって、村人の共同作業がおこなわれる。村人が総出して、一枚の畑の播種が終わると、つぎの畑、さらにそのつぎの畑と共同で作業を続けていく。

Laxo（六月中旬～七月中旬）の月になり、陸稲の草だけが二～三センチメートルぐらいに達すると、第一回目の除草がある。つぎの月 Laku（七月中旬～八月中旬）になり、草だけが豚の高さぐらいになると、第二回目の除草がおこなわれ、その後、陸稲の成育期間中にさらに二回、合計四回の除草をおこなう。この際には通常村の女性による共同作業がおこなわれる。このように、焼畑農業における農作業のあり方は、かなり共同作業に依存する度合が大きく、この点ではあとに述べる水田稲作における農作業の相対的に「個人主義的」傾向ときわめて対照的である⁽⁶⁾。

いうまでもなく、陸稲の種類により、出穂のはやい、おそいはあるけれども、*Chicha*（九月中旬～一〇月中

第三章 カレン族の村落構造

表8 山村 Hti Topa の月別農作業と農耕儀礼

農業・儀礼		焼畑関係		水田関係	
西洋暦	カレン暦	農作業	農耕儀礼	農作業	農耕儀礼
12	Tale				
1	Teku	焼畑地を探す			
2	Tepe	森林伐採 男女による共同作業			
3	Lasa	森林伐採 男女による共同作業			
4	Denya	伐採地点に火を放つ 男子による共同作業	<i>Patomeko</i> (播種) 儀礼 <i>Boa.xu</i> (稲神)儀礼	陸苗代に播種	
5	Lanwe	陸稲の播種 村落全体の共同作業 野菜・とうもろこしの播種		代かき、田植え	
6	Laxo	除草(近隣集団による共同作業)			
7	Laku	除草(近隣集団による共同作業)	<i>Boa.xu</i> (稲神)儀礼		
8	Chimú	除草(近隣集団による共同作業)			
9	Chicha	除草(近隣集団による共同作業) 野菜・とうもろこしの収穫		田の草取り	
10	Lano	陸稲の収穫 (個別経営による作業)	<i>Pachota-Pobu</i> (収穫)儀礼 脱穀前	水稻の収穫	
11	Laplu		<i>Obuko</i> (稲魂)儀礼 脱穀後 <i>Sepoko</i> (穀倉)儀礼		
12					

注 表2の注と同じ

旬)の月になると、穂が始める。その頃になると、陸稲の間作として栽培していたとうもろこし、やきゅうりなどが実り、やがてそれらの収穫がおこなわれる。Lano(一〇月中旬～一月中旬)の月に陸稲は熟し、収穫がおこなわれる。

筆者が第一回目の調査をおこなった、一九六四年の例だと、Hii Topa 村では陸稲の収穫はわれわれの使っているグレゴリー暦の一〇月二〇日すぎから開始され、一月八日ぐらいまで続いた。

収穫にさきだち、村人たちは村から数キロメートルから一〇キロメートルぐらい離れた焼畑に建てた出作り小屋に移住して、農作業に当たる。この間、手間の少ない家では、本村の家を閉めて、一家で出作り小屋に移る。だが、家によっては、人手が十分にあると、老人や子供が村に残り、家畜などの世話や留守番に当たる。そのような場合には、かれらは留守にしている家が飼っている家畜の面倒もみる。このように、山地カレン族の村落においては、農業労働における相互依存、ないし共同作業はきわめて顕著な特徴である。

しかしながら、焼畑農業における収穫に関しては、一般的に、共同作業はあまりおこなわれていない。それは、カレン族の農耕儀礼における焼畑の収穫儀礼が、共同作業をきわめておこないくくしているからである。それについては、第四章第一節Aで述べることにしよう。もっとも、このような場合においてさえ、近親者の間では、手伝ったり、手伝われたりすることもある。近親者の間では、早目に収穫が終わると、ほとんど自発的に、農業が遅れている者の所に行って手伝うのである。

なお、農繁期は、いずこも同じで、手助けに行つて、借金を返済する時期でもあるようだ。前年度に米が不足して、ほかの村人から米を借りて糊口していた者は、焼畑の収穫期のような農繁期に、その米の“代金”を労働で支払うのがつねである。そのレートは、借りたもみの石油カン一つにつき二日の労働であり、また、草む

しりの時には三日の労働で支払いがおこなわれる。

iii 焼畑農業の衰退と水田稲作の導入 ところで、このような焼畑農業も、HiTi Topa 村のカレン族の説明によると、ここ数十年間にかなり衰退してきたといわれている。

焼畑農業が衰微した原因は、根本的には、この地方における人口増加とそれによる土地不足のために、過度に焼畑がくり返されたからではなからうか。そのため、森林は荒廃し、地力が低下したのであろう。だが、それと同時に、陸稲によるいや地現象(7)なども原因の一つと考えられよう。

焼畑農業がこのようならず、勢にあったころ、五〇〜六〇年昔に山村 HiTi Topa 村の Siki という男が、Mae Sarieng の谷に住んでいるラワ族やタイ・ユワン人から、水田稲作の技術をまなんできて、村に導入した。当初はこのような先駆者を中心に、何回かの試行錯誤が重ねられたといわれている。いちばん初期には土地を簡単に耕して、あぜを作っただけで灌漑水を入れた。だが、水は一晚で無くなってしまったという。そこで、あわてた HiTi Topa 村のカレン族は、Mae Sarieng の谷にまた人を送り、タイ系やラワ系の水田農耕民から、あらためて水田の床固めの技術をまなび、水田を造成しなおしたという。しかしながら、このようにして、山地カレン族の農業に移植された水田稲作は、現在のところ、HiTi Topa 村の二五戸中、わずか六戸にしか定着していない。これは全戸数の二五パーセントにしか相当していない。このように、HiTi Topa 村における水田耕作は量的には村全体でも寥寥(8)たるものであるけれども、質的には、かれらの農業のあり方にかんがりの影響を与えた。それは大掴みにいうと次のごとくである。

- (1) 山地カレン族の低い水田稲作技術では、土地生産性を高めることは困難であった。⁽⁸⁾けれども、すくなくとも焼畑による陸稲栽培よりも、農業生産を安定させることができたと考えられる。

(2) 水稲はたとえ無肥料で栽培がおこなわれても、焼畑による陸稻栽培のように毎年栽培する場所を移動させる必要は相対的にすくない。それは灌漑水によって、カリ、カルシウム、マグネシウムなどがもたらされるからである。また、水田化によって起こる湛水現象によって、空気中の窒素が固定されたり、土壌有機物が分解されたりすることによって、水稲に窒素が供給されるからである。さらに、水田における湛水と乾燥が繰り返されることによって、リン分の有効化も促進される。⁽⁹⁾

また、水田における灌漑水は稲のいや地現象を除去する役割も果たしているので、水稲は陸稻とは異なり、連作が可能である。

(3) 焼畑農業は、水田農業とは異なり、すきによる耕作は不要で、ただ掘り棒による農耕がおこなわれているだけであった。しかるに、焼畑農業に水田稲作が導入されると、田おこしや代かきをはじめとして、水牛を用いた耕種方式が不可欠となる。

焼畑農業に対する水田稲作導入といったような農業における変化は、山地カレン族の社会・文化的側面にも、変化をもたらさざるをえなかった。この変化については、第五章の第一節で詳細に述べることにしよう。

iv 経済生活

Hti Topa 村における山地カレン族の経済生活の基礎は、陸稻栽培を中心にした焼畑農業である。それに加えて、すでに述べたように、ここ数十年間に、一部では水田稲作農業が副次的に導入された。水田稲作の導入が Hti Topa 村の経済に与えた影響はかならずしも大きかったとは思われないけれども、それが山地カレン族の社会や文化に与えた衝撃はきわめて甚大なもののように考えられる。たとえば、水田稲作をおこなっている家は、村の全戸数二五戸中七戸であったが、最近数年間に Hod の町と Mae Sarieng の間に建設された

「ハイウエー」が通ったために、その付近にあった一軒の家の水田が破壊された。そのために、今日ではわずかに六戸の家が水田耕作に従事しているだけである。

ところで、水田稲作をおこなっている六軒について見ると、面積については実測をしていないので、正確には分からないけれども、昨年度の収穫量はつぎのごとくである。すなわち総収量は一戸当たり約四〇〇～一五〇カン⁽¹⁰⁾ほどのもみ⁽¹⁰⁾が収穫されたけれども、平均としてはほぼ一〇〇カンほどのもみ⁽¹⁰⁾がとれたと推定することができる。

一方、焼畑農業については、水田耕作の場合と同様に、全戸数二五戸の家のなかで、戸主もしくは戸主の夫婦が老齢のためにすでに引退して、土地の「相続」が終わっている三戸を除くと、二二戸の家ではおしなべて焼畑をおこなっている。

水稲の場合と同様に、焼畑農業における生産力を一戸当りに収穫された陸稲のもみの量によって推定してみよう。

それによると、陸稲の収穫のもっともすくない家で約二〇カン、最高で一五〇カンほどになっていて、平均約六八カンのもみ⁽¹⁰⁾をあげている。

以上、山地カレン族の農業における主要な作物である陸稲と水稲の総収量を見ると、かなり家計別の差異があるように思われる。

すなわち、L家の約二〇カンを最低として、K家の三〇〇カンまで、じつに一五倍ほどの差異がある。

また、大家畜については、山地カレン族の間では象を所有するのが好まれている。しかしながら、象の価格は成象一頭が、七千～一万四千バーツときわめて高価であるために、一軒で一頭を所有している例はHi:Topa村

にはない。すなわち、二五戸中一一軒の家で象を、所有^gしているが、それらはすべてが親族や友人との共有である。このような所有形態が存在する理由としては、次のような理由が考えられる。すなわち、一般的に、象は平均寿命がかなり長い。そのため、遺産相続によって、一頭の象の持分が、時代とともに、どんどん分割されていく。とりわけ、カレン族の相続制度は均分的なので、この傾向は顕著に現われる。いま一つの理由として考えられるのは、象の価格は、このあたりのカレン族個人にとっては、きわめて高価であるからであろう。象が必要な場合でも、個人の手に余る時には、親族とか友人が何人か集まり、金を出しあって、共同購入する。

なお、象関係で付け加えると、象はカレン族にとっては、いぜんとして *prestige symbol* ではあるけれども、すでに、その経済的地位は急速に低下しつつあるように思われる。それは、チーク材がタイ国の輸出品で、かつては第一の地位にあったものが、第七位に転落してしまったこと、また、前世紀末から今世紀前半にかけて、内外の資本が、立地の良いチーク林を過伐したために、チーク産業自体が斜陽化してしまったからである。

しかも、近年になると、中央政府や民間企業の努力によって、道路網がしだいに整備され、それが僻地にも及んできた。それにともなって、トラック便が急速に発達し、象の活躍する余地は、一般的にいつて、しだいにすくなくなくなってきている。しかしながら、山地カレン族の貧しい経済生活においては、現在でもなお、象は重要な役割を果たしていることはいうまでもない。

なお、この村で象以外に飼育されている大家畜としては、水牛をあげることができる。水牛は、二五戸のうち一八戸で飼育されている。飼育頭数は、一戸当たり最低一頭から、最高一〇頭に及んでいて、一戸当たりの平均は約三・六頭になっている。この水牛は、おもに、*Mae Sarieng* の谷に住んでいる、タイ系平地民に売られる。いずれにせよ、水牛が現在山地カレン族にとって、きわめて重要な現金収入源になっていることは間違いない。

山地カレン族は、このほか、小家畜・小家きんを飼育している。それは豚と鶏であり、かれらの経済生活のみならず、伝統的なアニミズムにおいても、犠牲動物として、きわめて重要な役割を果たしている。

豚はかなり経済性の高い家畜で、現金収入源としても見逃すことはできないけれども、鶏やその卵は、ほとんど儀礼用もしくは自家消費用である。

豚は、全戸数二五戸中一四戸で飼育している。また、鶏は九戸で飼っている。しかしながら、これらの動物の飼育戸数や飼育頭数・羽数などは、大家畜の場合と違って、静態的にも、きわめて把握しにくい。

なお、以上述べてきた家畜以外の動物として、四頭ほどのやぎが Hiti Topa 村で飼われている。しかし、これにはほとんど経済性は認められず、乳の利用もされていない。ただ、Safya が悪霊よけのために飼育しているという。

ところで、個別の家計について、どの程度のものか考えてみよう。もちろん、わが国のようなかなり進んだ農村においてさえ、簿記でもつけていない限り、個別農家の経営実態はきわめて把握しにくい。その理由はいろいろと考えられるが、税金を恐れて、農家が正確な数字を提出しないと、生産と消費が未分化であるのが主因であろう。前者の理由はとにかくとしても、山地カレン族においては、後者の理由は日本の農村以上に決定的である。また、文字の無い世界には、蓄積された資料や数字は、口碑口伝以外にはまったく存在しないからである。

しかしながら、筆者はフィールド・ノートにある僅かばかりの数字をつなぎ合わせて、とにかく Hiti Topa 村の“平均的”もしくは“標準的”な一戸の家計を推定してみよう。なお、この種の作業は、Hiti Topa 村の山地カレン族のようにある程度“同質的”な場合には、“異質化”の進んだ Hiti Kani 村の平地カレン族よりもやり

易いし、その結果もあまり現実の姿とはかけ離れていないと考えられる。

それでは、平均的な数字をもとにして、Hi Topa 村のごくありふれた一軒の家計を推定してみよう。すなわち、この家では稲作の部門で六五カンのもみ、を收穫すると考えると、六五〇キログラムの稲もみ、を入手することができることになる。そこで、一戸当たりの人口を大人二人と子供三人からなると仮定しよう。かれらのうち、大人の一人当たり年間消費量を一五〇キログラム、子供を一〇〇キログラムとすると、販売できる米の量はもみにして五〇キログラム、すなわち、五カんに過ぎない。従って、一カンのもみが一〇バーツという、このあたりの庭先価格で換算すると、わずかに五〇バーツに過ぎない。

さらに、水牛を年に〇・五頭と豚を二頭売るとすると、水牛で三五〇バーツ、豚で三〇〇バーツの収入になる。以上のように、稲作部門と養畜部門で、山地カレン族は七〇〇バーツの年間農業粗所得をあげていることとなる。そのほか、年間二、〇〇〇バーツ余りかせいでいる象を三分の一頭分、所有してしているとすると、それで約七〇〇バーツの収入があることになる。かくして、年間現金総所得の合計はわずかに一、四〇〇バーツに過ぎず、邦貨で約二五、二〇〇円である。

もちろん、このほかに、狩猟で入手できる獲物や山菜などの採取による、“自然の恵み”の価値については、推定することが困難であるので、考慮に入れない。いずれにせよ、それを加えたところで、山地カレン族の“生産性”はあまり高いものとはいえない。このように、かれらの技術水準の低さがもたらす低生産性と生産の不安定性は、経済における自給的価格を維持させるのに役立っている。

次に、賃金労働については、Hi Topa 村からは、二人の男が道路工事に人夫として働きに出ている。かれらは、それぞれ日給で一〇バーツずつもらっている。この二人を除くと、他の村人たちは、平地民と密接に接触す

るのを極度に恐れ、かつ嫌って、出稼ぎに行こうとはしない。従って、村落経済全体からみると、労働力の商品化はほとんど進行していないとみてよからう。

さらに、市場経済の影響も、Mae Sarieng の町自体の経済規模に限度がある上に、山地カレン族の生産活動における剰余が少ないため、これまではあまり顕著なものではない。Hit Topa 村と Mae Sarieng の距離はわずか二〇キロメートル余りであり、足の達者な山地カレン族にとっては、ただの半日行程に過ぎない。しかしながら、筆者がこの村の調査に従事していた一九六四年当時には、道路条件は劣悪であった。そのため、一部の生活必需品を除いては、Mae Sarieng の町から Hit Topa 村に向かっての商品流入は、ほとんど見るべきものがなかった。

この間の事情については、あまり数量的に把握できなかったので、印象に残った一つのエピソードを示すことにしよう。山地カレン族の村における単調な生活に、なんとかう、おいを与えようと、筆者は、ある日 Mae Sarieng に買物に出かけた。山村では、あまり野菜が入手できないので、タラット(市場)で野菜を買おうと思った。だが、Mae Sarieng 地方には、中国人がほとんどいないために、あまり良い野菜が無い。そこで、筆者はかなり多量の柑橘類を買って、Hit Topa 村に持って帰る。そうすると、いつもはきわめて遠慮深く、礼儀正しいカレン族たちが、一人ならず、筆者の小屋にやって来て、異口同音に、「いままで食べたことがないので、一つ売ってくれないか……」というのには驚かされた。このような事實は、ネパール・ヒマラヤにおける商業民のタカリー族 (the Thakali) やボテ族 (the Bhoté) などの農牧民と比べると、きわめて対照的である⁽¹⁾。かれらの生活空間は約百から三百キロメートルにも及んでいる。

以上のような比較からも分かるように、Hit Topa 村の山地カレン族における経済は、市場経済や貨幣経済と

のかかわりあいも少なく、かなり自給自足的であるといつてよからう。

- (1) Pendleton (1962) p. 157
- (2) 佐々木 (1966) pp. 163-89
- (3) 上山 (1969)
- (4) Marshall (1945) p. 7
- (5) 現在使用されている掘り棒は、木の棒の先に鉄片が付いたものである。しかし、以前は、竹の棒先をとがらせた物を使っていた。cf. Hugh (—) p. 8
- (6) もちろん、水田稲作における小規模な共同作業の存在を否定するわけではない。あくまでも相対的な差異である。
- (7) せん虫が陸稲の根にはびこったり、また、陸稲の根からある種の化学物質が分泌するのも、いや地の原因になるという。
- (8) 筆者の概算によると、このあたりの山地カレン族のおこなっている農業においては、水稲も焼畑による陸稲も反収に關しては大差ないようである。
- (9) この点については、京都大学農学部農芸化学教室福井徒郎氏に御指導をいただいた。
- (10) 一カンは石油罐ごっばいを指し、現地における計量単位である *Tan* とはほぼ同量である。
- (11) Iijima (1964^a), Iijima (1964^b) 参照。

B 社会組織

i “血”の原理

a 山地カレン族の long house 一説によると、Mae Sarieng 地方における、「スゴー・カレン族は、約一二〇年ほど昔に、西方からやって来て、かつてラワ族が圧倒的に支配していた地域に移動し始めた。かれらが、最初に村をつくりつつあった時に、ラワ族が放棄した地域の山頂だけに定着した⁽¹⁾。という。なお、タイ語の資料によると、今から約一四〇年前に、すでに現在の Mae Hongson の町の周辺に、カレン族が定着していたことが記録されている。いずれにせよ、本研究が扱っている地方においては、一世紀以上前に、カレン族が住み始め

ていたことだけは間違いない。

これから述べようとする山地カレン族の村 *Hiu Topa* も、おそらくは、その時代に、前述のような過程をたどって、形成されたものであろう。

Hiu Topa 村については、このあたりのカレン族の村落の例にもれず、文字に残された記録や資料は、まったくといってよいほど、存在していない。そのため、*Hiu Topa* 村の正確な歴史はほとんど分からないけれども、村の古老の話を総合すると、現在 *Hiu Topa* 村がある周辺には、かなり古くから、村落が存在していたことだけは間違いない。

Hiu Topa 村の最長老であり、宗教儀礼の司祭役を勤める *Sappa* の R 老人⁽³⁾によれば、「かれの幼少の頃（すなわち、今から七〇年余り昔の一九世紀の末期までは）、この付近の山岳地帯では、焼畑農業がさかんであり、村は *long house* (*Hi*) から成り立っていた。その集会場 (*Bio*) で、みんなと食事をいっしょにした時のことを覚えていた。しかし、当時のことは、自分も小さかったので、よく覚えていない。ただ、今日になると、すべてが夢のように思い出されるだけである……」という。

その当時からしばらくたった二〇世紀初頭における、タイ国北部地方のカレン族の村落の情況については、*J. P. Andersen* 氏は、一九二三年に出した論文に、次のように述べている。すなわち、カレン族の「村落の大部分が山腹の高い所に作られていた。家は竹ばかりで建てられていて、屋根は木の葉でふかれていた。通常、各家族はめいめいの家を持っていたけれども、普通は一部屋だけしかなく、中央には泥でできた大型の四角な炉が切ってあって、煙は出るにまかされていた。しかしながら、これまでに二カ村で、家屋が長い建物になっていたのを目撃した。それぞれの建物は数室からなっていて、おたがいに親戚関係にある数家族が住んでいた。」⁽⁴⁾

Hi: Topa 村の昔話でも、Andersen 氏の記述にも述べられているように、一九世紀末期から二〇世紀初頭の頃になっても、タイ国北部地方においては、カレン族の long house が存在していたようである。その後、間もなく、山地カレン族は漂泊的な生活様式に見切りをつけて、定着化の方向に向かった。だが、その頃の Mae Sarieng 地方にはまだ、半定着化しているか、あるいは、かろうじて漂泊的生活様式を維持していた、野性の“カレン族”がかなり住んでいたと伝えられている。たとえば、一九世紀の終りに、この地を旅行したイギリス人の Hallett 氏は、野性の (wild) “カレン族の”数については推定できなかったけれども、かれらはきわめて多数いる」と述べている。さらに、「定着村に住んでいる人間が一万三千人以上いるけれども、それ以上多数の人間が野性のカレン族であることを確信している」と推測している⁽⁵⁾。

なお、岩田教授の話によると、一九五〇年代の末期においても、Mae Hongson 県北東部にある Muang Pai 地方における、山地カレン族の一部では、すでに long house は崩壊しているけれども、村落自体にそのおもかげを残している所があるという⁽⁶⁾。

Hi: Topa 村の long house については、古老の口伝以外には、詳細に知るすべもないことはすでに述べた通りである。しかしながら、カレン族の long house については、Harry I. Marshall 師が一九二二年に出版した *The Karen People of Burma* にかなりくわしく報告しているもので、ここに要約して述べることとしよう。Hi: Topa 村付近にあった long house の内容も、本質的にはこれとあまり大差がなかったものと想像される。

今世紀の初頭において、ビルマ平坦部にいたカレン族は、すでにビルマ風の独立家屋に住んでいたという。しかしながら、Pegu 地区の山岳地帯に住んでいたカレン族は、long house を作って、村落を形成していたと述べている。その long house とは「二〇から三〇家族を収容する高床の竹でできたアパート状の家屋といったらよ

いだろう。それは一つの床の上に拡がっていて、一つの家族がそのアパート全体を占めていたのではない。アパートを縦断している通廊に面している、カレン語で“*Deu*”という一つ一つの部屋を占居しているのである。⁽⁷⁾」

「カレン族の *village house* はせいぜい一二年間住むことができるだけである。それは豊富にある材料で、この小地域社会の成員の努力の結果によって建てられたものであり、すみやかに移動が可能なものである。このため、隣接家族に疾病がまんえんし始めると、かれらはいちばん必要な財産を持って、四散してしまう。まもなく、かれらは集合して、あたらしい場所に、いま一つの村落を再建する。そして、ふるい汚れた家屋から残りの財産を取り出してきて、その建物は荒廢に任せられるか、火をつけられる。⁽⁸⁾」

ビルマのカレン族の間では、「*Th'wewu*」⁽⁹⁾というその種の村落は通常毎年新しい場所に再建された。村の首長が夏の間長老たちと相談をしておいて、収穫が終わると新しい場所が決定される。首長の選定する場所は、ある程度平坦で、つぎの年に切り開く畑地に近く、かつ暑熱期に干あがることのない泉か小川の付近である。昔はそれに加えて、高所にあり、襲撃に対する防御に便利な場所を選択する必要があった。場所の決定が最終的にこなわれる以前に、首長は鶏の骨のうら⁽¹⁰⁾ないをたてなければならなかった。もしこれが吉とでて、笑い鳥(*Lanius*)が“*chet chet*”と鳴かないならば、人々は竹を切り始め、それで村を作るのである。⁽¹¹⁾」

long house についで、Marshall 師は「家庭 (*home*)、と呼ばない。なぜならば、カレン語には「家庭」に相当する言葉がないからである。しかしながら、(*long house*) はその村の諸家族の食事や寝る場所以上のものかである。すなわち、それは家族生活と信仰の中心であり、ある種の聖域であるからだ。」⁽¹²⁾と述べている。

以上、Marshall 師が記述したビルマにおけるカレン族の *long house* のあり方から、われわれがいま問題にしている *Hiti Topa* 村の *long house* の社会構造がある程度類推できると思われる。

現在の Hi Topa 村の住民の系譜を調べてみると、図 13（巻末の綴じ込み）のように、村人は「共通の祖先」を持った血縁集団がその中心になっている。また、それに婚姻関係のある者、もしくは、それらの子孫たちからなっている。このような血縁集団をカレン族は Taduro と呼び、個人を中心に広がる親族の網目において、ある種のまとまりを持った集団である。いずれにせよ、「発達した個人的意識を媒介にして結び合ってきた共同体



図11 カレン族の long house

注 Marshall (1922) p. 59

ではないのである。『個』人がまだ分化して出て来ない以前の未分化状態にある集りである。したがってそれは多数の『個』人の集りであると考えよりも、肉体的には個々に分かれていても、意識的には、いまだ『個』人となっていないものの結合体であったと考えなくてはならない。肉体的につながっているもの、あるいは血のつながっているものは、意識的には、まだ個々に断ち切られてはいないのであり、一体としてのものであったというほかないのである。⁽¹³⁾」

筆者の印象では、J. D. Freeman 博士の描く⁽¹⁴⁾西ボルネオのイバン族 (the Ibans) の long house がカレン族のそれに外観、内容ともに酷似していると考えられる。けれども、カレン族のものはイバン族のものよりも、いまますこし社会的統合が強いように思われる。すなわち、イバン族における long house は家族の集合体として、地域社会を形成している点においては、カレン族の long house と同じであるといえよう。しかしながら、その成員の流動性ということになると、イバン族の場合には、自由な参加・脱退の可能な非閉鎖的な集団である。だが、カレン族の long house の場合は、すでに述べたように、血縁集団が基礎になり、その姻戚関係にある者、もしくは、せいぜいそれらの子孫がその構成員である。従って、カレン族の long house の方がより閉鎖的な集団といえよう。long house が現在の Hiti Topa 村のある付近に存在していた頃には、Bangkok にあるタイ国中央政府はもとよりのこと、当時 Chiengmai に存在していた Lannathai 王朝の紙上行政 (paper administration) すら、あまりこの地方には及んでいなかった。そのため、外部権力により任命された村長は、この村に存在していなかった。せいぜい、年に一回、その当時この地方を支配していた Chiengmai (もしくは Lamphun) の王 (Chao) に手織りの大幅布 (Yadoti) を二枚ずつ入貢してただけであった。しかしながら、その頃の long house には、Pomoh という村自体の指導者がいた。かれは現在の Sapga である R 老人の二代前であり、そのおいで、現在

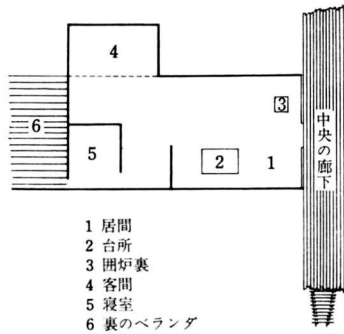


図12 カレン族の long house における家族が占居している部屋
注 Marshall (1922) p. 62

の“官選”村長K氏の三代前の“祖先”に当たる。Pomole は現在でも村人の語り草になっているように、きわめて有能な村の聖俗両面にわたる指導者であったのだらう。当時すでに崩壊過程にあった long house と、それを中心として形成されていた部落連合の解体をかううじて食い止めていたようである。しかしながら、Pomole の死去を契機として、Long house も部落連合も解体してしまった。Marshall 師もいうように、カレン族は村落レベル以上の政治組織を発達させることが、一般的に困難である。かりに、そのようなケースがあったとしても、強力な指導者の死去とともに消滅することが多い。⁽¹⁵⁾

一九世紀の中期までは、この周辺の人口圧力は低かったので、森林も今から比べるとかなり豊富に存在していたといわれている。従って、焼畑農業のフロンティアもまだ山奥の処女林に向かって拡大していたと思われる。カレン族は焼畑によって、long house の周囲にある森林を消耗しつくすと、遠方のジャングル奥深く、村をあげて移動しなければならなかった。

現在ではすでにこの周辺には、カレン族の long house は存在していないけれども、Mae Srieng の町の西方にあるビルマ国境のように、森林資源がまだ豊富にある一帯では、山地カレン族の伝統である漂泊的な生活様式が、いまなお、ある程度保存されている。たとえば、Mae Saku, Mae Kongka, Mae Te, Mae Ge のようなカレン族の部落では、焼畑農業の必要から、約三年に一度ずつ、村をあげて別の場所に移動しているといわれている。もっとも、そのような村々においても、すでに long house は存在していないけれども、前述のように、岩

田教授の目撃した、Muang Pai 地方のカレン族のように、村落のたたずまいに、かつて存在していた long house の名残りをいくらか留めているかも知れない。

いずれにせよ、一般的に述べると、過去においては、long house はカレン族に血縁集団の凝集に場を与え、その社会集団は焼畑農業に適した、きわめて重要な機能を果たしていたことだけは間違いないようである。すなわち、long house は、村落の成員全体が焼畑農業の必要から、一時に移動をするというような漂泊的生活様式を前提として、成立していたのではないだろうか。

そのために、後述するような理由で、焼畑農業が停滞し、移動性が低下すると、long house は主要な存在理由を失い、崩壊の方向に向かったと考えられる。

なお、ビルマにおけるカレン族の long house についても、Marshall 師の後任の宣教師として、かれのすぐあとに、Tharrawaddy 地区に赴任した James L. Lewis 師は、今から半世紀ほど以前における、long house の衰退ぶりを次のように記述している。

「家を研究している時に、われわれは、カレン族が、古風な村落生活を保存した竹の高床のうえにある、不規則に建てられた大型のアパートメント状の家屋を、すでに放棄してしまったことに気が付いた。そこでは、おなじ竹製の家屋のなかに、約二〇から三〇家族、すなわち、約二百から三百人ぐらいが住んでいたのである。一家族当たり、一部屋あり、大きい部屋は首長の家族に割り当てられていて、それに客室も存在していた。一つの家屋に、二五戸もしくはそれ以上の家族が住んでいた。山岳地帯でも、これらの古風なカレン族の家は、ビルマ風の一家族用の家に取って代わろうとしている。筆者の任地の東側にある丘陵地帯を旅行している時でも、数日の間に、カレン族の大アパートメント状家屋と同様に他の山村においてはいくつかの一戸建て家屋に宿泊したことが

ある。Tharrawaddy 地区における筆者の前任者である Marshall 師は、一九〇三年以来、数カ村が兵舎風家屋の古風なカレン様式を捨てて、一家族当たり一戸のビルマ様式を取り入れていると述べていた。⁽¹⁶⁾

いずれにせよ、Lewis 師が述べているように、「外敵」によっておびやかされない限り、ビルマにおいても、long house はすでに半世紀以上に崩壊の一途をたどっていたのである。

ところで、Hi Topa 村の前身でもある、これまで記述してきたような long house は、いうまでもなく、数十年も昔に、解体してしまった。Hi Topa 村においては、今日では、普通の形態の独立家屋を基礎とする村落が形成されている。しかしながら、山岳地方におけるカレン族の村落の例にもれず、独立家屋とはいっても、外見内容ともにきわめて粗末なものである。平坦部にある、タイ系平地民の定着している村落はもちろんのこと、平地カレン族の村落における家屋に比べてさえ、かなり簡単な様式で建てられている。このあたりにも、山地カレン族がいまなお漂泊的生活様式の名残りを残していることが感じとられるのである。

なお、図 13 (巻末の綴じ込み) の Hi Topa 村における系譜図を見ても分かるように、この村の社会組織の前提となっているのは、血縁組織を中心とした社会集団である。従って、Hi Topa 村の成員になるためには、第一の条件として、カレン族でなければならない。また、その上、この村出身の両親か、すくなくとも、どちらかの親を持たなければならないのである。それ以外の者が村人になる場合には、この村出身の男性もしくは女性を配偶者にしなければならない。

原則として、前述のような条件を満たさない者は Hi Topa 村の領域に、田畑を所有もしくは占有することはもちろんのこと、一片の土地をも入手することはきわめて困難のように思われる。すなわち、ここにおいては、個人と村人であること、さらにカレン族であることが、未分化のまま、渾然一体となり、さらには、村の領域で

ある大自然とも、明確な分岐線があたかも存在しないように思われるのである。

ii 政治的リーダーシップ　まず、村落レベルの問題から話を始めることにしよう。Hi Topa 村では、山地カレン族の漂泊的生活様式が卓越していて、long house がなお健在であった頃には、現在知りうる限りでは、外部から任命された村長は存在しなかったように思われる。従って、現在、村で Sapga または Hiko と呼ばれ、もっぱら宗教的指導者もしくは司祭者の役割を果たしている者は、以前には俗界の指導者の役割をも兼ねていたと考えられる。もちろん、当時の山地カレン族においては、かれらの社会・文化は現在以上に「祭政一致」をしていたのであろう。そのために、聖俗の指導者の機能を分離させる必要がなかったのであろうか。

カレン族の社会組織について述べた時に、すでに触れたように、かれらの社会は双系的傾向がつよいために、たどることのできる系譜が父系社会や母系社会のような単系的社会とは異なり、あまりさかのぼることはできない。そのため、Hi Topa 村においても、現在たどることのできる聖俗の機能を兼ねた村の指導者の最後の者は Pomohé である。前述のように、かれは現在の Sapga の二代前に当たり、現村長の三代前に当たる。このように、現在の Sapga と村長はおじ・おいの関係にある。

当時、Pomohé は自分の所属している long house はもちろんのこと、付近にあるいくつかの部落 (Hi) にも影響力を持っていた。Pomohé はおそらく有能な指導者であったのだろう。long house はすでに内部の矛盾がかなり激化し、その解体の危機にひんしていたと思われるのに、Pomohé は long house 自体の崩壊を食い止め、さらには配下の「部落連合」の分解をも押し止めていたようである。しかしながら、Pomohé の死後間もなく long house は解体し、「部落連合」も消滅してしまった。現在の Sapga の R 老によると、「Pomohé の死後、人は自分のことばかり考えて、子供のようになってしまった」からだという。

Hit Topa 村におけるこのような傾向は、ビルマにおけるカレン族に関する Marshall 師の記述と完全に符合している。すなわち、「カレン族は村落生活の機構を越えるいかなる恒常的政治組織をも発展させることができないように思われた。時によっては、強力な男が出現し、おおくの村々に権力を振り、それらをかれ個人のもとに結合することがある。しかしながら、通常は一人一人の個人的独立の感情が現われて、その組織者の死とともに、かれの地位を継承する者がいないと、数カ村はそれぞれの首長のもとに独立して行ってしまうであろう」と述べている。⁽¹⁷⁾

山地カレン族の村落社会がこのように変動していた時に、このあたりをめぐって外界とはどのような関係を保持していたのであろうか。当時の Mae Sarieng 地方一帯の状況については、第一章第三節に述べたので、ここでは重複を避けることにしよう。

Hit Topa 村は、山地カレン族の村落の例にもれず、歴史をしるしている資料や記録が皆無である。そのために、long house がこのあたりに存在していた頃のことについては、詳細なことは分からないけれども、一九世紀の中葉頃までは Chiangmai の王、もしくは Lamphun の王がこのあたり一帯を支配していたと思われる。ところが、一八七七年になると、Bangkok に本拠を置くシャム政府をひきいる Rama 五世が Chiangmai に Phayatep Worchun という常駐高等弁務官 (Resident Commissioner) を送った。すなわち、この頃を境として、タイ国北部一帯はしだいにシャム政府の影響化に入ったと考えられる。しかしながら、当時の Bangkok 政府と北部地方との関係は、近代国家における中央政府と属領という関係から見ると、きわめてゆるやかなものであったように思われる。当初は年に一度ぐらい、入貢する程度の政治的関係に過ぎなかったのである。このような状態は、一九一〇年代のはじめの頃まで続いたのであろう。この間、Hit Topa 村の山地カレン族たちは上部の政

治的变化とはほとんど無関係に、前述のように Chiengmai¹ もしくは Lamphun の王に手織りの大幅布 (Yadori) を毎年二枚ずつ入貢していたと伝えられている。なお、Hi Topa 村の山地カレン族の説明によると、入貢先の王朝は、村から数日歩いて Hod² に行き、そこからさらに数日東北に行った Wiang (都市) というだけで、正確には Chiengmai か Lamphun か知ることができなかった。

今世紀に入り、Chiengmai や Lamphun を初めとして、タイ国北部が Bangkok の中央政府のもとに完全に政治的統合がおこなわれるに従って、Hi Topa 村のような山岳地帯にある僻村にもかなりの変化が現われてきた。この村においては、その頃までは聖俗の指導者であった *Sapga* によって治められていた。しかしながら、すでに中央政府は Mae Sarieng 一帯に影響力をつよめ、Mae Sarieng の町にある政府の出先機関が Hi Topa 村の村長 (*Kae*) を任命するようになる。かくして、山地カレン族の社会においては、聖俗のリーダーシップが形式的には分離されたことになる。もっとも、政府の山岳地帯における行政は、いわゆる紙上行政の域を出ず、たいていの場合には、村人たちの推した有力者を、政府の地方出先機関が自動的に任命することが多かったようである。Hi Topa 村もこの範疇の外にはなかった。

ちなみに付け加えると、Hi Topa 村で、現在、すでに引退している P 老人は、政府の“任命”による第一代の村長であった。かれは、現在の村長 K 氏の実父であるとともに、この村の *Sapga* として、村人の精神界に“君臨”している R 老人の実弟に当たる。

このようにして、ここ数十年間には、Hi Topa 村のような山奥の村においても、形式的にはかなりの政治的变化が存在した。だが、その過程を注意して吟味してみると、この村をめぐる社会的統制は、実質的にはあまり変化がなかったのではないかと考えられる。すなわち、かつての“大指導者” Pomohé に端を発して、*Sapga* の

K老、前村長のP老人、それに現村長のK氏と続くこの“一族”が、Hi Topa村のリーダーシップを“独占”し、long house 以来の“祭政一致”的な社会的統制をひいていたと思われる。

しかしながら、このような伝統的社会的統制も、いまや変化のきざしを見せ始めている。政府はこれまで Hi Topa 村のような山地民の住んでいる僻村に対しては、村長を形式的に“任命”するとしても、実質的には、まったく自由放任的な態度をとり続けていた。ところが、この数年間に、村長の扱いに微妙な変化が現われ始めた。それというのは政府が山地民村落における村長を任命するようになってから、数十年たつて初めて、Hi Topa 村のような山地民村落の村長に、名目的ではあるけれども、“月給”を支払うようになった。かくして、Hi Topa 村の村長のK氏は、平均して月に一度、村から二十数キロメートルの山道を歩いて、Mae Sariengの町にある郡役場⁽¹⁸⁾(Amphoe)に、会議のため出かけるようになる。また、時には、郡役場の方から、反対に、北タイ人の地区長(Kamnan)をHi Topaのような山村・僻村に派遣し、現住民に接触を求めようになった。

これら一連の変化は、中央政府による、国民形成の努力の現われであると理解されるが、山地カレン族の社会統制を考えるうえで、きわめて注目に値する変化と評価してよからう。このような変化は、税制にも現われ始め、以前かけられていた人頭税も、タイ系平地民に準じて、地税や家畜税など不動産税や物品税に変わりつつあることも指摘する必要がある。

(1) Kunstader (1967) p. 641

(2) Phũ wã rãtchakaan caiwát lé' Khaná' Kamnakaan Capwát mee Hẽpsõn (1957)

(3) 山地カレン族には、伝統的には年齢を数える習慣はない。従つて、R老人の年齢は正確に分らないけれども、約八十歳と推定される。

(4) Andersen (1923) pp. 54-55

- (5) Hallet (1890) p. 37
- (6) 岩田教授との会話による。
- (7) Marshall (1922) p. 56
- (8) Marshall (1922) p. 63
- (9) カレン語では村と言う意味。
- (10) 「うらない」の諸形態のなかで、

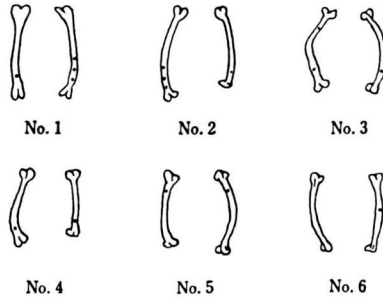


図10 鶏骨によるうらない

注 Marshall (1922) p. 283

読む時には、骨をさかさまにする。上部は *‘hkaui’* (文字通りでは頭) という。右 (*‘hsa’*) と左 (*‘mi’*) はうらないをする人の右左とはぎやくである。[Marshall (1922) p. 282] など、Marshall はうらないを読み取る場合の、六種類の穴の並び方について図10のように述べている。

- (1) この並び方は悪運か病気の前兆である。
- (2) これは(1)の反対で好運の前兆である。
- (3) これは吉兆である。
- (4) これは、うらないとしては普通である。

もっとも一般的におこなわれているのは、鶏骨を調べるものである。それはあらゆる機会に利用される。かれら(カレン族)にとって、その結果が重要でなくても、

また重要であっても、通常、鶏骨を調べて、吉兆を得るといったようにうらないなしでは、迷信に固執している者はなにごともしようとしない。[Marshall (1922) pp. 280-82] このうらないの方法には何種類もあるようだが、Marshall によると、ビルマの Tharrawaddy 地区では、次のようにおこなわれているという。「この方法によると、左足のもの骨 (*‘mi’*) はジャングルを現わしている。もし、この骨が右のもの骨よりもたくさん穴があったり、ある特別な並び方をしていると、縁起が良くない。すなわち、生命の源泉である *‘etla’* がこの前兆を知ることによって影響されて、関係のある人間の体から離れるので、病気や死を招く。しかしながら、なにか企てに対して、骨をうらなうと、上述のような結果は、吉兆を得ることができるまで、それを延期しなければならぬことを意味している。右のもの骨 (*‘hsa’*) は家を示す。それが吉兆を示す時は、すべての計画はうまくゆき、関係者は好調である。(うらないを)

- (5) これは(4)の普通よりも少し悪い。
- (6) これは大凶の前兆である。
- (11) Marshall (1922) p. 56
- (12) Marshall (1922) p. 64
- (13) 柏 (1968) p. 153
- (14) Freeman の描くイパンの族の long house の特徴はつぎのとおりである。
- (1) イパンの族の最小かつ基本的な社会集団である家族 (*brick family*) が四ないし五〇戸くらい集まって形成されている。long house 以外には地域社会は存在しない。long house が村落そのものである。すなわち、long house は独立的な自治体で、外部から法的、政治的、社会的制約は受けない。
- (2) 個々の long house はそれぞれが占有している土地を明確に、領有して、その領界は流れや崖のような自然的地形によって区分されている。
- (3) イパンの族の社会は双系的 (*ambilineal*) なので、親族と言えども、組織された集団ではない。家族が最大の自律集団 (*corporate group*) である。親族はただ long house という地域社会の形成に、ひとつの枠組を与えているだけである。
- (4) long house 内における通婚は五〇パーセントを占めている。家族が唯一の族外婚をする単位であり、それ以上に大きい族外婚をする集団は存在しない。
- (5) 双系的親族組織を基礎とした long house は、それぞれ核集団 (*core group*) を持っている。それは long house の創始者を中心とする親族によって形成されてくる。
- (6) long house のなかの家族はたがいに親族関係によって結合されているけれども、long house 全体が完全に相互依存的であるとか、階層化した集団ではない。それは家族が自立的・独立的であるからだ。そのため、他の long house に移動することはまったく自由である。いうなれば、long house は双系的親族組織を基礎とする、自治的家族の地域を限定した連邦である。
- (8) long house の家族はたがいに親族関係が存在するにもかかわらず、long house の共有財産も農耕地の共有のみならず共同利用もない。さらにそれを母体とする共同的経済行動もない。
- (9) long house は共同生活の舞台としては、かなり意義がある。すなわち、成員は農耕儀礼に対しては権利・義務を保有し、long house の宗教的行事にかかわりあいを持っている。

- (10) long house には二種類の役職者がいる。その一人は聖職者で、他は世俗的秩序維持を担当する者である。
- (11) long house における家族には、能力の差異により貧富の差が存在するし、また prestige を得る者もいる。しかしながら、ここではそれによる支配・服従の関係は成立しない。すなわち地位も名譽も子孫に継承されることはない階級なき平等の社会である。[Freeman (1955) pp. 8-10 参照]
- (15) Marshall (1945) p. 29
- (16) Lewis (1924) pp. 40-41
- (17) Marshall (1945) p. 29
- (18) 県 (Changwat) の次の行政単位で、Amphoe という。しかし、地方の用語としては郡役場自体も Amphoe と俗称する。

第二節 Hti Kani 村——平地カレン族の村落

A 水田農業のエロロジと経済生活

i 水田農業のエロロジ 本節でも取り扱う平地カレン族の村 Hti Kani は、現在生きている古老から数えて、三代ほど昔に設立されたという。当時、北方の Mae Top 村から、Pablo という男がやって来て、この村を開いたと伝えられている。その頃は、第一章第三節でも述べているように、Mae Sarieng を中心とする谷間の平坦部は、かなり背の高い草におおわれていて、原野のような状態であったように想像される。村の古老の話によると、村ができた始めた頃は、家もまばらで、こちらに一軒、あちらに一軒という状態で、**“散村”**の様相を呈していたという。そこへ、さらに Hue Pu とか Mae Et Ki というような山岳地帯にある村々から、カレン族が移住して来て、しだいに今日のような集村型の村落を形成したといわれる。

Hti Kani 村の形成され始めた当初においては、第一章第三節にも述べてあるように、人口に比べて、まだ土

地が十分にあったのと、村人の文化のなかに、山地カレン族的生活様式が濃厚に保持されていたので、かれらは村の周辺のみならずこちらで、さかんに焼畑農業を行っていたと伝えられている。

そこへ、当時 Main Loongyee と呼ばれていた Mae Sarieng の町に住んでいた「インド人」（現在のパークスターン人）商人の Surek や Alimot が、カレン族や北タイ人の労働者を使って、現在の Hui Kanu 村の周辺に、水田を造成し始めた。隣国のビルマにおいても、きわめて悪名が高く、狡猾なインドやパークスターン人の商人だけに、カレン族にいわせると、かれらはずいぶんえげつない商売をしていたようである。草原を伐採し、水路をつけただけの「水田」を造成し、カレン族などに売りつけたといわれる。

このように、未完成の「水田」を購入したカレン族は、水田耕作に不慣れで、その技術も未熟であったために、Hui Topa 村の山地カレン族と同様に、水田耕作を開始し始めた当初は、たいへんに苦勞を重ねたようである。

何回かの試行錯誤をしたり、Mae Sarieng の盆地に、すでに定着していた北タイ人、シャン人、ラワ族などから、水田農業の技術をまなんだりして、しだいに水田農耕民になっていったと伝えられている。

ところで、東南アジア諸国における主要農産物のなかで、いちばん重要な物は米と考えられている。その支配的な生産様式は水田稲作であろう。これは一般的にいうと、東南アジアの平坦部の生活様式を特徴づけるものである。土地が平坦で、降水量が十分にある所か水利の便のよい場所では、水田農業がいろいろな形で発達を遂げてきたのである。「ほかの農耕形態と同様に、水田農業の伝統的技術は、気候と地形の地方的特有な条件に対しての長期にわたる苦難に満ちた適応の結果である。これは焼畑農業よりもはるかに集約的な土地利用形態なので、それが発達したのは注目すべきことである。

田の面を水平にすること、あぜを作ること、それに、必要に応じて階段状の水田を作ることによって、土壌浸

第三章 カレン族の村落構造

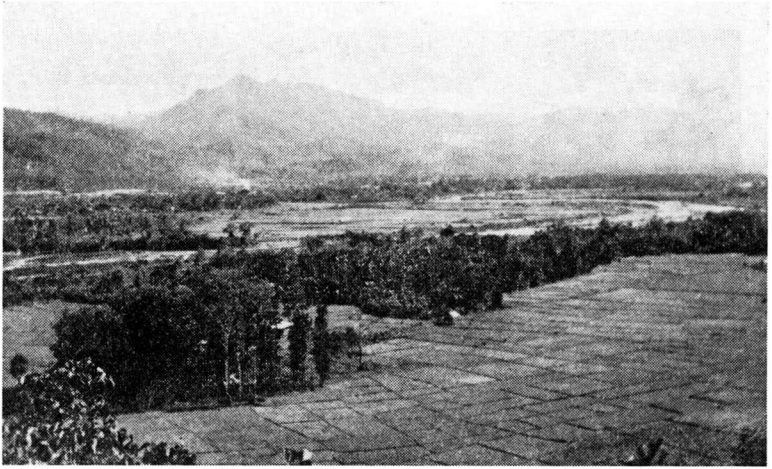


写真11 Mae Sarieng の谷にある Hti Kani 村の全景

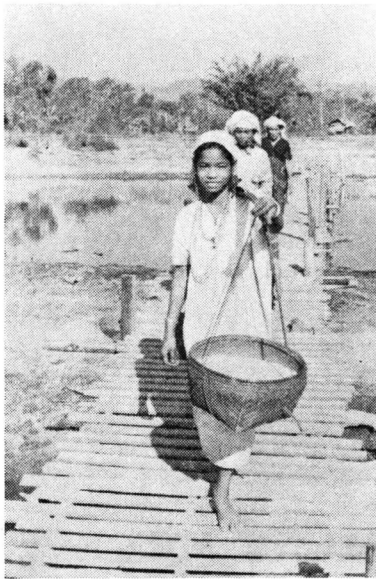


写真13 平地カレン族の村 Hti Kani から Mae Sarieng の町に行商に出かけて行く。

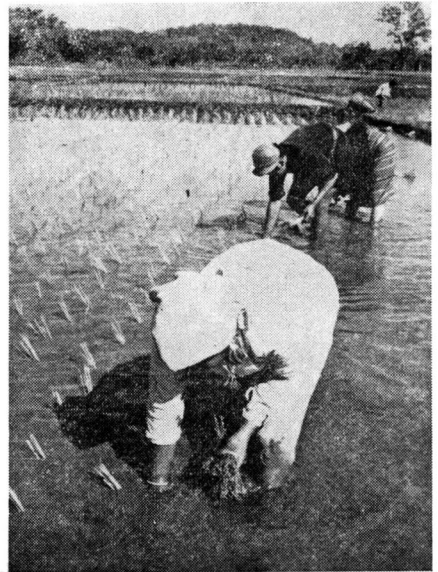


写真12 平地カレン族の田植



写真14 機織りをする平地カレン族の娘

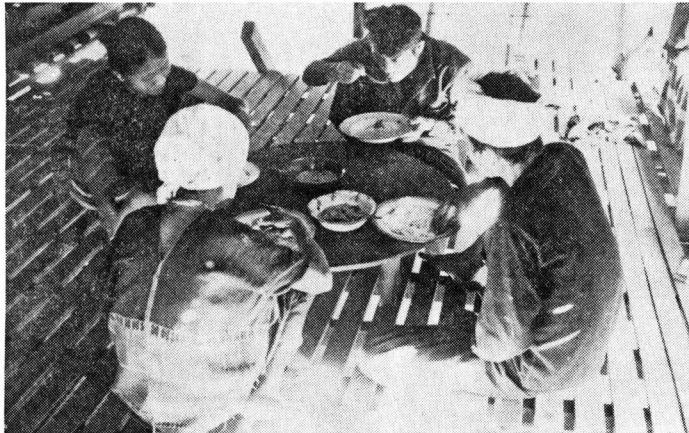


写真15 平地カレン族の食事。 *Sabi* というカレン式の食台は用いず、北タイ式の食卓を使う。

第三章 カレン族の村落構造

表9 平地カレン族の月別農作業と農耕儀礼

農業と儀礼		水田関係	
西洋暦	カレン暦	農作業	農耕儀礼
12	Teku	水稲の収穫 米を穀倉に入れる	<i>Boa Bu</i> (地神) 儀礼 <i>Talē Koti</i> (水と大地神) 儀礼 <i>Sebuko</i> 穀倉儀礼
1			
2	Teku		
3	Tepe		
4	Lasa		
5	Denya		
6	Lanwe	灌漑水を導入する	<i>Lutiboko</i> 灌漑溝の儀礼 <i>Puchoda</i> 水田儀礼(耕す前)
7	Laxo	苗代作り 播種	
8	Laku	代かき	<i>Boachi</i> (地神) 儀礼
9	Chimū	水田整備 田植え	<i>Boachi</i> (地神) 儀礼
10	Chicha		<i>Boachi</i> (地神) 儀礼
11	Lano	除草	<i>Obuko</i> (稻魂) 儀礼 <i>Kwe Buk'la</i> 脱穀儀礼 <i>Pobuk'la</i> 脱穀儀礼
12	Laplu	水稲収穫 開始	

注 表2の注と同じ

食のたえざる脅威に対する効果的な保護と、さらには何千年とはいわなくても、何百年間も土壌の肥沃度を失うことなしに、大部分の地方で耕作が続けられてきた。これは灌漑水や大水が運んでくる肥料分によって、水田土壌の肥沃度が保持されているからである。⁽¹⁾

それでは、次に *Hu Kani* 村の平地カレン族はどのような水田農業を行なっているか、一瞥することにしよう。表9 に見るように、*Hu Kani* 村においてはカレン暦の *Denya* (四月中旬～五月中旬) の中葉を過ぎると、通常六カ月にわたる雨の季節が始まる。前年の十月の終り頃から約半年間にわたった乾季のために、ばさばさに乾燥しきった大地がほどよくしめり気を持ち、河川も増水を始め *Lanwe* (五月中旬～六月中旬) に入ると、平地カレン族たちは田に灌漑水の導入を開始する。*Laxo* (六月中旬～七月中旬) に入ると、苗代の準備がなされ、

そこに稲もみの播種がおこなわれる。さらに、Laku (七月中旬～八月中旬)には代かきがおこなわれ、Chimu (八月中旬～九月中旬)にかけて、水田の整備が続けられる。それが終わると、田植えがおこなわれる。この頃になると、雨季に入ってから四ヶ月ほどたっているのに、河川もかなり増水して、このあたり一帯の水田に十分灌漑水がゆきわたるようになる。

その後は、平地カレン族たちは、ほとんど施肥をしたり、除草をしたりせず、水田に手をかけることはしない。せいぜい、Lano (十月中旬～十一月上旬)の間に一回除草をおこなうだけである。それは水稲の成育の妨げになっている雑草を除去するというよりは、むしろ間もなくおとずれる収穫の際に刈り取りや稲の整理がしやすいようにするためのようである。焼畑については、山地カレン族のきわめて粗放的農耕方式のなかにあっても、何回か除草をおこなっているのに、水田農業では除草回数がすくないのはなぜであろうか。それはいうまでもなく、灌漑水が水田における雑草の発生をかなり抑制しているからであろう。

Lapu (十一月中旬～十二月中旬)に入ると、水稲の収穫が始まるが、それはTale (十二月中旬～一月中旬)の前半まで続く。かくして、Hi Kani村における水田農業を中心にした一農業年が終了する。

ここで、Hi Topa村における山地カレン族の焼畑農業とHi Kani村における平地カレン族の水田農業とを比較すると、きわめて対照的なのは、共同作業のあり方であろう。すなわち、焼畑農業においては、焼畑の候補地の決定に始まり、伐採、播種、何回かにわたる除草作業などと、収穫にともなう仕事を除いてはほとんどの農作業の体系が、地域社会全体もしくはその一部を包含する共同作業によってなされている。さらに興味深いことに、山地カレン族の村落において、わずかばかりおこなわれている水田稲作の場合にも、平地カレン族の村落に見られる、個別経営間の共同作業よりも、かなり広範な共同作業がおこなわれている。

一方、平地カレン族の村落においては、灌漑や田植えとか、収穫・脱穀調整の時には、一部でゆい（結）のような形式による小規模の共同作業が見られる。しかしながら、水田稲作農業における作業の基本的形態は、個々の経営単位によっておこなわれている「家族労作型」のものではなからうか。この点は、われわれが山地カレン族の村落構造と平地カレン族の村落構造を比較するうえで、きわめて注目し値する。

これまで述べてきたように、Hi Kani 村の農業の基礎になっているのは、疑いもなく、水田稲作である。しかしながら、調査をしてみると水田を自分自身で所有している家族はあまり多くない。すなわち、全戸数の四八戸中で、水田を所有している経営は、わずかに九戸（一八・九パーセント）に過ぎない。しかし、そのほかに一三戸（二七・一パーセント）の家が水田の小作をおこなっている。

水田所有面積については、実際の面積を把握するのが、きわめて困難なので、米の収穫量で考えてみよう。村の総代をしているM老の家では、調査をおこなった一九六五年には、作柄不良であったために、もみにして約四百カンの収穫しかなかった（平年作は約五百〜六百カン）。そのM家の収穫を最高にして、数字を示すことができないほど、「少ししか収穫できなかった」と答えたT家を最低に、かなりの階層分化のきざしを観察される。村の平均は一戸当たり、おそらく、不作な年でも、約百カン前後、豊作の時には約一五〇カン前後の収穫があると推定される。

いずれにせよ、Hi Kani 村の平地カレン族たちの水田所有面積がきわめて少ないのは、驚くほどである。その理由としては、山地にある Hi Topa 村の場合とは異なり、Hi Kani 村は市場経済の波に直接洗われているからであろう。ここでは、土地自体が、すでに貨幣の媒介によって商品化し、離合集散を始めているのである。

これは Hui Topa 村の山地カレン族の間においておこなわれているような、土地の占取もしくは取得が、血の原理、もしくはそれにまつわる姻戚関係によってのみ可能な社会とは、きわめて対照的であるといえよう。

このような水田のほか、Hui Kani 村のカレン族は、それぞれの家で、周囲に若干の「畑地」(Suan)を持っている。しかしながら、畑地は家の敷地ややぶとの境界線が不明確で、水田以上に面積の把握が困難である。だいたい、一戸当たり、四分の一から四ライぐらいの畑地を所有し、平均約一・五ライぐらいと推定される。

そのうえ、Hui Kani 村の平地カレン族における畑地の耕作技術は、山地カレン族の粗放的な焼畑農業と、基本的にはあまり変わるところがないと思われるほどで、高度なものではない。そのため、商品作物を生産する余地は、ほとんど存在していないように思われる。従って、畑作物の生産の目的は、自家消費を中心としておこなわれている。わずかばかりの剰余は、女たちが天びん、棒でかついで、村の近くの Mae Sarieng や Ban Pon に行商として売りに行く。

畑作物の種類は雑多をきわめている。たとえば、バナナ、ココナツ、こしょう、ピーナツ、大豆、いんげん豆、さつまいも、砂糖きび、タバコ、マンゴー、パパイヤ、それに若干の野菜や陸稲である。このように、種類の統一がなく、しかもその生産量が僅少であるために、Hui Kani 村の畑作物の商品価値はきわめて低いといえよう。

次に家畜について述べよう。水牛は、全戸数四八戸のうち三一パーセントに当たる一五戸で飼育している。一戸当たり、最低一頭から最高七頭まで飼っているが、一戸当たりの平均は二・九頭である。なお、全村合計では、四三頭いる。

豚については、四八戸中三七・五パーセントに当たる一八戸で飼育している。一戸当たりでは、最低が一頭、

最高で一六頭、平均二・二頭を飼っていることになっている。平地にある Hi Kani 村においては、豚が儀礼用であると同時に、商品としての性質が濃厚なので、山村の Hi Topa 村におけるよりも、やや実数が把握しやすかった。

一方、豚とともにカレン族の宗教儀礼に不可欠である鶏については、Hi Topa 村と同様に、Hi Kani 村においてさえ、なかなか飼育羽数の実態は掴みにくかった。飼育戸数は、全戸数の七〇パーセント余りに当たる三四戸である。インタービューから得られた飼育羽数から類推すると、一戸当たりでは、約四羽ほどの鶏を飼っていると考えられる。

ところで、第三章第一節 A のところでも述べたように、伝統的には、山地カレン族にとって、象は重要な経済的動物であるのみならず、地位の象徴 (status symbol) としても、たいへんに重視されている。ある意味では、象を持っているということが、カレン族の一員としての一種のパスポートでさえあるのだ。ところが、平地カレン族の村 Hi Kani においては、誰一人として象を持っていない。この事実は、かれらの社会・文化的性格を知らううえで、きわめて注目すべきことでなかろうか。

ii 市場経済の影響 きわめて自己完結性の強い経済生活をいとなんでいる山地カレン族に対して、平坦部の Hi Kani 村のカレン族も、市場経済のなかに包み込まれているとはいっても、基本的には、自給自足経済の域を脱してはいない。それは、かれらの農業生産力がきわめて低いために、それから生まれてくる剰余が少ないからであろうと考えられる。

しかしながら、一八五〇年頃から、Mae Sarieng 地方一帯にはチークを求めて、Bombay-Burmah Corporation

などの会社が進出した。また、Mae Sarieng の町自体も、そのような刺激を受けて、ある程度市場としても、**発達**したのである。そのために、Mae Sarieng の町の近郊に位置している Hti Kani 村に対しても、市場経済の圧力がかなり加わるようになったと考えてよからう。従って、きわめて緩慢ではあったが、水田や畑のよ
うな不動産はもとより、動産も、さらに労働力でさえ、貨幣を媒介とした商品流通の流れのなかに、巻き込ま
れているのである。

とりわけ、Hti Kani 村のカレン族たちは、タイ系平地民が支配的な Mae Sarieng の谷のような地域に、比較
的遅れて定着したために、十分な土地を占拠することはできなかった。しかも、一度手に入れた土地でも、商
品経済に不慣れで、**“ナイーブ”**なカレン族たちは、すぐに失ってしまったようである。被害は自分の土地を失
うだけに止まらない。**“はげたか”**のようなインド商人たちは、Hti Kani 村の入口にある土地を手に入れると、
村人を日雇いに使って、その拡張を始めた。毎年毎年、じりじりと、畑地の周囲を拡張し、ついには道幅をつめ
過ぎて、牛車が通過できないようにしてしまった。いずれにせよ、カレン族はこのようにして、土地を失い、生
産手段を失ったのである。

かくして、Hti Kani 村の平地カレン族のかんりの者が、村外に出稼ぎに行っている。村の全戸数の過半数で
ある約三〇戸前後の家から、毎日、一戸当たり一人から三人ぐらいの者が Mae Sarieng の町とか Ban Pon な
どのタイ系平地民のもとに働きに出る。大部分の者が、目に一丁字もないので、職種も限定されている。使い走
り、庭作り、木こり、溝掘り、土方仕事など、下級労働者として働いている。一日の収入は、約五バーツから三
〇バーツ(約九〇円から五四〇円)といわれ、平均の相場は、日本円にすると、わずかに百円前後が相場だとい
われている。

このほか、山地カレン族の Hiti Topa 村では、まったく見られなかった現象として、家庭の主婦による行商がある。女性による行商は、伝統的にはカレン族の習慣ではないようであるが、おそらくは、周囲のタイ系平地民からまなんだものであろう。Hiti Kani 村の主婦は、毎朝、天びん棒の両側にかごをさげ、農作物を持って、Mae Sarieng の町にある市場 (Tarat) に行きに行く。だが、このような平地カレン族による商業活動は、商品の絶対数や絶対量がきわめて限定されているために、それ自体では、かれらの村落経済に決定的な衝撃を与えるとは思えない。けれども、それと労働力の商品化などの他の諸要因との総和を考えると、平地カレン族の経済は、自らが望むと望まざるとにかかわらず、商品経済化の方向に押しやられていることだけは間違いない。

平地カレン族の村 Hiti Kani においては、貨幣が、慣行による集中と再分配の循環からはずされて、個人所有にゆだねられた。このことは、その額が当初においては僅少であっても、やがて伝統的経済組織を突き崩し、ついに、カレン族の社会・文化の再編成を要求することにならないだろうか。

(一) Fisher (1964) p. 75

B 社会組織

i 土地、原理 Mae Sarieng の谷間の平坦部に位置している Hiti Kani 村においては、前述のように、村落の編成原理が、山村の Hiti Topa 村と大きく異なるように思われる。すなわち、平地村の Hiti Kani 村においては、血縁的編成原理と同時に、地縁性が前面に出てくるようだ。Hiti Kani 村から他の町村、他の所から Hiti Kani 村と、人の流出流入がたいへんに多い。それに加えて、山地カレン族の村 Hiti Topa ときわめて対照的なのは、Hiti Kani 村への流入は、カレン族だけではないということである。図14(巻末の綴じ込み)に



写真16 平地カレン族の家屋、家の周囲には、^レ田い込み、^ルすら始めている。

も見られるように、調べうる限りでは、開村以来これまでに、北タイ人、ラオ人、ラワ族、カムー族、ビルマ人、カンボジャ人などの非カレン系民族集団も、*Hti Kani* 村のカレン族と結婚して、定着している。

現在でも、ポー・カレン族男性一人、ラワ族の男女各一人、北タイ人の男性三人、女性二人、カレン族とカムー族の混血の女性一人が、婚姻関係を通して、ここの村人になっている。

このように、他の民族集団の成員がカレン族のなかに比較的容易に吸収されていくのは、平地の村で顕著な傾向であるように思われる。だが、この現象は、山村においてはきわめてまれなことのようなのである。*Hti Topa* 村においては、このようなケースは一例もないのみか、調査で得られた三〜四代の系譜のなかでも皆無である。しかも、平坦部の村で、このように他の民族集団の成員がカレン族のなかに吸収されていくのは、婚姻というような社会的な障壁をのり越えた者だけではない。筆者も *Hti Kani* 村に調査のため、かなり長期間滞在したけれ

ども、その間に一度ならず「カレン族になる」ことを村人からつよく勧められた。その時、村人の何人かにカレン族になる方法を尋ねてみると、「村でおこなう *Talutphadu* 儀礼(1)に毎年連続参加し、豚やにわとりをそのたむじとに *Hii K'cha Ko K'cha* の神に犠牲として供すれば、カレン族の一員になることができる」という。もつとも、後述の「家族儀礼」の対象になる「家神」*Baha* を獲得するのは、両親のいずれかが、*Baha* を持つか、あるいはカレン族と結婚することが必要である。このような訳で、上述の方法では他の民族集団に属している者が、一世代の間に百パーセント完全なカレン族になることはできない。しかしながら、このように平地の村落では、原則として、他の民族集団の者が、カレン族になる道がふさがれていないことは、山村と平地村の社会・文化的性格を考えるうえで、興味深いことである。

それでは、このような平地村における、異質的要素をも吸収する「開放性」と、山村の血縁的結合を基礎にした「封鎖性」は、どのような背景のもとに発達してきたのであろうか。いくつかの理由が考えられるであろうが、その根本的なものの一つとして、山岳地帯と平坦部における社会・文化に対する、カレン族のエコロジカルな適応の差異によるのではないかと考えられる。すなわち、*Hii Topa* 村のような山岳地帯においては、カレン族が他の民族集団に比べて「多数派」である。そのため、山地カレン族はいかなる状況のもとにおいても、周囲に住んでいる他の民族集団に吸収され、消滅されてしまう恐れはない。むしろ、一般的に考えられるのは、逆の可能性である。従って、そのような状況のもとにある山地カレン族は、「排他的」に血の「純潔」を保持することができるのである。

それに対して、平坦部にある *Hii Kani* 村の平地カレン族の状況は、これとまったく対照的である。谷間においては、カレン族はもはや「多数派」ではなく、タイ系の住民に囲まれて生活している。そのため、一歩あや

まると、カレン族はみずからの本質を失い、他の民族集団に吸収されてしまう危険にさらされている。このような状態のもとにあつては、カレン族は「少数派」として、「血の純潔」を犠牲にしてまでも、カレン族という文化集団として、自分たちの民族集団を維持し、生存していこうとしているのではないであろうか。

これとの平行現象を von Furer-Haimendorf 教授がネパールにおける Chetri カーストとインドにおける再生カースト (twice-born caste) との比較により、報告をおこなっている。すなわち、「われわれは Chetri とそれに比すべきインドの再生カーストとの顕著な差異について、確信を持って説明しうるネパールの社会史については、まだほとんど知っていない。しかしながら、限られた資料にもとづいて、カーストの枠組の中における Chetri の異なったカースト間の性的関係に対する寛容さとか、それにとまなう子供の承認は、他のおおくの民族集団のなかにおけるマイノリティーとしての地位が原因なのかもしれないという仮説をこころみに発表しようと思う。それは、分裂的傾向に抵抗することや、また Chetri の血の純潔を薄めてまでも数のうえでの優勢を保つことは、他のコミュニティーに対する共通の生命線を維持することであり、それはかれらの利益であつたし、また利益でもあるのだ。雑婚による後裔たちと分割されないカーストとをかれらの父親の氏族 (clan) の成員として保持することによって、Chetri はこれら 半 Chetris の忠誠を獲得しているのかも知れない。さもなければ、地位の低いカーストの分派は Newars, Gurungs や Magars のような土着の民族集団と同盟をむすぶ結果になつたであろう。Rana 氏族が支配の末期に権力を過信して、非 Chetri の母から生まれた息子たちに対して、儀礼上だけではなく、政治的にも差別をした。そのために、この種の C クラスの Rana が Rana 家の支配を転覆するのに重要な役割を演じたのであつた。Chetri の地位に相当するインドのカーストは大部分の場所で支配的地位が確立している。そのため、混血の人間をひくい亜カーストに追いやるように規定して、数による実力を弱体

化することができるのである。なぜならば、だれもが認めているカトストのヒエラルヒーをつくりあげているピラミッドの頂上付近に、かれらが位置しているからである。しかるに、Chetri コミュニティーに対するネパールの非ヒンドゥー系住民の態度は、その種の考慮によって、あらかじめ決められていない。むしろ、Chetri の団結とか数の上の優越性とかが政治権力になるのである。⁽²⁾」

いずれにせよ、このような社会・文化現象は、すでに述べたように、カレン族の山村と平坦部にある村落の間にも観察できる。これは今後のカレン族の社会・文化変容の方向を知るうえで、注目に値することといえよう。

ii 政治的リーダーシップ

筆者が山村 Hui Topa 村における調査を終了後、Mae Sareng の盆地に行つて、

Hui Kani 村を調査地として選定した時、調査のルールに従つて、まず村長が誰であるかを尋ねた。そうすると、そばに居合わせた Hui Kani 村の村人たちが異口同音に村の長老 M 氏を名指した。そこで、筆者はさっそく M 老宅におもむき、挨拶と自己紹介をおこなった。同氏はきわめて友好的な態度で筆者を迎え入れ、もし Hui Kani 村に住みたいならば、いつでも来て住んでよいといった。しかも、小屋を建てるのならば、自分の長男 E の水田の一隅を貸してもよいともいった。かくして、筆者の調査は和気あいあいのうちに順調にすべり出した。

ところが、しばらくたって、他村の北タイ人の一人が、筆者に、「Hui Kani 村で調査をする以上、村長 (Kae Ban) に挨拶に行った方がよい……」と注意してくれた。その言葉に筆者は飛び上がるほど驚いた。それというのは、すでに述べたように、調査を開始するに当たつて、Hui Kani 村の「村長」といわれる M 老のところに、手みやげまで持参して挨拶をしていたからである。

そこで、Hui Kani 村の村人に尋ねなおすと、M 老は「村長 (Kae Ban) のような者」すなわち総代に過ぎないという。「本当の村長 (Kae Ban Dae-dae) は、村の東側を流れている Mae Yuam 川の対岸に家を持つ、

タイ人のK氏だといふのである。この点は、村が選出した者を政府が「自動的に」村長として「任命」している、

山地カレン族の村 *Hu Topa* とはかなりの差異があるといえよう。

一方、平地にある *Hu Kani* 村においては、村内の「自治」は多少ゆらぎ始めたようである。なにか村内に重要な事件がおこると、村人は *Ban Pon* 村に向いて、タイ人の村長の裁定をあおがなければならないのである。このようにして、平地カレン族は、すでに、タイ国政府の行政の末端に組み入れられている。

しかしながら、*Hu Kani* 村自体の問題のかかなりの部分は、ほとんどかれらの「自治」に任されている。

村落内のリーダーシップは、村の三人の長老によってとられることが多い。すなわち、伝統的な精神界の指導者である *Sapga* は、カレン語で *Koe* (北タイ語でいう *Puchoe-Ken*) と呼ばれる首席補佐員、また、次期の *Sapga* 候補として、呼び声の高いN老人は、*Table* (*Puchoe-ti-song*) といわれる次席補佐員、さらに、村人から当初、村長、と呼ばれていたM老は *Aple* (*Puchoe-ti-sam*) という三席補佐員である。

このトリオは、*Hu Kani* 村の俗事をとりしきるだけでなく、地域社会できわめて重要な役割を果たしていると思われる村落儀礼の *Talutaphadu* においても、リーダーシップをとっているのである。

元来は、村会に相当する会合は存在しなかったようであるけれども、現在においては、*Sapga* を中心としたトリオの指導のもとに、村会が開かれて⁽³⁾いる。これには、各戸から一名の人間が出席して、村内の問題の討議や決定がおこなわれている。

しかしながら、戦前までは、村には *Sapga* がただだけで、かれが聖俗に関するすべての事柄の決定をおこなう、*Hu Kani* 村のリーダーシップをとっていたといわれている。

Hu Kani 村をめぐる社会的統制の変化について考える時に、その推移を知るうえで、きわめて困難なことは、

その記録がほとんど残っていないことである。従って、断片的な村人の記憶をたどって総合してみると、日本軍がやって来て、この付近で道路を建設していた頃（一九四二年頃？）は、*Hiti Kani* 村は *Sapga* によって、治められていたという。だが、第二次世界大戦が終了した頃（一九四五年前後）には、村の政治の実権は、*Sapga* から、村外に住んでいるタイ系の村長や地区長（*Kannan*）に移ってしまったといわれている。

ところで、徴税組織になると、平地カレン族は、北タイ系やシャン系の平地民とまったく同様の扱いを受けている。すでに、僻地に住んでいる山地カレン族の受けているような特別な扱いはなされていない。たとえば、平地カレン族の場合だと、酒を自分の家で醸造することは厳禁されている。しかし、山地カレン族に対しては、交通が不便であることなどを考慮に入れて、年間一―百ツ（約一九八円）の自家醸造税を政府に支払うことによって、自家製の酒をつくることを許されている。

(1) *Tatutaphadu* 儀礼は、平地カレン族の間だけでおこなう儀礼である。あとで述べるように、この儀礼のおもな社会・文化的機能は村落の地縁性の強化にあると思われる。

この儀礼については、第四章第二節 B で詳細に述べることにする。

(2) von Fürer-Haimendorf (1960) pp. 23-24

(3) カレン語には村会を示す用語はない。この会合を北タイ語では、*Pasumbasa* と呼んでいる。

要約―三

i エロロジ― 山地カレン族の村 *Hiti Topa* において、伝統的には、陸稲栽培を中心とする焼畑がおこなわれてきた。しかしながら、焼畑農業はその後停滞のきざしを現わし始める。その理由は、人口増加のために、

土地が不足して、過度に焼畑がくり返されたからではなからうか。

このようなすう勢に対して、Hi Topa 村の Siki という男は、Mae Sarieng の谷間に行き、北タイ人やラワ族から、水田稲作の耕作技術をまなんで来る。だが、不慣れな山地カレン族が、水田農業をかれらの文化に定着させるまでには、何回かの試行錯誤が必要であった。

やがて、水田稲作が山地カレン族の文化のなかに定着すると、いろいろな波及効果が現われる。たとえば、農業生産力が増大しないまでも安定性が増したり、農耕に水牛が不可欠になったりする。

ところで、Hi Kani 村の平地カレン族の場合には、現在の古老たちから数えて三代前に、Pablo という男が Mae Top 村からやって来て、村の建設を始めた。その頃には、Mae Sarieng の谷間にも人口が少なく、草地在に十分にあつたので、Hi Kani 村の村人の祖先たちは、焼畑農業に従事していた。しかし、その後、かれらはしだいに周囲のタイ系やラワ系の平地民から、水田稲作の技術をまなんだ。その際にも、山地カレン族の場合と同様に、何回かの試行錯誤がおこなわれたようである。

焼畑をする山地カレン族と水田稲作に従事している平地カレン族を比較すると、それぞれの村落における共同作業に、きわめて顕著な差異が見出される。すなわち、前者においては、共同作業が全地域社会を包含するのに對して、後者においては、家族間のきわめて小規模なものである。

なお、家畜については、カレン族のシンボルともいえる象が、平地村で欠けていることは注目に値しよう。

ii 経済生活

山地カレン族の村 Hi Topa と平地カレン族の村 Hi Kani の経済生活を比較すると、きわめて対照的である。すなわち、前者においては、自給自足的性格が顕著であり、市場経済の影響がいまなお寥々たるものである。それに対して、後者はすでに市場経済の波に洗われ、自己完結性の強い経済生活の基礎がゆ

らいでいるのである。

山地カレン族の間においては、元来、市場に相当するものは存在していなかった。たとえば、Bohannan 教授のいうような「末梢的市場」⁽¹⁾すら、通常は見出すことができない。わずかにおこなわれている商取り引きは、ほとんどがバーターを中心に、村人同志とか近隣の村の人たちの間か、せいぜい、村にやって来る行商人との間で、ほそぼそとおこなわれているに過ぎない。しかしながら、ここでは農民社会や都市社会の市場におけるような、労働力をはじめとする生産手段といったような生産要素が取り引きの対象になってはいない。食糧とか衣料などを中心にした、日常使われている生活必需品の売買がおこなわれているに過ぎない。このような経済組織のあり方と生産面における単純再生産は、山地カレン族に微少な剰余しかもたらず、かれらの社会・文化を内部から揺り動かすには、十分な潜在力を持っていないように思われる。

それに対して、平坦部にある Hiti Kani 村も、農業生産性がきわめて低いために、基本的には自給自足的経済の域をあまり出ていない。しかしながら、Mae Sarieng の町を中心に、「発達」した市場経済の圧力を受けて、不動産や動産はもとより、労働力でさえも、貨幣を媒介にした商品流通の流れに巻き込まれている。

平地カレン族の間では、貨幣が慣行的集中や再分配の循環からはずされて、個人所有にゆだねられたということは、現在はその額が僅少であっても、やがては伝統的経済組織を突き崩し、カレン族の社会や文化を再編成するきっかけをつくることであろう。

iii 社会組織 タイ国北部における山地カレン族の例にもれず、Hiti Topa 村のカレン族たちも、七七八〇年昔までは、long house に住んでいた。しかしながら、かれらが漂泊的生活様式をしないで放棄し、定着化の方向をたどっている時に、大酋長 Pomohé の死を契機として、long house が解体してしまった。

その後、半漂泊的な生活様式を続けていたカレン族が、水田稲作を導入するにおよんで、定着化はかなり決定的なものになった。かくして、現在では、山地カレン族の村落は半定着的な独立家屋からなっている。

ところが、このように外見上ではきわめて変化を示した山地カレン族の村落 Hii Topa においても、社会組織の上では、系譜図を見れば分かるように、「血」の原理が卓越している。ここでは、あらゆるものが未分化の状態にある。自然、個人、村落が渾然一体であり、個人はカレン族であると同時に村人であり、さらに、その資格によって、村の領域の土地利用の権利を保有するのである。

一方、平地カレン族の村落 Hii Kani になると、村落の編成原理に、血縁とともに地縁が重要な役割を果たすようになる。山村では、村人になる前提として、カレン族であるということが不可欠である。しかし、平地村 Hii Kani においては、他の民族集団に属する者でも、村人と婚姻関係をむすぶことにより、村に住み着くと、「カレン族になる」ことも不可能ではない。

iv 政治的リーダーシップ 山村の Hii Topa 村が long house であった頃、村には Pomohe のような聖俗をつかさどる首長がいた。やがて、リーダーシップにおける聖と俗は分離された。当時は、この地方へは政府の紙上行政しか及んでいなかったため、村の選出した首長をそのまま「村長」として「任命」した。現在でも、この形式が踏襲されている。だが、今日では、村長は名目的な手当をもらい、月に一度 Mae Sarieng の郡役場に会議に出かけるようになった。

ところで、平地カレン族の Hii Kani 村になると、社会的統制の段階は、Hii Topa 村に比べると「おらこー

段階進んでいる。すなわち、Hi Kan 村においては、正式の村長は常住していない。村には、長老の M 氏が総代としてだけである。村長は、隣村の Ban Pon に住んでいるタイ人の K 氏である。このように、平地カレン族においては、行政的にも、自己完結性が低くなっているといえよう。

(1) Bohanan (1963) p. 241

第四章 伝統的宗教と儀礼

東南アジアには、欧米の学者が、一般的にアニミズムと呼んでいる、自然信仰がひろく分布している。アニミズムにおいては、山川草木をはじめとする森羅万象に精霊が宿り、そこに住んでいる人間のいとなみのあらゆる側面を支配し、影響を与えていると考えられている。

この種の自然信仰は、岩田教授も指摘しているように、⁽¹⁾アニミズム、すなわち精霊信仰というような、欧米から輸入された概念を持ち出すよりは、むしろ、日本人古来の神に対する考え方が、はるかに東南アジアの人たちの神に対する概念に近いのではないかと考えられる。しかしながら、東南アジアにおける、自然信仰を総括して呼ぶ適当な名称が見当たらないので、ここではカレン族の伝統的宗教を総括して、アニミズムという用語を使っておこう。

このようなアニミズムは、東南アジアにおける諸民族の社会や文化に、きわめて深く根差している。そのため、仏教のように寛容な組織宗教はもとより、イスラム教やキリスト教のような排他的“一神教が入って来た”時でさえ、東南アジアの人たちからアニミズムが払拭されることはなかった。⁽²⁾なかでも、タイ国における *Phi* 信仰とビルマにおける *Nat* 信仰は有名である。カレン族のアニミズムも、基本的には、*Phi* 信仰や *Nat* 信仰と近縁関係にあるといわれているけれども、かれらの宗教生活には、仏教のような組織宗教が十分に定着してい



写真17 焼畑における陸稲の脱穀。ここは「聖域」であり、よそ者の出入りは許されない。

ないので、土俗信仰における神々は、かれらの心のなかで、生き生きと活躍を続けている。

ところで、本節においては、カレン族のアニミズムのなかでも、きわめて重要な機能を持ち、しかも、かれらの社会・文化変容のなかで中心的役割を果たしていると考えられる、農耕儀礼と、基礎集団の秩序に関する宗教儀礼に焦点を当てることにしよう。

Leach 博士も述べているように、「もし、われわれが、宗教儀礼は参加している集団の団結 (solidarity) の表現であるという、デュルケム派の見解を踏襲するにしても、われわれは、その儀礼がおこなわれている時だけ、団結が存在する必要があるのだということを明確に理解する必要がある。儀礼が終了した後にも、潜在的に存続している団結を想像することはできない。」⁽³⁾ という考えもある。しかし、同時に、同博士も認めているように、「社会構造 (social structure) は儀礼において表現されている。」⁽⁴⁾ という見解も事実である。従って、このような観点を考慮に入れながら、山地カレン族と平地カレン族の村落における宗教儀礼について述べること

にしよう。

- (1) 岩田 (1966) 参照。
- (2) ビルマのカレン族においては、キリスト教の影響がいちじるしい。この点に関しては、付録一を参照されたい。
- (3) Leach (1964) p. 281
- (4) Leach (1964) p. 264

第一節 農耕儀礼

すでに、第三章の第一節Aと第二節Aにおいて触れたように、山地カレン族の文化では、焼畑農業を基礎にした経済生活がいと生まれ、また、平地カレン族の文化では、水田農業を基礎とした経済生活がいと生まれている。このような、山地カレン族と平地カレン族の文化の核 (cultural core) の状態は、⁽¹⁾きわめて敏感に、農耕儀礼のあり方に反映されている。すなわち、山地カレン族においては、農耕儀礼はもっぱら焼畑農業にだけ発達している。しかるに、導入後、わずか数十年しか経っていない水田稲作農業に関しては、これまでのところ、見るべき農耕儀礼はほとんど存在していない。一方、平地カレン族の場合には、Hi Kaní 村が創設されていた一世紀以上昔においては、焼畑農業がかれらの生活の基盤であったために、おそらく、農耕儀礼は焼畑を中心に発達していたことが想像される。だが、平地カレン族がエコロジカルな適応をおこなう過程で、焼畑農業を捨て、水田稲作農業を採用するようになると、農耕儀礼の内容は一変したのである。かくして、今日では、平地カレン族の間では、焼畑農業に関する農耕儀礼は、ほとんど姿を消し、タイ系平地民のおこなっている、水田稲作を中心に発達した農耕儀礼がさかんにおこなわれている。

それでは、以上述べたようなカレン族の宗教儀礼について、農耕シーズンの順序に従って、具体的に記述することにしてしよう。

(1) Steward (1957) p. 37

A 山地カレン族の焼畑農業に関する儀礼

Palmeko 儀礼 Denya 月（四月中旬～五月中旬）になり、山地カレン族が村の周囲の山焼きをおえて、焼畑に陸稲の種子をまく時おこなう儀礼である。**Palmeko 儀礼**は、カレン族のアニミズムのなかで、もっとも重要な神として考えられている **Hhi K'cha Ko K'cha** ⁽¹⁾ に捧げられるものである。**Hhi K'cha Ko K'cha** の神は、山地カレン族の間にあつては、自然界にあまねく君臨していて、水と大地をつかさどる大神であるといわれる。従つて、この神は農業とは、いちばんかかわりあいのある神であると信じられている。そのため、昔は、**Palmeko 儀礼**をかなり手のこんだ方法でおこなつたと伝えられている。しかしながら、今日では、俗化²されて、きわめて簡素な儀礼になっている。

Palmeko 儀礼は各戸別々に、焼畑のまんなかにある木の切株の所でおこなう。木の切株のうえには、御飯と地酒を捧げる。御飯のうえには豚のカレー汁をかけ、それに酒をそそいで、**Hhi K'cha Ko K'cha** の神に捧げ、祈りをあげる。

Boaru 儀礼 Denya 月に、陸稲の播種が終わり、やがて発芽すると、**Boaru 儀礼**がおこなわれる。この儀礼は、陸稲の成育を祈つて、稲魂 **Bu K'la** に対しておこなわれるものである。これと同じ儀礼は、稲の成育期間である **Laku 月**（七月中旬～八月中旬）になると、ふたたびおこなわれる。

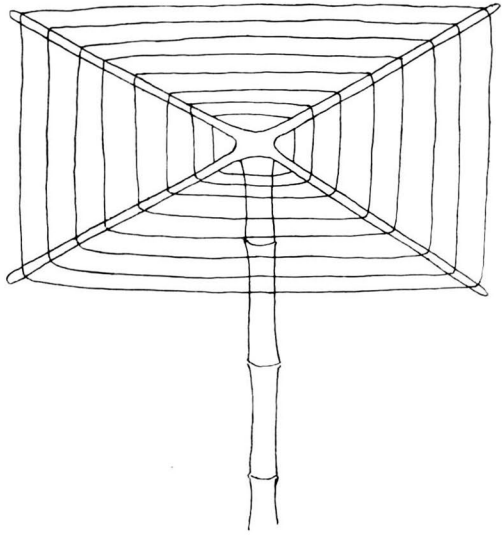


図15 Tapacho 儀礼の祭壇

Boaru 儀礼は、焼畑に建てた出作り小屋とその付近でおこなわれる。出作り小屋のまえには、Tapacho Lume (Talumé) 'Tadamo' Tase' という四種類の儀礼用祭壇が作られる。それぞれの祭壇の所では、次のような儀礼がおこなわれる。

(1) Tapacho 儀礼 この儀礼は、大地を所有するといわれている Tapacho の神に捧げられたものである。出作り小屋のそばに、図15のような儀礼用の祭壇が作られる。

まず、Tapacho の神に対して、鶏二羽が犠牲に供される。鶏はすぐに解体されて、カレー料理が作られる。

そして、口ばし、つめ、羽根の先端、心臓、尾の部分の先端などを切り取って、酒や御飯とともに、祭壇に捧げられる。

(2) Lume 儀礼 この儀礼は、火の神 Lume に対しておこなわれるものである。Lu Hii Bo Ko 儀礼のように、屋根のついた高床の祭壇(写真20)が作られる。祭壇には、まず、生きた鶏が一羽そなえられ、祈禱がおこなわれる。鶏は犠牲に供されて、血は祭壇にぬりつけられる。その後、鶏は解体されて、カレー料理が作られる。Tapacho 儀礼の場合と同様に、鶏の口ばし、つめ、羽根の先端、心臓、尾の部分の先端などが切り取られ、バナナの葉の皿に盛った御飯にそれらをのせて、祭壇に捧げられる。酒のびんが一本、祭壇の下に置かれるが、

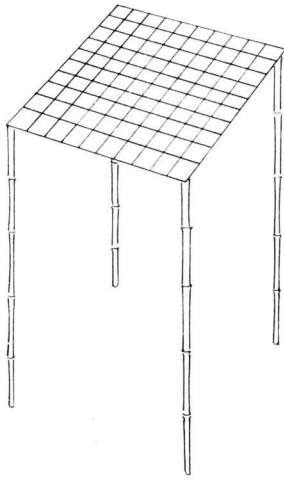


図16 Tatamo 儀礼の祭壇

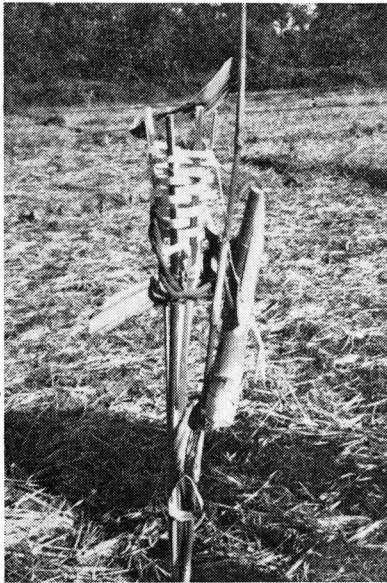


写真18 Boaxu 儀礼に使われた Tase という祭壇

一部は竹筒に入れて、祭壇のなかに捧げられる。

(3) *Tatamo* 儀礼 *Tatamo* 儀礼は、*Lume* 儀礼と同様に、火の神 *Lume* に捧げられたものである。祭壇の形態は、図16のようなものである。儀礼自体は *Lume* 儀礼とほとんど類似しているけれども、犠牲にした鶏の血は祭壇にぬりつけられず、付近の陸稲の葉にそそがれる。鶏のほかには、酒が一本捧げられる。

(4) *Tase* 儀礼 この儀礼は、天の神 *Tase* に対しておこなわれるものである。祭壇は、写真18のようなものが作られ、鶏一羽を犠牲に供し、酒を捧げて儀礼をおこなう。

Pachotah-Pobu 儀礼 村人の説明によると、この儀礼は水と大地の神 *Hi K'cha Ko K'cha* に捧げられたものであるといわれている。これは一種の収穫儀礼で、*Lano* 月（一〇月中旬～一月中旬）に脱穀を開始する以前におこなわれる。

焼畑における陸稲の収穫が終わり、稲束がしばらく圃場に放置されて、乾燥が十分になると、やがて脱穀作業が開始される。脱穀作業にさきだち、焼畑の一隅にある出作り小屋のなかに、図15のような *Tapacho* という祭壇を作る。その祭壇には、焼畑でとれた陸稲の初穂を木の葉に盛って、そのうえに、犠牲にされた二羽の鶏のカレー汁をかけて、そなえるのである。さらに、このそなえ物のうえから酒がそそがれ、*Hi K'cha Ko K'cha* の神に祈りがあげられる。

その後、この儀礼に出席した者は全員で食事をするけれども、当日収穫したばかりの新米を、その日の食卓にのせることはない。

Pachotah-Pobu 儀礼の出席者は、通常、家族の成員に限られている。しかし、それ以外の「養子」などが参加する場合には、かれは、焼畑における陸稲栽培の播種の頃から、一連の農作業を手伝っていなければならぬのである。そうしない者は誰でも、儀礼の当日に、畑に行くことは禁じられ、従って、脱穀に参加することができない。儀礼をおこなった日は、いかに少量の陸稲でも、脱穀をしなければならぬといわれている。

Obuko 儀礼 この儀礼は、*Laplu* 月（一月中旬～二月中旬）に、脱穀が終了した次の日におこなわれる。**Obuko** 儀礼は、その年の収穫を稲魂の *Bu K'la* に感謝するためにおこなわれる。

この儀礼のために、新米の御飯がたかれ、同時に、キンマ一本、かえる一匹、かに一匹、魚一匹でカレーが作られる。この食物は稲魂に捧げられ、祈りがとなえられる。

このように、**Obuko** 儀礼で食物や飲物を稲魂 *Bu K'la* に捧げ、実りの秋に感謝するのであるが、供物のなかに、魚とか、が含まれている事情を、カレン族の説話は次のように述べている。すなわち、昔ある時、稲がカレン族の所から逃げ出し、かにの穴のなかに逃げこんでしまった。そして、カレン族が、いっしょうけんめい稲を

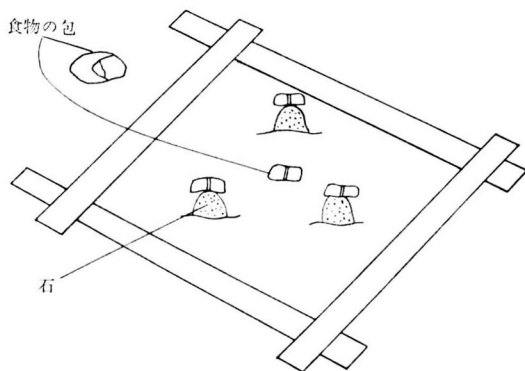


図17 山地カレン族の農耕儀礼 *Obuko* の時の囲炉裏端

探していると、魚がやって来て、稲がかにの穴に姿をかくしていることを教えてくれる。そこで、カレン族がかにの穴にいる稲に向かって、出て来るように頼むと、稲は次のように答えた。「カレン族がわたくしたち米を食べる時には、かにと魚をいっしょに食べてくれることを約束するならば、わたくしは出て行きます。」というので、カレン族は稲の希望をいれることにして、穴から出てもらったということである。

用意された新米の御飯とかにと魚のカレーは、木の葉にくるんで、五個の包みがつくられる。そのうち、四個の包みは、図17のように、家のなかにある炉の四カ所に置く。残りの一包みは、その年に焼畑の稲にはじめてかまを入れた家族の成員が食べることにしている。

かくして、*Obuko* 儀礼が終了すると、家族全員がそろって食事を
 する。

この儀礼に際して、山地カレン族にとっては、いちばん大切な家財道具である食台 (*Sabi*)、とうがらしを砕く石の乳鉢、米を入れる籠などに、ある種の草をむすびつける。また、この時に、食台を前日の食事に使ったまま、洗うことなく儀礼に使用するのは興味深いことである。

なお、*Obuko* 儀礼をおこなう以前に、前年度の陸稲の収穫が不足して、どうしてもその年の新米に手をつけなければならぬ場合には、肉ととうがらしが副食品として食べることができないとい

った、一種のタブーが存在していることを指摘しておこう。

Sepoko 儀礼⁽²⁾ この儀礼は脱穀が終了して、もみを自分の家の穀倉に搬入する前に、戸別におこなう儀礼であって、豊稔を約束する女神 *Pibigo* に捧げられたものであるという。

Sepoko 儀礼をおこなうために、村人は、*Boaru* 儀礼の際に作ったような *Tase* (写真18) と呼ばれる祭壇を用意する。*Tase* のなかには、新米を入れ、犠牲にした鶏の血をふりそそぐ。鶏の血は、それと同時に、*Tase* の周囲にもぬり、その羽毛をはりつける。

犠牲に供した鶏は料理して、例により、口ばし、羽根の先端の肉、つめ、尾の先端の肉などを取って、木の葉の皿に盛った御飯とともに、*Tase* に捧げる。さらに、酒を祭壇のうえからそそぎながら、次のように祈りをあげる。

「この食物をゆっくりと食べて、われわれの食物もはやく終わらないようにしてください。この食物を付近の魚やか、などの客といっしょに食べてください。この米は来年の良い種になり、永遠につづかんことを……」という。

(1) この発音はこの付近の山地カレン族のものである。平地カレン族では *Hi: Kisa Ko Kisa とンン*、*Hi: Marshall* 44
Hi: Kisa Kaw Kisa と書ぶ。

(2) *Sepupo* 儀礼とも呼ばれている。

B 平地カレン族の水田農業に関する儀礼

前にも述べたように、山地カレン族の村 *Hi: Topa* においても、水田稲作がすでに数十年間もおこなわれている。しかしながら、山岳地帯のエコロジカルな限界が存在しているために、水田面積が限られている。それに

加えて、山地カレン族は孤立した生活をいとなんでいるために、北タイ人やシャン人のようなタイ系平地民との接触もすくないので、水田稲作に関する農耕儀礼の発達があまり見られない。

ところが、平地カレン族の Hui Kani 村においては、水田稲作にはきわめて手のこんだ農耕儀礼が発達していることは注目に値する。この村における水田稲作の歴史は、Hui Topa 村におけるものよりも、ややふるいといっても、おそらくは三〇〜四〇年ほどふるいだけではないかと推定される。しかしながら、両村におけるきわだった農耕儀礼の差異は、山地カレン族と平地カレン族のエコロジカルな適応の差異を知るうえで、特に注目する必要がある。すなわち、平地カレン族にあっては、山地カレン族とはことなり、たえず北タイ系もしくはジャン系の平地民文化との接触を持ち、しかも、水田稲作文化のかかわりあいがかなりふかいのである。とりわけ、同じ水田稲作をおこなっていても、山村の Hui Topa と平地村の Hui Kani とは水田の性質がことなっていることを指摘する必要がある。すなわち、山村の Hui Topa は山間の湧水を基礎とした小川に水源を頼っているが、平地村 Hui Kani の場合には、村の東側を流れている大川の Mae Yuan から灌漑水を引いてこなければならぬ。灌漑をおこなう場合は、いうまでもなく、無定見におこなうことはできない。そこには、なんらかの地域社会間の調整が不可欠であるのだ。従って、平地村 Hui Kani における水田稲作は、山村 Hui Topa における「水田」的な水稲農業とはきわめて対照的なのである。

このような山地カレン族と平地カレン族のエコロジの差異は、明確に、農耕儀礼のあり方に反映されている。すなわち、山地カレン族にあっては、水田耕作の歴史がかなり長期にわたっているにもかかわらず、今日まで見るべき農耕儀礼を発達させていない。しかるに、平地カレン族にあっては、水田稲作に関する農耕儀礼を、相当な規模にまで発達させている。なお、Hui Kani 村がでぎ始めた頃には、Mae Sarieng の谷間には人口が少なく、

草原が田畑によって蚕食されていなかったために、カレン族も焼畑に従事していたという。だが、この一世紀ほどの間に、未開墾地はほとんど姿を消してしまった。そのため、焼畑はごく一部の村人によって、限界地において、ほそぼそとおこなわれているだけになってしまった。このようにして、焼畑農業が平地カレン族の経済生活のなかで、重要性を失ってしまうと、農耕儀礼の方もたいへんにおろそかになり、ほとんど消滅してしまっただけといえよう。

Lu Hti Boko 儀礼 この儀礼は Lanwe 月（五月中旬～六月中旬）の初旬に、水田に川から灌漑水を導入する際におこなわれる。カレン族の解釈によると、水神である *Hti Kcha* に捧げられる儀礼であるといわれているけれども、内容的に見ると、このあたりの北タイ人がおこなっている灌漑溝の神と堤の神に捧げられている *Liang Phi Muang Phi Pai* とほとんどおなじである。ただ、その儀礼に使用する祭壇の作り方が北タイ人のものとカレン族のものとは若干の差異が認められているけれども、儀礼のやり方も目的も基本的にはほぼおなじであると考えられている。

Lu Hti Boko 儀礼は、ある特定の灌漑水路を水田耕作に利用する者だけが集合しておこなうものである。従って、それ以外の村人は儀礼に原則的に参加していないけれども、性には関係なく出席できる。司祭はカレン語で *Sapga Hti Boko* といい、北タイ語では *Kae Muang Kae Pai* と呼ばれている。この役職は世襲ではなく、村の有力者でその灌漑水路を利用している者のなかから選出される。Hti Kani 村においては、任期のかなりながい輪番制で、一九六四年には長老のN氏から中年の村人であるT氏に役目が交代された。

儀礼にはそれぞれの家から鶏一羽や若干の御飯を用意する。そのほか一戸当たり五バーツ（約九〇円）ほどの金を出しあって、酒や豚を購入する。もっとも、豚のような高価な家畜は毎年のように犠牲に供するのでは



写真20 *Lu Hti Boko* 儀礼の祭壇
に鶏を捧げる平地カレン族
の男。



写真19 平地カレン族の灌漑溝
儀礼 *Lu Hti Boko*. 隣
り村の北タイ人といっ
しょにおこなう。

なくて、三年に一度だけそれを使用する
のである。他の年はたんに鶏を犠牲に供
するだけである。なお、平地カレン族は
行政機関の目をのがれることができない
ので、豚のような中型以上の家畜は密殺
することなく、郡役場に「大枚」二〇パ
ーツ（三六〇円弱）⁽¹⁾の税金を支払って、
屠殺をおこなっている。

Lu Hti Boko 儀礼のために、川から
灌漑溝に水を導入する入口に写真20のよ
うな祭壇を作る。そのほか図18のよう
川のせき⁽²⁾に二カ所と水の取り入れ口の三
カ所に、くいを打ち、そのうえに物を置く
のように板を打ちつけておく。

このような準備が完了すると、*Sapya*
Hti Boko が、ある特別な宗教的意義の
ある *Apko* と呼ばれる鶏二羽⁽²⁾を犠牲にし
る。そのほかめいめいの参加者が持参し

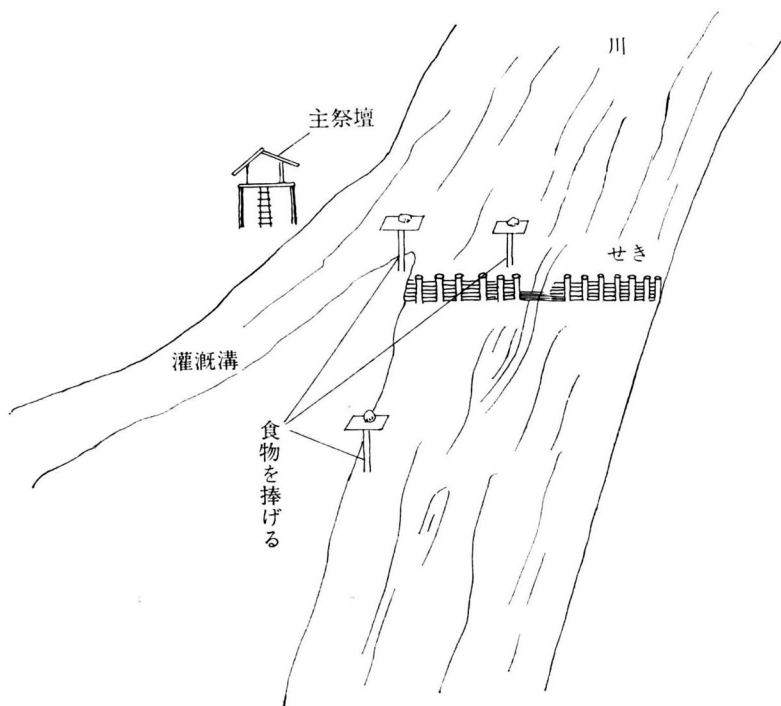


図18 平地カレン族がおこなう *Lu Hti Boko* 儀礼の祭壇の位置

てきた鶏については、だれが殺してもかまわない。

Sapga Hti Boko の犠牲にした鶏の血は祭壇にぬりつけられる。その鶏をもとにして、とうがらし、それに *Kapi* という魚やかに作った味噌味の調味料で味をつけたカレー料理が作られる。その際、鶏の足や羽根は、組み合わせから料理する。

カレー料理ができると、家から持参して来た御飯を木の葉の皿のうえに盛り、鶏を二羽ずつのせて、川辺のくいや祭壇の所に持って行く。その時には、酒一本、*Sue-dok* という葉のたば、一つ、ろうそく一本をそえて、水神 *Hti K'cha* に灌漑溝や堤の保護を祈禱する。それが終わると、水神にそなえた食物は一カ所に集められて、出席者一同で会食がおこなわれ

る。出席者は、あとで述べる *Talutaphadu* 儀礼の場合とは異なり、いつでも儀礼から離れて、帰宅することが許されている。

なお、この儀礼の性格を知るのにきわめて重要なことであるけれども、この灌漑溝を共同に利用している北タイ人の *Tonglen* 村からも出席者を迎えている。その数は一九六五年に五軒の北タイ人農家から参加者があったといわれている。

このように、*Hi Kani* 村の灌漑は、「大川」からの水を引くことによっておこなわれているので、山地カレン族における水田耕作とはことなり、自己完結的な生産活動やそれにとまなう生活空間から引き出され、他村との関係、すぐれて他民族集団との関係を持たなければならぬような契機を与えているのである。

Puchoda 儀礼 この儀礼は前述の *Lu Hi Boko* 儀礼と同様にカレン暦の *Lanwe* 月（五月中旬～六月中旬）におこなわれる。儀礼の目的は、「水田の神 *To K'cha De K'cha* ⁽³⁾ に捧げられるもので、水田で働く人間と水の平安を祈り、同時に十分に水に恵まれるように祈禱するのである。

Puchoda 儀礼 そのものはきわめて簡単な儀礼である。図15のような *Tapacho* と呼ばれる祭壇を作り、各戸別に儀礼をおこなう。儀礼のためには二羽の鶏が犠牲に供され、その血は祭壇の柱にぬりつけられ、羽毛をはりつける。その後、鶏でカレー料理を作って、家から持参した御飯のうえにのせて、*Tapacho* にそなえ、同時に一家の成員が会食に参加する。かくして、水牛により水田の代かきが始まる。

Boochi 儀礼 この儀礼は *Lu Hi Boko* や *Puchoda* の儀礼に続いて、*Laku*（七月中旬～八月中旬）と *Chimu*（八月中旬～九月中旬）におこなわれる。時期としては、田植えがおこなわれるまえと、そのあとにおこなう儀礼であり、地の神 *Ho Ko K'cha* に捧げられるものである。

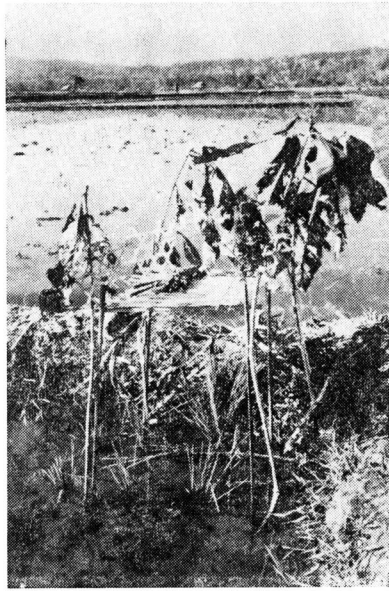


写真21 田植の時期におこなう Boachi 儀礼の祭壇

Boachi 儀礼のうちで、田植えのまえにおこなうものは、水田の一隅に四本のちいさい柱をたて、そのうえにちいさい竹のマット状の台をつけて、御飯とろうそくをそなえる。

また、水稲の移植後約一カ月たった頃、鶏二羽を犠牲に供し、また酒一本を捧げて儀礼をおこなう。この Boachi 儀礼は各戸でおこなわれ、両親がいる場合には、別居をしても、招待しなければならない。なお、儀礼の最後には主婦の父親

もしくは年長者が出席者の手首にひもをゆわえる Kichu をもって儀礼を終わる。

この Boachi 儀礼は水稲の成熟期に当たるカレン暦の Chicha 月（九月中旬～一〇月中旬）にふたたびおこなわれる。

Obuko 儀礼 この儀礼は水稲の刈り取りを開始するす前に、稲魂 Bu K'ia に捧げられる儀礼で、通常カレン暦の Lano 月（一〇月中旬～一月中旬）におこなわれる。これは山地カレン族における Obuko 儀礼と主旨もやり方もほとんどおなじであるけれども、平地カレン族においてはその存在理由はゆらいでいる。すなわち、村の長老 N 氏によると、Obuko 儀礼は、Hu Kani 村においては、もはや誰にとっても、必要不可欠な儀礼ではないという。そして水稲の平均収穫量が、すくなくとも五〇カン以上の者だけがおこなえばよい儀礼であるとして、具体的に十数名の村人の名前をあげた。N 老はさらに続けて、しかも、そのような村人たちも、かならずしも

Obuko 儀礼を毎年のようにする必要はないと付け加える。たとえば、一九六五―六六年には、このあたりの水稲作が平均作以下だったので、*Obuko* 儀礼をおこなった家は、わずかに一一戸に過ぎなかったという。

Kue Bu K'ia 儀礼 この儀礼も稲魂 *Bu K'ia* に捧げられたもので、*Lano* 月（一〇月中旬―一月中旬）におこなわれる。*Kue Bu K'ia* 儀礼は、山地カレン族が陸稲を脱穀する直前におこなっている *Pachota-Pobu* 儀礼と同性質のものである。

まず、脱穀場を選定すると、そこを使用する家の女の一人が、司祭役として籠か皿に二羽の鶏、御飯、新米、それに女性用のカレン服を入れて、その田を一巡する⁽⁴⁾。その時、初穂が田に落ちていたならば、それを拾って籠



写真22 平地カレン族の収穫祭 *Pobu K'ia*

もしくは皿にいれる。田を一巡しながら、女は祈りをあげる。女が脱穀場にもどって来ると、そこにある竹の敷物を御飯用のしやもじでたたきながら祈禱をする。そして、二羽の鶏を犠牲にして、血を敷物にぬりつける。家から持参して来た御飯と料理をした鶏を少しバナナの葉の皿に盛り、竹の敷物のうえに置いて、稲魂 *Bu K'ia* に捧げる。この竹製の敷物は、脱穀の際に、穂をたたきつける棒のしたに置き、もみ受けとする。

儀礼が終了すると、まず司祭役の女性が食事をし、一同はそれに続いて、稻魂と共餐し、かつ酒をくみ交す。脱穀場の入口には、山地カレン族が *Tatamo* 儀礼に使っているような祭壇(図16)を作る。

Pobu K'ila 儀礼 この儀礼は *K'ue Bu K'ila* 儀礼と同様に、*Lano* 月におこない、脱穀の時にする儀礼である。

北タイ人もこれと同じような儀礼をおこなうけれども、いろいろ細かい点では、多少の相違が認められる。たとえば、写真22のような祭壇はカレン族の場合には、男性が作るものであるけれども、北タイ人の場合には女性がそれを作るという。もっとも、儀礼の大筋については、両民族集団の間には大差は認められない。

さて、祭壇 *Talu* は *Pobu K'ila* 儀礼が開始される前夜に作られ、つぎの朝から儀礼自体が開始される。まず、用意されていた鶏三羽を犠牲に供し、祭壇の三カ所にその血をぬりつける。祭壇には竹のふしで作ったコップに水と酒をいれて捧げ、そのほかバナナもしくは砂糖きびとペテル二個、タバコ二個をそなえる。

鶏はカレー料理にして、羽根の先端、つめ、口ばし、尾の先端の肉などを取って、御飯といっしょにバナナの葉の皿にのせて、祭壇に捧げる。また、脱穀場に当てる田畑の四すみに、御飯を一皿ずつ置く。いま一皿の御飯を用意して、その頃の空を飛ぶ⁽⁵⁾わしにもそなえるのである。このようにして、地の神である *Ho Ko K'cha* に祈りをあげると、一同は出作り小屋に引きあげて、*Oskoneplo* と呼ばれる会食をおこなう。

ところで、この儀礼はカレン族の“伝統的”なものではないように思われる。すなわち、この儀礼を捧げる神は、一応 *Ho Ko K'cha* という地の神と考えられているけれども、よく調べてみると、どうやら北タイ人やシャ人との共通の *Chadin* のカレン的解釈のように思われる。従って、*Hu Kani* 村の大部分の村人に聞くと、*Pobu K'ila* 儀礼をする神についての説明は支離滅裂である。ある者はそれについてまったく知らないといひ、

ある者は女性の神であるという指摘はおこなえるが、名前をまったく知らないと言った。この儀礼の対象になっている神の名前を知っているという村人でも、せいぜい、*Damura* という神もしくは悪霊の一般的呼称を使うか、水と大地の神 *Hhi K'cha Ko K'cha* と同じく包括的な超自然の神の名前をあげるのがやっとである。このような事実から考えると、平地カレン族の文化に、*Pobu K'la* 儀礼が導入された歴史があまり古くないことを示唆しているように思われる。この推測は次のようなことでも裏付けられる。すなわち、カレン族の文化にふかく根差している、家族儀礼、*Ore* のような場合には、平地カレン族の間においてさえ、カレン語を儀礼に使用することが不可欠である。しかるに、ここで扱っている *Pobu K'la* の儀礼においては、北タイ語でも、シャン語でも、カレン語でもよいといわれている。かくして、*Pobu K'la* 儀礼は非カレン的性格がすくなくないと考えてよからう。

Boabu 儀礼 この儀礼は、北タイ人は *Liang Kao* 儀礼といい、水稲の脱穀が終わった時におこなうもので、カレン族の伝統的なものではない。脱穀場に使用した水田の祭壇 *Talu Atu* に、*ベテル・ナッツ*、*タバコ*、*ろうそく*、*Sue-dok* という葉を二たば、*砂糖きび*などを捧げ、地の神 *Ho Ko K'cha* に実りの秋を感謝するという。
Tale Koi 儀礼 この儀礼はカレン族の固有のもので、カレン暦の *Tale* 月（二月中旬〜一月中旬）におこなわれるものである。筆者が調査をおこなった一九六六年には、一月四日におこなわれた。脱穀を完全に終了して、水稲のみみを穀倉に入れた直後におこなう。もみを穀倉に入れた時に、ごく少量を家に持ち帰り、それをつけて白米にして、酒に入れる。その酒で、*Kwesi* という儀礼をする。この儀礼は水と大地の神 *Hhi K'cha Ko K'cha* に捧げられたものであると信じられている。

Sebuko 儀礼

水稲のみみを穀倉に入れてから、一カ月間はそれを取り出すことはできない。この儀礼は、

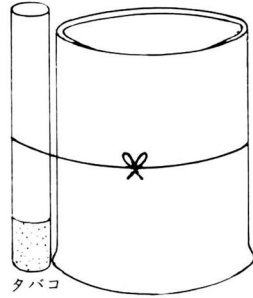


図19 *Sebuko* 儀礼における祭壇の代用品

新米のみを穀倉に入れてから、一カ月目にそれを穀倉から取り出す時の儀礼である。

儀礼に際しては、写真18の祭壇 *Tase* を穀倉のなかにたてる。鶏一羽を犠牲に供し、血を祭壇の柱にぬって、その羽毛をつける。鶏のカレーを御飯といっしょに、*Tase* のなかに入れて、稲魂 *Bu K'ia* に祈りをあげる。祈禱の内容は、「米の世話をお願い申す。穀倉が急速にからにならないように……と祈るのである。もっとも *Tase* のような祭壇の代りに、竹のふしを切

ってコップを作り、それにタバコを図19のようにゆわえておく場合もある。

この儀礼の出席者は、山地カレン族の *Sepoko* 儀礼の場合と同様に、家族だけでおこなわれる。そして、出席者一同は新米を鶏のカレーとともに食べる。だが、この時には他人にはそれを与えないという。

なお、昔はこの *Sebuko* 儀礼が、*Hi Kani* 村の全戸でおこなわれたといわれているけれども、今日ではそれもばらばらになった。その理由としては、村人の貧富の差がおおきくなり、穀倉が満たない者もいるからであるという。このあたりにも、平地カレン族の社会・文化の特質が首をもたげている。

- (1) 成年男子の三〜四日分の労働賃金に相当する。このような高額の税金を支払って儀礼をおこなっているあたりに、平地カレン族の社会的性格が特徴的に示されている。
- (2) この鶏は *Sapua Hi Boko* の *T* 氏が持参したもので、かれが儀礼用に飼育していたものである。
- (3) 一説には、水と大地をつかさどる神 *Hi K'cha Ko K'cha* とおなじであるといわれる。
- (4) 当該の家に女性がいないければ、他の家の女性にこの役を依頼する。
- (5) カレン語で *Leo* とごう。

第二節 集団の秩序に関する儀礼

すでに第二章で述べたように、カレン族の社会の編成原理はきわめて双系的傾向が強い。そのため、家族より大きい社会集団がほとんど発達せず、家族が最小の自律集団であると同時に、最大の自律集団でもある。この点については、山地カレン族と平地カレン族の社会で共通していることである。従って、カレン族においては、山地に住んでいても、平野部に定着していても、家族という社会組織が重要な役割を果たしているのである。

また、平地カレン族においては、水田稲作農業を中心に生活するというエコロジカルな変化のために、社会生活のうえで村落の機能が重要になってきている。

そこで、ここでは、家族と村落という社会的基礎集団の秩序維持に関して、どのような神々がかかわりあいを持ち、それらについて、どのような儀礼がおこなわれているか述べることにしよう。

A “家神” *Baha* と “家族儀礼” *Oxe*

Mae Sarieng 地方で、目下カレン族とラワ族の比較研究をおこなっているアメリカ人の人類学者 Kunstadter 博士はつぎのように述べている。

「カレン族の *self-identity* の “本質” がなにかからできているかということについては、明瞭ではないけれども、大部分のカレン族は、山村に住んでいようが、谷間の村に住んでいようが、かれらはカレン族としての *identity* を維持することを決意している。かれらは、カレン族の *identity* を守りぬぐべき何物かであると考えている。⁽¹⁾」

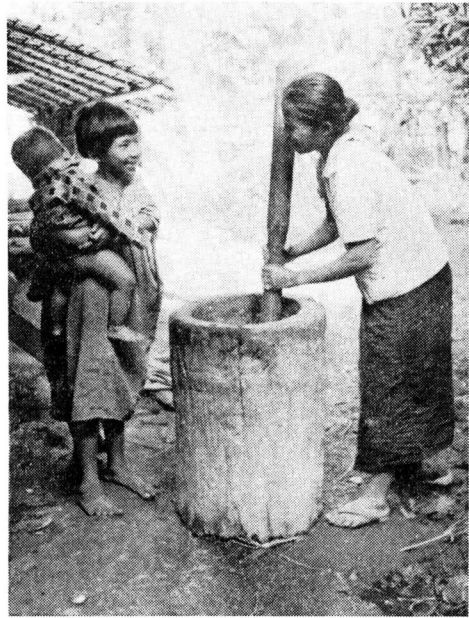


写真23 Oxo 儀礼には不可欠のカレン服も平地カレン族にあっては女性でも日常生活には着用しないことも多い。

することにしよう。

“家神” *Bgha* の信仰と *Oxo* 儀礼

カレン族の社会は双系的傾向がきわめてつよい。そのため、単系的社会組織を持つている民族集団のように、氏族や部族などの社会集団をまったく発達させていない。前述のイバン族の場合と同様に、双系社会においては、親族といえども組織された集団ではない。家族が最小かつ最大の自律集団であると考えられる。したがって、カレン族の社会組織のなかで、“家族”⁽²⁾がきわめて重要な役割を果たしていることはいうまでもない。このようなカレン族社会のあり方が、かれらの伝統的宗教文化のあり方にも反映していることは当然のことである。すなわち、カレン族のアニミズムのなかで、それぞれの“家族”が持っている母

それではカレン族の self-identity の本質を支えているものはなんであろうか。筆者は、カレン族が形成する基礎集団のうちで、もっとも基本的なものであり、恒久的な最小の単位である家族のなかにそれを求めたい。すなわち、それは家族という社会組織の社会的統合の象徴であると同時に、かれらの行動にきわめて重大な枠組を与えている“家神” *Bgha* ではないであろうか。そこで、つぎに“家神” *Bgha* について述べるとともに、その社会的機能について分析

系の祖霊である「家神」*Baha* の果たしている機能は、かれらの行動様式に影響を与えている点で、神々のなかではいちばん重要なものと考えられる。「家神」*Baha* はいわば、カレン族の行動様式を律する倫理規律の源泉である。すなわち、カレン族における日常生活はもちろんのこと、性関係にまで影響を及ぼし、万一不品行な行為があった時にはひどいたり、があると思われている。たとえば、ブエ・カレン族 (the Bwe-Karens) においては、早魃かんぼと不作がもたらされると信じられ、そのため、性的に不品行な行為があると、村の長老によって蔽罰が科せられると伝えられている。⁽³⁾ある「家族」の成員はその「家」の *Baha* に家畜や家禽かきんを犠牲にして捧げ、祈りをあげることによって、加護を得ることができる。しかしながら、万一 *Baha* に対して儀礼をおこたり、怒りに触れると、災難は個人のみならず「一家」にも及ぶという。

そこで、「家神」*Baha* に対しては、「家族」の成員の誰かが病気や災害にあった時だけでなく、何事もなくとも、最低、年に一度ぐらいは儀礼をおこなって、その「ごきげんをうかがう」という。またこの儀礼をおこたると、その家族が食糧不足に見舞われるとも信じられている。この「家族儀礼」をカレン族は *Ore* と呼んでいて、山地カレン族の間でも、平地カレン族の間でも普遍的におこなっている。また、本稿で取り扱っているスゴー・カレン族だけでなく、方言を異にするポー・カレン族においても *Ore* 儀礼がおこなわれている。このように、「家神」*Baha* に対する信仰は、カレン族の文化の深層に根差していることを指摘しておこう。

「家族儀礼」の方式を大別すると、スゴー・カレン方式の *Ore Chuko* とポー・カレン方式の *Ore P'go* とがある。両儀礼ともたいへん類似していて、両者ともスゴー・カレン族とポー・カレン族のあいだでおこなわれている。とりわけ、*Ore Chuko* と *Ore P'go* が類似している傾向はビルマよりもタイ国で顕著であるといわれている。しかしながら、*Ore Chuko* と *Ore P'go* の間には微妙な儀礼上の差異が認められ、それがカレン族の社

会・文化変容の過程を考えるうえで重要な意味をもっているように思われる。そこで、この二つの儀礼の相違点を明確にするために、本節では *Ore Chuko* と *Ore P'go* の儀礼のやり方について、やや立ち入って述べることにしよう。なお、*Ore* 儀礼は地域によって若干の差異があると同時に、ビルマのカレン族のあいだには、三種類の *Bgha* に対する儀礼が記録されている。⁽⁴⁾ しかしながら、本稿の目的は、カレン族の総括的な民族誌の作成ではないので、*Mae Sarieng* 地方に住んでいるカレン族の「家族儀礼」に限定して記述することにする。

(1) *Ore Chuko* の儀礼(一) *Ore Chuko* は *Ore P'go* の儀礼の場合と同様に、ある家族の成員のだれかが病気になった時におこなう儀礼である。また、病気のような「災害」がその家の者にふりかからなくても、年に一度ぐらいは、*Ore* 儀礼をその「予防」のためにおこなう。これは「家神」*Bgha* を慰め、災害や事故などを未然に防ごうとするのが目的である。

Ore Chuko がおこなわれる場合には、まず「一家」の全員が呼び集められる。儀礼をすることが、第三章で述べた鶏の骨によるうらないで決定されると、*Ore* 儀礼に出席する成員の一人が使いに行き、出席予定者に「何月の何日に *Ore* 儀礼をする」と告げる。このような通知を受けると、召集をかけられた者はたとえどのようなことがあっても、万難を排して *Ore* 儀礼に出席しなければならない。とりわけ、*Ore Chuko* の儀礼集団の場合には成員が死亡するか、キリスト教に帰依するか、それともあとで述べる *Chakasi* になって、「家神」*Bgha* と絶縁する以外には、いかなる事情があっても、儀礼に出席しなければならない。もし、この儀礼集団の成員で一人でも欠員ができると、*Ore Chuko* の儀礼は成立しない。成員に出席できない者がいる場合には、たとえ儀礼をおこなったとしても、その効果がまったくないのみか、害があるときを信じられている。そのため、*Ore Chuko* をおこなっている家では、儀礼に欠席者がいると、それをおこなうのを中止する。このような事情を Marshall

師はつぎのように記述している。「*Baha*の儀礼に付随する若干の習慣やタブーについて、注意する必要がある。その儀礼から除外されている者を除いては、家族の全成員がその種の儀礼に出席しないならば、儀礼自体が *Baha* に対してたてを ついたことと考えられるのである。もし、ある人が、病気の親類の者の回復をうながすためにおこなわれる儀礼に欠席すると、かれは病気が永続することを望んだり、病人が死ぬのを望んでいると疑われる。さまなければ、かれの欠席はその家族の誰かに災難がふりかかるべく努力をしていると解釈されるかも知れない。このような非難はキリスト教徒になって、この儀礼から遠ざかっている家族の成員に対しても向けられるのである。他の者がかれが親族の者にもはや愛情はなく、欠席することによって *Baha* を怒らせて、かれらにすんで病気や災害をもたらそうとしているのだと主張している。⁽⁵⁾」

ところで、この *Ore* をおこなう儀礼集団は母系親族集団 (*matrilinal group*) を基礎に形成された社会集団で、カレン族の間では *Dopurech* と呼ばれている。この社会集団は時には夫婦家族、またある時にはある種の拡張家族と偶然一致することもあるが、基本的には社会学でいう家族を形成する原理とは、多少異なった原理をもつ母系的社会集団である。

では図20にしたがって、*Dopurech* について簡単な説明をしよう。*Dopurech* の中心になる人物はその集団の最年長の女性で、通常は祖母もしくは主婦であり、この図でいうと M_1 にあたる。 M_1 の母親が死亡した後は、 M_1 の夫である x もこの儀礼集団に入る。この x と M_1 のあいだにできた子供である M_2 と M_2' と m_2 は、両親もしくは母親の属している儀礼集団の成員であるけれども、息子 m_2 が結婚後に妻の母親が死んでしまうと、自動的に妻が属している他の *Dopurech* に移ってしまう。また、 m_2 の子供は m_2 自身の住居がいずこにあっても m_2 の妻、すなわちかれらの母親の儀礼集団に属するのである。いっぽう、母系の孫である M_3 も m_3 もこの *Dopurech* に属しているが、 m_3

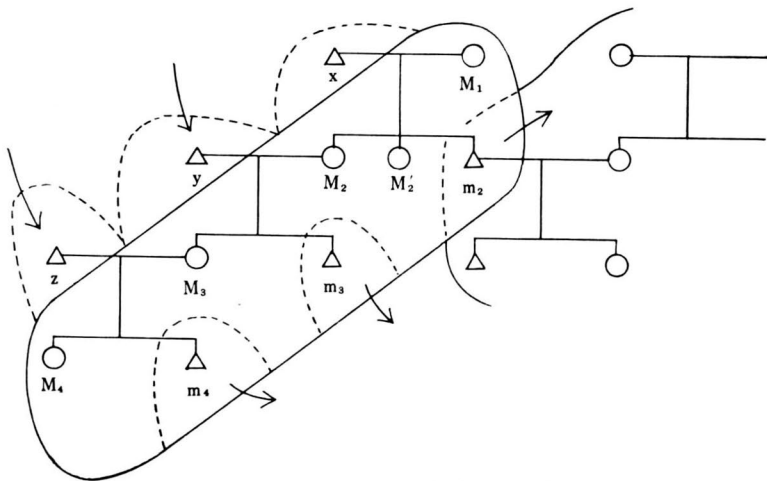


図20 Oxe の儀礼集団 Dopurweh

は m_2 の場合と同様に、条件が整えばかれの妻の Dopurweh の成員になってしまう。 M_3 やさらに M_4 の配偶者はそれぞれ M_3 や M_4 の母親が死亡した時には、この Dopurweh に吸収されていく。

Ore Chuko 儀礼の司祭役にあたる者は、後述の Ore Pigo 儀礼の場合とは多少異なり、母系の原理が完全に貫かれて、 $M_1 \rightarrow M_2 \rightarrow M_3 \dots$ と継承されていく。なお、ちなみに付け加えると、 M_2 の姉妹 M_2' (多くの場合には姉) がこの Dopurweh より婚出し、夫とともに別の家屋に住むようなことになる。その新居には、簡単な儀礼をおこなって、Bajha を招致することもある。では、ここで“家族”儀礼がどのような形でおこなわれるか述べることにしよう。

Ore 儀礼に招集されて来た者は、村内から来た者でも村外から来た者であっても、儀礼の前夜は儀礼をおこなう家で宿泊しなければならない。

翌日、Ore 儀礼が始まるに当たり、儀礼の司祭役に当たる Dopurweh の最年長の女性 (Xeko) が出席者全員に屋内に入ることを命ずる。その際には、出席者はすべてカレン服を着用することが要求される。一同が室内に集合すると司祭

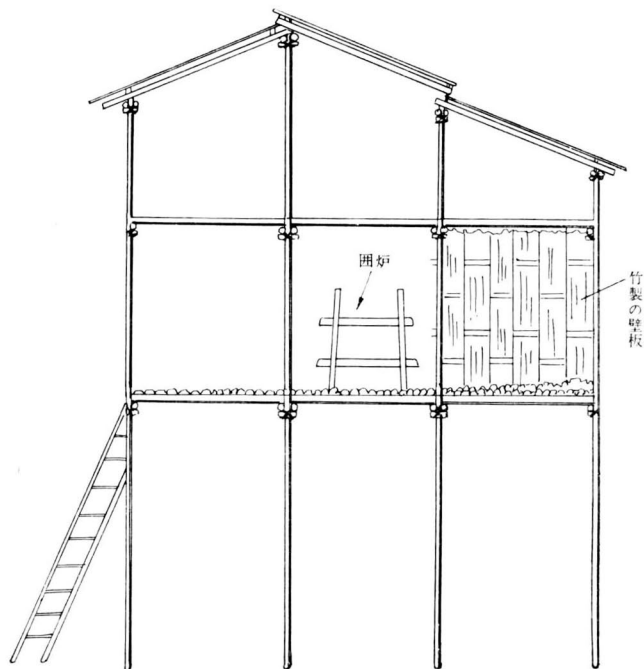


図21 カレン族の家屋の側面図

者は儀礼に使用する土なべを洗い始める。これから後は、参加者が静粛であることが望まれる。もし、どうしても話をしなければならぬ場合には、標準タイ語はもちろんのこと、北部地方のリングフランカである北タイ語 (Kha Müang) も使用することができない。ここでは、かれらの母語であるカレン語の使用が許されているだけである。

司祭役の女性は室内で土なべに入れた米をといで、囲炉裏にかけてたき始める。Ore Chuko の場合には、儀礼用にこれ以一种のおじやを作るのである。この時は出席者が室外に出ることが許されるけれども、はしごをおりて屋外に出ることはできない。かれらはずぎに司祭者が一人で鶏を床下に取りに行つて戻るまでには、室内に帰らなければならない。司祭者が部屋に入ると、鶏の口ばしをつまむ動作を始める。これをカレン語で Chopino とつう。その後、この Dopwueh の最年長の男性 (多くの場合、司祭役 Xeko の夫) が Chopino をおこなつて、

娘ともし彼女が既婚で子供がいればその子供たち、妹娘、兄息子、弟息子…などがそれに続いて *Chopino* をおこなう。*Chopino* をおこなう順序は *Dopueh* の成員の構成によって、いろいろな組み合わせがあるが、原則としていえることは、全体として母系原理が優先しているが、同時に同性のなかでは年長者優先の原理が卓越しているように思われる。

Chopino が終わると、「家神」*Bgha* に対して、祈禱 (*Tukpa*) が捧げられる。その主旨はおよそ次のようである。「これは大きい鶏であります。これをみもとに捧げし故に、*Bgha* よ！、どうかわれらを病気や災害から守りたまえ。」祈禱が終わると、犠牲用の鶏は首をひねって殺される。その鶏の羽根は手でむしり取られ、残されたこまかい羽毛は火にかざして燃やしてしまう。鶏を解体する場合には、肝臓を破損しないように、十分注意を払わなければならない。かくして解体された鶏によって、前述の米とともに、一種のおじやが作られるのである。一方、占いで、豚が犠牲に供される場合について述べることにしよう。

司祭役の女性のほかに、二三人の男が屋外に出ることが許される。男たちはまっすぐジャングルに行き、竹ひもと竹コップを作るために、若干の竹材を切ってくる。また、その際に野性もしくは栽培種のバナナの葉も取ってくる。

竹材から竹ひもが作られると、男たちは犠牲用の豚をつかまえて、脚や鼻をゆわえる。豚は男たちの左肩のせられて、家に運び込まれる。この時に、豚を左肩のせられる理由は、カレン族が左側を悪霊 *Damusa* に対して、「強力に作用する」と信じているからである。室内に運び込まれた豚は、稲もみを風選する時に使用するみ(箕)の上に安置される。

みの上には、豚をのせる前に、あらかじめ五枚ないし七枚の野性もしくは栽培種のバナナの葉を置いておく。

このような儀礼の準備がとどのうと、みのすみには炉から取ってきた灰が置かれ、その灰を出席者がめいめいの手につけて、豚の体に押しつけてゆく。この順序は前述の *Chopino* と同様に、司祭役の女性の *Xeko* から始まって、母系原理と年長者優先の原理によって、*Dopuwah* の成員全員がおこなうのである。この間、出席者一同は酒を小さな竹の容器にとり、ストロー状の細い竹の棒を入れて回し飲みにする。

やがて、司祭役の *Xeko* は刃物を取って、犠牲用の豚に突きさす。もし、*Xeko* が女性のために、それが十分にできないような場合には、出席者の男性の助けを借りて、この行為を象徴的におこなうのである。これに使用される刃物は *Xemaze* (Xe: 刃物、Ma: せうなう、Xe: Ore のこと) という祖先伝来の特別の物を使用することもある。これは *Xekina* (Xe: 刃物、Kina: 子孫) と呼ばれ、*Ore* 儀礼の司祭をする *Xeko* の役職とともに母親から娘へと伝えられる。なお、場合によっては、普通の刃物を使用することがある。

その後、出席者全員が刃物で豚の体に浅い傷をつける。すると、通常豚は大あばれをするので、いそいで豚の鼻を押えるか、ぬれた布で鼻をふさいで窒息させるか、頸動脈を切るなどして殺すのである。

犠牲に供された豚には、口から肛門に竹の棒を通して火にかざし、体毛を焼く。かくして後、豚の解体が開始される。その際に出る血は容器にとりおき、米の粉とともに竹筒に入れて料理をする。

鶏もしくは鶏と豚を米に加えたおじや料理⁽⁶⁾ができあがると、参加者一同はふたたび部屋の中に呼び入れられる。バナナの葉に食物が盛りられ、床のうえに置かれる。年長の男性は、家神 *Baha* に対して、*Baha* よ！ われらはすでに十分な糧^{かて}をみもとに捧げし故に、手もとに食物なし。そのため、ふたたびわが家に戻り賜わぬことを願う”ととなえる。このように“一族”の平安加護を祈ると、男は竹張りの高床のすき間から、バナナの葉に盛ったある食物を地面に落として、この祈禱を終了する。

以上の過程が終わると、儀礼の一環として、*Dopurueh* の成員全員と、家神、*Baha* との共餐がおこなわれる。その際、豚を犠牲にした場合だと、あばらの肉を三ないし五個の奇数だけ取って、皿の料理や御飯とともに、出席者一同が食べ回す。この時は各人が食物を象徴的に一口だけとるだけである。食べる順序は、男の年長者、女の年長者、長男、長女、次女……という、性別では男性から女性、年齢順では年齢の高い者から低い者である。

その後、司祭役の *Xeko* は、儀礼用に作った竹籠に、食べ残した豚のあばら骨、豚の口や脚をゆわえるのに使った竹ひも、竹筒に残った血などを入れる。*Xeko* はこのほか豚の口から肛門にとおした竹の棒を持って、村はずれにある大きな木株 (*Terako*) の所に行き、竹籠をぶらさげる。大きな木株はどれでもよいこともあるけれども、村によっては特定の木株に竹籠を持って行く場合もある。木株にかけられた竹籠は、前述の竹の棒で地面に突き落とされる。

村はずれから *Xeko* が家に帰って来ると、儀礼に使わなかった肉や内臓を料理して、出席者全員で会食をする。この時は、これまでとは異なり、一同は腹いっぱい食べることができる。

なお、それでも豚や鶏の肉が消費しきれない時には、二〜三回に分けて食べてもよいし、場合によっては翌日とか翌々日に *Dopurueh* 以外の村人を招いて食べてもよい。しかしながら、*Ore* 儀礼で犠牲にされた動物の肉はその家から持ち出すことがタブーにされているので、かならず、人を招いて食べさせなければならぬ。

この食事が終わると、かくして儀礼の全過程が終わり、長子から順々に屋外に出ることが許される。

以上、*Ore Chuko* 儀礼について述べてきたけれども、そのなかでもっともオーソドックスな儀礼である *Chuko Ora* に焦点を当ててきた。それに対して、豚を屋外で殺すなど「略式」の「家族儀礼」は *Chuko Goma* と呼ばれている。*Chuko* とは、前述のように、「スゴー・カレン族の「スゴー」のことであり、*Goma* とは「中

道”とか“中間”の意味である。従って、意識をおこなうと、*Chuko Goma*とは“緩和された方式”の *Ore huko* といえよう。一方、これから記述しようとしている *Ore P'igo* 儀礼の場合にも、相対的に“オーソドックス”な *P'igo Ora* と“略式”の *P'igo Goma* の二種類の“家族儀礼”が存在していることを指摘しておくことにしよう。

(2) *Ore P'igo* 儀礼について “家族儀礼”の *Ore Chuko* と *Ore P'igo* もその目的、機能、実施方法に関して、大筋を一見すると、あまり大差がないように思われる。しかしながら、この二種類の“家族儀礼”を詳細に吟味すると、きわめて微細ではあるけれども、重大な差異を見出すことができる。これはカレン族の社会・文化変容を考えるうえで注目すべきことのように思われるので、次にそれを述べることにしよう。

(1) *Ore* 儀礼に出席する者はカレン服を着用することが要求される。これを守らないと、*Bgha O* (“家神”に食べられること) になり、ついには発狂してしまうと信じられている。とりわけ、*Ore Chuko* 儀礼においては、この禁忌は厳格に守られている。しかしながら、*Ore P'igo* 儀礼においては、*Ore Chuko* 儀礼におけるように、カレン服の上下を着用して正装することはかならずしも必要としない。とりわけ、男性などは、カレン風のロンジー(ビルマ風のサロン)を着用するだけの“略装”でも *Ore* 儀礼に出席することができる。

(2) *Ore* 儀礼の前夜は、儀礼がおこなわれる家で *Dopuweh* 全員が宿泊しなければならないといわれている。けれど、*Ore P'igo* 儀礼の場合には、そうすることが望ましいというだけで、不可欠の条件とは考えられていない。

(3) *Ore Chuko* の儀礼集団においては、母系親族集団 *Dopuweh* のなかで、生存している最年長の女性が *Xeko* と呼ばれる司祭役に当たり、男性はその役につくことができない。すなわち、ある *Dopuweh* でこれに該

当する女性がない時には、*Ore Chuko* 儀礼は成立しない。従って、他の方法による儀礼を考えなければならぬ。

一方、*Ore P'go* 儀礼をおこなう場合にも、女性が司祭役 *Yeko* になることは望ましいといわれているけれども、事情によっては、男性でもこの役割を果たすことができる。たとえば、ある儀礼集団で主婦が死亡し、しかも娘がいない時には、夫が *Yeko* になることができるのである。また、極端な場合には、年長の女性の成員がいても都合により、*Ore P'go* 儀礼に出席できない時には、その娘が *Yeko* の役を代行することができるのである。

(4) *Ore Chuko* 儀礼の場合には、*Dopuweh* 全員の出席が儀礼成立の前提条件である。しかしながら、*Ore P'go* 儀礼においては、*Dopuweh* の成員の誰かが *Chiengmai* のような遠方の都市に行つて消息不明になった時にも、欠員があつたまま、儀礼をおこなうことができる。その際には、*Ore* 儀礼のために用意された食物を乾燥して保存しておく。そして、欠席者が「家」に戻つて来た時に、その食物を与え、儀礼を完結させるのである。

(5) 鶏を犠牲に供するに当たつて、*Chopino* といつて、鶏の口ばしを出席者全員が順番につまむ過程がある。

Ore Chuko 儀礼の場合には、*Chopino* をする順序は母系的原理と老齡尊重の原理にもとづいていなければならない。

Ore P'go 儀礼の場合には、その順序はあまりきびしく決められていない。

鶏を犠牲に供す方法は、*Ore Chuko* 儀礼の時には、かならず首をひねつて殺さなければならない。しかるに、*Ore P'go* 儀礼をおこなう場合は、どのような殺し方してもよいといわれている。なお、鶏を犠牲にした後は、*Ore Chuko* 儀礼では羽根を手でむしり取つて、残つた羽毛は火にかざして焼く必要がある。この際には、付近の人たちはこの悪臭に悩まされるのである。ところが、*Ore P'go* 儀礼の時には、鶏を湯に浸して、簡単に羽根

や羽毛を除去することができる。

鶏の解体については、*Ore Chuko* 儀礼の場合には、細心の注意が必要である。すなわち、その過程で、肝臓を傷つけると、この犠牲は無効になり、改めて、別の鶏を犠牲にして、やりなおさなければならないのである。ところが、*Ore Pigo* 儀礼になると、このような心配はいっさい必要ない。

(6) 豚を犠牲にする際には、正式の *Ore Chuko* 儀礼である *Chuko Ora* においては、そのやり方はきわめて面倒である。すなわち、豚を薄暗く、狭い部屋に運び入れて、出席者一同が豚の体に刃物で傷をつけなければならない。この時には、豚は鳴き叫び、おおあばれをするし、室内に血が飛び散って、きわめて不快であるという。しかるに、*Ore Pigo* 儀礼の場合には、*Pigo Ora* のように正式に儀礼をおこなう場合でも、豚は屋外で殺すことができる。しかも、殺し方は自由で、絞殺をしても、口から水を流し込んで溺死させてもかまわないのである。

(7) *Ore Pigo* 儀礼においては、うらない によっては、豚や鶏のような「高価」な家畜や家禽を使用せず、付近の河川で捕えた魚を「犠牲」に供するだけで済みます場合もある。山地カレン族の *Hiti Topa* 村にはこの例はなかったけれども、平地カレン族の *Hiti Kani* 村において、一例を採集することができた。それは P という老人の場合で、かれは Chiangmai 県 Hod 郡 Mae Papai 村出身のポー・カレン族である。P 老人の話によると、ポー・カレン族の村でおこなわれている *Ore Pigo* 儀礼とあまり変わっていないという。しかし、ポー・カレン族の村においては、うらないの結果によっては、魚を *Ore* 儀礼に使用するといわれている。儀礼用の魚は、*Nua-pozu* といいつて、うるこがある魚で、Mae Papai 村では、二本の指幅大の魚を二匹だけ使うという。その際に、二匹以上の魚がとれると、川へふたたび逃がしてやらなければならない。なお、Lamphun 県 Ban Hong 郡の

Ban Hue Dok 村のポー・カレン族は二匹以上の魚を儀礼に使用するという。

なお、Ore Pigo 儀礼で魚を「家神、Bjha に捧げても、あまり効果がなかったと思われる場合には、改めて豚や鶏などを使った Ore 儀礼をしなければならない。

いずれにせよ、以上述べてきたように、Ore Pigo 儀礼は Ore Chuko 儀礼よりも、あらゆる点で「カレン色」が少なくなり、儀礼としては俗化され、また簡易化されていることは注目に値する。

最後に、Ore 儀礼の様式を子供が親から受け継ぐ時の方法について触れてみよう。

一般的にいうと、この法則においては、母系の原理が優先しているように思われる。すなわち、Hit Topa 村においては、全戸数二五戸の六〇パーセントに当たる一五戸が、Ore 儀礼の様式を母方から継承している。しかも、全戸数から、Chakasi⁽⁷⁾の家三戸、カトリック一戸、を除くと、母方から確実に Ore 儀礼を継承している家の割合は七一パーセント強になる。

また、Hit Kani 村においては、全戸数四八戸のうち、六五パーセントに当たる三一戸の家が、Ore 儀礼を母系原理に従って継承している。しかも、Chakasi の家五戸、カトリックの家一戸を除くと、その割合はじつに七三パーセント強に達する。

だが、この法則も時代の波を受けたからだろうか、かなり弾力的になっている。最近では、母系による継承の原理にこだわらずに、両親の Ore 儀礼の様式のうちで、容易な方を踏襲するのを好む傾向があるようだ。また、伝統的には、男子は結婚後妻の母親が死亡した場合には、妻の Ore 儀礼様式に従うといわれていたが、それも含めて今日では決定的なことではない。たとえば、妻がオーソドックスな Ore 儀礼のわずらわしさに閉口している場

合には、時として、夫の *Ore* 儀礼様式に従うこともある。

- (1) Kunstader (1968) p. 3
- (2) 実際は、家族とは多少編成の原理を異にする社会集団である。しかし、ここでは便宜的に「家族」と述べておこう。詳細はすぐあとで説明することにする。
- (3) Marshall (1945) p. 13
- (4) Marshall (1922) pp. 248-257, Tongkham (1964) p. 15
- (5) Marshall (1922) p. 257
- (6) H. I. Marshall 師によると、ビルマにおけるカレン族においては、このような場合には塩ととうがらしで味付けをするだけであったという。しかし、今日の Mae Sarieng 地方ではスパイスも使って、日常と同じ味付けをする。これも宗教儀礼の俗化といえよう。
- (7) 第五章で述べているように、*Chakasi* 儀礼によって、*Dopureuh* の成員と「家神」*Baha* との関係が断絶した者。

B *Hti K'cha Ko K'cha* の神々 *Talutaphadu* 儀礼

カレン族のアニミズムのなかで、これまで述べてきた「家神」*Baha* と並んで、きわめて重要な役割を果たしているのは、伝統的には「超自然の神」と信じられてきた *Hti K'cha Ko K'cha* の神であろう。Kanchanaburi 県で、ポー・カレン族を調査した¹⁾ Theodore Stern 教授も次のように述べている。「信仰している者にとっては土地神 (the local Lord) は祖霊 (母系の家神) とともに、倫理的秩序を守るために役立っている。過失者を罰するためには、両者とも、いろいろな程度の連帯責任の原理を用いている。祖先 (の霊) は、以前は母系親族集団の成員を罰していたのが、いまでは母方居住の家族の成員に天罰を限定している。一方、土地神は地域社会 (community) 内の信者たちのいかなる者に対しても、天罰を科すことができる。」⁽¹⁾

いま引用したポー・カレン族における祖霊もしくは祖先は、筆者が本稿で述べている *Baha* で、土地神という



写真24 平地カレン族の村落儀礼 *Talutaphadu*
 祠に向かって村人は、^ニ仏式に合掌をしている。

のは、おそらくは、*Hi K'cha Ko K'cha* のことであろう。ポー・カレン族の間では、*Hi K'cha Ko K'cha* がすでに地縁的性格の強い「土地神」として機能しているようであるが、この点は平地カレン族の場合との平行現象 (parallel) と思われる。すなわち、*Hi K'cha Ko K'cha* の神は、元来、原義が示すように、「水と大地の主」として、エーテルのようになまねく全自然界に存在し、それを支配しているものであった。現に、山地カレン族の間にあつては、*Hi K'cha Ko K'cha* の神は特定の場所とか村落には付着していない。山地カレン族の *Hi Topa* 村においては、*Hi K'cha Ko K'cha* の神がかれらの精神生活のなかで、かなりの比重を持って存在していることは間違いない。しかしながら、村にはその神を祭る祠はなく、あたかも大気のなかにただようエーテルのような存在として、山地カレン族を取り巻く大自然のあらゆる側面を支配し、それにかかわり、あいを持っているといわれている。しかしながら、平地カレン族の間において、Stern 教授の述べているポー・カレン族と同様に、*Hi K'cha Ko K'cha* の神はその超自然的性格を弱め、かなり村神的性格が目立つ

ようになってきたと考えられる。たとえば、平地村の Hti Kani 村においては、*Hti K'cha Ko K'cha* の神は「常設」の祠ほこらを持ち、そこで村人ごぞつて年に一度盛大な *Talutaphadu* の儀礼をおこなっている。⁽²⁾

Talutaphadu の儀礼は山地カレン族よりも、平坦部に住んでいるカレン族のように、北タイ系やシャン系の住民と接触している平地カレン族の間で顕著にみられる。これは、カレン族の伝統的な *Talupo* の儀礼がタイ系文化の影響で、儀礼の *reinterpretation* がおこなわれたのではないかとも思われる。この儀礼とほとんど同じものが、北タイ人やシャン人の間でおこなわれている。Mae Sarieng の谷においては、北タイ人がカレン族の *Talutaphadu* 儀礼と同じ日に、その儀礼をおこなっている。

それを北タイ語で *Liang Phi Chaoti Chaodin Chaomitang* といふ。⁽³⁾ おそらくは、カレン族が平地民のいくつかの儀礼のなから、この儀礼を選択的に採用したものの一つではなからうか。

それでは、*Talutaphadu* の儀礼について、概要を述べることにしよう。

筆者が観察した *Talutaphadu* 儀礼は、一九六六年には、五月二八日におこなわれた。早朝、村の各家から女子供が *Sapga* の家に *Sue-dok* という木の葉の束を二つ、鶏を一羽、蜜ろう、製ろう、そく二本、それに一皿のポップ・コーン状の米を持ってやってくる。*Sapga* の家としては、鶏を用意する。それに酒は村人が出しあった金で合計一本準備される。かつては自家製の酒を持ち寄ったのであるが、現在では、原則として、酒を個人が勝手に醸造することを政府が禁じているので、市販の酒を利用している。九時頃になると、村のはずれにある仏塔 (*Cheidi* または *Tat*) の丘のふもとに、村の男たちが水を持ってぞくぞくと集まってくる。⁽⁴⁾ ここには竹で作った粗末な祠 (*Talutaphadu-Da*) がある。出席者は儀礼が終わるまでは家に帰ることはできない。村人たちは付近で竹を切ったり、子供たちはおおきい木の葉を集めて、坐る場所や雨やどりする場所をつくる。また、祠ほこらの修復、

囲い作りもおこなわれる。この間に、石油カンで二本の湯がわかされる。この日は犠牲にする家畜以外の殺生を厳禁しているので、周囲にむらがる毒のある赤蟻を殺すことすらできない。

準備が終了すると、儀礼が開始される。Sapga は四散していた村人を祠ほくらのまえに呼び集め、合掌する両手の間に Suedok の葉をはみみながら、カレン語で祈りをあげる。それからまず、祠ほくらの左側にある簡単な祭壇で祈りをあげて、さらに祠ほくらに四本の酒とその祭壇に三本の酒を捧げる。ふたたび、祠ほくらの前で祈りを始める。そのなかには当日欠席した九人の村人の名前を Sapga が加えて、あわせて神の加護を祈る。その後、村の総代であり、犠牲執行役 (Dosuda) の M 老が鶏の頭を棒でたたいて殺し始めると、他の村人もそれにならい、鶏を殺す。次に、M 老は豚の頭を大きい竹の切端で一撃する。豚が脳震盪をおこすと、村人の一人がするどい刃物で豚ののどを刺す。したたる血は容器に受けられる。しかしながら、豚が完全に死なないので、村人が二人がかりで、豚ののどを太い竹の棒で押しつけて、とどめをさす。この頃になると、村人は殺した鶏を湯につけて、羽根をむしりだす。Sapga の提供した鶏は宗教的に特別な意味があるので、ほかの鶏とは別に解体を始める。そして、これはほかの鶏とは別に神に捧げられる。豚も水洗いが終わると、湯をかけて表皮をはがしてゆく。まず腹を切り開き、頭と脚をばらす。かくして、豚の解体が終わると、村の副総代にあたる N 老が料理の指導役 (Alochio) として、食事の準備がなされる。

このころ、Sapga は祠とその左側にある祭壇に捧げてあった洗面器いっぱい、Suedok の葉をそれぞれあげて、洗面器を垣根のそとにいる村人に手渡す。Sapga は村人に命じて、各自が家から持参してきた少量の御飯を一つの洗面器に集めさせる。いま一つの洗面器には村人が手伝って、豚や鶏で作ったカレーを盛る。また、ほかの洗面器二つに鶏と豚の肉を盛りあげ、それぞれのうえに御飯と肉のはいったバナナ皿二つと、水と酒のはいっ

た二本の竹筒をのせる。そしてそれを祠ほこらと祭壇ほこらに捧げる。その時、*Sapga* の息子 A が *Sue-dok* の葉を垣根の左手に植えると、*Sapga* は祈りをあげる。*Sapga* は、村人が *Sue-dok* につけて持参したろうそくを数本ずついっしょにねじって一本の太いろうそくに仕立てて、火をつける。太いろうそくに火をつけてから、*Sapga* は祠ほこらに祈りをあげて、そなえてあるポップ・コーン状の米をつまみあげる。その数が偶数だと、*Hi: K'cha Ko K'cha* の神がこの祠ほこらにやって来たと考えられるという。この神の住んでいる所は、北タイ人の伝説にもでてくる、はるか東方に存在すると信じられている *Doi Kham*, すなわち「金の山」⁽⁵⁾ であると信じられている。祈りが終わると、*Sapga* は酒を祠ほこらにあるバナナ皿の食物のうえにかけ、また祠ほこらの入口につけてある竹ばししごにも振りかける。その後、左側にある祭壇でも同様の動作がくり返される。祠ほこらや祭壇ほこらにバナナ皿の食物だけを残して、肉の入った二つの洗面器は、垣根のなかから、皆が控えている広場に持ち出す。

かくしてのち、*Sapga* と犠牲を担当した M 老、それに料理の指揮をとった N 老の三人がまず食事をする。かれらの食事が終了すると、他の村人たちはいっせいに食事を開始する。これはいうまでもなく、*Hi: K'cha Ko K'cha* の神と村人の共餐である。

出席者全員の食事が終了すると、前述の「役員をしている」M 老人と N 老人の二人が、出席者に老若にかかわらず、酒を配って歩く。その時は、一〇歳ほどの男の子にも酒が与えられる。一同に酒がまわり出すと、*Uha (Hia)* という単調なしらべの合唱があくことなくくり返される。やがて、*Sapga* が最後の祈りをあげ、それが終了すると、皆が *Sa⁽⁶⁾* と唱和して、儀礼を終了する。

その後、村人たちは三三五五と村に帰り、*Sapga* の家に集合して、ふたたび酒宴をはる。

(1) Stern (1968) p. 4

- (2) 第一回目の調査によって書かれた拙稿〔飯島(1967) pp. 9-10〕によると、山地カレン族の間でも *Talutaphadu* 儀礼をおこなうと述べた。しかしながら、第二回目の調査で集めた資料や情報を総合すると、この記述は正確ではないことが分かった。どうやら、*Hu Topa* 村における古老の R 氏や T 氏の「古きよき時代」の幻想をうのみにした筆者の誤りであったようだ。
- (3) *Liang Phi* : 儀礼をする。 *Chaoti* : すみかの神 *Chaodin* : 大地の神 *Chaomuang* : 村や町の神。
- (4) *Mae Han* 村のように、女性が *Talutaphadu* 儀礼に参加できる場合もある。しかし、*Hu Kani* 村では女性の参加は許されない。
- (5) タイ国北部の人々によると、*Doi Khan* には、*Phi Chaoti Chaodin Chaomuang* の神がいるという。平地のカレン族の文化変容は進み、北タイ人とほとんど同じ考えを持つに至っている。かくして、*Hu Kani* 村では、*Hu Kcha* *Ko Kcha* の神は、すでに超自然の神としての性格を弱めているようだ。
- (6) “*Sa*” はキリスト教の祈りにある “アーメン” のようなものという。

要約—四

この章においては、山地と平野部に住んでいるカレン族のエコロジーの差異にもとづく、農耕儀礼の相違とこれらの基礎集団の秩序に関係する宗教儀礼とその変化について記述した。

農耕儀礼について、きわめて明確に判明した事実として、山地カレン族の村落 *Hu Topa* においては、焼畑農業にはきわめて手のこんだ儀礼が発達しているということである。しかるに、水田稲作農業に関しては、ほとんど見るべき農耕儀礼は発達していない。

一方、平地カレン族の *Hu Kani* 村においては、水田文化の影響も強く、水田農耕儀礼はタイ系の平地民なみに発達している。この傾向は水田の灌漑のために、ある種の地縁組織が必要であるというような条件により促進

されているようである。

では、次にカレン族における基礎集団の秩序維持のために役立っている儀礼について要約してみよう。

双系的傾向の強いカレン族の社会においては、家族は最小かつ最大の自律集団である。従って、家族の社会・文化における比重は重いといえよう。その家族の秩序を維持しているものは、「家神」*Baha*ではなからうか。この「家神」*Baha*はカレン族にとって、きわめて有益ではあるが、手間のかかる存在である。「家族儀礼」*Ore*とどこおりなくやれば、「*Baha*はその家族の成員の「百万の味方」として、保護に当たってくれる。しかし、そうでない場合には、かれらに病気や災害がもたらされるという。

「家族儀礼」*Ore*は大別して二種類ある。すなわち、オーソドックスな*Ore Chuko*方式と比較的弾力的な*Ore P'igo*方式である。前者においては、「儀礼には母系集団を基礎とした家族の成員は、いかなる事情があっても、すべて参加しなければならない。*Ore P'igo* 儀礼においても、全員出席は望ましいけれども、ある種の便法によって、欠席者のいるままでも、儀礼を実施することができる。しかしながら、いずれにせよ、*Ore* 儀礼はカレン族の社会の凝集力として機能し、かれらの identity の源泉になっていることだけは間違いない。

一方、カレン族の社会で、家族に次いで重要な基礎集団である村落に関する宗教儀礼について述べることにしよう。「家神」*Baha*は母系的集団の成員に罰を与えることによって、カレン族の倫理的秩序を維持するのに役立っているが、平地カレン族の間に「村神」として君臨している *Hi K'cha Ko K'cha* の神は、地域社会の成員に天罰を科すことによって、かれらの倫理的秩序の維持に貢献している。

Hi K'cha Ko K'cha の神は「元来、超自然の神として、あまねく自然界を支配していた。現在でも、山地カ

レン族の間においては、このような解釈が踏襲されている。しかしながら、平地カレン族の村落にあつては、*Hi K'cha Ko K'cha* の神は自然界をエーテルのようになだよつていて、水や大地を支配している超自然の神の座をおりて、村神的性格を強くしている。このあたりに、地縁的性格の比較的卓越した平地カレン族の社会組織が反映されていると考へてもよからう。

第五章 村落構造と宗教における変容

第一節 村落構造の変化

すでに第三章第一節で述べたように、山地カレン族の村落 Hti Topa においては、村落編成の原理は“血”の原理に基づいていた。伝統的な long house はすでに数十年昔に崩壊してしまっているけれども、現在に到るまで、この“血”に基づく原理は根本的にはゆらいではない。しかしながら、山地カレン族の焼畑農業を基礎とする経済に、水田稲作という異質的な生産様式が導入されると、Hti Topa 村の社会的・文化的側面にいろいろな変化をもたらさないわけにはゆかなかった。

たとえば、山岳地帯に住んでいる大部分のカレン族がこれまでおこなってきた“無畜”農業とは異なり、代かき、その他の農耕に役畜が必要になってくる。そのため、Hti Topa 村では水田稲作が導入されたのと軌を一にして、平坦部から水牛も導入された。この事実、その後の山地カレン族の文化変容にかなりの影響を与えた。それを要約すると次の三点になる。

- (1) 水稲栽培を山地カレン族の文化の中に根をふかくおろさせた。それは水牛を導入することにより、水田耕作をきわめて容易にした。さらに、水牛のようなかれらにとってはきわめて“高価な”家畜がひとたび導

入されると、それをふたたび簡単に放棄することができなくなる。従って、その後は水田稲作を放擲しにくくなる。

(2) 水田農業を開始した当初に、水牛が平坦部より導入されたが、それを契機として、水田稲作をおこなっていない山地カレン族の間においてさえ、かなり飼育をおこなうようになった。そのため、現在では、村全体として、かなりの数の水牛が飼育されるようになった。そして、水牛を販売することによって、焼畑農業における土地生産性の低下、従ってまた、農業所得の低下をある程度おぎなうことができるようになった。すなわち、山地カレン族は村落の周囲にある二次林を利用して、水牛を育成し、それを平地の農民に売って、ある程度現金収入を得るようになった。

(3) 水牛の数がしだいに増加してゆくと、山地に放牧に行くなど飼育にいろいろと手間がかかり、そのために社会・文化変容に、ある種の方向づけがおこなわれるようになった。たとえば、この村に水牛を導入した頃を境にして、カレン族特有のすぐれた竹の工芸品や織物が減少し始めたことも、かならずしも偶然の一致とは考えられない。さらに、今日では村の周辺に数多くの水牛が放牧されているために、植林とか果樹園芸がおこなにくくなったのも事実である。

しかしながら、このような焼畑農業に対する水田稲作導入にともなう「物的」な変化よりも、山地カレン族の社会や文化に与えた重要な変化がある。

すなわち、その第一は、山地カレン族の村落の定着化であろう。いま述べたように、水田稲作は焼畑による陸稲栽培とは異なり、一カ所で連作することができる。また、水田の開拓は相当な労力を必要とするために、一度それを開始すると、途中で中止して、村落の位置を動かすわけにはゆかなくなる。たとえば、Hiti Topa 村の場

合は、病気が発生したのと、水場からの距離がかなりあったために、十年ほど前に、東側の山の裏側から現在村のある位置に村落を移したのが、最後の“移動”となったといわれている。しかし、元来は、悪疫が蔓延したり、生活が不便である場合以外でも、*Sapua* が死んだ時には、前述のような鶏骨によるうらな^{ウラナ}いをして、“場所の良い所”に村を移すことすらあった。

第二に、水田造成のために、山地カレン族がこれまでに経験したことの無いほど過分な労働力を、ある特定の土地に投入することになる。このようにして、かれらは土地に対する考えをしいだいに変更しなければならなかった。すなわち、水田稲作を導入する以前の山地カレン族にとっては、山地に関する所有の観念は実際上ほとんど欠如していたと考えられる。Marshall 師によれば、「土地はただであり、地域社会に属していた。誰もが伐採できるだけの山腹の欲しいだけの面積を利用するのにかかされていた。」⁽¹⁾このような状態のもとでは、「土地は私有でなかったことはもちろんのことながら、共有の事実も、また観念も存在してはいなかったのである。そこでは、いまだ公私の区別も生じなければ、個と個との分離対立もできてはいなかった」⁽²⁾のである。しかるに、水田農業導入を契機として、土地を“私有”もしくは、少なくとも“私的に占取”するという考え方がしだいに芽ばえてきたのである。このようにして、「本来、異質の営みである『土地への労働投下』ということがおこなわれるようになってくる。これもやはり、異物の内含包摂である。もちろん土地に対して労働投下をなせば、たとえば排水の施設をすとか、灌漑のための溝を作るとか、あるいは通路を整えるとか、さらに肥料を入れるとかというようなことをすれば、その土地の価値は高まってくる。いわば土地への投下労働の財価値としての凝結化が起こることになる。それだけ土地の財価値が高まってくることにもなる。いままでは単なる自然空間にすぎなかった土地が、こうして物化し、財価値を持つてくることになるのである。」⁽³⁾もっとも、現在でも個人もしくは

家族による、自由な土地の処分権は持っていない。「自分の」水田であっても、相続以外では勝手に他人の手に渡すことはできないのである。しかしながら、「土地の財としての確認とその所有主体の確認ということは、あらゆる段階への発展というほかはない。」⁽⁴⁾

このような状況のもとでは、焼畑農業に利用されている森林・山腹などに対して、占有権が確立されていく過程も観察できる。それというのは、伝統的には、いまも述べたように、カレン族が焼畑農業に使用している山林は、「村のもの」であって、村落の成員は、必要な者が必要な時に必要なだけ、伐採をして、焼畑に利用するだけであった。それが時がたつにつれて、家族を単位とする占有的土地利用に変化した。これにはいくつかの段階があったことが想像されるけれども、現在では、焼畑農業の形態は七圃式の農業に転化しているのである。⁽⁵⁾ すなわち、Hi: Topa 村では村人が通常一戸当たり、焼畑用の土地を七枚占有していて、それを年ごとに一枚ずつ耕作していく。これについて、Marshall 師はブルマの例を次のように書いている。

焼畑をするには、「その土地を伐採して、二回目の播種をおこなうのに、すくなくとも七年の期間をかけなければならぬ。そして、その期間でさえ最高の収穫を得るには短すぎるのである。」⁽⁶⁾

ところで、このような焼畑用の林野について、山地カレン族の考え方が近年どのように変化しているかを見ることにしよう。この点について、Hi: Topa 村の七〇代の長老 P 氏にたずねてみると、「山というものは、村人ならば誰でもが、どこでも耕すことができる。自分の耕していた土地は、かならずしも子供が相続しなくてもよい。」という。ところが現実には、P 老人の子供たちは、以前 P 老人が引退前に耕していた土地を、「自分たちの」畑地として利用している。そこで、P 老人の息子にあたる四〇歳に近い現村長の K 氏に聞いてみる。「自分の畑は、田と同じように、親から受け継いだものである。やがて、自分も年老いたならば、このまま子供にその

土地を渡すであろう……。」このようにわずか一世代の間で、山地カレン族の焼畑用の土地に関する考え方がまったく違ってきていることは興味深い。いや、P老人ですら、すでに時代の変化は十分に分かっていたのだから。ただ、「良き時代」に育った「良き」カレン族としては、「土地が自分たちのものである」などという「せちがらい」とは、人前でいいたくなかったのではなからうか。

いずれにせよ、以上のように Hi: Topa 村に水田稲作が導入されたことにより、伝統的農業に従事している村人の間にも動揺がおこった。ひき続いて、焼畑農業までもが個別の家族経営的傾向強化への一途をたどったのである。このように、焼畑農業にいそしんでいる村落の成員の間に、水田農業の方に顔を向けだした者が出現し始めた時、カレン族の山村にそれまで存在してきた社会秩序の基本に崩壊のきざしが現われ始めたのである。

さらに、谷間の平坦部に移住して、水田稲作農業を開始して久しい平地カレン族になると、事態はさらに進んでいる。血縁を基礎に結合していた村落の社会組織はある種の傾斜を示した。天水もしくは湧き水に依存している山村の水田稲作とは異なり、平地における水田農業では、河川を利用した灌漑・治水などを通して、村内のみならず隣接村落に対しても、地縁的なかかわり、あい、持たざるをえなくなる。

また、平地村 Hi: Kani においては、立地の関係もあって、異なった民族集団の者までもが、婚姻を通じて、正式な村の成員になるだけではなく、「カレン族になる」ほどの変化が現われている。それに対して、山村の Hi: Topa においては、このような現象はまったく発生していない。

いずれにせよ、山地カレン族と平地カレン族の村落を比較すると、前者より後者における村落の封鎖性ははしだいに薄れている。平地カレン族は、村落の境界を越えて、より広い世界との接触を持つ機会が多くなっている。

いわば、平坦部においては、カレン族社会の規模が拡大したことを意味しているのである。

カレン族の社会や文化は、他の“未開民族”の場合と同様に、諸要素間の緊密な相互依存関係の特徴として、水田稲作の導入というような文化の一部に生じた変動は、それと密接に関連する文化要素をはじめとして、ひいては文化や社会全体に変化をもたらしやすいのである。⁽⁷⁾もちろん、平地カレン族のエコロジが、この問題に関して、大きな役割を果たしていることはいうまでもない。

以上のように Hiti Topa 村の山地カレン族が、伝統的な焼畑文化に、量的にはきわめて僅かではあるが、水田稲作を導入することにより、質的には、きわめてドラマテックな変化が発生した。さらに、平地カレン族のように、水田農耕文化と、長期間にわたって、密接なかわりあいを持っていると、当然のことながら、Hiti Kani 村の社会や文化のあり方に構造的な変化が現われている。たとえば、水田農業と個別の農家が密着してくると、山地カレン族の村落の場合とは異なり、水田稲作にも農耕儀礼が付着してくる。

このようなカレン族における山地と平野部におけるエコロジの差異による宗教儀礼の変化については、次の節で述べることにしよう。

(1) Marshall (1922), p. 129

(2) 柏 (1968) p. 155

(3) 柏 (1968) p. 163

(4) 柏 (1968) p. 158

(5) このような傾向は、ビルマにおいてはかなり昔から存在していたように思われる。Hugh 氏はすでに今世紀初頭にこのことを報告している。

(6) Marshall (1922) p. 75

(7) 姫岡 (1967) pp. 194-95 参照。

第二節 伝統的宗教の変化

第四章の伝統的宗教と儀礼を扱った所では、カレン族の農耕儀礼と基礎集団の秩序を維持するための儀礼について述べた。

農耕儀礼に関する山地カレン族と平地カレン族の差異は、いうまでもなく、両者のエコロジカルな適応の相違にもとづくものである。すなわち、焼畑農業を基礎経済としている山地カレン族の村落においては、農耕儀礼は焼畑に集中している。しかし、水田稲作文化に強く影響されている平地カレン族の村落においては、農耕儀礼は圧倒的に水田農業にかかわりあっている。

このように、カレン族の農耕儀礼の変化については、原因も結果もきわめて明瞭に理解することができる。しかしながら、基礎集団の秩序維持に関係している儀礼については、変化の原因も結果も十分に分析されていない。しかも Lucy Mair 教授も述べているように、「小規模な社会の構造に関する基本的原理は二つで、親族組織と地縁集団のメンバーシップである」⁽¹⁾が、カレン族の場合もその例外ではない。そこで、ここでは、ふたたび家族や親族組織にかかわりあいを持つ Oae 儀礼と平地カレン族の村落儀礼 *Talutphadu* に焦点を当て、その変化をカレン族の社会・文化変容の全体像のなかでとらえてみよう。

A “家族儀礼” Ore の変化

i “仏壇” *Dapo* の導入 第四章第二節 A で述べてきたような事実からも分かるように、“*Ore P'go* 儀礼をおこなう儀礼集団の成員のほう”が *Ore Chuko* の儀礼集団の成員よりも、“家神” *Bofa* による社会的制約が少ないと考えることができる。その意味では、“*Ore Chuko* 儀礼をおこなっている家族よりは”、“*Ore P'go* 儀礼をする家族のほう”がより、“平地民化”もしくは農民化が進んでいると理解してよからう。

ところで、カレン族の“平地民化”もしくは農民化という一種の社会・文化変容を考慮するうえで、たいへんに重要なことは、すでに述べてきた *Ore* 儀礼の中で、豚に関する犠牲のやり方ではないだろうか。すなわち、よりオーソドックスな *Ore Chuko* 儀礼においては、豚の犠牲をおこなう場所は屋内に限られている。だが、“*Ore P'go* 儀礼をおこなう場合には、豚を屋外で殺すことができるのである。しからば、このような儀礼上の差異はどのようにカレン族の農民化に影響を与えるのであろうか。かれらの説明によると、家のなかで四つ足の動物を犠牲にして、血を流さなければならぬ以上、“完全な”仏教徒になりきることはできないという。この場合、家屋のなかにおいて、犠牲のために流す豚の血は、おそらく仏教の殺生戒と抵触するのだらう。さらに、山地カレン族に仏教が順調に入ってゆかない理由は、仏教寺院があり僧侶が住んでいる町から遠方僻地の山岳地帯に分布しているというだけでなく、狩猟と無関係には存在することのできない、山地カレン族の焼畑農業を前提にした生活様式が、殺生戒と競合していることも十分想像できるのである。

ところで、平地カレン族はここ一世紀ほどの間、タイ系平地民文化ときわめて密接に接触していた割には、仏教文化の影響は表面的で、その文化の深層には及んでいないようだ。

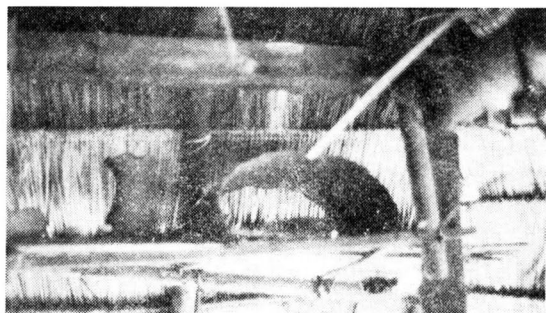


写真25 山地カレン族の *Dapo* 仏壇の原型、

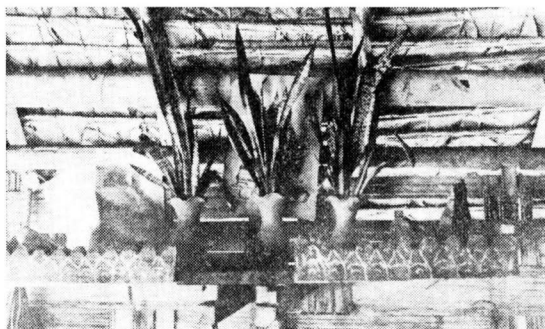


写真26 平地カレン族の *Dapo*. 仏画などを飾り
本物の仏壇にまであと一歩

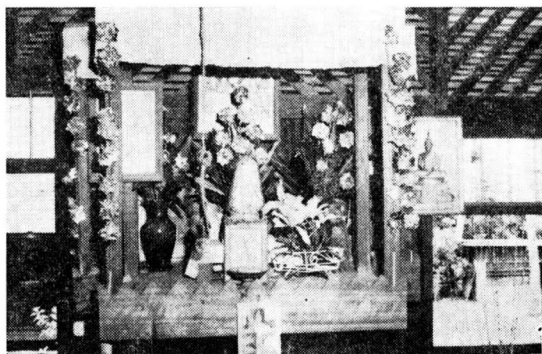


写真27 タイ系平地民の仏壇. 仏像も安置してある.

たとえば、平地カレン族の家にある *Dapo* (原義は「花を置く場所」という「仏壇」があるが、山地カレン族の物に比べると、きわめて立派なものが作られている。だが、北タイ人やシャン人がおこなっているように、

ブロンズや焼物の仏像を安置していることはない。そのため、北タイ人やシャン人のような平地民は、平地カレン族ですら、“本物の”仏教徒とは考えていないし、平地カレン族自身も、本格的な仏教的宗教生活を送っているとは考えていない。“本物の”仏教徒になるためには、カレン族が、タイ系平地民の行者がおこなっている *Chakasi* という儀礼によって、*Dopuwet* の成員と“家神” *Bgha* との関係を断絶して、*Ore* 儀礼を中止することが、一つの前提条件になるのではなからうか。

なお、カレン族がキリスト教徒に帰依することによっても、“家神” *Bgha* との関係を遮断し、*Ore* 儀礼から解放されるのである。しかしながら、これではカレン族がふたたび仏教化される道がほとんど完全に閉ざされて、この国の国民形成の本筋からは逸脱してしまう。かれらは、単に、クリスチャン・カレンという特殊な社会集団を形成し、さらに、別の意味でのマイノリティーに落ち込んでしまうのである。そのため、キリスト教化の問題は、本稿の主題からかなりはずれているので、ここでは言及しないことにする。

ところで、*Chakasi* 儀礼について述べるのに先立って、カレン族の農民化の象徴とも言うべき“仏壇”の導入についてまず簡単に触れることにしよう。

カレン族の間では、仏教文化の影響の強い平地の村ではもちろんのこと、その影響をあまり受けていない山村においても、程度の差こそあるが、すでに仏壇の原型と思われる棚状の祭壇が家屋の入口に存在している。祭壇がカレン族の家々に導入されたのと、*Chakasi* の影響があったのと期を一にしているのは興味深い。仏壇状の祭壇の導入はカレン族の文化と“大きな伝統”との接触を象徴するものと思われる。まえにも述べたように、山から降りてきたカレン族によって、平地の村 *Hi Kani* が設立されたのはすでに三〜四世代むかしのことである。そのため、この村のカレン族はすくなくとも数十年から百年余りのあいだ、周囲のシャン系もしくは北タイ系仏

教文化に直接的にさらされてきた。しかしながら、*Hiti Kani* 村のカレン族に *Chakasi* の影響がかなりはつきりと現われはじめたのは、一説には数十年むかしともいわれ、一説には三〇年ほどまえ（戦争のすこしまえ）ともいわれている。その当時、この村に、シャン系と思われる行者が現われたと伝えられている。村人はかれをカレン族のアニミズムのなかで、もっとも重要な役割を果たしている神の一つである *Hiti K'cha Ko K'cha* の化身⁽³⁾ではないかと思つて、たいへん丁重に迎えた。

当の行者は、村の家々に仏壇状の祭壇 *Dapo*⁽⁴⁾を作らせ、毎日御飯、花、水などを供えることをすすめた。初期においては現在の山地カレン族の家にある *Dapo* のように礼拝対象物はまったく存在しなかつたといわれる。だが、今日の *Hiti Kani* 村では、高僧の写真や仏陀の絵画が *Dapo* に張られている。とはいつても、これにはシヤン人の仏壇 (*Ke Pla*) や北タイ人の仏壇 (*Keng Pa Chao*) に見られるような仏像が安置されていない。この事實は *Oze* 儀礼をおこなうこととふかいかかわりがある。カレン族の説明を総合すると、それは、屋内における豚の犠牲とそれに伴う血が、⁽⁵⁾カレン族の家々に仏像を持ち込むことをさまたげ、すぐれて“本物”の仏教徒になるためには、やはり、あとで説明をする *Chakasi* になることが前提のようだ。

一方、山村の *Hiti Topa* に *Dapo* が導入された歴史は、*Hiti Kani* 村に比べるとかなり新しい事である。まへにも述べたように、*Hiti Topa* 村の村人によると、約十年前にシヤン人の行者が、*Chakasi* を広めるためにこの村にやって来た時に、家々に *Dapo* を作ることをすすめたという。そして、行者は *Hiti Kani* 村の場合と同様に、*Dapo* に対して花や水や御飯を毎日捧げるように教えた。だが、現在までのところ、*Hiti Topa* 村の *Dapo* には仏像はおろか、*Hiti Kani* 村で見られるような仏陀の絵や高僧の写真すら飾られていない。*Hiti Topa* 村の山地カレン族は、*Dapo* に供え物をするにより、現世的御利益を期待するか、せいぜいカレン族に“固有な

アニミズムに結びつけて考えるくらいである。⁽⁶⁾ いずれにせよ、この祭壇 *Dapo* に象徴されているように、平地カレン族は山地カレン族に比べると、タイ系平地民の文化に対する傾斜の度合が異なっているように思われる。

ii *Chakasi* 儀礼について 次に、カレン族が「完全な」仏教徒になるために、一つの重要なきっかけを与えると考えられている *Chakasi* 儀礼、もしくは *Sakasi* 儀礼について述べることにしよう。

これまでくり返し説明したように、*Chakasi* 儀礼はカレン族の「家族」の成員を「家神」、*Baha* の支配から解放し、*Ore* 儀礼の桎梏^{しごく}を放棄するのに重用な手段であると考えられる。

Chakasi 儀礼はビルマで発生したといわれる仏教系宗教儀礼であると伝えられる。*Salween* 川西方のビルマ領では、ビルマ人が *Nache* と呼び、カレン族はこれを *Che Che* とよぶ。

平地カレン族の *Hti Kani* 村には、同じ *Mae Sarieng* 郡の北部にある *Mae La* 村から、シャン人の行者⁽⁷⁾がやってきて、*Chakasi* の儀礼をおこなう。なお、この付近の *Mae Tè* 村や *Solu* 村にもカレン族出身の行者がいて、これと同様の儀礼をおこなうといわれている。

Chakasi 儀礼は行者の側から見ると、単なる金儲けに過ぎないといわれているけれども、カレン族にとっては、母系親族集団 *Dopuweh* の複数の成員もしくは一人が、「家神」、*Baha* との関係を断絶し、*Ore* 儀礼にとまら煩^{わづ}わしさから解放されることを意味している。*Chakasi* の儀礼自体はきわめて簡単なものではあるけれども、カレン族の社会・文化変容を考えるうえで、きわめて重要な役割を果たしているように考えられる。その儀礼はだいたい次のようにおこなわれる。

まずその「家」で栽培しているとうがらし、稲、いんげん豆、大豆、とうもろこし、きゅうり、ごまなどの種子を黒焦げになるほど火であぶり、種子の発芽力を止めてしまう。それに儀礼用に殺した鶏でカレー汁を作り、

御飯や干し魚とともに村はずれの特定の枯木の所に持って行く。そこにはいろいろな神々や精霊が住んでいると信じられている。枯木の前では、行者が食物を供えて、「ここにある種子とこの枯木から芽が出て、花咲かぬかぎり、*Bgha*よ、どうかこの家にふたたびもどり給うな」と祈りをあげる。この時に用いる「経典」は、*Chakasi* 儀礼のためだけに書かれたものでなく、ビルマ語の仏教教義書である。また、時には、これがシャン語によって書かれている場合もあるといわれている。このあたりに、*Chakasi* 儀礼が山地民を平地民化しようとしている暗黙の意図がうかがわれる。*Chakasi* 儀礼は、出席者の両手首に糸を巻く *Kichu* (めしくは、*Kisu*) をもって終わるが、時には、両手の親指と人差し指の付け根に、それぞれ一カ所だけ小さな入れ墨をすることもある。

Chakasi 儀礼は、これまで述べてきたように、カレン族のある *Dopuweh* の成員が「家神」*Bgha* との関係を断絶するためにおこなう儀礼である。しかしながら、その断絶は、*Chakasi* 儀礼により、一瞬のうちに実現するものではないようだ。何年かの年月のうちに、じょじょに断絶されてゆくと信じられている。従って、*Chakasi* 儀礼を受けた者でも、その後二代目までの者は年に二回ほど行者に来てもらって、*Kichu* による簡単な儀礼をしてもらわなければならない。しかし、この際には、*Oze* 儀礼とは異なり、*Dopuweh* の全員が家に集合する義務はないし、豚を犠牲にするような多額の出費ともなわれない。さらに、三代目の成員からは完全に「家神」*Bgha* から解放され、この種の儀礼をする必要がなくなる。

なお、山地カレン族の村 *Hiti Topa* でも、十年ほどまえから、シャン人の行者がやって来て、*Chakasi* の儀礼をおこなっているという。この儀礼により、何人かの村人は「家神」*Bgha* から解放されて、*Oze* 儀礼を中止した。調べてみると、*Chakasi* 儀礼の「洗礼」を受けた第一号は、驚くなかれ、*Hiti Topa* 村の伝統的宗教指導者として、*Sapga* の称号を持っている R 老人である。かれはある日、筆者にこっそりと、「*Oze* 儀礼をやめて、

ほんとうにほっとした”と告白したのが印象的であった。このR老の言葉からも、“家神” *Baha* に対する *Ore* 儀礼がいかにカレン族にとって、煩わしく、また重荷になっているかを知るのである。

ところで、このような儀礼をおこなって、*Chakasi*⁽⁸⁾ になった者は、“家神” *Baha* との関係を断絶して、もはや *Ore* 儀礼にわずらわされる必要がなくなる。それにより、当地人だけが自由を享受するだけではない。むしろ、ほかの村人たちや他の民族集団に属する者までもがある種の煩わしさから解放されるのである。すなわち、*Ore* 儀礼をおこなっているあいだは、その家に *Dopruweh* の成員以外は出入りできないとか、外部の者と商取引きをすることができないなど、村における日常生活にいろいろと障害が発生するからである。

また、前述のように、カレン族は *Ore* 儀礼をおこなっているかぎり、北タイ風もしくはシャン風の風俗に完全に同化することはできない。それはかれらが儀礼用につねにカレン族の伝統的服装を用意しておかねばならないからである。通常、カレン族の女性は平坦部に住んでいても、かなりの数の者が、未婚者は貫頭衣風の白い無地のワンピース、既婚者は刺繍をした黒の上衣に、横縞のスカートを着用している。だが、男性の場合には、黒色か濃紺のシャツと半ズボン姿の北タイ風かシャン風の平地民的服装をしていることがおおい。とりわけ、平地カレン族の間においては、この傾向は顕著である。しかしながら、そのようなカレン族の女性はもちろんのこと、男性といえども、*Ore* 儀礼をおこなう際には、どうしてもカレン服を着用しなければならないのである。また、これと平行現象が言語についても存在する。すなわち、*Ore* 儀礼をおこなっている場合は、カレン族が他のいかなる民族集団と混住し、いかなる言語を日常の生活に用いても、カレン語を保持しなければならないのである。それはカレン語が *Ore* 儀礼に不可欠で、これ以外のいかなる言語も儀礼中は使えないからである。この点になると、おなじ重要な儀礼でも、*Talutaphadu* 儀礼のように、“二次的”に発生した儀礼とはきわめて対照的

であるといわなければならぬであらう。

ところで、*Baha* 信仰や *Ore* 儀礼にまつわる慣習としては、これ以外に、食物に関するタブーが存在していることを指摘しておこう。*Chakasi* 儀礼によったり、時にはキリスト教に帰依することによって、カレン族のある者が *Ore* 儀礼集団から脱退した場合には、親子兄弟といえども、その後永久に豚や鶏を含む食物をすべて共餐することができなくなる。

いずれにせよ、*Baha* という「家神」に対する信仰は、あらゆる意味で、カレン族の行動に関する倫理規律の源泉になっていることは間違いない。そして、これはきわめて厳格に守られていたようだ。従って、カレン族は、伝統的にはきわめて「道徳的な」民族集団であると思われていた。以前、タイ国の警察に長年勤務したことのあるデンマーク人の *Seidenfaden* 氏は、「カレン族は性関係については、きわめて道徳的な人々であるし、かれらの間ではどのような犯罪もまれである⁽⁹⁾」と書いている。

それでは、一例として、カレン族の性道徳について述べてみよう。カレン族は、伝統的には姦通をいみ嫌っている。それは「家神」*Baha* に対する重大な犯罪として考えられているからである。たとえば *Marshall* 師によると、「そのような不道徳な行為は *Baha* を刺激して大地にのろいがかかり、作物を枯らし、かつ人々の間に疾病をはやらせる。このようなことが万一発生すると、*Baha* は虎やへびの姿をして、その罪を犯した者や部落の他の住民の *Kla*⁽¹⁰⁾ を破壊するために、*Baha* はえじきを待ち受けるのである。不順な季節や凶作の場合には、長老たちは疑いぶかくなり、時には若者たちをおどかしつづけて、かれらの秘密にしている罪を告白させてしまう。怒れる（神）を慰めるのに通常必要とされている捧げ物は、手もとにあるリストによると、第一に水牛、つぎに牛、最後に鶏と豚などである。家族全員が熱心に祈りながら一堂に会すると、これらの供物は *Baha* が受

理し、かれらを今後の災害から救うかも知れないのである。⁽¹¹⁾「このような理由から、カレン族においては、ふしだらな行為は、昔はきわめてきびしく罰せられたと伝えられている。Andersen 氏の記述するタイ国北部のカレン族の例では、「不正規な恋愛関係にたいして、カレン族は独特で、むしろ思いきった罰則を保有するのをつねとしていた。その関係が明るみになると、男も女も村長の前に引き出される。かれらの前にはまったく同様な小型の丸薬が三個置かれ、めいめいが一個飲むことを求められる。丸薬のうち二個は劇薬が含まれているが、他の一個は無害なものである。それから、二人はいっしょにジャングルへ行かなければならなかった。そしてしばらくすると、村の村長や他の者はどうなったかを知るために、かれらのあとを追う。時には死体が二つ発見される。しかし、もし一人が幸運にも無害な丸薬を選んだとすると、かれもしくはかの女は村に帰り、事件は解決したことになる。これは信頼すべき筋より、一九一二年にあった例であると聞いている……」⁽¹²⁾」

このように、カレン族の伝統社会においては、「家神」*Baha* を倫理規律の源泉として、日常生活がいとままれていたし、現在でも基本的に変わっていないようである。そのために、カレン族は宣教師からはたびたび「たか倫理性」を評価されてきた。それは、今日でも山地カレン族にはある程度妥当なことであるけれども、いまでは姦通などを死罪をもつてのぞむようなことはなくなっているようだ。いわんや、平地カレン族においては、性関係などはかなり乱れ始めている。平地カレン族の古老たちによると、かれらの若い頃には、姦通の罪を犯した者に対しては、「家神」*Baha* のたりを恐れて、村人たちは井戸の水を共用することを断わったという。しかしながら、今日では、そのようなことはまったくおこなわれない。従って、古老たちは村の若い連中を評して、「平地民のようにだらしなくなった」とつぶやくのが常である。

いずれにせよ、カレン族が「家神」*Baha* を信仰し、「*Ore* 儀礼を続けるかぎりには、かれらの行動は外面的にも

内面的にもあらゆる面でいろいろと枠がはめられているのである。とりわけ、この傾向は *Ore Chuko* をおこなう儀礼集団においてきわめて顕著である。

ところで、山村の *Hu Topa* と平地村の *Hu Kani* における各儀礼集団の実態はどのようになっているのであろうか。それは表10に見られるごとくである。すなわち、いちばんオーソドックスな儀礼である *Ore Chuko* の儀礼集団に関係している家族は、山村よりも平地村のほうが九パーセントもおおく、全体の三三パーセントにも及んでいる。しかも、*Ore Pigo* の儀礼集団は、山村では五六パーセント、平地村においては五〇パーセントとあまり差異はない。両村の八〇パーセント以上の「家族」はいぜんとして、「家神」*Bgha* との関係を断絶することができないのである。*Chakasi* 儀礼をすべにおこなって、「家神」*Bgha* から解放されている家族は山村では一二パーセント、平地村では一五パーセントを占めるに過ぎない。このように、調査村のカレン族の大部分は、現在でもなお「家神」*Bgha* の支配を受けていて、社会・文化面における農民化もいまだしの感が深い。いずれにせよ、カレン族のあいだでは、「家神」*Bgha* が社会的凝集力の核としての中心的機能を持ち、*Ore* 儀礼はその強力な文化的支柱としての役割を果たしている。この意味からいって、「家神」*Bgha* したがってまた *Ore* 儀礼は、カレン族の農民化という社会・文化変容の決定的な阻止要因となつてゐることだけは間違いない⁽⁸⁷⁾。

このような *Ore* 儀礼もその機能を十分に発揮していたのは、*long house* がカレン族の間に存在していた頃ではないだろうか。たとえば、*long house* のある家で、「家神」*Bgha* に対する儀礼がおこなわれている場合、家族員でその儀礼集団に入っていないいむ⁽¹⁴⁾などが待ったり、客人が待ったりするのに、*long house* の客間 (*Blaw : Blo*) が役立っていた⁽¹⁴⁾。しかるに、*long house* の解体の後は、村落にこのような「設備」がないために、長時間にわたる *Ore* 儀礼の間は待つてゐる者にはきわめて不便になっている。

表10 山村と平地村における *Oxe* 儀礼

村名	Hti Topa (山村)	Hti Kani (平地村)
Oxe Chuko	6戸 (24%)	16戸 (33%)
Oxe P'go	14戸 (56%)	24戸 (50%)
Chakasi	3戸 (12%)	7戸 (15%)
その他	2戸 (8%)	1戸 (2%)

注1 表2の注と同じ

2 「その他」は Hti Topa 村の場合は戸主が独身なので、その家族は *Bgha* を持たず、いま1戸はカトリックのために *Oxe* 儀礼をおこなわない。また Hti Kani 村の場合はカトリックである。

五八(六三年)以降は、中央政府の国民形成に対する努力がある程度実を結び始め、以前にも増して、司法や行政機構が、Mae Sarieng 地方というような末端の地方でもしだいに整備されるようになった。そのため、Mae Sarieng の町の周辺に散在している村々にも、警察の目が以前より住民の日常生活にも届くようになったといわれる。したがって、カレン族の側から見れば、前よりは官憲の目がいささかむたく感じられるようになったといえる。そのため、豚を犠牲に必要としている *Oxe* 儀礼を、人目につかない早朝におこなうようになったことは

さらに、カレン族もほかの東南アジア諸国における山地民系の住民と同様に、近年とみに外部からの衝撃をつよく受けるようになってきた。そのため、カレン族の農民化が促進されてきたことはいうまでもない。問題を、現在取り扱っている“家族儀礼”の *Oxe* に限定しても、カレン族に対する外界からの影響がつよくなるにしたがって、儀礼自体に多少の変化が現われた。この傾向は、とりわけ平地に住んでいるカレン族の間で顕著に見出すことができる。すなわち、もともとは夜分におこなわれることのおおかつた *Oxe* 儀礼が、最近では早朝におこなわれるようになった。それは外部の者、とりわけ官憲の目を避けるためだといわれる。昔は豚のような家畜を自分の家で屠殺する時には、税金を役所に支払う必要はまったくなかった。しかるに、近年になって、屠殺税が設けられて、豚を屠殺する際には、一頭につき二〇バーツ(約三六〇円)も郡役場に支払わなければならない。そのうえ、Sarit 時代(一九

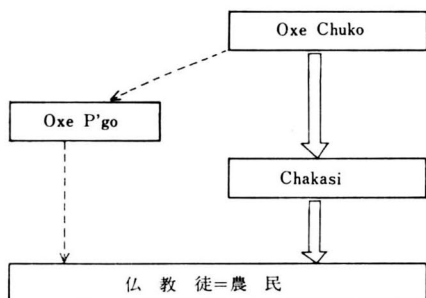


図22 家族儀礼変容の方向

注 矢印の方向は文化変容の方向を示す。また矢印の太さは変容の相対的容易さを示す。

当然といえよう。

筆者が調査した平地カレン族の Hti Kani 村では、これまでに Ore 儀礼のために家畜を密殺することによって、警察に検挙されたり、郡役場に罰金を支払わされたりした例はない。しかしながら、Mae Sarieng の町から半日〜一日行程の所にある Mae Han や Mae Top というようなカレン族の村々でも、すでにこの件で二〜三人の逮捕者がでていると聞いている。そこで、蛇足ではあるが、カレン族の一人に、Ore 儀礼をおこなう際には、なぜ警察の許可をとらないのか尋ねてみた。かれの答えを要約すると、だいたい次の二点になる。その第一は現実的なものである。かれらにとって二〇パーツの屠殺税は大金である。この金額は一人前の男子の三〜四日

分の日当にあたるので、支払うのがつらい。第二の理由は宗教的なものである。すなわち、Ore 儀礼をおこなうことが他にもれると、儀礼の効果が減少してしまうか、またはそれが皆無になるという。

いずれにせよ、Ore 儀礼はカレン族が圧倒的多数である地域とか、外界から「孤立」した環境のもとにおいて成り立つ儀礼である。そのような所では、Bjiza 信仰が、前述のように、カレン族の文化や社会における有力な凝集力の中心として機能する。しかしながら、平坦部にある Hti Kani 村のように、タイ系のような他の民族集団のまっただなかにあり、そのうえ政府の祖先機関のかなり強い影響下にある社会環境の場合には、かれらの伝統的社会・文化のあり方がすでに周囲の環境に不適合をおこしている⁽¹⁵⁾。このように、カレン族社会を取り巻く客観情勢は、

かれらの社会や文化を少しずつ農民社会の方向に押しやっていることだけは確かである。そのために、「家族儀礼」*Ore* などの俗化⁽¹⁶⁾はおそらく不可避なものであろうし、また、社会・文化変容の一種の歯止め役としての機能も低下せざるをえないであろう。

いずれにしても、*Ore* 儀礼における *Ore Chuko*, *Ore Pi'go*⁽¹⁷⁾、そしてさらに *Chakasi* を比較分析してみると内容的には図22に見られるような社会・文化変容の流れを読み取ることができるのである。すなわち、この模式図に見られるように「*Ore Chuko*, *Ore Pi'go*, *Chakasi*」という矢印の方向に向かって、「自由な行為と選択の拡大」、親族組織の弱体化⁽¹⁷⁾、宗教的行事の減少と世俗化⁽¹⁷⁾が進行している。すなわち、Redfield 教授の言う「部族」から「農民」へと、社会・文化的座標の移動を看取することができる。

いずれにせよ、「家神」*Bjha* はカレン族社会における凝集力の核としての機能を果たし、カレン族の社会・文化変容のある種の阻止的役割を演じていると思われる。しかしながら、儀礼自体もしいに、メタモルホーゼして、社会・文化変容の流れにある種の適応をおこないつつあるのを見逃すわけにはゆかない。

(1) Mair (1963) p. 23

(2) 「大きな伝統は学校や寺院で培養されたものである。小さな伝統はそれ自体で機能し、村落社会の文字なき者の生活のなかに息づき続けている。哲学者、神学者、そして文化の伝統は意識的に培養され、また伝承されてゆく。小さな伝統というものは大部分が与件と考えられていて、たいした詮索をされることも、こまかい手入れも改良もされることはない。」[Redfield (1956) pp. 41-42]

しかしながら、「小さな伝統の一部は、大きな伝統とおなじように広範囲に分布しているように思われる。そして、疑いなく、文字に書かれた伝統よりも、はるかに多数の人間によって知り尽くされ、おこなわれているのである。「小さい伝統」と、地方的な「伝統」とを混同してはならない。なぜならば、「小さい伝統」はしばしば全国的に分布しているのだらう。」[Bereman (1961) p. 339]

(3) これはサンズクリット語の *Avatar* から由来したもので、「平地カレン族のこの発想自体がたいへん仏教的であるとい

- えよう。
- (4) 花の家の意味、別名を *Meteko* と言い、これは葉のある所という意味。
 - (5) おそろく仏教における殺生戒の一種の *parochialization* と思われる。
 - (6) 飯島 (1965) p. 14
 - (7) *Pusala*, またはカレン風のなまりでは *Pusasa* と言う。
 - (8) 儀礼の名前も、その儀礼によって、洗礼²を受けた者も同じ呼称を用いている。
 - (9) *Seidenfaden* (1963) p. 119
 - (10) “生命体”を指す。
 - (11) *Marshall* (1922) p. 238
 - (12) *Andersen* (1923) pp. 56-57
 - (13) 飯島 (1967) p. 91 参照。
 - (14) *Marshall* (1922) p. 258
 - (15) 飯島 (1967) p. 90
 - (16) *Redfield* (1941) pp. 338-339 参照。
 - (17) *Redfield* (1934) pp. 57-59, *Redfield* (1941) pp. 338-339

B *Hu K'cha Ko K'cha* の神における社会・文化的性格の変化と村落儀礼 *Talutaphadu* の発生

ここでは、カレン族の伝統的信仰における、もっとも重要な神である *Hu K'cha Ko K'cha* が、かれらの社会・文化変容のなかで、どのように性格を変え、また、それにともなって、村落儀礼 *Talutaphadu* がどのような状況のもとに発生するかについて説明することにしよう。

この問題を解くかぎとしては、*Talutaphadu* 儀礼が山地カレン族の村落にはまったく存在せず、より平地民化³もしくは農民化の進んでいると考えられている平地カレン族の村々で一般的に行なわれている事実に注目したい。この儀礼を、たんに、北タイ人やシャン人のようなタイ系平地民がおこなっている *Liang Phu Chaoti Chaodin*

Chaoniang の儀礼をただ模倣したのであると理解してしまえばそれまでである。けれども、なぜカレン族が北タイ人やシャン人の宗教儀礼のなかで、物心ともかなりの負担になるにもかかわらず、とくにこの儀礼を選択的に摂取したかということをわれわれは吟味しなければならないであろう。

Talutaphadu 儀礼は、カレン族における“部族的”社会編成が解体の方向に向かっている段階で登場してきたものと理解することができよう。すなわち、すでに述べてきたように、水田農業導入以来カレン族の“部族的”な社会や文化に急速に現われたした組織破壊のきざしを“村神”としての *Hu K'cha Ko K'cha* に対しておこなう *Talutaphadu* 儀礼によって、いわばそれを文化的な^たがとして、かれらの統一主体としての村落社会を地縁集団として再編成しているのではないだろうか。この点、平地民の北タイ人やシャン人の場合は、儀礼の性格が“一歩進んで”もっと明確である。すなわち、かれらの村においては、北タイ人の *Chaoti Chaodin Chaoniang*、シャン人の *Saoti Saodin Saoniang* ははっきりとした神像を持ち、かつ、木造のしっかりした祠すらそなえている。村落の移動に当たっては、その“村神”の神像は運び出され、新しい村に移されて、安置されるという。さて、話を本稿の主題であるカレン族に戻すと、*Talutaphadu* 儀礼が自己完結性の高く、同質的な山地カレン族の村落には存在しないけれど、それと対照的な平地カレン族の村落において発生した理由は、次のように推量される。すなわち、*Talutaphadu* 儀礼は、平地カレン族の村落において、通婚圏の拡大、ならびに他の民族集団との通婚などによってもたらされた“異質的要素”を、かれらの社会や文化に包摂し、融合し、みずからの社会や文化の変容を支えるてこととしているのではないであらうか。平地村 *Hu Kani* においては、カレン族以外の民族集団に属する者でも、この儀礼に毎年連続的に参加することによって、“カレン族になる”ことも不可能ではないのである。このように、*Talutaphadu* 儀礼は、“カレン族がかれらの社会に“異物”を内含することによ

つて、新しい社会的編成をおこなう場合、きわめて重要、かつ積極的な役割を果たしていることが推測される。いずれにせよ、平地カレン族の村落においては、年に一度、水田の耕作を開始するに当たって、村の男性全員が、すでに“村神”とほとんど同じような機能を持つようになっていゝ *Hi K'cha Ko K'cha* の神の祠ほこらの前に集合し、祈禱をおこない、村人の加護を祈る。その際には、村人は *Hi K'cha Ko K'cha* の神と共餐することによつて、村の成員間の連帯性を確認し、さらに、その紐帯を強化しているであろう。もし、そのような“努力”をおこたれば、異質性の増大した平地カレン族の社会は、事実上“空中分解”してしまふ恐れがあるからではなからうか。スゴー・カレン族よりも平地文化に親和力を持つポー・カレン族において、*Talutaphadu* 儀礼が発達していることから、上述の推論が裏付けられる。

このような訳で、*Talutaphadu* 儀礼は、カレン族の社会・文化変容のなかで、かれらの社会・文化的組織を“部族的”なものから“農民的”なものへと再編成してゆく媒介として、きわめて重要な機能を果たしていることだけは間違いない。すなわち、平地カレン族の村落においては、山地カレン族の血縁を基礎とする伝統的村落結合の社会的性格を一步進めて、*Talutaphadu* 儀礼を媒介とすることによって、すぐれて、別の種類のより広い地域組織に組み入れられる、いわば足ならしをおこなっているのではないかと考えられるのである。そのような社会・文化変容の底流は、果たして、平坦部における河川の水を利用した、広範囲にわたる灌漑、従つてまた、治水の問題とはまったく無関係であらうか。

C Oxe 儀礼と *Talutaphadu* 儀礼の関係

前述のごとく、“家族儀礼”の Oxe は、“カレン族の社会・文化変容のなかで、“量的”には急激な衰退は見

られない。たとえば、山地カレン族の村落と平地カレン族の村落を比較した場合、*Ore Chuko* 儀礼、*Ore P'go* 儀礼、それに *Chakasi* 儀礼などの儀礼集団の割合はあまり差異がないことが分かる。しかしながら、“質的”な面から見ると、前者と後者の *Ore* 儀礼のあり方に相違を認めないわけにはゆかない。すなわち、平地村の場合には、“同じ”家族儀礼“の *Ore Chuko* をおこなう時にでも、オーソドックスな *Chuko Ora* をするよりも、比較的簡略化した *Chuko Goma* の儀礼をおこなうことが多い。

このように、カレン族の社会・文化変容を全体的に眺めると、*Chakasi* 儀礼の導入とかキリスト教化、さらに今日では仏教化などの影響もあって、*Ore* 儀礼の俗化もしくは衰退現象が観察されよう。

このようなカレン族の社会・文化の流れのなかで、*Ore* 儀礼の衰退・俗化傾向と丁度対照的に、平地カレン族の村落においては、“村落儀礼が”発生”し、発達してきたことは注目に値する。

まえにも触れたように、*Talutaphadu* 儀礼が対象にしている神 *Hhi K'cha Ko K'cha* は、筆者の印象では、山地カレン族と平地カレン族の間で、かなり、社会・文化的性格が異なっているように思われる。山地カレン族の間においては、*Hhi K'cha Ko K'cha* の神は、“ほとんど”村神”としての性格は所有していないように考えられる。むしろ、この神はあまねく自然界に存在しそれを支配している超自然神であるといえよう。

しかるに、平地カレン族の間では、*Hhi K'cha Ko K'cha* の神は、自然界をエーテルのようにただよっているとは理解されていない。この神は、北タイ人の伝説にもある“金の山”*Doi Khan* にいつも住んでいて、必要に応じて、村にある祠ほこら (*Talutaphadu-Da*) をおとすれて、村や村人の加護に当たるといふ。

このように、平地カレン族の村落においては、今日においてさえ、*Hhi K'cha Ko K'cha* の神が“非常勤”の“村神”に過ぎず、一種の過渡的現象を示している。だが、平地カレン族の社会・文化変容が進むと、この“非

常勤“の”村神”は、やがて、北タイ人の Chaoti Chadin Chaomüang やシャーン人の Saoti Saodin Saomüang のような村神に “昇格”していくように思われる。

このような過程は、わが国のいろいろな地方で見出される「祖霊の後退と勧請神の進出」⁽¹⁾と類似の現象ではないかと思われる。この場合には、先祖霊のように家神的性格の強い神が後退すると、より個人的、外来的、公的なる神霊が表面に強く出て、やがてそれが独占の形を取ってしだいに祖霊祭的感觉を失うに至らしめるのである。村氏神のなかには、こうした変化の過程をたどって神社化したものもすくなくなかったと推定される。

わが国の農村は、すでに古くから都市となんらかの關係を持つ農民社会であったので、筆者が本書で問題としているカレン族における “部族社会”とは差異がある。従って、宗教の性格においても、“発展段階”が異なっていることは当然である。しかしながら、前述のような信仰上の変化はカレン族における “家神”の後退傾向と “村神”の進出という現象を知るうえできわめて示唆に富んでいるので、この問題に関する堀一郎教授の分析を引用することにしよう。すなわち、わが国各地で採集された諸例は、「各種の変容の諸段階において採集されたものであるが、しかしその中核をなす同族的信仰は、わが国の農村社会の基盤構造に相応しており、かつその信仰の中心に、先祖、あるいは祖霊、死者あるいは死霊、祖先との関わり合いにおける神霊等を奉祀して来ていることが知られる。そしてここに未分化な漠然とした靈魂から、次第にその祭祀対象が明確化し、神霊化すると共に複合化しつつ存在して来た幾つかの段階が示されている。農村社会の信仰がその基盤社会としての同族集団に依存しつつ、その経済文化ないし生活の向上発展による同族的アウトタルキーの崩壊に伴って、その信仰を外方に拡大しつつも、なおその旧態を種々な形で歪曲複合しつつ保存せしめて来ていることは、農村がなおそれ自身一つの生活的アウトタルキー機能を存しているからに外ならない。しかし、ひとたびそのアウトタルキーが内部的のみ

ならず外方的に脅かされて来ると、そこに外部からの新文化、新宗教の伝播浸潤を促し、外来者の来訪移住につれて次第に外部を自己の信仰に習合し、漠然たる類型的靈質が個別化され、解説され、いわゆる分化過程をたどるとともに、部族神は他姓他族を含む部落神地域神へと移行し、重層的な信仰圏を形成して行った。その各種段階における同族信仰変化の諸形態が今日雑然と混在していることからして、素朴なる同族靈が同族祖神となり、さらに個性の強い御靈や外部神と習合し、それらの影響下に自らを個別化して、今日の村の神社の前段階をなして来たことが知られるのである。しかも他面、部族神が高く清まって部落神となり、一郷の産土神となった場合、そのかつてのプロパーであった同族が、かえって神との神縁関係の意識を稀薄化して、別に同族だけの祠を設け祭祀を行なっている事實は、同族信仰の機能とその限界性を示すものであり、信仰がその信仰者の生活形態と生活基盤に深くかかわり合うものであることを示していると言えよう。⁽²⁾

以上述べたように、わが国においては同族神が同族祖神に変化し、さらに個性のつよい御靈や外部神と習合することによって、しだいに村神へと“昇格”していったのである。一方、カレン族の場合は、まえにも触れたように、双系的社会組織を持っているために、同族とか氏族の発達があまりみられなかった。従って、当然のことながら、同族神や氏神は存在していない。しかしながら、カレン族の社会においては、家族が最小かつ最大の自律集団であるので、それがきわめて重要な社会的機能を果たしている。それ故、“家神” *Baya* は、わが国における同族神や氏神とは、社会的に“相同”であるといっても過言ではないであろう。

このような理由から、カレン族における、“家神” *Baya* 信仰の停滞や俗化の傾向と *Hii K'cha Ko K'cha* の神の村神的性格への変化は、機能的に見ると、わが国における氏神や同族神の村神への“昇格”の過程と平行現象であるといえよう。

これら諸神の属性の変化の背景には、カレン族の村落における社会的性格の変化が存在していると考えられる。すなわち、カレン族の山村においては、一般的にいうと、Hi Topa 村に見られるように、編成の原理に「血縁」が優先している。しかるに、平地カレン族の村 Hi Kani におけるように、「血縁原理」はしだいに「地縁原理」によって蚕食されつつあるようだ。

(1) 堀 (1968) pp. 143~44

(2) 堀 (1968) pp. 164~65 「文脈を変えない程度に、できるだけ当用漢字と新かな、使いに近づけた。」

第三節 “大きい伝統” との接触

“大きな伝統” とは、すでに述べたように寺院や学校などで、“人工的” に培養され、洗練されたもので、“小さい伝統” のように、村落社会において昔から引きつがれてきた文字に書かれていない伝統ときわめて対照的なものである。すなわち、カレン族にとっては、平地に住んでいるタイ系住民が信仰している小乗仏教が、まさに“大きな伝統” の代表といえよう。

これまでに記述してきたように、カレン族の宗教の基礎になっているものは、いわゆるアニミズムである。ところが、まえにも触れたように、近年カレン族の間には、小乗仏教に代表されている“大きな伝統” の影響がひたひたとうち寄せてきている。たとえば、Hi Topa 村のような山岳地帯にある僻村にまで、前述の Pusa (あるいは Pukacha) と呼ばれる平地民系の行者がやって来て、Chakasi のような儀礼をおこなうだけでなく、時には、村人の一部を積極的に Doi Khun⁽¹⁾ という所にある仏教寺院に連れて行ったりしていることは、すでに述べ

たとおりである。この *Pusasa* の直接的意図は明確ではないけれども、どうやら *Doi Khun* に仏塔を作る運動の一環のようであった。*Doi Khun* に行った *Hi Topa* 村のカレン族たちはなにがしかの金を出しあって、*花やろうそく* を買い、寺院に捧げてきたという。

このように、山地カレン族の間にもじわじわと仏教の影響がおよび、*Dapo* と呼ばれる「仏壇」の原型が導入されたのである。だが、この種のカレン族における仏教化の傾向は、当然のことながら、平地文化から「隔絶」されている山地カレン族よりも、そのまったなかで生活している平地カレン族の間で顕著である。たとえば、その進んだ例としては、一部のポー・カレン族のように平地民と混住して、ある程度「仏教徒」になりきっているものもある。もっとも、そこまで極端ではないにせよ、*Hi Kani* 村やその西隣りにある *Mae Salap* のように、仏塔のあるカレン族の村落も存在している。さらに *Hi Kani* 村から半日ほど北に行った *Mae Han* 村のように、寺院 (*Wat*) すら持っているカレン族の村もある。ここでは、*Hi Kani* 村のカレン族の信仰生活に焦点をあてることにより、このような仏教化の過程を追って、カレン族の社会・文化変容の分析を進めることにしよう。すでに触れたように *Hi Kani* 村の平地カレン族の場合、すでに約一世紀にわたってシャン系もしくは北タイ系の仏教徒のなかで暮らしてきた。しかし「家神」*Bgha* の信仰などもあって、「本当の」仏教徒になることができなかったのである。だが、平地カレン族がタイ系の平地文化との接触を通して、ある程度仏教化したことも事実である。すなわち、かれらが「大きい儀礼」という *Kaophansa* (入安居) とか *Okphansa* (出安居)、さらには *Songkran* (灌水祭) や *Loy Kraton* のような仏教ならびにそれにかかわりあいのある重要儀礼の時には、平地民のように寺院におもむき、仏教儀礼にも参加する。しかしながら、平地カレン族とて、「仏教徒」としての限界は存在している。たとえば、平地民の「小さな仏教儀礼」の場合には、シャン人や北タイ人のように仏教寺



写真28 平地カレン族は主要な仏教
儀礼には積極的に参加する

院に行って礼拝したり、また自分の家で祭りをしたりすることはない。

平地カレン族がおこなう仏教系の重要儀礼のうち、筆者が直接観察できたのは、*Songkran* 祭り、俗にいう「水祭り」である。平地カレン族の宗教生活の一側面を知るために、それについて、すこし立ち入って述べることにしよう。

タイ国においては、乾季が終りを告げようとする頃になると、毎年 *Songkran* の祭りがやってくる。なかでもとりわけ北部地方においては、四月中旬にこの水祭りを盛大に祝うのである。

Songkran の祭りは、元来仏教徒が春分を祝うタイ国の旧正月であり、ビルマにおいてもおこなわれている有名な水祭りと同系統のものであるといわれている。この日は、仏像、僧侶、両親、長老などに、敬意と祝福のしるしとして、水をかけるしきたりがある。タイ国では、国王も宮中でみそぎを受けられ、民衆は町に出て水をか

けあうという習慣が古くからおこなわれてきた。

しかし、ひと頃 Bangkok ではその慣行が過熱しすぎて、首府としての機能が停滞したり、また多数の居留外国人にも迷惑をかけるという理由で、現在は禁止され、あまり派手にはおこなわれていない。しかしながら、北部地方においては、この伝統は根強く残っており、その地方の中心である古都 Chiangmai においては、いまなおきわめてさかんである。だが Chiangmai における *Song-*



写真29 仏教の祭に着飾るカレン族の娘

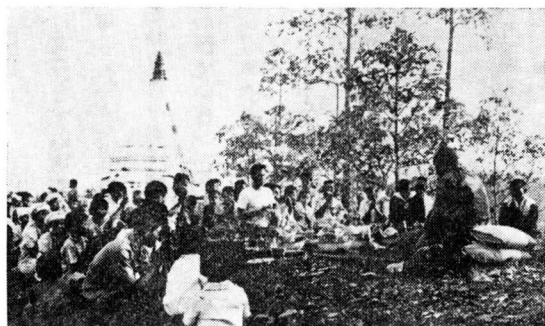


写真30 平地カレン族による水祭りの儀礼。隣村の寺院から僧侶を招いておこなう



写真31 平地カレン族の水祭り。水をかけあう
無礼講は果てしなく続く

bran は、近年になって、観光化してしまい、多分に民衆の祭りとは質を異にってしまった。

ところで、多分にショー化してしまった *Chiengmai* における *Songkran* にくらべて、田舎の水祭りは、寺院や道端で素朴ながらなかなか熱狂的に祝われる。今日の *Chiengmai* では、水祭りの期間を四月一三日から五日の三日間に限定するとか、日没後の水のかけあいは禁止するとか、人々がほどほどに *Songkran* を「楽しむ」ように企画されている。すなわち、*Redfield* 教授が述べているように、⁽²⁾「聖日から休日、(from holy day to holiday) へと変わったのである。だが、一步農村地帯に入ると、コントロールされない本来の *Songkran* が残っている。そこでは、祭りの期間は、天下晴れての無礼講がくりひろげられる。

Mae Sarieng の谷では、*Chiengmai* の *Songkran* に先立つ数日前の四月一〇日頃になると、田舎の子供たちはもうじつとしていられない。バケツに水を入れたり、ビニール袋に水をいっぱい詰めて、道路わきに身をひそめる。そこにやって来るものは、人といわず車といわず、道路を通りぬけるあらゆるものがかれらのえじきになって、しこたま水をあびせられてしまう。やがて四月の中旬になると、大人も参加して、祭りの楽しい混乱が続く。農村の水祭りは *Chiengmai* とは異なり、早朝から夜半に及ぶ。

ところが、北タイ系の住民の *Songkran* に輪をかけたのが、*Hiti Kani* 村の平地カレン族の水祭りである。前にも述べたように、カレン族は伝統的にはアニミズムを信仰している。仏教の影響のほとんどない山地カレン族の村落においては、*Hiti Topa* 村をはじめとして、*Mae Ho* や *Mae Et Ki* 村のように *Songkran* をまったくおこなっていない。しかし、平地カレン族の間では、シャン系やタイ系の平地民の間以上に派手な水祭りが見られる。もっとも、平地カレン族といっても、たいていの場合には「本当の」仏教徒もしくは平地民になりきっていないので、かれらの *Songkran* に対する考え方にはいささか頼りないところがある。たとえば、水祭りの三日

まえになっても、Hi Kani 村のほとんどの住民が正確にいつから Songkran が始まるか知らなかった。もちろん、祭りの宗教的意義をほんとうに知る村人はまったくいない。だが、このように呑気な村人たちも四月二―三日になると、Songkran の中心になる儀式のために、準備を開始する。たとえば、Hi Kani 村の裏山にある仏塔を飾るのぼりなどが準備される。

周囲に住んでいる北タイ人やチャン人が祝う Songkran の祭りに遅れること三日目の四月一六日に、待ちに待った水祭りがやって来る。もっとも、子供たちは「本当の Songkran の祭りが待ちきれずに、すでに数日前から、村に来る人に片っぱしから水をあびせて喜んでいた。

四月一六日の午後、村人はいっせいに部落を出発して、西側の村はずれ一キロメートルほど離れた小高い丘にある仏塔に向かう。老若男女はそこに到着すると、仏塔に向かって、ひざまずき、タイ風に三拝して礼拝をする。さらに、一行はめいめい玉串状になった Sue-bok という木の葉を仏塔に捧げる。やがて太鼓やかねを打ち鳴らしながら、若い男の一団がやって来ると、村人はそのあとにつづいて、仏教賛歌を歌いながら、仏塔のまわりを何回となく回わる。

Hi Kani 村にはお寺がないので、村自体の僧侶 (Tuchao) や寺の世話役 (Achun) がいない。そのため、南隣の北タイ人の村 Tonglem から、かれらを招く。カレン族はこのようにして、タイ系の平地民のつくっている地域組織にくり入れられてゆくのであろうか。太陽がビルマ国境の山並に傾いた頃、僧侶たちの一行は Hi Kani 村の仏塔の所に到着する。その頃になると、村人のカレン族は、仏塔のまわりにろうそくをたて、火をつける。僧侶は仏塔の北側にござをひき、枕にもたれかかって座る。そうすると、村人は仏塔のまわりに置いてあった捧げ物を僧侶の前に供え、礼拝をする。かくして、寺の世話役により読経の口火が切られる。つづいて、僧侶もそ

れに唱和し、読経が二〜三回くりかえされる。やがて、僧侶は立ち上がり、仏塔に向かって聖水をかけ、続いて、村人たちもそれにならう。それから、仏塔には村人が作ってきたのぼりを立て、出席者一同は仏塔に水をかけ、口々にはやしたてる。かくして、儀礼は終わり、村人は家路につく。

このようにして、仏塔の丘における仏教儀礼が終わると、カレン族にも本格的な水祭りがやってくる。誰かまわず、人かまわずの水かけの無礼講が数日続く。かくして、*Songkran* の祭りが終わると、このあたりの住民は雨季の到来と農繁期を待つばかりである。

ところで、このような祭りが進行している最中に、カレン族の社会・文化変容を考える上で、きわめて注目すべき行事がおこなわれる。それはカレン語では *Puji Ko* といひ、一般的には北タイ語で、*Dam Hua* という行事である。これは *Hti Kani* 村の若者全員が他村に出向き、その寺院や男女の老人たちにココナツやバナナを捧げ、敬意を表するならわしである。また、他村の若者もござって *Hti Kani* 村に *Dam Hua* にやってくる。

Dam Hua を交換しあう村々がいろいろな民族集団にわたっていることは興味深い。すなわち、カレン族の村の *Hti Kani*, *Mae Han*, *Mae Salap*, *Ban Pamat*, *Ban Luang*、それに北タイ人の村 *Tonglem*, *Takam*, *Suphan*、カレン族と北タイ人が混住している *Ban Pon* などの諸村の間でおこなわれている。

以上のように、カレン族は *Songkran* というような仏教的儀礼とそれともなう慣行を採用することによって、仏教という「大きな伝統」に接触し、カレン族の社会や文化をより農民型の類型に押しやっているように思われる。

また、この水祭りにともなう *Dam Hua* という慣行は、*Hti Kani* 村のカレン族を村落という限定された血縁組織や地縁組織の壁を乗り越えさせていることは注目に値する。*Marshall* 師も指摘し、筆者自身も確認してい

るように、カレン族は、元来村落以上の社会的凝集力を持ち合わせるものがほとんどない。その意味で、*Dam Hwa* によつて、*Hü Kani* 村の村人たちの形成している社会集団が、より広い地域社会にくり込まれ始めていることは興味深い。そののみか、すぐれて、カレン族という民族集団の壁すらも乗り越えさせていることを忘れてはならない。このようにして、カレン族は仏教文明を摂取してゆく過程で、その変化を宗教上にとどめるだけではなく、地域組織のうえからも、農民的類型へ向かつて、社会・文化的座標を移動させているのである。ちなみに付け加えると、*Morris Opler* 教授が指摘するように、「農民は都市にだけ結びつけられているのではなく、他の農民の村にも同様に結びつけられている。社会的、宗教的、経済的ネットワークを通して、かれらは近隣の村落の人々に密接な関係を維持しているのである。それ故、個々の農民の村は事実上より広い農村の統一体の一部なのである。」⁽⁴⁾

ところで、カレン族の仏教という「大きな伝統」に対する理解の程度、すなわち換言すると、その吸収・摂取の程度について触れなければならぬであろう。筆者は、*Hü Kani* 村の平地カレン族に、仏陀を示す北タイ語の *Pa Chao* はなんであるかと尋ねてみた。ところが、村の青年、壮年、老年の男女のほとんど全員がためらいもなく、「*Pa Chao* とは *Yurua* の神のことである」と答えた。*Yurua* の神とはカレン族のアニミズムのなかの最高神なのである。このように、カレン族の「大きな伝統」の摂取・吸収の程度はきわめて表面的で、まだかれらの文化の構造的変化に及んでいないように思われる。このように、文字を媒介とする方法によつて、本格的に「大きな伝統」を吸収したことのないカレン族の仏教に対する理解の水準はきわめて低く、かれらがオーソドックスな仏教徒になり、外界との接触をより緊密に持つようになって、*Pen Khon Tai* にはおおくの年月が必要となることであろう。

なお、仏教が、村落生活をひろく外界と結合するうえで重要な機能を持っていることは、とりわけ農民社会においては顕著なことである。この点については、すでに仏教徒であり、また「農民」であるタイ国東北部のラオ人 (the Lao) の村について、S. J. Tambiah 博士が指摘しているので、ちなみに引用することにしよう。すなわち「ある特定の地域の諸村落においては、たとえば、実際におこなわれている結婚とか親族の拡がりなどで計られるように、相互の社会的接触は半径十余キロメートルに限られている。しかも、村落外との通婚はきわめて少ない。接触がもっとも広範囲におこなわれていたのは宗教的なもので、近隣の村落はそれに参加したり、また村の寺院でおこなわれた仏教の儀礼や祭りにおたがい出席していた。仏教が社会的相互関係のもっとも広範囲なネットワークと地域文化の認識の焦点であるという事実は、文字を使う伝統に対するわれわれの理解にとって、きわめて重要なことである。なぜならば、どのようにありふれた大きさの村落においても寺は存在している。すなわち、それは宗教的に必要であると同時に、社会的にも必要であるからだ。」⁽⁵⁾「農民」村落に関するこのような記述からも分かるように、「大きな伝統」が「部族的」社会や文化の農民化に果たす役割はきわめて重要である。これと関連した問題については、第六章と第七章でさらに触れることにしよう。

(1) Doi とは北タイ語で山という意味。

(2) Redfield (1941) pp. 270-302

(3) Marshall (1922) p. 127

(4) Potter *et al.* ed. (1967) p. 13

(5) Tambiah (1968) p. 87

伝統的には、部族的“文化を保持してきたカレン族の社会も、タイ系平地民が信仰している小乗仏教に代表されている。大きな伝統“の洗礼を受けるようになる。平地民系行者がカレン族の間でおこなっている *Chakasi* 儀礼などは、その露払いの役目を果たしていると考えられる。

いうまでもなく、このような仏教化の傾向は、平地民文化と“隔絶“されている山地カレン族よりも、平地カレン族の間において顕著である。もっとも、*Hti Kani* 村の平地カレン族にあっても、“完全な“仏教徒になりきった訳ではない。この地方で、“大きい儀礼“と呼ばれる仏教の重要儀礼には出席するけれども、小さな仏教儀礼はほとんどおこなっていない。

平地カレン族の仏教化の実態を知るために、ここでは筆者が直接観察することのできた水祭り (*Songbrān*) について要約する。

水祭りは、タイ系平地民とは日付けこそは若干ずれたけれども、ほとんど同様に祝われる。祭りの当日は、*Hti Kani* 村の裏山にある仏塔に集合して、盛大な祭りがおこなわれる。村には僧坊や寺院がないので、隣の北タイ人村 *Tonglem* から、北タイ人の僧侶や寺の世話役などが招かれる。

仏塔における宗教儀礼が終了すると、タイ系平地民と同様に、おたがいに水をかけあう水祭りが数日続く。この過程で、カレン族の社会・文化変容を考えるうえで、きわめて重要な行事がおこなわれる。それはカレン語での過程で、*Pagi Ko* とくく、北タイ語では *Dam Hua* とくく。これは、*Hti Kani* 村を含む近隣のカレン族の村落五ヵ村

北タイ人の村三カ村、両者が混住している村一カ村の間で、若者同志が他村におもむき、老人たちに手みやげを持って、敬意を表するのである。

カレン族は伝統的には村落以上の社会的凝集力をほとんど持っていないが、*Dam Hua* によって、村人の形成している社会集団が、より広い地域社会にくり込まれ始めているのである。そのみか、すぐれて、民族集団の壁すらも乗り越えているのである。ここに至ると、かれらは「近隣の村落の人々に密接な関係を維持している」農民的特徴すら持つようになっていく。

第六章 国民形成による社会・文化変容の促進

—教育と行政の影響—

第五章においては、おもにカレン族の“自生的”ならびに“土着的”な社会・文化変容について述べてきた。従って、本章においては、カレン族の社会や文化に対する外部からの“指導された”社会・文化変容 (directed socio-cultural change) について記述することにしよう。

第一節 内務省による Tribal Research Centre の設立と

山地民に対する仏教の布教活動

A Tribal Research Centre の設立

これまでも述べてきたように、カレン族の周辺に見られるエコロジーの変化、市場経済やコミュニケーションの発達、かれらの伝統社会や文化をいまや根本から揺り動かさそうとしている。しかしながら、行政の面から見ると、カレン族はあまりこのような急激な変化の経験を持たなかったといえよう。そののみか、カレン族自身も積極的に外界との交渉を持つとしなかった。

Bangkok のタイ国中央政府といえども、つい最近までは、カレン族のみならず、山地民全体に組織的な接触工作をおこなったわけではなかった。このような事情について、タイ国におけるカレン族の研究をおこなったこ



写真32 Chiangmai 大学の一隅に設立された Tribal Research Centre

とある Truxton 氏は、次のように述べている。タイ国政府の「山地民としての」カレン族に対する行政の伝統的「政策」はこれまでで「きるだけ僅少にし、かれらに対してなるべく責任をおわずに接触したり、働きかけることにあった。一般的に、タイ国政府の、そのような非タイ系民族集団に関する主要な関心は、かれらに価値ある国民として興味を持つよりも、ある一定の領域に対する、従ってまた、潜在的な自然資源に対する、多年にわたる権利の正統性を維持することである。たしかに、これまでは支配することと介入することに関しては、わずかに最小限のこころみがなされただけであった。」

タイ人の行政官たちはかれら自身で、カレン族地帯をおとずれることはほとんどない。そして、かれらは、当該地域における、村側と郡役場支所の役人の側で相互に受け入れられたあいまいな方法で任命されたカレン族の首長にほとんど完全に頼りきっている。

これら首長は行政の地方における中心地に出向くことはあまりなく、せいぜいその支所か地方役場まで行って、報告したり、納税の支払いをしたり、苦情や争いごとを申し立てて行政的考慮をあおいだりする程度である。また、行政的決定などを村に持ち帰ったりする。」⁽¹⁾

一方、タイ国における山地民の大部分の者と同様に、「カレン族の

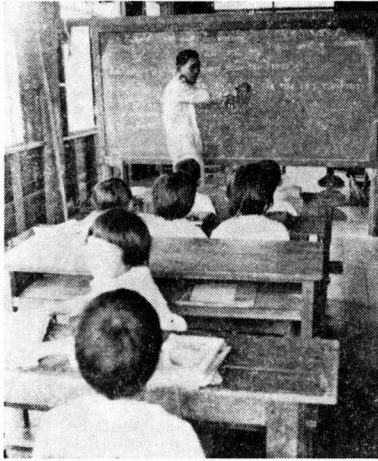


写真34 平地カレン族の村 Hti
Kaniの小学校。字を習う
ことはむずかしいことだ！

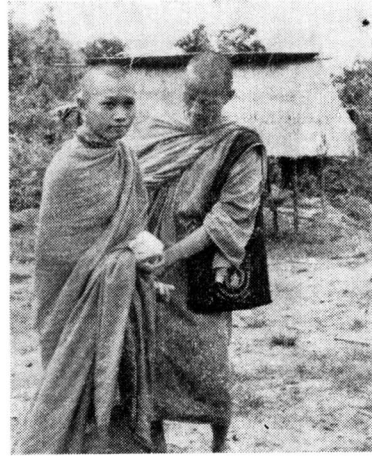


写真33 仏門に入ったカレン族の少年
の着付けを手伝うタイ人の僧侶

多くは、もし政府が放置しておいてくれるならば、きわめて満足していることを認めなければならない。かれらは、たしかに過大な行政的支配を要求しないし、また、初等教育、医療、通信、警察による保護というような、タイ国における近代国家の政府による、明確な社会的利益さえも強く望んではいない。⁽²⁾

ところが、第二次世界大戦を契機として、東南アジア諸国においては、住民の間で国民的自覚がうながされ、ナシヨナリズムが急速に台頭するようになる。それにもなう各国政府の国民形成に関する努力を過小評価するわけにはゆかなくなった。これについては、タイ国の山地民対策もその例外ではない。

タイ国の場合は、本格的な山地民対策の手初めとして、一九五八年一二月一九日に政令第三七号が発表された。それにより、麻薬の原料になるけし栽培が全面的に禁止されるとともに、山地民問題解決は緊急を要することが強調された。さらに、一九五九年は公共福祉局が国内植民計画を山地民地域にまで拡張した。それにとまじり、Chiangmai

県、Chengrai 県、Petchabun 県、Tak 県、などに一カ所ずつ、計四カ所に山地民の福祉施設として *Nikhom* が設立された。

一九六四年には、内務省公共福祉局植民部 (Land Settlement Bureau, Department of Public Welfare, Ministry of Interior) に山地民課 (Hill Tribe Division) が新設された。初代の課長には、Cornell 大学で農村社会学を専攻した Prasit Dhitsavath 氏が就任した。

この山地民対策の主眼は次の二点であるといわれている。⁽³⁾

- (1) 分散して住んでいる山地民を説得して、計画地域に移住させて、定着化を計る。
- (2) 家畜の改良、多年性作物の栽培、ならびに家内工業の育成を計るとともに、山地民に対する流通機構の組織化、さらには計画地域に移住してきた者の健康と教育の増進を計る。

以上のような目的で発足した *Nikhom* ⁽⁴⁾ も対象となっている民族集団の資質やエコロジーの相違などによって、その性質に多少の差異が見られた。たとえば、Chiangmai 県の Doi Chengdao の *Nikhom* はラフ族やミャオ族に茶栽培の普及をした。それというのは、その土地に以前から、茶のプランテーションや茶工場があったからである。Chengrai 県の Mon Saenjai 地方においては、ヤオ族やアカ族に対して、陸稲などの裏作に小麦を導入する試みがおこなわれた。Tak 県の Doi Mussur 地方では、ラフ族や若干のミャオ族に対して、育牛を中心にした畜産の指導がおこなわれた。また、Petchabun 県の Pulomolo 地方では、ミャオ族に対して、多年性の作物を中心に指導がおこなわれた。

このように、*Nikhom* の性質の地域差はおおきいけれども、共通した問題の解決にも努力が払われた。たとえ

ば、*Nihon* までには平野部から道路が建設されたばかりではない、学校や売店も設立された。

しかしながら、このような計画の難点は、なによりも財政的困難さと社会的困難さがともなっていることを指摘しておく。国連調査団は次のように述べている。

「財政上の困難さは、山岳地帯の広範な地域にわたって道路を建設する多額の出費にある。地形はけわしく、一部では絶壁をなしている。もし、道路が未舗装であるならば、乾季においてさえ、その維持には多量の労働を必要としているし、また雨季においては、ほとんど通行不可能である。その道路も今日ではセツルメントのある地域にいる山地民には、あまり経済的価値がないように思われる。なぜならば、かれら自身は車の付いた輸送手段もないし私営のバスやトラックは通常そのような地域にはやってこない。しかも、役所の車両の数には限界があり、しばしば少数の人のためにいつも使われているだけである。

事実、山岳地帯における大規模なかかる未舗装道路の建設も、積極的な効果がないだけではなく、エロージョンを誘発するために、害すらあることもある。道路の建設と維持は、予算とセツルメントの要員の人的エネルギーのかなりの部分を消費してしまう。このような意味で、道路が経済的施設としてよいかどうかはなほだ疑わしい。⁽⁵⁾」

一方、セツルメントの遭遇している社会的困難については、次のように述べられている。すなわち、「これまで *Land Settlement* 計画の経験をしてきた社会学的困難さは、計画地域に人々が移住するのをいやがってきただことである。これについてはいろいろと理由が存在している。第一の疑惑は長い独立の歴史を持った人々が文化の異なった、より強力な官吏と接触するところからきている。また、定着生活と対照的な山地民のある者の半漂泊的性質、さらに、かれらに与えられた新しい機会その他の不確定さもその理由である。大規模な生活様式の

変化を数年間でおこなおうと期待していたことは、あまりにも楽観的のようであった。⁽⁶⁾

このような山地民対策にもなる初期の経験を踏まえて、*Nikhom* は若干の組織変えをおこなった。たとえば、Tak 県の *Nikhom* は山地民担当の改良普及員の訓練センターに改組されるとともに、Mae Hongson 県の Mae Sarieng 郡の山地に、新たに開発福祉センターが設立された。現在では、そのようなセンターとか *Nikhom* から、公衆衛生、社会福祉、農業などの担当官が山地民の村々におもむき、生活改善や農業改良普及に当たっている。

内務省公共福祉局に山地民課が新設されるに先立ち、政府は山地民問題の全貌をとらえ、問題点を把握するために、公共福祉局に命じて、山地民の社会・経済調査をおこなわせた。

一九六一年九月から一〇月にかけては、まず政府の各機関から出向してきた調査員の訓練がおこなわれた。山地民の実態調査は、同年の一〇月から翌年の二月にかけての乾季に実施された。かくして、一九六二年九月には、公共福祉局から *Report on the Socio-Economic Survey of the Hill Tribes in Northern Thailand* という英文報告書が出版された。この報告書は一一二ページのタイプ印刷であるが、その後、タイ語のものと合本されて出版されている。

この報告書は第一部と第二部に分かれている。第一部では山地民の現状に関する総括的分析がおこなわれ、第二部はそれにもとづく勧告にあてられている。この勧告は政治、行政、福祉の各方面にわたって述べられている。その一環として、タイ国北部地方に、*Tribal Research Centre* を設立することを勧告している。

この勧告にもとづき、一九六五年一〇月二二日に、内務省公共福祉局が *Chiangmai* 大学の協力をえて、同大学のキャンパスの一隅に *Tribal Research Centre* を設立した。政府はこれにたいして、本館建設に三〇万バ

ーツ(約五四〇万円)、官舎建設に一二万バーツ(二二六万円)を支出した。

本館の一階は図書室、陳列室、教室にわけられている。図書室は開所間もなくなので、まだ書籍や参考文献などほとんどそろっていないけれども、将来はタイ国を中心とする大陸部東南アジア関係の研究資料が拡充されることが期待されている。とりわけ、人類学、社会学、山地農業を中心に文献収集がおこなわれるという。また教室は政府機関の山地民担当官のトレーニングなどに使用されている。

本館の二階は所長室、事務室、外国人アドヴァイザーや山地民担当官の研究室、写真用暗室、エア・コンデインション付きの貯蔵室などがある。

また本館の周囲には、近い将来に、山地民の家屋の見本を各民族集団ごとに、何種類か建設することが計画されている。

この Tribal Research Centre にたいしては外国政府も関心を示している。とりわけ、オーストラリア政府は SEATO の関係もあって力を入れ、すでにジープ二台、トラック一台、それに第一線の社会人類学者で New Guinea 研究で有名な William R. Geddes 教授(現 Sydney 大学人類学部長)を同センターに送った。Geddes 教授は一カ年半タイ国北部に滞在し、山地民調査の技術をタイ国側の担当官に指導した。同教授は一九六五年帰国し、後任には門下の Peter Hinton 氏(現 Sydney 大学講師)ほか一名がきつ、Tribal Research Centre のアドヴァイザーとして働いてくる。

なお、このほかに、外国から援助が寄せられている。たとえば、アメリカやイギリスは書籍、テープ・レコーダー、ムービー・カメラなどを寄付した。

いずれにせよ、Tribal Research Centre は発足したたので、いろいろと設備が不備のようであるが、所長

の Wanat Phruksasri 氏のイニシアティブのもとに、着実に活動が開始されたように思われる。すでに一九六六年には、第一回の山地民担当官のトレーニング・コースもおこなわれ、国境警察、公衆衛生局、初等教育局、畜産局、米穀局、農業局、土地局、国防省、国家安全中央司令部などから三〇名もの受講者を集めた。

またアドヴァイザーの Hinton 氏の発案で第一回山地民研究者セミナーが一九六六年三月一八日に開かれ、内外の人類学者、言語学者、農村社会学者など、いろいろな分野の専門家が一堂に会して、熱心な研究討議がおこなわれた。その後も、同様な公式、非公式の研究会やセミナーがしばしば開催されて、一九六九年には、Hinton 氏の編集で、*Tribesmen and Peasants in Northern Thailand* というシンポジアムの成果が *Tribal Research Centre* より出版された。

Tribal Research Centre は、当初、ミャオ、ヤオ、アカ、リス、ラフ、カレンなどの諸民族集団の研究に焦点を当ててきた。通常、オーストラリアやイギリスからの人類学者に、タイ人の助手がついて、フィールド・ワークがおこなわれた。その過程で、タイ人の助手に対して外国人専門家によって、人類学的トレーニングがおこなわれることが期待されていた。さらに、可能な時には、そのなかの何人かは、オーストラリアなどで、人類学の勉強を続け、将来のセンター要員として働くことが期待されている。

もちろん、*Tribal Research Centre* の本来の目的は、いま述べたような人類学的基礎研究に止まることなく、将来は農業を初め、人口統計など、いわゆる応用社会科学の面をも包含することが望まれている。一九七〇年五月に、筆者がセンターをたずねた時には、責任者の口から、われわれはもはや基礎調査の段階から、一歩前進しようとしている……、と聞くことを聞いている。

以上のように、*Tribal Research Centre* は、山地民関係の研究と訓練の統合機関として、ある種の機能を発

揮し始めた。山地民問題はいろいろな難題が山積しているし、Tribal Reseach Centre 自体も行政的にも研究上にもいくつかの問題をかかえている。しかし、それらの問題の解決は、ひとえに、Tribal Reseach Centre が、より強力な財政的裏付けのもとに、研究成果を蓄積し、かつ人材を育成しながら、発展するかどうかにかかっているように思われる。

以上のように、タイ国政府は内務省の公共福祉局をその軸として、カレン族を含めた山地民の問題について対策を立て、それに必要な行政的措置をとり始めた。だが、これは初期の段階なので、その成果を問うには時機尚早であるようだ。しかしながら、そのなかでも、若干の注目すべき動きが現われたので、次に指摘することにしよう。

- (1) Truxton (1958) pp. 69-70
- (2) Truxton (1958) p. 71
- (3) UN (1967) p. 74
- (4) チャットメントの言葉。
- (5) UN (1967) p. 75
- (6) UN (1967) p. 75

B 仏教の布教活動

歴史的に見ると、タイ国においては僧団が原始民族や山地民などの非仏教系住民に対して、大規模な組織的布教活動をすることはほとんどまれであった。

しかるに、タイ国の仏教界は、内務省公共福祉局の要請に応じて、一九六五年より、タイ国北部地方を中心に、山地民の村々に布教団を送って、かれらの間に広範な布教活動を開始した。

このような運動が展開されようとする背景にある消極的な理由としては、タイ国がビルマの轍くわを踏んで、外国の宣教師によって、国内に国境がつくられるのを恐れたからでもあろう。さらに、積極的には、国民形成をおこなって、近代的な国民国家を建設するためでもあろう。このような運動の成否はとにかくとしても、カレン族を含むこの国の山地民の社会・文化変容を考えるうえで、きわめて注目に値する。

このミッションの正式名称は仏法移動布教団 (*Thamma Charik* : 文字通りに訳すると、法の巡歴⁽¹⁾) と呼ばれる。そのことの起りは、内務省公共福祉局山地民課の現課長 *Prasit Dhitsawath* 氏が、一九六四年に三ヵ月間得度して、*Benchamabopit* 寺院に滞在した時から始まる。*Prasit* 氏は僧院生活の後に、その寺の大僧正である *Phra Dharnmakittisophon* 師と相談し、同意を得た。その後、公共福祉局の認可を受けて、仏法移動布教団は発足したのである。

この費用の主要な部分は公共福祉局によって支出されている。計画のおもな意図は、標準タイ語の普及と識字運動を軸として、仏法を山地民の間に布教し、あわせてかれらの間で福祉事業をおこなうことにあった。

この計画においては、山地民の村落に派遣される僧侶のチームは理想的には五人一組である。その五名の内訳は中部タイ出身者二名と北部地方出身者三名で、もしできれば、山地民出身の僧侶もしくは少年僧の参加が希望されている。

第一年度としては、*Mae Hongson* 県に一五名、*Tak* 県に一九名、*Chiengmai* 県に九名、*Chiengrai* 県に一八名、*Phetchabun* 県に七名の合計六八名の僧侶が配置された。僧侶たちは一年の半分を占める雨季には、交通事情がきわめて悪いために、山岳地方における活動をおこなうことができない。従って、一二月から翌年の四月頃にかけての乾季を中心に仏法移動布教団は山地民の村々をおとずれた。

これらの僧侶の活動はタイ国の国是である「仏教、国王、民族」を踏まえたうえで、良きタイ国国民をつくりあげることが最終目標としているのであるから、たんなる布教活動の域を越えているといえよう。しかしながら、当面はあくまでも布教活動の形式がとられている。第一年度は山地民に対する医療活動を通して、かれらに接近をこころみながら、政府やサンガの意図を説明した。また、言語や風俗・習慣などの「基礎調査」もおこない、これを Bangkok の本部に報告した。それと同時に、この地方に僧侶が托鉢に来たことがあるか、仏教に興味のある人がいるかなどという宗教に関する初歩的調査も並行しておこなわれた。これを糸口として、次のような方法で布教をおこなった。

まず、仏教に関心を示した村人を集め、仏教について話をし、さらに、必要ならば積極的にそれを教える。その後も、さらに興味を示す者には入信をすすめ、帰依した者には仏陀や高僧の像のついたメダルを与え、信仰のあかしとする。かれらの誓いの言葉をテープ・レコーダーで録音するとともに、写真もとっておく。また、仏教の祭日にはかれらを招いて、仏に祈りを捧げ、説教を聞かせる。その間、山地民のなかで比較的タイ語をよく理解する者を世話役 (*Achan*) として選ぶ。かれが有能でよく働いた場合には、金か物品で謝礼をおこなう。なお、事情が許せば、講堂 (北タイ語で *Sala*、タイ語で *Rong Thern*) を建て、井戸や便所も設備するが、費用は *ほんやく* Bangkok の本部がみることになっている。

このようにして、一九六五年度内には、この仏法移動布教団が送り込まれた Tak, Mae Hongson, Chiangmai, Petchabun などの諸県において、公称約五千人の山地民が仏法に接したと伝えられている。そのうち、約八百人の者が仏教徒になる誓いをたて、なかでも何人かの者は身内の者を僧院に送ることにした。その数は一二名に達したといわれている。さらに、一九六六年度においても、前年度とほぼ同様の人数の者が仏法と接触する機会

を持ったといわれるので、この二年間にそのような経験をした山地民は約一万人にも及ぶことになる。さらに、石井教授によると、「一九六五年・六年に二〇人、六七年には四七人、六八年には一人が、タンマー・チャールクの影響でビク(僧侶)あるいはサマーネン(少年僧)としての得度を受けている」という。⁽²⁾

この仏教普及計画においては、政府も教団もきわめて弾力的な接近方法で山地民にのぞんでいる。たとえば、僧侶になる場合でも、山地におけるタイ語の普及度を考慮にいれて、その条件を緩和して、タイ語の知識を必須とはしていない。公費で、Bangkok の Benchamabophit 寺院でタイ語の勉強をしながら、仏教の教義を身につければいいことになっている。また、少年僧をこころざす者はかならずしも遠方の仏教寺院にゆく必要はなく、その人の出身地にいちばん近い寺院で仏教教育がおこなわれる。

ところで、すでに述べたような第一年度における仏法移動布教団の事業における成果を踏まえて、第二年度の一九六六年度には以下のような計画で事業がおこなわれたので、ここにその項目を列挙し、その動向を知ることしよう。

- ① 僧侶の労働に対する報酬の増加。
- ② 僧侶に現地語を習得させて、仏教教義書の翻訳に当たらせる。
- ③ 学校の建設とタイ語教育、ならびに教師の候補者の発見。
- ④ 山地民の健康管理。
- ⑤ 布、薬、菓子などの準備。
- ⑥ タイ語ができて、仏教の道を進む者を Bangkok の本部に送る。
- ⑦ 山地民の村落の付近に僧坊を建てて、僧侶が住み込み、村人との接触を密にする。

⑧ 村長の仏教的教化に力をいれる。

⑨ 剃髪道具、カメラ、テープ・レコーダー、ラジオなどを用意し、村に持ってゆく。

⑩ 本年度中に、特別列車、飛行機、自動車などを用意する。

当初においては、以上述べたように、きわめて盛り沢山の山地民の仏教化計画が企画された。

ところで、このような仏法移動布教団の活動はその後どのように展開したのであるか。筆者自身がフィールドを去って間もなく、Mae Sarieng 地方の調査にたずさわっていた Keyes 博士は、その後の事情をつぎのように書いている。「一九六八年には、タイ国北部の各地におけるミャオ族、アカ族、リス族、ヤオ族、カレン族などの村々に、仏法移動布教団の根拠地二〇ヵ所があった。それぞれの根拠地には、通常四人の僧侶と一人の少年僧の五人の聖職者がいた。理論的には、各グループの構成員は部族出身の僧侶か少年僧を一人含むべきであるとした。しかし、実際にはそれについていく十分な人数の部族出身の僧や少年僧がいなかった。

一九六八年の Mae Sarieng に関しては、一八名の僧侶と二人の少年僧がスゴーニカ村、ポーニカ村、計四ヵ村のカレン村に派遣された。僧侶のうち八名は Bangkok と Thonburi 地方の出身者であったけれども、あと一〇名は、Mae Hongson 県出身であった。二人の少年僧は、両者とも前年度の計画で選抜されて、Bangkok の寺へ勉強するために送られたミャオ族である。地方出身の一人の僧侶はかれ自身ポー・カレン族であり、一方、他の二人は若干のスゴー・カレン語を話すことができる。

大部分の僧侶は、計画が遂行された後に、あまり成功したとは感じていなかった。有効なコミュニケーションはきわめて限定されていた。なぜならば、僧侶はほとんどカレン語ができなかったし、カレン族の大部分はユアン語（北タイ語）ができたとしても、ごく限られていたし、また、一人もタイ語の読み書きができなかったから

である。せいぜい、僧侶は、聖職者の行動がどのようなものであるかという見方と、サンガは尊敬すべきものであるという考えを残したに過ぎない。⁽³⁾」

このように、筆者自身が経験し、見てきた仏法移動布教団とその後の展開過程を見ると、数年間、かならずしも当初企画したとおりの順調な発展をとげなかった。それには言語の問題とか、山地民の間に根強く残存しているアニミズムとの抵触⁽⁴⁾の問題とか、また、山地民は経済的余剰がきわめて少ないために、日常生活がたいへん多忙であるとか、さらには、平地民に対する不信など、いろいろな原因をあげることができる。さらに、石井教授は仏法移動布教団の不振である原因として、僧侶の主体的条件をあげているのに注目すべきであろう。同教授は東北地方でもにおこなわれたタンマトゥット計画 (Thamma Tu) すなわち、「法の使節」のあり方と対比させながら、仏法移動布教団について説明している。

「タンマトゥットと、タンマ・チャリックとのあいだには、その動機と方向において重要なちがいがあつた。それは、前者がもっぱら地域社会の開發に力をそそぎ、そのなかで、僧侶の社会に対する新しいリーダーシップの確立を模索しているのに対し、後者は、ビクが、古いサンガ観⁽⁵⁾、仏教観をもったままで、政治権力の現実主義的な要求に押されて、ただ仏教的秩序を、山地民という異民族の世界に『輸出』する手伝いをしていくにすぎないという点である。ビクの側に、変革に対決するという精神の緊張が欠如している。これは時代の挑戦に対する主体的な応戦ではなくして、いわば、生き長らえるための手段として体制に順応しているにすぎないのである。それは、あくまで体制による体制の利益のためのサンガの利用である。……『法の巡歴』を主体性のない『順応型』の応戦とよぶ理由がここにある。⁽⁶⁾」としている。

しかしながら、仏教教団の主体性は欠如しているとはいへ、また、たとえ天降りであっても、このような試行

錯誤が積みかさねられることによって、カレン族を含む山地民の社会・文化変容になんらかの影響を与えないでおかないであろう。かくして、不備ではありながらも、ビルマにおけるカレン族のように外国人の宣教師によってではなく、自国の国教である仏教の教団によって、いよいよ本格的に“文字”という媒体を通して、“大きな伝統”がかれらのコミュニティに持ち込まれるべき、しが現われはじめた。このようなことは、タイ国に住んでいるカレン族の場合でも、一部の者がキリスト教の宣教師と接触を持つ以外には、まったく経験しなかったことである。いづれにせよ、タンマ・チャーリックによって、カレン族、とりわけ山地カレン族が“大きな伝統”と接触するべき、かけを与えられたという事実は、かれらの農民化、すなわちタイ化を考えるうえで、きわめて重要なことであることを指摘しておこう。

- (1) 石井 (1969) p. 225
- (2) 石井 (1969) p. 227 なお、僧侶は二七戒の戒律を守る必要があるので、少年僧は一〇戒の戒律を守るだけでよい。
- (3) Keyes (1969) pp. 40-41
- (4) 仏教は他の宗教に対して、きわめて寛大なので、一神教であるキリスト教ほどには、アニミズムと深刻な不適合はおこしていない。
- (5) サンガとは仏教教団のこと。
- (6) 石井 (1969) pp. 227-28

第二節 初等教育の導入

A 国境警察などによる僻地の学校

本章第一節Aでも述べたように、タイ人の山地民に対する伝統的態度は、良きにつけ、悪しきにつけ、自由放任的なものであった。山地民が平地民の問題に影響を与えない限り、中央政府は山地民の問題にほとんど介入することはなかった。

タイ国はビルマとの間に締結した国境協定によって、泰緬国境の両側それぞれ四〇キロメートルの地域には正規の軍隊を駐屯させないことになったので、一九五五年には国境警察 (Border Patrol Police) を設立した。その後は六千人にのぼる国境警察の隊員が、山地民とかわりあいを持つようになったのである。⁽¹⁾ 今日では、かれらが山地民の約四分の一の人口に影響を与えている。⁽²⁾

国境警察の設立の目的を大別すると、第一は国境周辺部における治安の維持である。第二の目的は、その治安対策の支柱として、僻地に住んでいる山地民や少数民族の福祉を増進することである。

ところで、山地民や少数民族の福祉については農業指導、医療、日常品の供給などいろいろな形でおこなわれているけれども、カレン族を含む山地民などの社会・文化変容を考えるうえで、初等教育の導入をもっとも注目する必要がある。

国境警察は管轄下にある地域に、一九五三年以来一〇五の学校を開設したけれども、現在ではその一部を文部省の管轄に移した。⁽³⁾ また、他の資料によると、国境警察はこれまでに一四四校の小学校を設立し、約六千人ほどの生徒を収容したともいわれている。⁽⁴⁾

このような学校では、山地民の子供たちに対して、タイ人の子供と同様に、四年制の初等教育がほどこされている。カリキュラムもタイ人と同じものを使い、標準タイ語の読み書き・話すの教育がおこなわれている。教育を担当する教師は国境警察の隊員が当たっている。このような訳で、非タイ系山地民の標準タイ語の習得に関す

る困難さ、教師の未熟さ、カリキュラムの内容、教育に専念できる時間的余裕などについては今後さらに吟味しなければならない問題が山積している。しかしながら、一般的にいつて、国境警察の隊員は選抜がきわめて厳格であるために、隊員の質はかなり高いと考えられるので、この計画における教育技術的な問題などを解決することとは不可能ではないであろう。さらに、機が熟せば、カレン族のような山地民出身者を隊員として起用することなどによって、いっそう発展が期待される。

それに加えて、一九五九年になると、前述のように、内務省公共福祉局に山地民課が新設された。かくして、北部地方の何ヵ所かに山地民対策の前線基地である *Nihom* が設置されるに及んで、山地民の教育問題が十分に注目を集めるようになった。内務省は文部省の協力をあおいで、*Nihom* 周辺やそのほか比較的交通の便が悪くない山地民の村々に、小学校を設立した。たとえば、*Chengrai, Chiengdao, Tak* などに小学校が作られた。

- (1) UN (1967) p. 73
- (2) UN (1967) p. 74
- (3) UN (1967) p. 73
- (4) Kunstader (1967) p. 383

B 文部省によるカレン村の初等教育

これまででは、おもに、カレン族を含む山地民に対するタイ国政府内務省、国境警察ならびに仏教教団による指導された社会・文化変容 (directed socio-cultural change) について述べてきた。

そこで、ここでは文部省による山地民に対する一般初等教育普及の一環である、カレン族に対する初等教育の導入と、それにもなうかれらの社会・文化変容について記述することにしよう。

近年、文部省も山間僻地の教育に注意を向けるようになった。前述の国境警察が開いていた学校のかんりの数も、今日では文部省の管轄に移り、そのほかの学校も新設された。それに加えて、僻地や山地民の村落から教師を育成するために、奨学金制度もできて、ある程度の成果をあげているようである。しかしながら、教師の数はまだ満足すべき段階には至っていない。

このような一般論はとにかくとして、話を本筋にもどすと、カレン族の村落における教育はどのようになっているのであろうか。

筆者のフィールドでも、山地カレン族の Hiti Topa 村においては、山村の例にもれず、ここ当分は学校が開設される可能性は大きくない。けれども、平地に住んでいるカレン族の村々には、すでにかんりの数の小学校が開設されている。たとえば、Mae Sarieng 郡には、小学校が三二校あるけれども、⁽¹⁾ そのうち、Hiti Kani 村をいじぐ Ban Pe, Mae Han, Mae Tia, Mae Lep, Sao Hin, Hue Pun, Mae Top, Mae Kong Pe, Mae Talu の一〇ヵ村のカレン村に小学校があり、学童を集めている。

Hiti Kani 村の小学校について触れると、これは一九五九年にタイ国政府の文部省によって設立された。この小学校は僻地にあるために、設備の点については十分とはいえない。一九六四年の調査当時は、村のほずれにある木の葉でふいた粗末な竹の小屋が校舎であった。しかしながら、その後校舎だけは改築されて、現在では立派な木造に変わっている。

この小学校は、ほかのタイ人小学校と同じように四年制で、一二名の男生徒と一〇名の女生徒は、上級と下級の二クラスに分かれて、教育を受けていた。二人の先生のうち、校長先生格の S 教師は、スゴー・カレン族出身のキリスト教徒で、若いほうの先生はトンスー・カレン族 (the Taungthu-Karens) と北タイ人の混血であると

表11 Hti Kani 村の小学校の
カリキュラム

課 目	時 間 数	授業回数
タイ 語	9	6
社会 - 倫理	6	3
算 数	3	3
理 科	3	3
職 業	3	3
体 操	3	3
計	27	21

注 1963-64年ならびに1964-65年の現地調査による

いう。

この小学校の教育課程は、一般のタイ人小学校とまったく同じであり、一週間のカリキュラムは表11の通りである。

このような時間割からみても、政府が標準タイ語の普及にかなり力を配っていることが分かる。

タイ国に限らず、このような僻地においては、末端にありがちな教育の非能率さや、またその質や水準には問題があるにしても、学校教育にともなうカレン族文化の「指導された変容」には、ある程度の成果が見られる。学校教育を受けたカレン族の子供たちは、Mae Sarieng 地方一帯で一般に使用されている北タイ語を飛び越えて、いまや Bangkok の標準タイ語を、日常にも用いだそうとしているのがきわめて印象的である⁽²⁾。

このような正規の学校教育にともなうカレン族の文化変容の促進のほかに、村に小学校が開設されて、先生のような「インテリゲンチヤ」が定期的に村にやって来るようになったことは、かれらの「タイ化」のいま一つの促進要因となっている。先生たちは外部のニュースを村にもたらすほかにも、「大きな伝統」の媒体となっている。一例をあげると、カレン族に創氏改名のき、つ、かけをもたらし、カレン族の文化にある種の刺激を与えている。

カレン族は伝統的にはタイ人と同様に、自分個人の名前しかもたず、姓をもっていなかった。ところが、タイ人の場合は、いまから数十年前から、法令によって姓と名をもつようになった。もちろん、姓の実際的な普及は容易なことではなく、今日でも農村はもとより、都市においてもしばしば、隣人の姓を知らないで過ごしている場合がおおい。すでに近代国家を建設しつつあるタイ人においてもこのような状態であるので、一般のカレン族

の間においては、姓が近年に至るまでまったく普及していなかったことは当然のことであろう。現在でも、山村のカレン族においては姓はまったく存在していない。

一方、Hi Kani 村のカレン族は、村が平坦部にあり、以前から北タイ文化やシャン文化との接触がかなりあったために、これまでも個人の名前は、北タイ風のものやシャン風のものが見受けられた。時にはカレン風の名前と北タイ風、もしくは、シャン風の名前と二つ持っている者もいた。だが、それは個人の名前に限られていた。村に小学校が設立され、外部から先生が毎日通勤するようになると、創氏改名は急速に促進される。

この数年の間に Hi Kani 村の小学校の先生は、カレン族の村人たちに本格的な創氏改名をおこないだしたのである。そのため、現在では Hi Kani 村の大部分の家ではタイ系の姓名を所有するようになった。また、多くの子供たちは、カレン名と同時にタイ系の個人名を持っている。さらに、場合によっては、カレン風の名前を持たず、タイ風の名前だけを持っている子供がいるような極端な例もある。

このような創氏改名によるタイ風の姓名については、カレン族の村落における日常生活では、あまり重要ではなく、実用性があるとは思えない。しかしながら、このような変化の傾向は国民形成に努力をかさねているタイ国政府の政治的要請とも、基本的に一致していることはいうまでもない。

いずれにせよ、平地カレン族の村 Hi Kani における小学校の開設は、かれらに文字や教育という文化的媒介を通して、国家的規模の“大きな伝統”を持ち込み、その地域社会の外界に対する依存度を大きくする契機を与え始めていることだけは間違いないだろう。

(1) このほか中学校が Mae Sarieng の町に一校ある。

(2) 村の小学校にある唯一の“財産”であるポータブル・ラジオは、オーストラリア政府の援助によるものである。これ

により、カレン族の子供たちはチェンマイからの放送を聞き、タイ語の勉強の一環としている。

要約一六

第五章までは、おもにカレン族の“自主的”な社会・文化変容を中心に述べてきた。そこで、本章においては、“指導された”変化について述べることにした。

伝統的には、タイ国中央政府は、実害がない限り、山地民問題には自由放任的態度をとってきた。しかしながら、近年、ナショナルリズムが台頭し、近代化の流れのなかで、国民形成の努力がかさねられるようになると、事情は一変する。

たとえば、内務省には山地民課が新設されて、それを軸として、山地民対策がたてられるようになる。Chiang-mai 大学にある Tribal Research Centre の設立や、山地民に対する仏法移動布教団の派遣などもその一環である。

それに加えて、文部省や国境警察による、山地民の村落における小学校の新設も注目に値する。

これら計画の一つ一つを吟味すると、実施の段階でいろいろな問題が山積しているけれども、農業改良普及活動、仏教の布教、文字のある標準語の導入、ならびに教師などの定着等々によって、自己完結的な山地民の社会や文化の壁は侵食されて、外界を支配している“大きな伝統”との接触を余儀なくしている。

結 語

以上、本稿ではカレン族の社会・文化変容の流れをたどりながら、かれらの社会や文化が“部族的”な編成を解体して、“農民型”に再編成をおこなっている過程について接近を試みてきた。そこで、最後にいまいちどこれまでの文脈を振り返りながら、その社会科学の意味について考えてみよう。

社会発展とか文化変容については、これまでいろいろな立場から論じられてきた。たとえば、生産力の発展により生産関係が変化するという観点から、問題を取り上げたのは Karl Marx である。この理論の系譜上にあり、生産力のかわりに技術の発展を軸に考えた Gordon Childe、またそれを消費エネルギーの量に置き換えることによって分析しようとした Leslie White 教授などがある。このような系列の学者を単線的発展論者といって、それぞれニュアンスには微妙な差異はあるけれども、ある特定の社会は他の社会と同様に同一のタイプの発展段階をとると考えるのである。これに対して、Julian H. Steward 教授に代表される多線的発展論者は、与えられた条件によって、社会・文化の発展はいくつかの方向がありうるという。そして、その方向は何種類かのパターンに分類することができるのとされている。Karl A. Wittfogel 教授も、大掴みに分類すると、このカテゴリーに属する学者であるといえよう。

語 しかしながら、これまで述べてきたような発展論者のほかに、社会の発展を二分法的発想で考えようとする社会学的志向を持った学者がいる。それはいままさらいうまでもなく、Henry Sumner Maine, Emile Durkheim, そして Ferdinand Tönnies などである。これらの諸学者は社会発展を分析するに当たって、二つの理想型とい

う極限概念を導入し、一連の社会発展の過程で、ある理想型から別の理想型へと変化すると考えたのである。すなわち、Maïne⁽¹⁾においては、あらゆる人間関係が家族関係に集約されている社会状態、また個人が親族集団の成員として位置づけられる社会関係を、*身分 (status)* が支配的な社会であるとした。それに対して、*契約 (contract)*、社会では、個人の自由の同意によって個人の義務が遂行されるものとした。このような認識の上で立って、社会発展の方向は、*身分より契約へ (from status to contract)* と推移するという有名な命題をうんだのである。

さらに、Durkheim は、社会発展の方向を、第一の集団類型である、*環節社会 (sociétés segmentaires)* が組織社会 (*sociétés organisées*) に変化してゆく⁽²⁾と論じている。前者の類型は集合的類型 (*le type collectif*) であり、分業が未発達な、類似性に基づく機械的連帯に基礎を持っているという。後者の類型は、個人的類型 (*le type individuel*) と呼ばれ、分業や仕事の専門化、さらに個人的人格が、集合意識から解放された有機的連帯に基づいているとしている。

一方、Tönnies は社会の発展を、*ゲマインシャフト (Gemeinschaft)* から、*ゲゼルシャフト (Gesellschaft)* へ向かうものであると説明した。⁽³⁾ かれによると、*ゲマインシャフト* とは「持続的な真実の共同体」であり、また「生ける有機体」であるともいう。それに対して、*ゲゼルシャフト* は「経過的な外見上の共同生活」に基づく「機械的な集合体で人工物」であるとしている。

これまで述べてきたような Maïne, Durkheim, Tönnies によって提唱された社会発展の方式は、Max Weber の理想型に関する理論とともに、Robert Redfield によって継承され、さらに Durkheim の流れをくむ Alfred R. Radcliffe-Brown の機能主義と統合されたのである。このようにして、構成された Redfield 理論は実態調査

に応用され、磨きがかけられて、面目を一新した。

Redfield によると、「第一類型の特徴として認められているものは以下のごとくである。すなわち、孤立性、文化的同質性、相互に関係している意味づけの単一のあや、に集約される伝統的理解の機構、地方の環境に対する適応、諸関係が圧倒的に人格的性格を持っていること、家族制度の相対的重要性、世俗的制裁に比べて聖的制裁の相対的重要性、信仰や姿勢に関する儀礼的表現の展開、個人的行動のかんりの部分が家族または地方集団に包含されている傾向などである。」⁽⁴⁾この第一のタイプに該当する社会類型を、Redfield は民俗社会 (folk socie-ty) と呼び、現在われわれが「部族社会」と「農民社会」とに区別して理解している二つの社会類型を包含している。かれによると、民俗社会は都市文明と接触することによって、他の一方に存在する「都市」という対照的な社会類型に移行してゆくと考えた。

このような Redfield の理論を現実の分析に適用したのが、有名なメキシコにおける Yucatan 半島の首都 Merida を中心とした地域社会の比較研究である。⁽⁵⁾ Redfield をリーダーとする研究グループは、Yucatan 半島のインディオの村落 Tusik、メンティーサの村落 Chan Kom、鉄道沿線の田舎町 Dzias、それにこの辺では唯一の都市である Merida を比較社会学的に研究することによって、一円の地域社会に対して、共時的 (synchronic) ならびに通時的 (diachronic) な接近をこころみた。その結果、かれのいう第一の類型である民俗社会の極限概念にもっとも近似している内容を持っているインディオの村落社会が、都市からの文明の影響によって、しだいにいま一つの社会類型である都市社会の方向に向かって変化してゆく社会・文化変容の過程を現実把握し、分析した。このようにして、「部族」→「農民」→「町」→「都市」という文化と社会の座標の変化を研究した Redfield はその過程をつぎのように特徴づけている。⁽⁶⁾

- (1) 孤立性の弱体化
- (2) 異質化
- (3) 複雑な分業
- (4) 高度に発達した貨幣経済化
- (5) 職業における專業者の出現
- (6) 親族組織の弱体化
- (7) 非人格的制度による統制への依存
- (8) 宗教的行事の減少と世俗化
- (9) 病氣の原因を「たたり」に求めることの減少
- (10) 自由な行為と選択の拡大

以上のような Redfield による Yucatan 半島における地域社会の社会・文化変容に関する一〇項目にわたる特徴づけは、かならずしも十分に整理できているとはいえない。しかしながら、その意味することについては、かなり一般的妥当性を持っていると考えられる。たとえば、これは筆者が本稿で取り扱っているカレン族における社会・文化変容の分析については、ある程度有効に援用できるものと思われる。

Redfield の古典的農民社会の理論⁽⁷⁾の後を受けて、その後、Maim MaKririot 教授や George Foster 教授などの諸学者によって、農民社会の実証的研究が進み、その理論は精緻化されていった。なお、Oscar Lewis 教授のように、Redfield における農民理論の概念規定にかなり批判的な立場をとる学者の場合でも、農民⁽⁸⁾という社会的、文化的類型が存在していることは否定していない。かくして、今日では多くの社会学者たちが、地域社

会の発展において、一般的には“部族”→“農民”→“都市”という社会・文化類型を経過するものと考えている。さて、話を Redfield 理論に対する疑問点に移すことにしよう。かれは社会・文化変容の過程を分析するに当たって、全体として主体的発展の条件よりもむしろ客体的条件に力点を置き過ぎたのではないであろうか。すなわち、かれは部族社会が農民社会、さらには都市社会に進化してゆく原動力を、もっぱらその客体的条件である都市文明の影響によるという視点から取り上げている。もちろん、Redfield 自身の一般理論では、主体的条件をまったく無視した訳ではないけれども、それをいささかなおざりにしたことは、*The Folk Culture of Yucatan* における分析の決定的な弱点といえないであろうか。

さて、この「結語」においては、以上述べられてきた Redfield の理論の長短を踏まえたうえで、本書が主題としている、タイ国北部に住んでいるカレン族の社会・文化変容の過程を全体的に振り返ってみよう。記述はいささか重複気味に見えるが、ここでは変化のメカニズムに力点を置きながら論を進めることにしよう。

すでに第一章から第六章にわたって述べたように、カレン族は、緩急はとにかくとしても、社会・文化変容が目下進行中である。そのなかで、*Mae Sarieng* 地方の山岳地帯では、カレン族がいまから数十年ほど前までは、焼畑農業をきわめてさかんにおこなっていた。すなわち、当時は処女林がたいへんに豊富であったために、現在の地方で見られるような半定着的な焼畑農業よりも、より“本格的”で、しかも、より漂泊的な焼畑農業がおこなわれていたといわれている。そのような状況のもとにおいては、当時生産を担っていた中心的社会組織はいらまでもなく long house であった。この発展段階において、カレン族社会は、共同作業を基礎とする労働過程

によって、個人はもちろんのこと、家族さえも long house という“共同組織”のなかに埋没していたものと考えられる。まえにも述べたように、このような状態のもとにおいては、『個』がまだ分化して出て来ない以

前の未分化状態にある集まりである」⁽⁹⁾といえよう。そこにおいては「土地は、今日、われわれの考えるような意味では、所有の対象物ではなかった。しかも、やがてそこには縄張り観が成立してきたのであり、そして次第にそれが共同体のものとして意識されるようになった」と考えられる。

さらに、カレン族の伝統的な焼畑農業が停滞して、水田稲作農業が導入されると、かれらの社会組織にきわめて重大な変化が現われる。Long house が崩壊して、各戸ごとに個別化が進み始めていたカレン族の社会に拍車をかけて、かれらの村落という家族の「むれ」から、個別の家族を遊離させ、水田稲作農業を担う主体とならしめたように思われる。

また、水田農業では、「本来、異質の営みである『土地への労働投下』ということが行われるようになってくる。これもやはり、いわば異物の内含包摂である。もちろん土地に対して労働投下をなせば、たとえば排水の施設を設けるとか、灌漑のための溝を作るとか、あるいは通路を整えるとか……をすれば、その土地の価値は高まってくる。いわば、土地への投下労働の財価値としての凝結化が起ることになる。それだけで土地の財価値が高まってくる。いままでは単なる自然空間に過ぎなかった土地が、こうして物化し、財価値を持つてくることになるのである」⁽¹⁰⁾このようにして、水田農業のようなカレン族にとって本来異質な生産様式が、伝統的な焼畑農業に導入されたのを契機として、かれらの土地所有に関する未分化な考え方が一歩進んで、占有や私有の方向に変化せざるをえなくなったのである。

ところで、カレン族の焼畑を中心にした伝統的農業に水田稲作農業が導入されると、村落の性格は一変する。これについてはすでに触れたのであるが、その経済的、ならびに社会的意義について、ここでは次のようにまとめておくことにする。

(1) 水稻栽培を開始した家はそうでない家よりも、より定着的になり、村落社会に亀裂が生じる。すなわち、村落が漂泊的なものから定着的になり、周囲の焼畑用の森林が枯渇し始めても、水田を持っている家は移動しつらぬ。一方、水田を持っていない家は、ジャングルの奥深く、土地を求めて移動することを希望し、村を離れて娘村を形成する。

(2) 焼畑経済のもとにおいては、ほぼ同じ条件の畑地を、ほぼ同じ面積だけ耕作してきた。たとえ多少の耕作面積についての差異があったとしても、農業技術の水準が低いために、家ごとの収穫量の差異は決定的なものではなかった。そのために、村落内におけるいわゆる階層分化の発生する余地がほとんど存在していなかった。

しかしながら、山地カレン族の村落における「平等な」村落構成単位の一部に、水田耕作という異質の経済行為が付加することによって、「平等な」社会関係が不平等なものに転化する^{きざし}が現われ始めた。実際には、山岳地帯における適地の不足のために、水田面積に限度があるから、急激な階層分化が出現していない。しかしながら、農業生産に存在している、僅かばかりの量的差異も蓄積されてゆくと、やがて社会の質的な差異へと変化してゆくと思われる。

語
いづれにせよ、カレン族の社会・文化変容の過程の根底には、かれらのおこなっていた焼畑農業に対する水田稲作の導入がおおきな役割を果たしていたことは疑いない。このような異物を内含することによって、カレン族の伝統的社会や文化の形態は変化をよぎなくされた。外見的には、カレン族は、すでに長期間にわたって水田農業に従事してきたタイ系の隣接諸民族集団の社会・文化の形態を一応模倣する形式をとっている。けれども、その事はいまま述べたように、水田農業という異物を包摂することによって、カレン族がみずからの社会とその文

化をメタモルフオーゼして、あたらしい秩序を編成しつつあると理解することができよう。

ところで、カレン族において、程度の差はあっても、個人がまだ集団のなかに埋没している社会組織のあり方は、一方ではかれらの文化のあり方にも反映している。とりわけ、文化諸要素のなかでも、その上澄みともいべき宗教的側面にそれが反映している。すなわち、第四章第二節Aで扱ったように、“家神” *Baha* に対する信仰は、伝統的にはカレン族の行動様式に顕著な影響を与え、またその社会・文化的枠としてかれらの行動に制約をも与えているのである。

すでに述べたように、カレン族のような双系的社会組織を持っている民族集団においては、父系親族集団も母系親族集団も十分発達することはない。カレン族にあっては、家族が自律集団の最小の単位であるとともに、最大の単位でもある。従って、その“家族” (*Dopweeh*) の凝集力として重要な役割を果たし、また成員の倫理的秩序の基礎を形成していると考えられる“家神” *Baha* は、すぐれてカレン族の *identity* の源泉でもある。このような“家神” *Baha* に対する“家族儀礼” *Ore* をおこなうことによって、カレン族の個人は物理的にも、精神的にも“家族”に結びつけられている。換言すると、“家神” *Baha* はカレン族の成員の個人的行動を制約し、足枷となっていることも事実である。ことにこの傾向は、“*Ore* 儀礼をもつともオーソドックスな方法でおこなっている儀礼集団 *Ore Chuko* において顕著である。

ところが、近年になって、平地民の間から発生した *Chakasi* 儀礼がカレン族に影響を及ぼすようになる。それによって、一部の“家族”においては、“家神” *Baha* とその成員との宗教的紐帯、従ってまた、社会的紐帯を断絶したり、少なくとも断絶しつつある。かくして、このような個人は、“家族”という血縁共同体から相対的な行動の自由を獲得したのである。このカレン族における社会・文化変容の一側面は、かれらの村落に市場経済

が浸透しつつある現実と見事に照応して、きわめて興味深い。

ところで、カレン族の「家神」*Bofa*の社会・文化的機能を客観的に把握するために、「すでに「農民」になっている北タイ人の「家神」*Phi Punya*と「家族儀礼」*Liang Phi Punya*について、「簡単に触れることにしよう。北タイ人の「家族儀礼」*Liang Phi Punya*は「カレン族の「家族儀礼」*Ore*にまつわるような煩雑さは付随していない。一般的には、せいぜい、結婚した時に、「家神」*Phi Punya*に報告をすることが「義務」づけられているだけである。そのほか、家族の成員が疾病にかかった時などには、家のそばに祭壇をもうけて、鶏のカレ―と御飯を用意して、簡単な「家族儀礼」をするだけである。

このような北タイ人の「家族儀礼」*Liang Phi Punya*においては、「カレン族の「家族儀礼」*Ore*のように、他人の目を超える必要もなければ、儀礼集団の成員が全員出席しなければ儀礼ができないというようなこともない。北タイ人の「家族儀礼」には、もはやカレン族におけるような普遍性のない、「部族的」社会・文化の側面は存在していない。

ところで、現在のカレン族のように、農業技術の水準が低く、低生産性にあえいでいる間は、毎日の生活を維持し、単純再生産を繰り返すのが精いっぱいである。従って、農業生産物の余剰は少なく、農産物の商品化の可能性は僅少である。しかしながら、最近になって、コミュニケーション網が発達して、社会環境が僅かながらも変化し始めると、労働力が商品化するきざしが現われ始める。そうすると、カレン族の社会や文化になんらかの影響が現われ始めるのである。たとえば、山地カレン族の村でも、村外の道路工事などに働きに出て、日銭をかき出した村人は、焼畑農業に関する伝統的な共同作業を妻に任せきりになったり、また、農耕儀礼をもなおざりにし勝ちになる。そのため、村人は「あいつは非協力的で、悪い奴だ」と爪はじきをするようになる。まさに、

Redfield も述べているように、「農業以外の方法で生計を立てることのできる機会が現われると、そのコミュニティの若干の人間は農業を放棄するために、農耕儀礼に参加しなくなる。このようにして、その人たちは、たとえば、農耕儀礼や疾病の關係の儀礼に、参加した者相互の了解事項を分かちあうことを中止する⁽¹¹⁾」というような現象が発生する。

これまで述べてきたような過程をへて、カレン族の社会では、個人は家族から、また家族は村落からと、しだいに「自由な行為と選択の拡大」を達成しつつあるように思われる。すなわち、農業様式のような技術的秩序 (technical order) の変化が回り回って、いま述べたような倫理的秩序 (moral order) の変化を招来させるような契機を与えたのではなからうか。⁽¹²⁾

しかしながら、技術的秩序の変化は、一般的には、倫理的秩序の変化には直結せず、両者の間には多少のラグが存在する。そのために、カレン族の社会・文化変容の過程において、その成員が相対的な「自由」を獲得するとともに、アノミックな状態に陥り、社会・文化の組織破壊がおこる恐れが生じる。

ところが、このような情況のもとにおいて、社会や文化の組織破壊と表裏一体的に出現するのは、社会や文化の再編成 (reorganization) の動きである。カレン族の場合も、その例外ではない。カレン族の社会とその文化が、「家神」*Bgha* に対する信仰が後退することを軸として、アノミーと化してゆく方向をたどった時に登場したのが村落儀礼の *Talutaphadu* である。この儀礼のプロトタイプと思われるものは、もともとはカレン族のものではなく、北タイ人やシャン人のようなタイ系平地民の間でおこなわれている村落儀礼 *Liang Phi Chaoti Chaodin Chaomiang* である。しかし、カレン族はこの儀礼をタイ系平地民からたんに模倣したのではない。むしろ、これをみずからの文化のなかに摂取することによって、血縁關係を基礎にして成立している「部族的」秩序が解体

してゆく方向にあるのを再編成して、文化的な^がとしての役割を果たさせているのではないであろうか。このようにして、山地カレン族において、血縁を村落編成原理の核としていた社会組織は、平地カレン族においては、しだいに地縁を基礎にした社会組織に移行しつつあると考えられる。

このような社会・文化変容の誘因は、第一には伝統的なカレン族の文化のなかに、水田稲作農業のような異質な生産様式が内含されることによって、主体的な社会・文化の発展が見られたと考えられる。また、第二の誘因として考えられるのは、山村と平地村におけるエコロジカルな条件の差異にもとづく平地文化の影響もかなりの圧力を与えていると思われる。このことは、本論のなかですでに述べた通りである。

ところで、このような趨勢にあるカレン族の社会や文化をより広い世界といっそう緊密に結びつける可能性を与えたものは、「大きな伝統」、すなわち、この場合は仏教の影響であろう。いうまでもなく、カレン族が焼畑農業に従事している段階にあっては、村落自体の漂泊的な属性がつよいたために、平地に定着しているカレン族のように、寺院を核とした仏教文明と直接的に接触することは困難であった。しかも、山岳の森林地帯を漂泊しながら、いとなんでいたカレン族の焼畑農業を中心とした経済は、狩猟のような殺生をとまらざる生業とは関係のふかいものであった。いや、むしろ、¹³⁾ 発生論的に考えると、焼畑農業が一般的には狩猟経済に付随して発生したとさえ推定する学者もいるほどである。従って、焼畑農業の停滞、さらにはそれとの訣別は、ある意味で狩猟生活からの離脱をも意味していると考えられる。かくして、狩猟生活にとまらざる殺生を日常定期的におかす必要がなくなったということは、カレン族に対する仏教の導入がある程度容易になったと考えてよいであろう。¹⁴⁾ このような事実とカレン族におけるいまひとつの仏教導入の糸口を作ったと考えられる *Chakasi* 儀礼の影響は、¹⁵⁾ たがいには直接的には結びつけられないとしても、文化の底辺のどこかではなんらかの¹⁶⁾ か、か、わ、り、あ、い、を、持、っ、て、い、る、の、で、は、な

いだろうか。いずれにせよ、カレン族自身としては、積極的であるにせよ、消極的であるにせよ、仏教を導入することによって、かれらの近隣に定着して、「物質文明を誇っている」タイ系平地民と「同じようになる」ために、一部では仏教徒になる方向をたどり始めたのは事実である。このようにして、カレン族が仏教文明と接することにより、仏教寺院を核とする平地民の生活空間のなかに社会的にも文化的にも繰り込まれ、やがてタイ国における国家レベルの文明へと歯車を噛み合わせてゆくのではないかと考えられるのである。

以上述べてきたようなカレン族の“主体的”、かつ“自生的”色彩の強い社会・文化変容のほかに、“客体的”ならびに“他生的”な変化の条件も無視することはできないであろう。とりわけ、それは平地カレン族に対する初等教育の普及などによる、タイ国政府の働きかけに顕著に見られる。さらに、多少の紆余曲折はあっても、近年における内務省と仏教界の協力による仏教普及活動も注目に値する。このような“指導された変容 (Directed change)”によって、カレン族の社会や文化は、全体としてじょじょに変化するきざしを現わし始めたのである。

これまで述べてきたカレン族の社会・文化変容の流れをさかのぼればさかのぼるほど、われわれはそこに“部族的”要素をより多く見出すであろう。これは大掴みにいって大陸部東南アジアの山地民に共通した現象であるといえよう。それでは、このような文脈のなかで、“部族的”とはどのようなことであろうか。ビルマにおいてチン族 (the Chins) の研究をおこなった F. K. Lehman 教授はつぎのように定義している。「それは周囲の平野や谷間の文化的伝統から、きわだって異なっている文化的伝統を保持しているからである。それはかなり孤立して、文明化の進んだ国の社会的・政治的ネットワークに通常は包含されていないからであるし、また、自分たち自身はそのような諸制度を持っていないからである。また、宗教はおもにアニミスティックで、言語は文字にしるされていないのである⁽¹⁵⁾」という。

この Lehman 教授によるチン族に関する特徴づけは、ほとんどそのまま、タイ国北部における山地カレン族に適用できる。ところが、平地カレン族になると、そのおもむきは多少異なってくる。すなわち、山地カレン族と平地カレン族の根底にある社会・文化的伝統とは基本的に相同であるけれども、すでに微妙な差異が現われていることも事実である。平地カレン族は山地カレン族ほど地理的にはあまり孤立していないけれども、タイ国の社会的ならびに政治的ネットワークと十分に噛み合っているとは思えない。しかしながら、平地カレン族自身の社会制度が成熟しないままに、全体としてしだいに中央政府の傘下におさまろうとしている。また、宗教についても、基本的にはアニミズムに根差しているけれども、すでに平地カレン族の文化のなかには、仏教文明の香りがそこはかたなくただよっている。言語については、キリスト教の宣教師の活動を通じて、前世紀にビルマで作られたカレン文字が平地カレン族の一部にある程度導入された。しかるに、それが一般の者に普及する以前に、タイ国政府による義務教育が開始されたことよって、ここ数年の間に標準タイ語が文字とともに平地カレン族の間に入り始めた。平地カレン族の間では、母語のカレン語はもちろんのこと、タイ国北部全体のリンガフランカである北タイ語も、文字に書かれた言語として一般に活用される以前に、標準タイ語の時代が到来しようとしているかにみえる。

「文字の使用に限度がある時には、村落における地方性 (Localism) とか、伝統にはたいした影響を与えない」といわれているけれども、標準タイ語とその文字というような文明の種子がカレン族の文化のなかに播かれた以上は、タイ国における最近のマスコミユニケーションの“発達”などによって、やがてカレン族の社会・文化変容はある程度促進されると考えてよからう。

結 ところで、最後に、本稿でこれまで述べてきたようなカレン族の社会・文化変容の過程を一般化して考察する

ことよって、論を閉じることにしよう。

すでに述べたように、Redfield はメキシコの Yucatan 半島の首都 Merida を中心に、周囲のインディオの村、メソテイーサの村、鉄道沿線の町の比較社会学的研究をおこなって、“部族”→“農民”→“都市”という方向づけをされた社会・文化変容を分析して十項目にわたる詳細な特徴づけをおこなった。そのような諸特徴を総括して、かれは、“部族”から“都市”へという理想型の推移にともなう社会・文化変容の過程で、社会は孤立性と同質性を減少するともに、“文化の組織破壊 (disorganization of the culture)”、“俗化 (secularization)”、“個人化 (individualization)”⁽¹⁷⁾が結果するという一般の特徴づけをおこなった。

このような Redfield による社会・文化変容に関する見解は、大筋として筆者がこれまで扱ってきたカレン族の“部族的”類型から“農民的”類型へと推移する社会・文化変容における一般的な特徴と大差はない。たとえば、カレン族の“家神”、*Boha* に対する信仰についても、宗教儀礼は社会・文化変容の過程で、“俗化”の方向にあることは明白な事実である。また、*Chukasi* 儀礼などによって、“家族儀礼”が衰退したり、中止されるとき、“家族”の成員間の紐帯がゆるみ、“個人化”も同時に促進されると考えられる。

ところが、“文化の組織破壊”ということになると、筆者は Redfield のこの件に関する一般理論について、いささか疑問を感じている。もちろん、筆者もカレン族の社会・文化変容の過程に接近を試みながら、“文化の組織破壊”の現象がまったく観察されないと主張する訳ではない。文化のみならず、社会においても、カレン族の“部族的”要素が一面で“組織破壊”をおこしていることは事実である。しかしながら、そのような過程を“部族的”社会・文化の崩壊という角度からだけとらえるのは正しくないように思う。カレン族は、拱手したままその崩壊の危機を迎えるのであろうか。いや、現実はそうではないように思われる。一例をあげると、ある段階の

カレン族は伝統のなかには存在していなかった *Tulutaphadu* のような村落儀礼を包摂し、発展させることによって、主体的にかれらの社会・文化秩序の再編成 (reorganization) する努力をもおこなっているように思われる。このようなカレン族の自己形成の過程のなかに、「部族的」類型が、「農民的」類型に変化してゆく姿を見出すのである。

ところで以上述べてきたような視点を考慮に入れて、カレン族の共時的な観察をおこなうと、まえにも述べたように、山地に住んでいるカレン族は①定着性が相対的に弱い、②社会的自己完結性が強い、③宗教的にも自足的である、④市場経済に巻き込まれていない……などの理由で、社会・文化的にはより「部族的」性格がつよい。一方、平地に住んでいるカレン族はいま記述したような「部族的」諸特徴を急速に消失しつつあり、かつて *Embree* 教授が述べた「農民」に対する古典的な特徴づけに接近しつつあるように思われる。すなわち、「農民的地域社会は文献のない社会のおおくの特徴を持っている。たとえば、緊密な地域集団、強固な親族的紐帯、環境のある神格化した側面に敬意を表して開かれる定期会合などがそれである。一方、それは単純な社会とは種々なる差異を示している。たとえば、それぞれの小農民集団は経済生活を支配し、法律を施行し、さらに近年においては国民学校での教育を要求する、よりおおきな国家の一部なのである。生活の経済的基盤は地方的要求によってのみ条件づけられていない……。農民の作った農作物は国家的要求に応じている。宗教や儀礼においては、儀礼と社会的価値観、祭りと農業の季節の単純な相関関係を複雑にするいろいろな外部的影響が存在している。種々なる偏差はあるけれども、儀礼や祭りは地域社会に固有なものではないし、またその地域社会は精神的に自足的ではない。」⁽¹⁸⁾ 平地カレン族の社会・文化的特徴はいま引用したような *Embree* 教授がえがきだした「農民」の姿と、かなり共通した基盤をもちはじめているように思われる。

語

結

ところで、カレン族における山地と平地といったエコロジーのまったくことなつた所にすんでいる二つの集団を共時的に観察し、分析した結果を發展させると、歴史的とまではいわないにしても、カレン族のこれまでたどつてきた社会・文化変容に関して、筆者なりの推論をおこなうことができる。すなわち、結論だけを端的にいうと、カレン族の大部分は、じょじょにはあるが、“部族的”状態を離脱しながら、みずからのメタモルフォーゼをおこなつて、“農民的”類型に向かつて、一步一步あるきだした“初源的農民 (emergent peasantry)”と呼ぶことができよう。

今日、カレン族がゆるやかに“農民化”の方向に向かつている背景には、その地域社会に対する都市の直接的影響が、もつぱら Mae Sarieng をはじめとして、Mae Hongson や Chiangmai のような“前産業型都市” (pre-industrial city)⁽⁶⁾に限られているからであらう。そのような所は、タイ系の言語で、Wiang と呼ばれ、商業や手工業のセンターとエリート階級の居住地としての機能しか持っていない。しかしながら、タイ国における近代化が進み、Chiangmai, Mae Hongson, Mae Sarieng のような“前産業型”都市もしくは町で、やがて近代産業が勃興してくると、事情は一変するであらう。カレン族における社会・文化変容の方向は、これまでたどつてきた道を大きく変更しなければならぬと思われる。

そのような情況が到来すると、カレン族の農業とか労働力は今日よりさらに緊密な形で市場経済の渦中に巻き込まれてゆくと考えられる。このようにして、世界各地の諸部族や原始民が現在経験しているように、“農民化”の進んだカレン族のある者は急速に“後期農民” (Post-peasantry) や一部では“企業的農民 (Farmer)”に転化するように思われる。けれども、大部分の“部族的”色彩をつよく残しているカレン族は、おそらく“農民化”の段階を飛び越えて、“企業的農民”はもちろんのこと、“後期農民”になるいとまもなく、属している村落の立

地により、ある時は都市に流出することによって、ある時は在村したまま、プロレタリアート化するのではないかと想像される。

- (1) Maine (1861)
- (2) マネルヤト (1968)
- (3) テンニヤス (1957)
- (4) Redfield (1941) p. 343
- (5) Redfield (1941)
- (6) Redfield (1934) pp. 57-59, Redfield (1941) pp. 338-39
- (7) 例えは Redfield (1960)
- (8) たんえは Marriott (1955) pp. 145-70 参照。
- (9) 柏 (1968) p. 153
- (10) 柏 (1968) p. 163
- (11) Redfield (1941) p. 361
- (12) Redfield (1953) pp. 54-83
- (13) 京都大学人文科学研究所社会人類学研究班における梅棹忠夫・中尾佐助両教授を中心とした討論による。
- (14) 神戸大学農学部高山敏弘助教授の御示唆による。
- (15) Lehman (1963) p. 1
- (16) Redfield (1953) p. 38
- (17) Redfield (1941) p. 339
- (18) Embree (1939) xvi
- (19) Sjoberg (1965) 参照。

付録一 ビルマにおけるカレン族小史

タイ国におけるカレン族の歴史は、地方史の一部に出てくる断片的な資料を除いて、組織的に書かれたものは少ない。従って、筆者も本論のなかで、残念ながら、正面から取り上げることができなかった。

ところで、タイ国におけるカレン族の歴史資料の欠如に対して、ビルマにおける情況はきわめて対照的であるといわなければならない。それというのも、カレン族は本論第一章第二節でも述べたように、ビルマにおいては数も多く、しかも、歴史の流れのなかできわめて独特な役割を果たしたからでもあろう。それについて、Truxton氏は次のように指摘している。「ビルマのカレン族は、インドやビルマにおけるイギリス植民地支配の初期から、かなり興味の対象になり、また西欧の観察者にとって立派な研究対象になってきた（そのなかには少数の学者や多数の行政官、さらに、多くの宣教師も含まれていた）。しかるに、隣接しているタイ国のカレン族については、今日に至るまで、それほど興味が示されず、まとまった研究がこころみられることはなかった。」⁽¹⁾この理由として、Truxton氏は第一には、西欧式の行政が独立国のタイ国では実施されていなかったとしている。第二の理由としては、タイ国におけるミッシュヨナリーの特権条件をあげている。

以上のような訳で、タイ国におけるカレン族の歴史を再構成することは、きわめて困難な作業であろう。今後、わずかに期待できるのは、Mae Hongson 県を中心に、泰緬国境における地方史が、北タイ語やビルマ語の資料

などによって、解明され、カレン族の歴史が多少明瞭になることであろう。

一方、ビルマにおけるカレン族の歴史は、欧文、とりわけ英文資料のなかに、かなり豊富に収録されている。たとえば、巻末にかかげた文献目録の「欧文によるカレン族関係の文献」を参照されたい。ここでは、その資料を使って、ビルマにおけるカレン族の歴史を一瞥することにしよう。本書においては、タイ国におけるカレン族が主題になっていているけれども、カレン族の主流であるビルマのカレン族の歴史の概要を知りたことも、あながち無駄なことではないであろう。

(1) Truxton (1958) p. 38

1 英領時代以前のカレン族とビルマ人の関係

カレン族とビルマ人の関係はビルマにおける歴代の王たちの年代記 *Mahayazawin* に触れられている。⁽¹⁾それは全体として、ビルマ人中心に書かれているために、正確な歴史というよりはビルマ民族の叙事詩としての性格がつよいとされている。そのため、この年代記ではカレン族とビルマ人との関係についてはあまり正確に知ることができない。しかし、これまでに欧米人によって書かれた文献資料によると、この一世紀ばかりの両民族集団の関係はきわめて不幸なものであったと伝えられている。たとえば、二〇世紀初頭におけるカレン族研究の第一人者である Harry I. Marshall 師によると、次のような説明がおこなわれている。

「定着した国の支配民族に政治的に従属しているカレン族は圧制と搾取にゆだねられていた。かれらのできることはただ憤るか時にはジャングルや人里離れた所で捕えた迷い子の敵を殺害するのがせいぜいであった。この状態がもたらす不可避な結果は相互の憎悪であった。それはさらにビルマ人側の被支配民族に対する侮蔑の感情に

よって強化され、一方カレン族のこちこちに固まった排他性は「黄金時代」が過去にあったという確信によって心の支えを与えられていた。その時代の輝ける伝来の慣習や伝統は変えられるべきではないとした。カレン族にアピールするようなビルマ人の宗教や生活はなにもなく……、カレン族の現状を改善することを期待できるものはまったくなかった。」としてゐる。⁽²⁾

以上のような見解はなにも Marshall 師に始まったことではなく、初代アメリカン・バプティストの宣教師 Adoniram Judson 師以来代々の宣教師やイギリスの植民地官吏によってとられてきた見解である。この点、たしかに英緬戦争の前夜には、カレン族とビルマ人の間に不幸な関係が存在したことは間違いない。しかしながら、それをもってカレン族とビルマ人との関係が歴史的に不倶戴天の敵であるかのように述べている欧米人の記述は正しくない。また、アジア人の間でも、同じイギリスの植民地支配に苦しんだインド人の Datta 氏⁽³⁾までが疑いもせず、この欧米人の見解を踏襲しているのは噴飯ものである。筆者の知るかぎりでは、外国人でこの点を比較的正当に評価したのは、アメリカの歴史家の Cady 教授⁽⁴⁾だけである。

カレン族とビルマ人のような山地民対平地民の関係は、タイ国その他の東南アジア諸国における歴史から類推すると、伝統的には一部で敵対感情が存在していたにせよ、全体としては、お互いに「無関心」な関係にあったのではないかと思われる。げんに、Alaungpaya 王朝（一七五五—一八八五）のもとでは、ビルマ人は山地カレン族を支配しようとはせず、平地カレン族でさえ正規の州の官吏や町役人のもとに統合しようとはしなかったとさえ伝えられている⁽⁵⁾。従って、アメリカやイギリスの宣教師や植民地官吏によって、熱心にくり返し強調されてきたビルマ人によるカレン族に対する「無慈悲」な支配という見解は一方的なものであり、うのみにすることはできない。第三者の目からみると、宣教師はそれを布教の口実に使い、イギリスは分割統治の道具に用いたのでは

ないかと思われるのである。しかしながら、カレン族が社会組織の性質上、村落以上の政治集団をつくることができず、⁽⁶⁾いたずらにアナーキーな復讐をおたがいの間でくり返していたために、ビルマ人の支配を容易に許していたことだけは間違いない。

- (1) Shaway Yoe (1963) p. 435
- (2) Marshall (1922) p. 304
- (3) Desai (1950)
- (4) Cady (1956)
- (5) Cady (1956) p. 832
- (6) Marshall (1945) p. 29

2 イギリス支配と宣教師との接触

カレン族は一九世紀中葉に至るまでは、農業のほか狩猟、漁業、機織り、竹細工などに従事していただけで、経済的には後進的であった。また政治的にも、文化的にもさして重要な民族集団ではなかった。

ところが一八一三年に前述の Adoniram Judson 師が妻とともにビルマに渡来したことは、その後のカレン族の歴史に決定的な影響を与えた。布教活動を始めた Judson 夫婦は一八二八年にビルマ人の債務奴隷になっていたカレン族の Ko Tha Byu 氏を買取り、解放した。その後、Ko Tha Byu 氏を教化し、かれを使って、カレン族の間に布教活動を開始した。しかも、その布教方法は天才的といえるほど巧妙なものであった。すなわち、欧米の宣教師や植民地官吏の説明によるとカレン族の伝説では、かつて「失われた本」が存在し、それが将来白い兄弟によって、カレン族たちに再びもたらされるであろうと伝えられていたという。この伝説を Judson 師は

自分たちの意図に結びつけ、カレン族に“失われた本”(バイブル)が今や白い兄弟(アメリカ人)によって、復活されたと強調した。そのために Ko Tha Byu 氏がバイブルをもって、はじめてカレン族の山村におとずれた時には、“失われた本”の復活に“感動”したカレン族は涙を流し、バイブルに口づけをするほどであったといわれる。欧米人によると、この“失われた本”の物語はけっしてミッシヨナリーによる創作ではないといわれている。たとえば、公平な Cady 教授でさえ、この伝説は宣教師によるねつ造ではないことを保障している。⁽¹⁾ だがわれわれから見ると、この物語はすこしできすぎているように思える。もし布教用のねつ造であるならば、まことに神をも恐れぬ行為というほかはない。

しかしながら、かれら宣教師のカレン族開化に対する貢献も大きかった。その第一は、布教の目的がおもではあったが、Jonathan Wade 師がビルマ文字を改良して、カレン語に文字を作ったことである。また、教育の分野における貢献も見逃すわけにはゆかない。このおかげで、かなりの数のカレン族は教育を受け、文盲状態から脱し、英領時代には陸軍軍人をはじめ、警察官、鉄道員、官吏、看護婦などとして、各方面で活躍した。かくして、伝統的にカレン族が持っていたビルマ人に対する劣等感をしだいに克服することができたのである。

このような過程で、注目すべきことは、カレン族はアメリカ人やイギリス人に対して、だんだん依存心をつよめてきたことである。すなわち、かれらはいつの間にか“洋魂洋才”になってしまい、現在ではビルマ人から“American Karen”とか“British Karen”と呼ばれる層が形成されてしまう。そのしりは 一八二四—二六年にかけておこなわれた、英緬戦争で見られた。カレン族は Snodgrass 少佐のひきいる英軍を支持し、ビルマ人と対決した。これに対して、ビルマ人は英国軍に協力を惜しまなかったカレン族に復讐^{たぐしゅう}をおこない、低地ビルマでは血を血で洗う闘争がくり返された。平地カレン族の村々はビルマ人の襲撃にさらされ、大部分の村が荒廃に

帰した。当時のイギリス人やアメリカ人はほとんど言及していないけれども、カレン族のビルマ人に対する暴力もかなり振るわれたように思われる。このために、低地ビルマの穀倉地帯の農業は荒れ果て、しばしば飢饉にも見舞われ、人口の減少が顕著になった。首府の Rangoon でさえ虎が出没したというのは、この時期のことである。当時、カレン族はイギリス人から援助を期待していたのであるが、現実にはその夢は破れた。そのため、かれらはアメリカのバプティスト派の宣教師たちへの依存度を増していった。宣教師たちは前に述べた Ko Tha Byu 氏を使って、イギリスの支配が及んでいる農山村を中心に活発な布教活動をおこない、カレン族の間におけるバプティストの影響力をしだいに強化していった。

一八三四年には Justus H. Vinton 師が妻の Calista とともに Moulmein に到着した。かれらはカレン語をマスターしたバプティスト派宣教師の第一号として、Moulmein から Tavoy にかけて活躍した。Vinton 師が一八四五年に Moulmein に設立した神学校は、その後におけるカレン族のキリスト教化に多大の貢献をした。

また、一八五三年には同派の Mason 師は聖書をカレン語のなかでいちばん重要なスゴー・カレンの言葉 (Sgaw Karen) に翻訳し、やうらに一八八一年には Brayton 師がポー・カレン語 (Pwo Karen) に訳し、布教活動に新しい局面を展開した。このような宣教師の努力によって、一八四〇年に Irrawaddy デルタ地方と Amberst 地方で開始された布教活動は、一八五二年になると、Rangoon だけでも一七の教会を数えるほどに成長した。なお、ローマン・カトリックはバプティストに一步遅れて布教活動に入り、Bigandet 神父により、一九四〇年にデルタ西部の Myaungmya と Bassein で布教が開始された。

ところで、このようなカレン族のキリスト教化はまったく無抵抗におこなわれたのではない。第一に、たとえカレン族をキリスト教に帰依させても、簡単にかれらの精霊信仰を終止させるわけにはゆかなかった。それとい

うのは、カレン族には、たんに、“迷信深い”といつてかたづけられない文化組織が存在しているからである。たとえば、カレン族のある家で、だれかがキリスト教徒になって、“家神”に対する儀礼から離脱すると、他の家族の成員とは鶏や豚をいっしょに食べることができなくなる。カレン族において、鶏と豚は不可欠の食糧であるところから、キリスト教化することは親子の間の共餐の機会を永久に閉ざす結果にすらなるのである。このような事実から、精霊を深く信仰している山地カレン族は宣教師につよく反発した。さらに、仏教徒になっているポー・カレン族は、ビルマ人とともに抵抗したことはいうまでもない。

また、ビルマ人の宮廷も外国人宣教師がキリスト教を布教するだけではなく、イギリス人がビルマにまたもどって来る……などと扇動することを極度に恐れていた。だが、それはビルマ人の根柢のない被害妄想ではなかった。宣教師のなかでも、バプティスト派の布教活動はかなり政治色をおびていた。たとえば、Vinton 夫妻にいたってはイギリスの支配がふたたびビルマによみがえることを自分たちで神に祈るだけに止まらず、ほかの宣教師や現地のキリスト教徒にも同様な祈禱をすることをつよく求めたのである。このような背景のもとに、一八五二年第二次英緬戦争のために Rangoon 港にイギリス軍艦がもどってくると、宣教師だけではなく、カレン族も“民族の祈り”がかなえられたとして狂喜したのであった。

第二次英緬戦争では、一部のカレン族はビルマ人のために働かされていたので、イギリス軍の被害を受けた。だが、大部分のカレン族はジャングルなどに逃げ込んで、ビルマ軍に対してゲリラ活動をしたり、イギリス軍に直接協力した。このように育成されていた両民族集団の敵対感情をイギリス人はたくみに利用し、分割統治の具に供した。そののみか、イギリスの植民地支配に忠実に協力するカレン族を手厚く保護し、モン人やビルマ人によって奪われた“カレン族の土地を”復活するために、Irrawaddy デルタや Tenasserim 地方ではカレ

ン族の低地に対する入植が広範におこなわれた。

以上のような理由から、ビルマ人はカレン族をイギリスのコロニアリズムの走狗オウゴクと考え、イギリス人が敗退した暁に報復することを公言していた。ところが、第二次英緬戦争もビルマ側の惨敗に終わると、ビルマ人はその責任のすべてを親英的なカレン族になすりつけた。狂気のようになったビルマ人は第一次英緬戦争の後と同様に、Rangoon 周辺半径数十キロメートルに及ぶカレン族の村をすべて襲撃した。家を焼きつくし、住民を殺傷し、あらゆる物を破壊した。

Rangoon を中心に荒廃した低地ビルマにおいて、Vinton 師夫妻を中心にくりひろげられた救済活動には目覚しいものがあった。もちろん、その対象となつたのは忠実なカレン族であったが、一八五二―五三年にかけては、実に五千人にもものぼるカレン族に衣食住の援助の手がさしのべられた。この結果、何千人もの入信者を獲得した Vinton 夫妻は、ビルマにおけるバプティスト・ミッションの金字塔を打ち立てたのであった。

しかしながら、Vinton 夫妻の活動はこの頃になると、外国における宣教師の活動の域を逸脱して、カレン族の間の紛争などの“裁判”をもおこないかねなかつた。ここまできると、宣教師の自主的判断を尊重するバプティスト派のポストン本部も黙視することができなくなり、Vinton 夫妻の布教活動に対する支持を中止した。

このような行過ぎはあったけれども、前にも述べたように、宣教師の功績も認めない訳にはゆかない。すなわち、キリスト教に帰依することによって、カレン族はある種の活力を得たことだけは間違いない。キリスト教化される以前のカレン族はたえず“悪霊”におびやかされていたので、自由な活動はおおいに制約を受けていた。ところが、キリスト教化されることにより、かれらは“悪霊”から完全に解放された。

また、カレン族の社会に欠如していた村落レベル以上の社会的統合をキリスト教がやってのけたことは注目に

値する。それに加えて、西欧風の近代教育をかれらの間に導入したことも、カレン族のその後の経済発展の道を開いたと考えられよう。このような発展は、劣等感にさいなまれていたカレン族に自信を与えた。かくして、カレン族の間では、多くの場合、キリスト教徒が指導者として、リーダーシップをふるったのである。

以上述べてきたようなキリスト教化によるプラス面と同時に、マイナス面も存在していたことも指摘しておく必要がある。仏教徒のおおくいるポー・カレン族の間ではあまりキリスト教の影響を受けることはなかったけれども、スゴー・カレン族の間にはキリスト教はかなりの勢いで浸透した。そうすると、一神教であるキリスト教は、単純なカレン族の間では欧米以上に強力な排他性を発揮し、仏教化への道、さらにはビルマ化への可能性を完全に閉ざしてしまう。

また、これまでのいきがかり上、カレン族のキリスト教徒はビルマ人にふたたび支配されることを極度に恐れて、イギリスのコロニアリズムを公然と支持し、その存続を願った。この結果、ビルマ人はカレン族と宣教師は結託して、ビルマの分裂を計っていると非難した。かくして、キリスト教の布教によって、仏教国ビルマは将来長期間にわたって、抜きさしならない禍根をのこしてしまったのである。

(一) Cady (1956) p. 845

(二) Cady (1956) p. 854

3 カレン族のナシヨナリズム

前述のように、カレン族はキリスト教化されることによって、村落を越えるレベルでの社会的統合、従ってまた政治的統合も進んだ。それに加えて、教育の発展などにより、しだいにカレン・ナシヨナリズムに目覚めてい

った。一八八一年には民族カレン協会 (National Karen Association) が結成され、三人のスコット・カレン族と二人のポー・カレン族がその指導に当たった。かれらはカレン族全体に、言語や宗教の差異によって分裂せず、つねに団結するように訴えた。しかしながら、本協会の主目的の裏には、イギリス政府に接近することによって、ビルマ人を牽制する意図があったようだ。

低地ビルマを征服したイギリスは一八八六年に Mandalay 王朝を完全に従属させて、ビルマ全土をイギリスの植民地とした。ビルマ人はこの歴史的事実を単なる政治的危機とだけ受け止めずに、ビルマの宗教である仏教の運命にもかかわる重大事件であると感じた。そのため、イギリス人に対するゲリラ活動を執ように続け、レジスタンス運動はビルマ平定後四年間にもわたって続けられた。この間、キリスト教徒を中心に、カレン族は積極的にイギリスの植民地支配者に協力を惜しまなかった。そのため、かれらはビルマ人から「民族の敵」として、くり返し襲撃された。また、カレン族もそのような攻撃に対して、はげしく応戦したのであった。

当時のイギリスの高等弁務官 Bernard 氏はこの二民族間の争いをたくみに利用し、分割統治の実をあげた。かれはカレン族に武器を与えて、補助警察官としてビルマ人の反乱の鎮圧に当たさせた。このように、カレン族はイギリス人の援助のもとに、ビルマ人に報復を試み、カレン族のキリスト教徒はこの国から仏教を亡ぼすチャンスとさえ考えたのであった。

イギリスのビルマ平定の翌年、植民地官吏 Sneaton 氏は有名な *The Loyal Karen of Burma* という本を出版した。このなかで、かれは「イギリス政府がカレン族の民族性を奪うことなく、文明化したり、水準を高める実験をすべきこと、また、カレン族が起源、風俗、宗教、伝統においても、ビルマ人と異なった民族であることを認めること……」⁽¹⁾を強調した。このような主旨の本書は、その後カレン族の独立や自治要求の金科玉条として、

くり返し引用され、使用された。いずれにせよ、英領ビルマ時代のカレン族はアメリカの宣教師の援助とイギリス人の保護のために、ある意味で“黄金時代”を迎えたといえよう。

一八九〇年から一九二〇年にかけては、カレン族の教育がたいへんに普及した。この頃には高等学校のレベルにまで教育が発展した。第一次世界大戦当時には実に三万五千人ほどのカレン族が小・中・高いずれかの学校に入学するようになった。これは東南アジアの山地民の水準からいうと、まことに目覚ましいことである。このように教育を受けたカレン族は教育者、官吏、軍人として、植民政府に忠実に仕えた。また、アメリカで教育を受けた San C. Po 博士は立法院のメンバーに選ばれるほどになった。

第一次世界大戦の時には、カレン族のおおくが軍隊に志願したが、実際には一部隊がイギリス軍の一翼として、メソポタミアに従軍しただけである。NK Aの指導者たちも、カレン族のこのような行動を支持し、イギリス政府への忠誠を表明した。

このような情況のもとに、一九一二年にはカレン族の側から、かれらの自治に関する試案が提出された。当時のカレン族の見解を代表して、Po 博士がビルマ南部の Tenasserim 地区に“カレン独立州”を設立することを提案した。その構想によると、“カレン独立州”はカレン族の手によって運営されるが、イギリス行政官の指導も喜んで受け入れるとした。また、それは“ビルマ連邦”（もちろん、英領の）に止まることを約束した。

Po 博士によるこの提案は、ビルマ人からは裏切り行為とみなされて、強い非難を受けただけではなく、頼りにしていたイギリス政府からも一瞥も与えられなかった。失敗の原因は Tenasserim 地区でカレン族が必ずしも多数を占めていなかったというような基本的な提案の弱点があったけれども、致命的だったことはカレン族がイギリスのコロニアリズムの本質を見抜けなかった甘さにあるのではないかと思う。“カレン独立州”の提案は、

その後 Simon 調査団が来緬した際には提出されなかった。だが、一九三一年から三二年にかけて、ロンドンで開催された円卓会議で、カレン族側から「独立州案」が再提案されたが、ビルマ人の強力な反対とイギリス側の不熱心さのために日の目を見なかった。この運動は一九三七年にビルマが英領インドから分離する時に、国民会議の二三議席中一二という少数民族最大議席を獲得するのに止まった。

(一) Smeaton (1887) p. 227

4 第二次世界大戦ならびにビルマ独立とカレン族

第二次世界大戦がぼつ発して、間もなく、日本軍がビルマに進行してくると、イギリス人—ビルマ人—カレン族の關係に潜在していた矛盾がついに爆発した。従来、親米・親英的であったカレン族はただちに連合国側に投じ、抗日活動に従事した。一方、ビルマ人はこれまでも反英感情が強いのと、戦争の初期には日本による早期独立を期待して、対日協力に踏み切った。このような状態のもとに、一九四二年にはビルマ独立軍(BIA)によるカレン族の虐殺事件があり、ビルマ人とカレン族との間に不信感をいっそうつらせた。その後も両民族集団は激しく衝突し、流血惨事を見るにいたった。この内乱は都市だけではなく、農村部にも波及したので、当初は事態を静観していた日本軍もついに鎮圧のために出動しなければならなかった。

日本の占領下においても、カレン族のおおくは地下活動を通じて、イギリスやアメリカに協力し、何人かはそのため処刑された。なかでも Salween 地区に潜入したイギリス軍の H. P. Seagrims 少佐がカレン族のゲリラ部隊を組織し、反日活動に従事したことは第二次世界大戦の秘話としても有名な物語である。

いっばう Aung San と Thakin Than Tun 両氏を中心に、悪化したビルマ人とカレン族との關係を改善す

るために、努力が傾けられた。また、かれらはそれと同時に日本軍対策にも心をくだいたのである。だが、その努力も部分的には成功したものの、全体としてはあまり見るべき成果を得るに至らなかった。このようにして、一九四五年四月、敗色濃厚な日本軍が Irrawaddy デルタ地方から撤退すると、ふたたびその地方でカレン族とビルマ人との間に混乱が発生した。同年の夏にイギリスがビルマに復帰した後も、事態があまりにも険悪なために、軍政をしいて治安確保に当たった。独立の政治過程を中心的に担ったのは、全国的基盤の上に形成された民族統一戦線である。反ファシズム人民自由連盟(AFPFL)であった。連盟は、一九四四年八月に結成を見ている。これはそれ以後の独立運動の主導権を独占し、一九四八年一月のビルマ連邦独立以後は、国家権力を排他的に占有する。⁽¹⁾

この反ファシズム人民自由連盟は少数民族問題、とりわけカレン族問題では十分な配慮を払ったとは思えない。連盟自体はけっして反カレン族的ではなかったのであるが、事前にカレン族の急激な政治化を予想できず、かれらを不当に刺激してしまった。最大の失敗は、連邦化の構想のなかで、カレン族に独立州を認めるよりも、むしろかれらを独立ビルマに同化する政策を強く打ち出したことである。

カレン族の過激派は急速に反AFPFL化し、あるいはイギリスの直接統治の継続を要求、あるいは、ラオスの如き⁽²⁾独立を要求し、ビルマ連邦加盟をきっぱり拒んだ。これは、とりわけ Irrawaddy デルタ地方に住んでいるカレン族がビルマ人との間に持った過去のにがい経験が忘れられず、将来に不安を感じたからである。

反ファシズム人民自由連盟はカレン族がこのように不穏な動きを示した後でも、カレン族に対する偏見と無理解を改めることができず、両者の関係はいたずらに悪化し、カレン族の軍事組織、カレン民族防衛軍(KND

O)は反乱に備えはしめる。⁽³⁾

独立ビルマは、一九四八年一〇月に当時の司法官の *Bar* 氏を議長として、地方自治諮問委員会を組織した。ここではモン、カチン、チン、アラカン、カレンなどの少数民族の利害の調整がおこなわれた。

この期に及んで、*C. N. U.* 首相らは中央政府とカレン族の意見の対立を認めながらも、できるだけだけの融和策を提出して、この難局を打開しようと努力した。しかしながら、同年一月にカレン族が *Temasserim, Irrawaddy* のほか三地区を含むカレン州の独立を要求する最後通告を中央政府に送るに及んで、交渉は決裂した。そして、地方自治諮問委員会が一九四九年二月に *Salween* 地区とその周辺部をカレン州として独立させるべきだとする最終答申案が出されるのを待たず、カレン民族防衛軍の武装蜂起がおこなわれた。

反ファシズム人民自由連盟はカレン民族防衛軍を非法化し、迎撃体制を整える。ところが、政府軍の相当部分を構成していたのが植民統治時代以来のカレン兵であって、かれらがかなり政府軍から離脱したり、あるいは、カレン軍の軍事技術が新造の政府軍より上であったりしたことから、政府軍は苦戦を強いられる。しかしながら、イギリスのコロニアリズムやアメリカの宣教師によって、過剰保護的に育成されたカレン族のナショナルリズムはこの期に及んでも、かれらの依頼心を克服できなかった。かれらは単独抵抗を試みることなく、チン族やカチン族がカレン族側に立って、ビルマ人との戦いに参加することを期待していた。だが、現実はそうはならなかった。

一九五一年、ビルマ政府が地方自治諮問委員会の答申に従って正式にカレン州を認めたり、また、同州が一九四四年に発足するとともに、保守派のカレン族指導者が要職に迎えられると、カレン族の反乱は一応平穏化する。しかしながら、このような中央政府の融和策にもかかわらず、カレン民族防衛軍は共産党と共同戦線を張って、レジスタンス運動を続ける。その頃の反政府活動のほぼ四分の三はかれらの手によるものだといわれている。

中央政府のクーデター後に革命評議会議長に就任した *Ne Win* 将軍もカレン族との和平に努力した。一九六

三年にはカレン民族防衛軍との間に協定をむすび、その協定は翌六四年に批准された。だが、カレン族に根深くおろされた反ビルマ的性格はその後も存続し、現在でも反乱が続いている。いまも、Salween 川を越えてタイ国側に亡命するカレン族は後を断たない。

- (1) 矢野 (1964) p. 68
- (2) 矢野 (1964) p. 78
- (3) 矢野 (1964) p. 78
- (4) 矢野 (1964) p. 78

おわりに

以上述べてきたように、ビルマのカレン族の例は、東南アジア諸国の国民形成と少数民族問題のなかでもっとも不幸な事例のように思われる。

初期の宣教師はキリスト教の布教と山地民の開化以外には、ほとんど他意がなかったのだろう。たとえば、Mason 夫人の著作の題である *Civilizing Mountain Men* ⁽¹⁾ が如実に示すように、かれらの布教に対する純粋さや熱意は疑う余地もない。しかしながら、近代ビルマにおけるカレン族の政治史を振り返ってみると、宣教師が意図したか意図しないかは別として、国境内に別の国境線を引いてしまったことは事実である。それが結果において、イギリスの「直接的、間接的に分派主義を刺激する」政策に貢献してしまったのである。このような情況のもとで、「カレン族がアメリカの宣教師を「母」と呼び、イギリス政府を「父」と呼ぶ」⁽²⁾ ようになる。この言葉ほどビルマのカレンの実態をよく表わして、またかれらの悲劇を物語っているものはない。

一九四八年、ビルマは独立し、また、一九六五年には、中央政府の手により、全外国人宣教師がビルマから追

放される。この二つの歴史的事実はビルマとカレン族の将来を考えるうえで、見逃すことのできない重大事件であると言えよう。

(1) Mason (1862)

(2) Furnival (1960) p. 22

(3) Morrison (1946) p. 30

付録二 東南アジアにおける焼畑農業

はじめに

東南アジアは北部山岳地帯の亜熱帯大陸性景観から、南部の海岸や島嶼における熱帯海洋性景観に至るまで、地理的にはたいへんに複雑な景観を呈している。この地域はまた人類の歴史の流れのなかでは、ポケット地帯であったので、一々の例外を除くと、巨大な帝国の建設を見なかった。従って、中近東におけるイスラム教圏、また西欧におけるキリスト教圏が経験したような歴史的“地ならし”がおこなわれなかったために、文化的にはひじょうに多様性に富んでいると言えよう。しかしながら、東南アジアを貫く共通性もまた見逃す訳にはゆかない。なかでも、“山地”と“平野”の問題はその重要なひとつであろう。

東南アジアのどの国でも、相対的に同質的な多数の住民は平野部に住み、国家を形成している。それと同時に、仏教（ベトナム、ラオス、カンボジャ、タイ国、ビルマ）、イスラム教（マレーシア、インドネシア）、キリスト教（フィリピン）などの世界宗教を信仰し、かれらがこれらの国と世界文化との接点になっている。

一方、東南アジア諸国の山地を中心に、かなりの数にのぼる少数民族が住んでいる。かれらは雑多な言語を話すなど、文化的統一性はなく、その上、それぞれの国家に対して政治的には完全に統合されていない場合が多い。ところで、“山地”と“平野”という自然的景観の差異は東南アジアの経済の基礎である農業のあり方を規定

している。すなわち、それは山地における焼畑農業と平野における水田稲作農業とに分けている。もちろん、これは平野部の限界地で焼畑がおこなわれたり、山地の谷間で水稻栽培がわずかながらおこなわれている事実を否定するものではない。⁽¹⁾

では、本稿で扱おうとする焼畑農業がこの地域でいかにおこなわれているか調べてみよう。

1 焼畑農業の類型

東南アジアおよびその周辺部における焼畑農業の基本形態は、雑穀型、陸稲型、根栽型の三つの類型に分類される。しかしながら、現実にはこれらの基本形態のほかに、混合型の焼畑農業が存在し、分布している。焼畑農業の研究に長年従事している地理学者佐々木高明博士の研究によると、次のように分類することができる。⁽²⁾

- (1) 陸稲卓越型 インドシナ半島の山岳地帯からマレーシアの島嶼部にかけての亜熱帯・熱帯林。
- (2) 陸稲・根栽型 フィリッピンからインドネシア島嶼部の熱帯降雨林。
- (3) 陸稲・雑穀型 雲南から台湾にかけての大陸亜熱帯・暖帯の森林地帯(温量が低いと雑穀卓越型になる)。
- (4) 雑穀卓越型 ヒマラーヤ、アッサム山地から北ビルマ、中国南部、日本にかけての東南アジア周辺部の照葉樹林帯。

- (5) 根栽型 ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアなどの南太平洋島嶼部における熱帯降雨林。

ここに見る焼畑農業の五類型のうち、東南アジア・プロパーでは陸稲卓越型と陸稲・根栽型が支配的である。またこれらの分類とは多少系列を異にするが、大陸東南アジアにおいては、けし栽培が広範におこなわれている。これはたいへんに重要な問題を含んでいるので、次節で多少立ち入って言及することにしよう。

(1) たとえばタイ国の例では Nan とか Kanchanaburi でおこなわれている。cf. Judd (1964) Stern (1965) Kunstadter (1967) 飯島 (1965)

(2) 佐々木 (1966)

2 焼畑農業の問題点

今日、東南アジア諸国の政府は程度の差こそあれ、焼畑の問題に頭を痛めている。そのうち重要な問題は次の五点に要約できよう。

1 森林の荒廃 現在までのところ、一般的に焼畑農業は経済性のある森林の外部でおこなわれてきているので、伝えられているよりは森林資源に対して実害が少ないように思われる。しかしながら、ある専門家がフィリピンのミンダナオ島の例をあげて指摘するように、一部では森林資源に被害がすでに現われ始めている。たとえば、熱帯雨林のように、植生にとって“天国”のような所ですら、森林資源は無限に存在している訳ではない。さいわい、各国政府も焼畑による森林の荒廃には注意を払い始めたので、今後さらに抜本的対策が立てられることが望まれる。これは水資源の保護のためにも大切なことである。その際には、森林地帯の“先住民族”である山地民の利益が十分に保護されなければならないのは当然のことである。

2 エロージョンとサバンナ化 焼畑農業は一般的に山岳地帯の傾斜地でおこなわれている場合が多いので、雨量の多い地域ではエロージョンが烈しい。さもなくば Imperata 属の草⁽¹⁾本がびこって、二次林が形成されてしまう。さらに、一カ所での焼畑期間が長期に渡ったり、耕作頻度が高い場合には土壌の劣悪化も進む。かくして、焼畑の跡地はしばしば農業用に再使用しにくくなる。

ビルマ北部の一部、タイ国中東部から東ラオスにかけての大陸部東南アジアの比較的雨量が少なく、乾燥した地帯では、焼畑の跡地はサバナ化して、これまた農業に再利用するのが困難になってゆく。

3 低経済性と生産の不安定性

陸稲が焼畑で栽培されると、反当り収量を玄米に換算すると、平均して四〜八斗ぐらいいしか収穫できない。これは日本の普通の畑における陸稲生産の平均反収一石二斗の三分の一〜三分の二にしか当たらない。佐々木博士の算定によると、一戸当たりの耕作面積は、現技術水準を前提とすると、一・四〜一・八ヘクタールぐらいので、人口支持力は一平方キロ当り二五〜三〇人にしかならないという。しかも、焼畑農業に限らず、水稲に比べると陸稲は早魃にきわめて弱いので、生産の不安定性はかなりおおきいと思われる。また、焼畑の可能な森林が近年減少する傾向にあるために、一カ所での連作回数が増えたり、焼畑の跡地に戻ってくる年数が短縮されたりする所も少なくないといわれる。このようにして、焼畑の土地生産性は各地で低下の傾向をたどっている。たとえば、タイ国北部の山地カレン族の間では、ここ数十年の間に、陸稲の反当り収量がじつに三分の一になってしまった。これは肥沃度の枯渇のみならず、せん虫などによる虫害、いや地など三つの原因が考えられる。しかし、真相を究明するためには、農業の専門家による本格的な研究が望まれるのである。いずれにしても、以上のような諸条件のために、近き将来東南アジアの山岳地帯では、平野部以上に急速なる食糧不足、従ってまた、人口過剰におちいり、重大な社会問題や政治問題が発生するのではないかと懸念される。

4 けしの栽培

けしはある程度冷涼な気候が必要なために、東南アジアではおもに大陸部の山岳地帯で栽培されている。国民の保健上の理由と、けしがもたらす高収益にともなう国際勢力介入を防止するために、各国政府も最近ではその対策に苦勞をしている。たとえば、タイ国においては、Sarit 首相時代の一九五九年にけし栽培禁止令が布告された。

しかしながら、ここで問題となることは山地民に高収益をもたらしていたけし栽培を禁止した場合に、いったいどのような代替作物をかれらに与えることができるかということである。このことは東南アジア各国の政府の苦慮するところである。ちなみに、けし栽培が山地民にどの程度の収益をもたらすか、タイ国政府内務省公共福祉局の調査に基づいて述べてみよう。⁽³⁾

タイ国北部の山地民は、だいたい一人当たり二分の一ライ（〇・八〜一・六反）ぐらいけし栽培することが可能である。二分の一ライしか栽培しない場合にはかなり集約的に作ることができるが、一ライ栽培する場合には、相当に粗放的になる。そのため、これらの栽培法による収量にはあまり差異がないと言われる。年平均は、生アヘンにして一人約一キログラムの収穫があると言われる。一九五八年前後には、生アヘンが一キログラム当りだいたい八百〜千バーツ（一バーツは一八円弱）していたので、中間をとって九百バーツとすると、邦貨にしてキロ当り約一六、二〇〇円になる。従って、山地民の一家の労働人口を四人平均とすると、年収が三、六〇〇バーツ、これを円に換算すると、六二、八〇〇円になる。この所得を日本の水準に比べると、あまり高収益の作物でないような印象を受けるかもしれないが、現地の経済事情のもとでは、きわめて収益率の高い農産物といえよう。タイ国北部では、谷間にある市場町でさえ、労賃は低く日当にして九〇〜一八〇円くらい、女中の賃金は三食付きで月に約千〜千百円である。かくして、けし栽培による山地民の収入が現地の水準から言っていかに高いものであるかが分かるであらう。

このため、タイ国政府では熱心にけしに代わる代替作物を探し求めているのだが、これに見合った適当な作物はまだ見つかっていない。

けしの代替作物としては、次のような条件が満たされることが必要であらう。

- (1) け、ほどではないにしても、高い経済性を持つ作物でなければならない。
- (2) 山地民の技術による粗放栽培が可能なこと。
- (3) 作物の脱穀とか調整が比較的容易で、それに特別高度の知識や農具などが不必要なこと。
- (4) 道路などの交通事情が悪く、市場までの距離が遠いので、その農産物がいたみにくく、容積も重量もあまり大きくないこと。

このようにして、け、の代替作物を開発するのは、競合する条件が少なくないために、きわめて困難な仕事である。しかしながら、山岳地帯の冷涼な気候を十分に活用できるような亜熱帯系や温帯系の作物や果樹の導入に努力が傾けられれば、あるいは活路が見出せるかもしれない⁽⁴⁾。

5 政治問題—国民形成と国境問題— 東南アジア諸国にとって、山地民などの少数民族を国民国家のネットワークの中に吸収してゆくことは、近代国家建設のために不可欠なことである。しかしながら、焼畑農業に従事している山地民は移動性が高く、人口すら正確に把握できないので、中央政府にとってもはなはだ対策が立てにくい。また、かれらには領土国家とか国民国家という感覚が欠如しているために、しばしば行政上の問題や国境問題をひきおこし、政府は手を焼く場合が多い。従って、長期的にはなんらかの形で、山地民を定着させることが必要なのである。

以上、焼畑農業の問題点について、五項目に分けて指摘をおこなってきた。このうち、最後の政治問題を除くと、すべては広義の農学に関する問題である。しかも、従来は外国人はもとより、現地の人たちにとってもあまり目立たない問題だったので、ほとんど対策が立てられていなかった。だが、東南アジアの安定を考える時には、焼畑農業に従事する山地民の問題を無視することはできない。かれらに農業技術援助の手がさしのべられ

ることがよく望まれる。

- (1) Thailand (1966) p. 31.
- (2) 渡部忠世教授の御示唆による。
- (3) Thailand (1966) pp. 34-35
- (4) ちなみに付け加えると、熱帯の人の温帯系の果実に対するあこがれは想像以上に大きい。たとえば、Chiangmai のよ
うな町では日本の山積みりんごが一個一五〇円ぐらいもするのだが、それでも買う人がある。

3 焼畑民の定着化について

これまで述べた“焼畑農業の問題点”の解決については、各国政府とも頭を痛めている。しかしながら、なんといつてもその第一歩は焼畑民の定着を促進させて、安定した農業をいとなませることであろう。

これについて、注意を喚起しておきたいことは、焼畑農業は山地民の統合された文化体系の一部であるということだ。従って、山地民をたんに物理的に移動を中止させ、定着させるだけでは十分な施策とはいえないのである。

たとえば、筆者が調査した山地カレン族の場合について具体的に説明すれば、本論でも述べたように、次のような事情を明確にすることができる。

この山地カレン族は約半世紀ほど前から“自発的”に定着化の方向に向かった。その理由は二、三考えられるが、森林の相対的不足がおもな原因であろうか。いずれにせよ、定着化に向かった山地カレン族は農業生産を維持するために、生産の比較的安定している水田稲作の技術を平地に住んでいるタイ系の住民から学んだ。そうすると、移動困難な水田の属性により、山地カレン族の定着化は決定的なものになる。また、それは元来土地所有

観念のなかつたかれらに土地所有観念を植えつける契機を与え、焼畑用の森林にすら占有権を発生させるきっかけをもつくる。

また、焼畑農業による移動性が停滞すると、long house は解体に向かう。村全体が移動して歩く必要が減少するからであろうか。現在山地カレン族は粗末ではあるけれども、北タイ人と基本的にあまり変わらないタイプの村落を形成している。

かくのごとく、山地カレン族の文化においては、焼畑農業のような文化の一部分に変化が起ると、文化全体に深刻な影響を与えずにはおかない。このような訳であるから、将来われわれがもし東南アジアにおける焼畑農業の問題解決に援助の手をさしのべる場合には、農業の技術問題とだけ割切ることなく、社会学者との協力がつよく望まれるのである。もっとも、このことはカレン族のような山地民の農業問題に限ったことではない。東南アジアのような低開発国の農民の間では、経済、社会、宗教などが未分化であるために、開発計画の実施に当たっては、自然科学者や技術者と社会学者の密接なる協力が不可欠のように思われる。

4 おわりに

これまで東南アジアにおける焼畑について述べてきたが、この研究がいろいろな理由で、ほとんど社会学者、とりわけ人類学者の手にゆだねられてきたことをここで指摘しておきたい。たとえばベトナムにおける Condo-minas 教授、フィリッピンの Conklin 教授、ボルネオの Freeman 博士にしろ、現地調査によって名著を残した学者はすべてこのカテゴリーに属している。その後タイ国で仕事をおこなった Judd 博士も農学の素養はあるけれども、本来は社会学者である。これらの仕事のうちには質的にたいへんに高く、人類学者の間では「古典的」

な本としての評価を受けているものもある。それらは社会科学者のおこなった農業研究としては、考えうる最高
のできればであることは間違いないが、著者たちが農学畑出身でないために、部分的には画竜点睛を欠くきらい
がないでもない。従って、今後は農業専門家の協力による焼畑農業の本格的調査研究、さらにはそれに基づいた
対策の立案がなされなければならないであろう。

文献目録

- 綾部恒雄(一九七二)『タイ族——その社会と文化』東京・弘文堂 三五四頁十一一頁
- ピアッテイ、ジョン(蒲生正男・村武精一訳)(一九六八)『社会人類学——異なる文化の論理』東京・社会思想社 三七四頁
- ビュツヒヤ、カール(権田保之助訳)(一九二二)『国民経済の成立』第一六版 東京・栗田書房 五一六頁
- デュルクム・E(古野清人訳)(一九四二)『宗教生活の原初形態上・下』東京・岩波文庫 上四〇四頁・下三三三頁
- デュルクム・E(井伊玄太郎・寿里茂訳)(一九四三)『社会分業論』東京・未来社 二四二頁
- 蒲生正男・大林太良・村武精一編(一九六七)『文化人類学』東京・角川書店 四八〇頁
- 姫岡勤(一九六七)『文化人類学』京都・ミネルバ書房 二三八頁
- 堀一郎(一九六八)『民間信仰』東京・岩波書店 三一四頁
- 飯島茂(一九六一)『ネパールの農業と土地制度』東京・東大出版 一三〇頁
- 同(一九六四)『タイ国北部のカレン族調査ノート』『東南アジア研究』第二卷第二号 一〇八頁―一二二頁
- 同(一九六五)『タイ国北部における山地カレン族の文化変容』『東南アジア研究』第二卷第四号 二頁―一八頁
- 同(一九六六)『タイ国西北部におけるカレン族の平地民化』『東南アジア研究』第三卷第五号 四〇頁―七一頁
- 同(一九六七)『欧米におけるカレン族文献調査の旅』『東南アジア研究』第四卷第五号 二〇九頁―二一三頁
- 同(一九六七)『カレン族の農民化過程における家族儀礼』『東南アジア研究』第五卷第二号 八〇頁―九二頁
- 同(一九六七)『カレン族問題とビルマの苦悩』『国際政治』No. 1 四五頁―五五頁
- 同(一九六八)『山地民の平地民化における二類型——Thakali 族と Karen 族の場合——』『民族学研究』第三二卷

第四号 三五二頁—三六二頁

石井米雄(一九六八)『アヌタヤ王朝の統治範圍を示す“三印法典”中の三テクスト』『東南アジア研究』第六卷第二号

一三五頁—一六四頁

同 (一九六九)『小乗仏教—戒律の救い』京都・淡交社 二五四頁

岩田慶治(一九六四)『北部タイにおける村落社会の解体と再編成過程』『東南アジア研究』第二卷第二号 二頁—二九頁

同 (一九六六)『東南アジアにおける山地民族の問題—民族の運命について—』『人間・人類学的研究』川喜田二

郎・梅棹忠夫・上山春平編 東京・中央公論社 三五七頁—三八九頁

同 (一九六六)『日本文化のふるさと—東南アジア稲作民族をたずねて—』東京・角川書店 二五〇頁

柏祐賢(一九六八)『危機の歴史観』東京・未来社 三〇二頁

川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編(一九六六)『人間・人類学的研究』東京・中央公論社 五八二頁

大林太良(一九六四)『タイ国北西部の Lavo 族と Sgau-Kaena 族の調査』『民族学研究』第二八卷第二号 二二三頁—二

二九頁

同 (一九六四)『北西タイ、ラワ族の経済生活実書—ことに焼畑耕作について—』『一橋論叢』第五一巻第六号

七〇二頁—七〇六頁

同 (一九六六)『北西タイ、カレン族の宗教』『一橋論叢』第五三巻第二号 一七一頁—一八九頁

大野徹(一九六九)『ビルマにおけるカレン族の独立闘争史(その一)』『東南アジア研究』第七卷第三号 三六三頁—三九

〇頁

太田常蔵(一九五九)『ビルマにおけるカレン人の説話』『民族学研究』第一八巻 三一五頁—三二三頁

ピア・アスマーン・ラーチャトン(河部利夫訳)(一九六七)『タイ農民の生活』東京・東京外大A A 研 一四四頁

佐々木高明(一九六七)『焼畑農業の研究とその課題』『文化人類学』蒲生正男・大林太良・村武精一編 東京・角川書店

一六三頁—一八九頁

テンニエス・F (杉之原寿一訳) (一九五七) 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト上・下』 東京・岩波書店 上二二五頁、
下二二六頁

友杉孝 (一九六九) 「ムーベンリッサンカプトング——北部タイの米作農村」 『アジアの農村』 大野盛雄編著 東京・東大出版会 一九九頁—一九一頁

上山春平 (一九六九) 『照葉樹林文化』 東京・中央公論新書 二二四頁

矢野暢 (一九六四) 「ビルマの政治的不安定性(1)——一九五八年の軍部選挙管理内閣の成立を主題に——」 『法学論叢』
第七四卷第四号 六二頁—一二二頁

Benedict, Paul K. (1942) "Thai, Kadai, and Indonesian: A New Alignment in Southeastern Asia," *American Anthropologist*, 4, pp. 576-601.

Bereman, Gerald D. (1961) "Himalayan Rope Sliding and Village Hinduism: An Analysis," *Southeastern Journal of Anthropology*, Vol. 17, No. 4, pp. 326-42.

Bohannan, Paul (1963) *Social Anthropology*. New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc. viii + 421 pp.

Britanica Inc. (1968) *Encyclopaedia Britannica*, Vol. 13. Chicago etc.: William Benton Publisher. 1139 pp.

Burling, Robbins (1963) *Rengangari—Family and Kinship in a Garo Village*—Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press. 377 pp.

_____ (1965) *Hill Farms and Padi Fields—Life in Mainland Southeast Asia*. New Jersey: Prentice-Hall Inc. viii + 180 pp.

Deutsch, Karl W. et al. (ed.) (1963) *Nation-Building*. New York: Atherton Press. xiii + 167 pp.

- Embree, John F. (1939) *Sage Mura: A Japanese Village*. Chicago: Univ. of Chicago Press. xxxi+354 pp.
- Fisher, Charles A. (1967) *Southeast Asia*. London: Methuen. xix+831 pp.
- Fox, Robin (1967) *Kinship and Marriage*. Harmondsworth: Penguin Books Inc. 271 pp.
- Freeman, J. D. (1955) *Iban Agriculture—A Report on the Sifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. London: Her Majesty's Stationery Office. xii+148 pp.
- _____ (1964) "The Iban of Western Borneo," *Social Structure in Southeast Asia*. (George P. Murdock, ed.). Chicago: Quadrangle Books. pp. 65-87
- von Fürer-Haimendorf, Christoph (1960) "Caste in the Multi-Ethnic Society of Nepal," *Contributions to Indian Sociology*, IV. Paris & The Hague: Mouton & Co. pp. 12-32.
- _____ (1967) *Morals and Merit: A Study of Values and Social Controls in South Asian Societies*. Chicago: Univ. of Chicago Press. xii+239 pp.
- Furnival, J. S. (1960) *The Governance of Modern Burma*. New York: Institute of Pacific Relation. xi+154 pp.
- Hallet, H. (1890) *A Thousand Miles on An Elephant in the Shan States*. Edinburgh & London: William Blackwood & Sons. 484 pp. +xxxvi.
- Iijima, Shigeru (1964a) "Ecology, Economy, and Social System in the Nepal Himalayas," *The Developing Economies*, Vol. II, No. 1. Tokyo: The Institute of Asian Economic Affairs. pp. 91-105.
- _____ (1964 b) "Hinduization of a Himalayan Tribe in Nepal," *Kroeber Anthropological Papers*, No. 29. Berkeley: Univ. of California. pp. 43-52.
- Keyes, Charles F. (1970) *New Evidence on Northern Thai Frontier History*. (unpublished mimeographed paper). 29 pp.

- Khanakammakan Prachasamphan lae Ekasan Kanchatungan chalong 25 Phuthasatwat (1957) *Changwat Mae Hongson*. Bangkok. 24 pp.
- Leach, E. R. (1964) *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London : G. Bell & Sons, Ltd. xx+324 pp.
- Lehman, F. K. (1963) *The Structure of Chin Society*. Urbana: Univ. of Illinois Press. xx+244 pp.
- _____ (1967) "Ethnic Categories in Burma and the Theory of Social Systems," *Southeast Asian Tribes, Minorities, and Nations*. (Peter Kunstadler ed.). Vol. 1. New Jersey : Princeton Univ. Press. pp. 93-124.
- Maine, Henry Sumner (1861) *Ancient Law: Its Connection with the Early History of Society, and its Relation to Modern Ideas*. New York : Dutton. vii+415 pp.
- Mair, Lucy (1963) *New Nations*. London : Weidenfeld & Nicolson. 235 pp.
- Mariott, McKim (1955) *Village India: Studies in the Little Community*. Chicago : Univ. of Chicago Press. xix+269 pp.
- Mizuno, Koichi (1968) "Multihousehold in Northeast Thailand" *Asian Survey*, Vol. VIII, No. 10, pp. 842—52.
- Murdock, George P. (1949) *Social Structure*. New York : MacMillan Co. xvii+387 pp.
- _____ (1960) *Social Structure in Southeast Asia*. New York : Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, Inc. ix+182 pp.
- Parsons, Talcott (1966) *Societies: Evolutionary & Comparative Perspective*. New Jersey : Prentice-Hall, Inc. 120 pp.+ viii.
- Pendelton, R. L. *et al.* (1962) *Thailand: Aspects of Landscape and Life*. New York : Duell, Sloan, & Pearce. xv+321 pp.
- Potter, Jack, May N. Diaz & George M. Foster (1967) *Peasant Society: A Reader*. Boston : Little Brown & Co. ix+453 pp.

- Redfield, Robert (1930) *Tepoztlán—A Mexican Village: A Study of Folk Life*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 270 pp.
- _____ (1934) "Culture Change in Yucatan," *American Anthropologist*, xxxvi, No. 1. Reproduced in *Human Nature and the Study of Society*. (Margaret P. Redfield ed.). pp. 160-72
- _____ (1941) *The Folk Culture of Yucatan*. Chicago & London: Univ. of Chicago Press. xxiii+416 pp.
- _____ (1953) *The Primitive World and Its Transformation*. Ithaca: Great Seal Books. xiii+185 pp.
- _____ (1956) *Peasant Society and Culture*. Chicago: Univ. of Chicago Press. vii+162 pp.
- Rüstow, Alexander (1950) *Ortsbestimmung der Gegenwart—Eine universalsgeschichtliche Kulturkritik—*. Erlenchach-Zürich: Eugen Rentsch Verlag. 360 pp.
- Steward, Julian H. (1957) *Theory of Culture Change*. Urbana: Univ. of Illinois Press. 244 pp.
- Sjoberg, Gideon (1965) *The Preindustrial City—Past and Present—*. New York: The Free Press. xii+353 pp.
- Tambiah, S. J. (1968) "Literacy in a Buddhist Village in North-East Thailand," *Literacy in Traditional Societies*. (Jack Goody ed.). Cambridge: Cambridge Univ. Press. pp. 85-131.
- Thailand (1964) *Climatological Data of 10 Years Period 1951-1960*. Bangkok: Meteorological Department, Office of the Prime Minister. 52 pp.
- _____ (1966) *Report on the Socio-Economic Survey of Hill Tribe in Northern Thailand*. Bangkok: Department of Public Welfare, Ministry of Interior. 81 pp.

(歐文に於るカンン族関係の文献)

- Andersen, J. P. (1923) "Some Notes about the Karens in Siam," *Journal of Siam Society*, Vol. XVII, pp. 51-58.
- Bagge, Arthur H. (1866) "Report of the Settlement of the Siam and Tenasserim Boundary," *Selections for the Records*

- of the Government of India.* Foreign Dept., No. L (i.e. 50). Calcutta: Foreign Dept. Press.
- Baldwin, J. W. (1949) "The Karens in Burma," *Journal of Royal Central Asiatic Society*, Vol. 36, pt. 2, pp. 102-13.
- Blackwell, George E. (1954) *The Anglo-Karen Dictionary*. Rangoon: Baptist Board of Publications. 543 pp.
- Blundell, E. A. (1836) "An Account of Some of the Petty State Lying North of Tenasserim Province," *Journal of Asiatic Society* (Bombay), Vol. 58, pp. 601-25, 688, & 707.
- Brown, Nathan (1852) "Comparative Vocabulary of the Sgan and Pwo Karen Dialects," *Journal of American Oriental Society*, Vol. 4, pp. 319-26+pl.
- Brown, R. J. R. (1900) *Elementary Hand Book of the Red Karen Language*. Rangoon: The Superintendent, Government Printing. 84 pp.
- BuMu, Thra (1942 & 1952) "The Karen Drum," *The Karen Baptist Convention*. Rangoon: The Karen Baptist Convention.
- Bunker, Alonzo (1902) *Soo Thah, A Tale of the Making of the Karen Nation*. London & Edinburgh: Oliphant, Anderson & Ferrier. 280 pp.
- _____ (1910) *Sketches from the Karen Hills*. New York et al.: Fleming H. Revell. 215 pp.
- Burma (1885) *Report on the Settlement of the Karen Hills Subdivision, for the Year of 1884-85*. Rangoon: Government Press. 8 pp.+vii
- _____ (1914) *Burma Gazetteer: Toungoo District*. Vol. A. Rangoon: Office of Superintendent, Government Printing. iv + 118 pp.
- _____ (1915) *Morrison, W. S. Burma Gazetteer: Henzada District*. Vol. A. Rangoon: Office of Superintendent, Government Printing (1963 reprint). 259 pp.+v.

- (1917) Page, A. J. *Burma Gazetteer: Pegu District*. Rangoon: Office of Superintendent, Government Printing. (1963 reprint). 132 pp. + vii.
- (1929) *Selected Correspondence of Letters issued from and received in the Office of the Commissioner, Tenasserim Division for the Years 1825-26 to 1842-43*. Rangoon: Office of Superintendent, Government Printing & Stationary. 280 pp. + a table.
- (1947) The Secretary of State of Burma, *Burma, Frontier Areas Committee of Enquiry*. London: His Majesty's Stationary Office. 24 pp.
- (1961) *Burma Gazetteer: Salween District*. Vol. A. Rangoon: Government Printing & Stationary Office. (reprint). 14 pp. + a map.
- Burmah Baptist Missionary Convention (1873) *Minutes of the (7th & 8th) Annual Meetings*. Rangoon: American Mission Press. 86 pp. & 76 pp.
- Buxton, Aubrey (1948) "Karens into the Breach," *The Spectator*, No. 6271. London: The Spectator. P. 303
- (1949) "The Fate of the Karens," *The Spectator*, No. 6294. London: The Spectator. P. 184
- Cady, John F. (1956) "The Karens," *Burma*, Subcontractor's Monograph, HRAF-37, Vol. II. New Haven: HRAF Inc. pp. 823-98.
- Candassena, Chandr (1923) "The Red Karens" (E. J. Walton tr.), *Journal of Siam Society*, Vol. XVII, No. 2, pp. 74-79.
- Carpenter, C. H. (1883) *Self-Support: History of the Bassein Karen Mission from 1840 to 1880*. Boston: Franklin Press. xxi + 426 pp.
- Coloquhoun, Archibald Ross (1885) *Amongst the Shans*. London: Field & Tuer; Simpkin, Marshall & Co. etc. iv + 392 pp.

- Cooke, J. *et al.* (1967) "Phlong (Two Karens of Amphoe Hod)", *Phonemes and Orthography in Eight Marginal Languages of Thailand*. (W. A. Smalley ed.). Chiangmai : Overseas Missionary Fellowship. pp. 149-97.
- Cross, E. B. (1854) "On the Karens," *Journal of the American Oriental Society*, Vol. IV, pp. 290-316.
- Croschwaite, Charles (1912) *The Pacification of Burma*. London : Edward Arnold. xii+355 pp.
- Cunning, Edward Dirom (1893) *In the Shadow of the Pagoda*. London : W. H. Allen. 362 pp.
- Desai, W. S. (1950) "The Karens of Burma," *India Quarterly*, Vol. VI. New Delhi : Indian Council of World Affairs & London *et al.* : Oxford Univ. Press. pp. 246-82.
- Din, Sau Tha (1947) "The Karen People," *Man*, 47, pp. 148-50.
- Enriquez, C. M. (1924) *Races of Burma*. Calcutta : Govt. of India, Central Publication Branch. 80 pp. + xiii + a map.
- Gilmore, David C., (1911) "Karen Folk-lore—the Legend of Taw-Me-Pa," *Journal of Burma Research Society*, Vol. I Pt. II. pp. 36-42, 75-82.
- Goodman, Robert J. & Edward Kersch (1954) "The Karen Problem in Burma," *World Affairs Interpreter*, Vol. XXV, No. 1 (April, 1954). Los Angeles : Univ. of Southern California. pp. 74-78.
- Gyi, Maung (1913) "From Karenni," *Journal of Burma Research Society*, Vol. III, Pt. I, pp. 72-75.
- Hackett, William Dunn (1953) *The Pa-o People of the Shan State, Union of Burma* Unpublished Ph.D. Dissertation, Cornell Univ.. vii+736 pp.
- Hamilton, James W. (1963) "Effects of the Tai Market on Karen Life," *Practical Anthropology*, Vol. 10/5 (Sept.-Oct., 1963), pp. 209-215.
- _____ (1965) *Ban Hong : Social Structure and Economy of a Pwo Karen Village in Northern Thailand*. Unpublished Ph.D. Dissertation, Univ. of Michigan (Univ. Microfilms 66-6614).

Haudricourt, A. G. (1942-45) "Restitution du Karen Commun," *Bulletin de la Société Linguistique*, Vol. 42. Paris. pp. 103-11.

_____ (1953) "A Propos de la Restitution du Karen Commun," *Bulletin de la Société Linguistique*, Vol. 49, No. 138.

Paris. pp. 129-32.

Houghton, Bernard (1894) "Short Vocabulary of Red Karen," *Journal of Royal Asiatic Society*, Vol. I, pp. 29-35.

Hinton, Peter (ed.) (1967) *Tribesmen and Peasants*. Chengmai: Tribal Research Centre. III + 117 pp.

_____ (1969) *The Pwo Karens of Northern Thailand—A Preliminary Report*—. Chengmai: A Report to the Tribal Research Centre. xxix + 65 pp.

Hughes, C. K. (1943) *Karens of Burma*. Westminster: The Society for the Propagation of Gospel in Foreign Parts.

Iijima, Shigeru (1965) "Cultural Change Among the Hill Karens in Northern Thailand," *Asian Survey*, Vol V, No. 8, pp. 417-23.

_____ (1970) *Socio-Cultural Change Among the Shifting Cultivators through the Introduction of Wet Rice—A Case Study of the Karens in Northern Thailand*—. Memoirs of the College of Agriculture, Kyoto Univ., No. 97, 41 pp.

India (1908) *Imperial Gazetteer of India*. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing. Vol. V-XXVI

_____ (1865) O. T. Cutter. *Journal of Salween Surveying Expedition and Report of the Karene Mission*. Calcutta: Military Orphan Press. 80 pp. + a map.

Kaufman, Hans E. (1966) "Das Karen—Problem in Birma und Thailand", *Bulletin of the International Commission for Urgent Anthropological & Ethnological Research*, No. 8, pp. 51-56.

Keyes, Charles F. (1969) *Tai-Tribal Relations in a Frontier District of Thailand: A Preliminary Report*. (unpubl-)

shed mimeographed paper). 60 pp.

K. N. U. (1948) "Karens Pledged to Non-Aggression," *New Times of Burma*. Rangoon, July 27, p. 2

Kunstadter, Peter (1965) *The Lua' (Lawa) and Karen Hill Peoples of Northwestern Thailand*. Princeton Univ. (unpublished mimeographed paper). 33 pp.

_____ (1966) *Irrigation and Social Structure: Narrow Valleys and Individual Enterprise*. The paper prepared for the Eleventh Pacific Science Congress, Tokyo. 14 pp.

_____ (ed.) (1967) *Southeast Asian Tribes, Minorities and Nations*. New Jersey: Princeton Univ. Press. 2 Vol. xiii + 902 pp.

_____ (1968) *Socio-Cultural Change Among the Upland Peoples of Thailand: Lua' and Karen—Two Modes of Adaptation*. The paper presented at the International Congress of Anthropological & Ethnological Sciences, Tokyo. Sept. 1898. 10 pp.

_____ (1969) *Ethnographic Research on Upland Karen Community of Mae Umlong Noi (Karen designation Lay Kawkey)*. Report to the National Research Council of Thailand: An Outline of Anthropological Research 1966-69. 43 pp.

_____ (1970) *Subsistence Agricultural Economics of Lua' and Karen Hill Farmers of Mae Sarieng District, Northwestern Thailand*. The paper prepared for the Symposium on Shifting Cultivation & Economic Development. 61 pp.

Langham-Carter, R. R. (1947) *Old Moulmein*.

Law Yone, Edward M. & David G. Mandelbaum (1950) "Pacification in Burma," *Far Eastern Survey*, Vol. XIX, No. 17 (Oct. 11, 1950). New York: American Institute of Pacific Relations. pp. 182-87.

- LaBar, Frank M. *et al.* (1964) *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. New Haven: HRAF Press. x+288 pp.
- Lehman, F. K. (1966) *Report of a Preliminary Survey of the Position of the Kayah (Red Karen) of Thailand*. (unpublished mimeographed paper). 14 pp.
- Lewis, James Lee (1924) *The Burmanization of the Karen People: A Study in Racial Adaptability*. Unpublished M. A. Dissertation, Univ. of Chicago. 163 pp.
- Logan, J. R. (1854) "On the Ethnographic Position of the Karens," *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Vol. II. Singapore: Jacob Baptist. pp. 364-90.
- Loo Shwe, Tra (1962) *The Karen People of Thailand and Christianity*. (typescript) n. p.
- Lowe, James (1850) "The Karen Tribes or the Aborigines of Martaban," *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Vol. IV. Singapore: Jacob Baptist. pp. 413-23.
- Lowis, C. C. (1910) *The Tribes of Burma, Ethnographical Survey of India*, Burma No. 4. Rangoon: Office of the Superintendent, Govt. Printing. 111 pp.+ii+a map.
- Luce, G. H. (1959) "Introduction to the Comparative Study of Karen Language," *Journal of Burma Research Society*, Vol. XLII, Pt. I (June 1959), pp. 1-18.
- Luther, Calista V. (1880) *The Yintons and the Karens*. Boston: W. G. Corbell, Mission Rooms. 251 pp. +illus.
- MacGowan, D. J. (1851) "Notice of the Karens," *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Vol. V. Singapore: Jacob Baptist. title page+pp. 345-53.
- MacMahon, A. R. (1876) *The Karen of the Golden Chersonese*. London: Harrison. 423 pp.+v+a map.
- _____. (1893) *Far Cathay and Farther India*. London: Hurst & Blackett. XII+340 pp.
- Marshall, Harry I. (1922a) *The Karen People of Burma, A Study of Anthropology and Ethnology*. Columbus: Ohio

Univ. Press. v + 329 pp.

_____ (1922 b) "The Use of the Bronze Drum in Siam," *Journal of Burma Research Society*, Vol. XXII, Pt. I, pp. 21-22.

_____ (1927) "Karens: an Element in the Melting Pot of Burma," *Southern Workman*, Vol. 56, Hampton, Virginia:

The Hampton Normal & Agricultural Institute. pp. 26-33.

_____ (1929) "Karen Bronze Drums," *Journal of Burma Research Society*, Vol. XIX, pp. 1-14.

_____ (1945) *The Karens of Burma*, (Burma Pamphlets No. 8), London, pp. (2) + 40 + pl 1.

_____ (1947) *Naw Su, A Story of Burma*. Portland, Maine: Falmouth Publishing House. 351 pp.

Mason, Eleanor (Mrs.) (1877) *The Mountain Karen Colony in Toungoo*, Burma. Rangoon: Albion Press. 23 pp. + illust.

Manson, Francis (1858, 1866, 1868) "Karen Religion, Mythology, Physical Characteristics, Dwellings, etc.," *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 34 (1858), Vol. 35 (1866), & Vol. 37 (1868).

Manson, Mrs. (L. N. R. ed.) (1862) *Civilizing Mountain Men, Sketches of Mission Work among the Karens*. London:

James Nisbet & Co. 384 pp. + vii.

Manson, Francis (Ripley, H. J. revised) (1877) *The Karen Apostle, Memoir of Thah-Byu*. Boston: Gould, Kendall, & Lincoln. 108 pp.

Maung, Maung (1952) *The Karens in Burma*. London: Eastern World, Vol. VI, No. 2, pp. 10-12.

McLeod, W. F. & D. L. Richardson (1869) Copy of Papers relating to the Route of Captain McLeod and the Route of Dr. Richardson on his Fourth Mission to the Shan Provinces of Burma. London, pp. 147 + map.

Mitton, G. E. (ed.) (1936) *Scott of the Shan Hills*. London: John Murray. 348 pp. + xii.

Morrison, Ian (1946) *Grandfather's Longlegs*. London: Faber & Faber. 239 pp.

O'Riley, E. (1857) "Notices on the Karene, The Country of the Kaya, or Red Karens," *Selections from the Records of the Government of India* (Foreign Department), No. XXIV (1858), Calcutta : John Gray, "Calcutta Gazette" Office. pp. 25-51.

_____ (1858) "Journal of a Tour in Karen Nee," *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, NS, Vol.

II. Singapore : Jacob Baptist. pp. 364-457.

Palmer, John Williamson (1856) *The Golden Dagon*. New York : Dix, Edward & Co. x+311 pp.

Po, Shan C. (1928) *Burma and the Karens*. London : Eliot Stock. x+94 pp.

Purser, W. C. B. (1911) *Christian Mission in Burma*. Westminster : Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 246 pp. + xvi + a map.

Rhodes, Dennis E. (1959) "The First Karen Dictionary," *Journal of Burma Research Society*, Vol. XLII, Pt. II, pp. 29-30.

Saw, Loo Shwe (1950) *The Karen in Thailand and the Baptist Convention*. Rangoon : Linn Press, 2 nd ed.

Scherman, Lucian u. Christine (1922) *Im Stromgebiet des Irrawaddy*. München-Neuberg : Verlag Oskar Schloss. 132 pp.

Scott, J. G. (1906) *Burma, A Hand Book of Practical Information*. London : Daniel O'Conner. x+527 pp. + a map.

_____ (1932) *Burma and Beyond*. London : Gayson & Fayson. 349 pp.

_____ (1922) "Among the Hill Tribes of Burma—An Ethnological Thicket," *The National Geographic Magazine*,

Vol. XLI, No. 3, pp. 293-321.

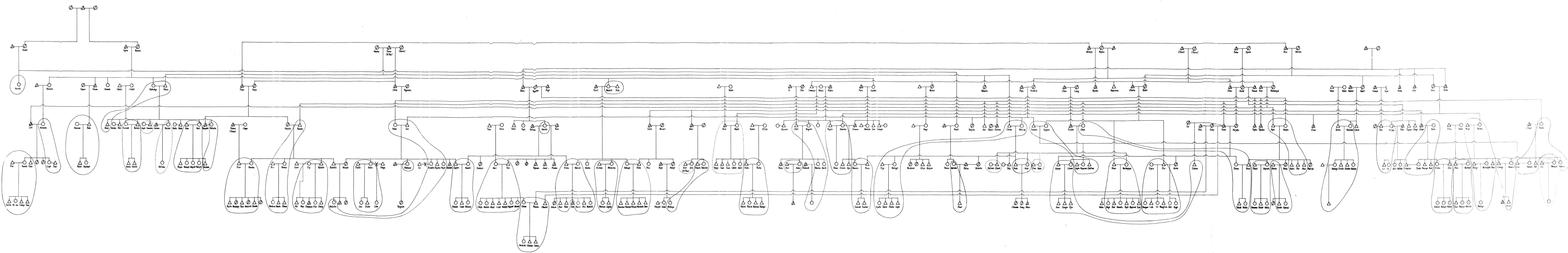
Seidenfaden, Erik (1963) *The Thai People*. Bangkok : The Siam Society. 169 pp.

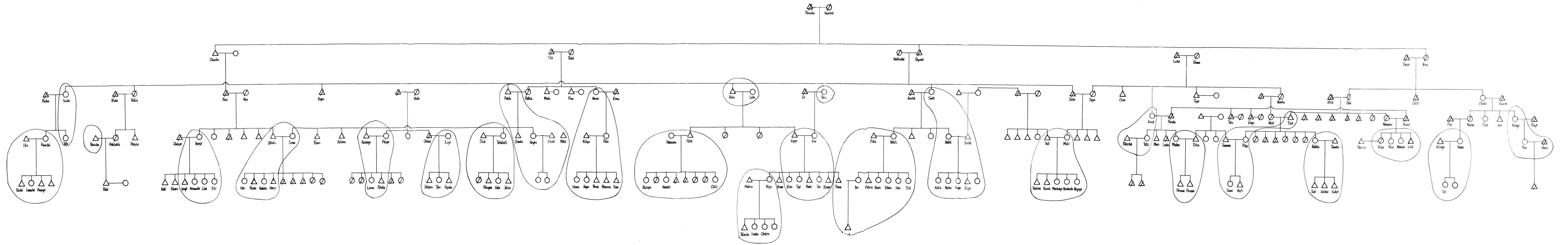
Sein, U Mya (1953) "The Karens," *The Guardian*. Rangoon. No. 1, pp. 9-10.

- Shaffer, Robert (1955) "Classification of the Sino-Tibetan Languages," *Word*, Vol. 2, pp. 94-111.
- Shaway, Yoe (1963) *The Burman: His Life and Migrations*. New York: W.W. Norton & Co. Inc. xxvi+609 pp.
- Smeaton, Donald M. (1887) *The Loyal Karens of Burma*. London: Kegan Paul, Trench & Co. 264 pp.
- Stern, Theodore (1965) *Research upon Karen in Village and Town, Upper Kraue Noi, Western Thailand*. (unpublished mimeographed paper). 15 pp.
- _____ (1968 a) "Ariya and the Golden Book: A Millenarian Buddhist Sect among the Karens," *Journal of Asian Studies*, Vol. XXVII, No. 2, pp. 297-328.
- _____ (1968 b) *The Cult of Local "Lord" among the Karens*. A paper delivered at the 67th Annual Meeting of the American Anthropological Association. Seattle, Washington.
- Tadaw, Saw Hanson (1959) "The Karen of Burma," *Journal of Burma Research Society*, Vol. XLII, Pt. II (Dec.) pp. 31-40+3 maps. 9 pp.
- Taylor, L. F. (1956) "Account of the Ethnographical and Linguistic Survey of Burma," *Journal of Burma Research Society*, Vol. XXXIX, Pt. II, pp. 159-75.
- Temple, Richard C. (1906) *The Thirty-Seven Nats*. London: W. Griggs vi+71 pp.+v.
- Thet, Kyaw (1955) "Cultural Minorities in Burma," *The Guardian*. Rangoon. Vol. 2, No. 7, pp. 9-13.
- Tin, Gyi (1926) "Report on the Original Settlement Operations in Labutta Township of Myaungmya District," *Season 1924-5*. Rangoon: Government Printing. 64 pp.
- Tinker, Hugh (1961) *The Union of Burma*. London: Oxford Univ. Press. 424 pp.+xiv+a map.
- Tongkham, Song Saeng (1964) *Demonology among the Karens*. Unpublished Th.B. Thesis. Chiangmai: Thailand Theological Seminary. 36 pp.

- Trotman, F. E. (1917) *Burma, A Short Study of its People and Religion*. Westminster: The Society of Propagation of the Gospel in Foreign Parts. 151 pp. + viii.
- Truxton, Addison S. (1958) *The Integration of the Karen People of Burma and Thailand into their Respective National Cultures*. Unpublished Master's Thesis, Cornell Univ. ix+123 pp.
- Tulloch, T. Cromarty (1946) "The Karens in the War in Burma," *Asiatic Review*. London: Westminster Chambers, Vol. XLII, No. 151, pp. 248-50.
- United Nations (1967) *Report of the United Nations Survey Team on the Economic and Social Needs of the Opium-Producing Areas in Thailand*. Bangkok: Nai Chaleo Chuntarasup, 144 pp.
- U. Tin (1954) "Our Youngest Brother, the Kayah," *The Guardian*. Rangoon. Vol. 1, No. 9 (July 1954), pp. 28-30.
- U Zan, Comp (1968) *History of Thai-Karen Evangelical Work* (Beny Gyant tr.). Mae Sarieng.
- V. K. H. (1954) "Eighty-sixth Baptist Convention," *The Guardian*. Rangoon. Vol. 2, No. 1, p. 8.
- Wade, Jonathan & Kau Too (1847-50) *Thesaurus of the Karen Knowledge*. Tavoy: Karen Mission Press. 4 Vols.
- Walton, E. J. (1922) "The Yang Kalo' (Karieng) or White Karens," Translation of a paper received from Chiengmai in answer to the Society's Questionnaire, *Journal of Siam Society*, Vol. XVI, Pt. I, pp. 39-46.
- Wayland, Francis (1853) *A Memoir of the Life and Labours of the Rev. Adoniram Judson, D. D.*. London: James Nisbet & Co. (2 Vols.). Vol. II, iv+418 pp.+ a table.
- West, George A. et al. (1933) *Jungle Folk*. Westminster: Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts. xi+83 pp.
- Winston, W. R. (1892) *Four Years in Upper Burma*. London: C. H. Kelly. 266 pp.+xii+a map.
- Wylie, Macleod (1859) *The Gospel in Burmah, The Story of Introduction and Marvellous Progress among the Bur-*

- nese and Karens*. London : W. H. Dalton. 439 pp. + vii + a map.
- Young, Gordon (1961) *The Hill Tribes of Northern Thailand*. Bangkok : The Siam Society. xiv + 92 pp. + 14 pls.
- Younghusband, G. J. (1888) *Eighteen Hundred Miles on a Burmese Tat*. London : W. H. Allen & Co. pp. (4) + 162.
- (——) *God's Work among the Karens*, Tracts Relating to Mission 1843-75.
- (1888) *Burma and its People*. London : T. Woolmer. 32 pp.
- (1948) "The Karens," *New Times of Burma*. Rangoon. (June 20 1948). 4 pp.
- (1964) "Burmese makes peace with the Karen Rightists." *Washington Post*, (March 13, 1964), 20 pp





Tharrawaddy (地方)97~98
 Thaton (地方)29
 Thonburi (地方)216
 Thoungyeen (地方)43~44
 Tonglem (村)198~199, 202
 Toungoo (地方)29
 タイ国7, 16, 19~20, 22, 28~29, 53
 ——中部73
 ——北西部35
 ——北部16~17, 20, 30, 35, 41, 53,
 73, 92, 101, 261, 269
 ——西北部53
 ——東北部201
 ——のシベリア31, 51, 53
 泰緬国境29, 32, 43
 台湾76, 291

東南アジア (諸国周辺部) ...7, 126, 288,
 290, 292

U

雲貴高原20
 雲南省7, 16, 18~19, 76, 291

V

ヴェトナム7, 19

X

Xo Loklo (サルウィン川)27

Y

Yain Sa Lin (古代都市)37

L

Lampang (ランパン) ……11, 12, 20, 29
 Lamphun (ランブーン) ……20, 29, 35,
 100~101, 157
 Lannathai……………12, 35, 45, 95
 Lolo Klo (イラワジ川) ……27
 ラオス ……7, 16, 17, 18, 19, 29, 30, 65, 230,
 293

M

Mae Et Ki (村) ……105, 197
 Mae Han (村) ……164, 185, 194, 199, 221
 Mae Ho (村) ……48~49, 63, 197
 Mae Hongson ……16~17, 29, 31~34, 36,
 45, 53, 90, 92, 213~214, 244, 272, 274
 Mae Khong (川) ……22, 27
 Mae Lanoi (村) ……50
 Mae Lep (村) ……221
 Mae Nan (川) ……12
 Mae Papai (村) ……157
 Mae Ping (川) ……12
 Mae Salap (村) ……194, 199
 Mae Sarieng (Meh Salin) ……6, 31~35,
 39, 40, 42, 44~47, 49~51, 53~54,
 67, 83~84, 86, 89~90, 101, 106, 112
 ~115, 119, 122, 148, 161, 184, 197,
 209, 216, 221, 231, 236, 244, 253, 261,
 272
 Mae Top (村) ……105, 185, 221
 Mae Yuam (Meh Nium, Ménium)
 ……31, 34, 40, 41, 43, 135, 231
 Maenam Chao Phraya (川) ……11
 Main Loongyee (Hmine Long-gyee)
 ……34, 37, 42~44, 106
 Maulmein (Moulmein) ……29, 37, 43,
 45, 279
 Mergui (地方) ……29
 Mon Saenjai ……207
 Mūang Pai ……92, 97
 Mūang Thai (タイ国) ……19
 Mūang Yuam ……34
 Myaungmya (地方) ……29, 279

マレー……………73
 マレーシア……………7, 76
 マレーシアの島嶼部 ……291
 ミクロネシア……………73, 291
 南太平洋島嶼部……………23, 291
 メコン川水系……………30
 メラネシア……………73, 291

N

Nan……………12, 16~17, 29
 日本……………76, 291
 ネパール・ヒマラーヤ ……18, 89

P

Papun (町) ……47, 236
 Pegu (地方)……………36, 92
 Pegu-Yoma (地方) ……29
 Phetchabun (Petchaboon)(県) ……16, 207,
 213, 214
 Pitsanulok (県) ……16
 Prae (県) ……12, 16, 29
 Prome (地方) ……29
 Pulomolo (地方) ……207
 Pwo Klo (メコン川) ……27
 ポリネシア……………73, 291
 フィリッピン ……7, 73, 76, 291, 292

R

Rangoon ……46, 281

S

Salween (サルイン) (地方, 川) ……27,
 29, 31, 45, 54
 Shan (シャン) 州 ……16~17, 19, 43
 シャン州南部……………30
 シャン高原……………20
 Shwegin (地方)……………29

T

Tak ……16, 29, 32, 207, 213~214, 220
 Takam (村) ……199
 Tavoy (地方) ……29, 279
 Tenasserim (地方)……………280, 287

地名索引

A
 Amberst (地方)……………279
 Assam (アッサム州) ……19, 55, 76, 291

B
 Ban Hong (村名)……………157
 Ban Hue Dok (調査村) ……6, 157
 Ban Pe (村)……………221
 Ban Pon (村)……………44, 112, 120, 199
 Bangkok (バンコク)…21, 35, 41, 45, 53,
 100~101, 195, 204, 215~216, 226
 Bassein (地方)……………29, 279
 Boluang (地方) (高原) ……46, 48~49
 ビルマ……………7, 28~31, 33~34, 44, 73, 106,
 170, 281
 — 国境……………96
 — 北部……………16, 18, 76, 291, 293
 — 低地……………278~279, 281
 ボルネオ西部 ……58, 95

C
 Chan Kom (村)……………259
 Chiengdao (地方) ……12, 220
 Chiangmai (Zimmé: チェンマイ)…6, 11
 ~12, 16~17, 20, 29, 33, 36, 47~48,
 54, 95, 100~101, 195, 197, 206~207,
 213~214, 272
 Chiengrai (チェンライ) ……12, 16~17,
 20, 29, 207, 213, 220
 Chompon (県)……………29
 Chonburi (県)……………29
 中国南部……………76, 291

D
 Doi Chiengdao (山)……………207
 Doi Khun (山) ……193~194
 Doi Mussur (地名) ……207

Dzitas (町の名)……………259

H
 Henzada (地方) ……29
 Hod (地方) (町) ……33, 46~47, 84, 101
 Hti Kani (平地の調査村) ……5~6, 36,
 38, 45, 56, 61, 63, 65, 67, 105~107,
 109, 111~117, 119~120, 122~124,
 135, 140, 144, 157~158, 161, 164, 171
 ~172, 176~178, 185, 194, 197~199,
 202, 221, 223, 225~226, 229, 244,
 247, 250, 255
 Hti Seh Meh Ywa ……27
 Hti Topa (山地の調査村) ……5~6, 33,
 36, 38, 45, 49, 56, 61, 63, 65, 67, 73, 79
 ~80, 83~84, 87~89, 91~95, 99,
 101, 112, 115, 122~124, 135, 157~
 158, 164, 167, 170, 172, 179, 193~
 194, 197, 221, 225
 ヒマーラヤ ……18, 76, 291
 ヒマーラヤ山脈 ……7

I
 Irrawaddy (川) ……27, 280, 286~287
 Irrawaddy デルタ地方 ……279
 インドシナ半島……………76, 291
 インドネシア……………7, 76, 291

K
 Kachin (カチン) 州 ……16, 19
 Kanchanaburi (県) ……29, 53, 159
 Karennee (国: 州) ……42~43
 Kawthule (コートレー) 州 ……29
 Kon Yuam (村) ……231, 244
 海南島……………19
 カレン州……………29
 カンボジヤ……………7, 30
 広西省チウワン族自治区……………19

N	
Nu, U	287
P	
Pablo	105, 122
Phruksasri, Wanat	211
Po, San C.	284
Pomohe	99, 101, 123~124
R	
Radcliffe-Brown, Alfred R.	258
Rama 5 世	100
Redfield, Robert	186, 197, 258~260, 266, 270
Richardson, D. L.	37, 42
S	
San, Aung	285
Sarit, Thanarat	184, 293
Seagram, H. P.	285
Seidenfaden, Erik	181
Shafer, Robert	29
Siki	122
Simon 調査団	285

Smeaton, D. M.	283
Snodgrass 少佐	278
Stern, Theodore	67, 159~160
Steward, Julian H.	257
佐々木高明	73, 291

T

Tambiah, S. J.	201
Thakin Than Tun	285
Thoo-the-Thoma	36
Tönnies, Ferdinand	257~258
Truxton, Addison S.	205, 274

V

Vinton, Justus H.	279~281
------------------------	---------

W

Weber, Max	258
Webster, David	41
Worchun, Phyatep	100

Y

Young, Gordon	12
Younghusband, G. J.	39

人 名 索 引

A

Andersen, J. P. ……91~92, 182

B

Bau 議長 ……287
 Bigandet 神父 ……279
 Brayton 師 ……279
 Burling, Robbins ……8, 55

C

Cady, John F. ……276, 278
 Calista (Vinton) ……279
 Childe, Gordon ……257
 Coloquhoun, Archibald R. ……36~37, 39
 ~42, 50

Condominas, Louis ……297
 Conklin, H. ……297
 Cushing 博士 ……38

D

Damrong 親王 ……41
 Desai, W. S. ……276
 Dharmmakittisophon, Phra ……213
 Dhitsavath, Prasit ……207, 213
 Durkheim, Émile ……127, 257~258

E

Embree, John F. ……271

F

Freeman, J. D. ……95, 104, 297
 Fürer-Haimendorf, C. von ……118

G

Geddes, William R. ……210

H

Hallet, H. S. ……36~39, 41, 43~44, 50, 92
 Hamilton, James W. ……66
 Hinton, Peter ……210
 Htaw Meh Pa ……26~27
 堀一郎 ……191

I

石井米雄 ……215, 217
 岩田慶治 ……9, 20~21, 92, 97, 126

J

Judd, Lawrence C. ……297
 Judson, Adoniram ……276~277

K

Keyes, Charles F. ……35, 46, 49, 216
 Ko Tha Byu ……277
 Kunstadter, Peter ……34~35, 67, 145,
 230

L

Leach, E. R. ……23, 27, 127
 Lehman, Frederic K. ……27, 67, 268~269
 Lewis, James L. ……97
 Luce, G. H. ……29

M

Maine, Henry Sumner ……257~258
 Marshall, Harry I. ……30, 92~93, 96, 98,
 100, 148, 169~170, 181, 199, 275~
 276
 Marx, Karl ……257
 Mason, Francis ……279
 Murdock, George P. ……67

218

Tukpa (祈禱).....152
 le type collectif (集合的類型)258
 le type individual (個人的類型) ...258

V

village house.....93

W

Wat (寺院).....194, 201, 267
Wiang (都市).....101

X

Xeko (司祭役)155
Xek'na (*Xe*: 刃物, *K'na*: 子孫) ...153
Xemaxe (*Xe*: 刃物, *Ma*: おこなう,
Xe: *Oxe* のこと)153
Xu (焼畑).....73

Y

Ya (カレン族)28, 73
Ya hai (焼畑).....73
Yadoti (大幅布).....101
Yan (カレン族)28
Yang (カレン族)28
Yao (揺族: ヤオ族)16, 18, 21
Yinbaw (カレン族の一族).....30
Yuanization (北タイ化)254~255
Yuan (北タイ人)35
Yumbri (ユンブリ族).....17
Yunzaleen (古代の王国)36
Yuwa (最高神)200

Z

Zayein (カレン族の一族)30

Peguan (Mon) 族 ……36
P'go Goma 儀礼 ……155
P'go Oxa ……155, 157
 Phansit 木材会社 ……46, 48~49
 Phi 信仰 ……126
Phi Tong Luang (黄色い葉の精霊) ……17
Pobu K'la 儀礼 ……141~143
Poongyee (僧侶) ……40
 post-peasantry (後期農民) ……272
 preindustrial city (前産業型都市)
 ……272
Puchoda 儀礼 ……139
Pugi Ko (Dam Hua) ……199
Pusalā (Pusasa, Pukacha : 行者) ……186,
 193
 P'wo-Karen (ポー・カレン族) ……6, 30,
 38, 66, 116, 147, 157, 159~160, 189,
 194, 226, 280, 282

R

Rana (ラナ族) ……118
 Redfield 理論 ……261
 Resident commissioner (常駐高等
 弁務官) ……100

S

Sabi (食台) ……133
Sakasi (Chakasi) 儀礼 ……178
Saoti Saodin Saomüang ……188, 191
Sapga (宗教的指導者) ……61, 80, 87, 95,
 99, 101, 120~121, 161~163, 169, 179
 —*Hti Boko* ……136~138
 scale (規模) ……65
 secularization (俗化) ……62, 129, 270
Sepoko 儀礼 ……134, 143~144
 Sgaw-Karen (スゴー・カレン族) ……6,
 30, 279
 Shan (ジャン人) ……23
 Sho (カレン族の一族) ……38
 social structure (社会構造) ……127
 sociétés organisés (組織社会) ……258
 sociétés segmentaires (環節社会) ……258
Songkrān (清水祭) ……194~195, 197~

199, 200
 status symbol (地位の象徴) ……113
Suan (畑地) ……112
Sue-dok (一種の木の葉) ……138, 143, 161,
 198

T

Taple (Puchoe-ti-song) ……120
Tadakwa (三等親) ……70
Tadamo (祭壇) ……130
Taduxo (血縁集団) ……94
 Tai Khün (タイ・ターン族) ……22
 Tai-Lu (タイ・ルー族) ……20~22
 Tai-Yai (タイ・ヤイ族) ……20~22
 Tai Yuan (タイ・ユアン族) ……17, 22~
 23, 50, 83
 Talain, Talaing (Mon : モン族) ……36
Talē Koti 儀礼 ……143
Talo taklelesukukō (外部財産) ……69
Talu Atu (祭壇) ……143
Talupo 儀礼 ……161
Talutaphadu (村落) 儀礼 ……117, 120,
 159, 161, 173, 180, 187, 189, 266, 271
 —*Da* (祠) ……161~163, 190
Tapacho 儀礼 (祭壇) ……130, 132, 139
Tasē (天の神) 儀礼 ……130~131, 134,
 143
Tatamo 儀礼 ……131
Taung ya (焼畑) ……73
 Taungthu (トンソー・カレン族) ……30
Taxo taxo ladapo (内部財産) ……69
 technical order (技術的秩序) ……269
 Thai (Tai : タイ人 : タイ族) ……19~23
 Thaiization (タイ化) ……222, 254~255
 Thakali (タカリー族) ……89
Thama Charik (仏法移動布教団 :
 法の巡歴) ……213, 215, 217, 224
Tham rai (焼畑) ……73
Th'waw (long house : 村) ……93
To K'cha Da K'cha ……139
 Tribal Research Centre ……204~205,
 209~210, 212, 224
Tuchao (僧侶) ……40, 174, 198~199, 216,

Kin müang (食邑)41
 KNDO (カレン民族防衛軍) ...286~287
Koe (北タイ語でいう *Puchoe-Kên*)
120
Kromakan42
Kwe Bu K'la 儀礼140~141
Kyong (僧院)40

L

Ladang (焼畑)73
 Lamphun 王朝17, 95
 Lahu (ラフ族)16, 18, 21, 28, 73
 Lao (ラオ族)116, 201
 Lawa (ラワ人)17~18, 28
Liang Kao 儀礼143
Liang Phi Chaoti Chaodin Chao-
müang (村落儀礼)161, 187
Liang Phi Müang Phi Pai (灌溉儀
 礼)136
Liang Phi Pünyā (“家族儀礼”)265
 Lisu (リス族)16, 18, 21, 28~29, 73
 Local Lord (土地神)159~160
 Lolo (ロロ族)21
 long house...36, 56, 72, 90~93, 95~100,
 102, 123~124, 167, 183, 261
Loy Kraton194
Lu Hti Boko(灌溉儀礼) ...130, 136~137
Lume (火の神)130~131

M

Mae Sarieng35~51, 54
 Magar (マガール族)118
Mahayazawin 年代記275
 matrilineal (母系的)67
 matrilineal extended
 family (母方居住的・母系制拡張
 家族)55
 matrilineal nuclear family (母方居
 住的夫婦家族)56
 Meo (苗族: ミャオ族)16, 18, 21,
 28, 73
 Blue——16
 Gua M'ba——16

White——16
Meteko (祭壇)187
 minimal extended family (最少拡張
 家族)56, 71
 moiety (半族)55
 Mon (モン族)28
 moral order (倫理的秩序)159, 165,
 266
 Moso (モソ族)29
 Moulmein279
Myosa (食邑: *Kin Müang*)41
Myotsa (食邑: Town-eater)41

N

NKA (National Karen Association:
 民族カレン協会)283~284
Nache (Chakasi) 儀礼178
Nai Amphoe (郡長)45
Nat (Phi) 信仰126
 Newar (ネワール族)118
Nikhom (公共福祉施設)209, 220
 Njo (ニョ族)20
Nyang (カレン族)28

O

Obuko 儀礼132, 140
Okphansā (出安居)194
Oxe (“家族”)儀礼72, 117, 142, 145~
 148, 150, 154~155, 159, 165, 173,
 176, 178, 180~182, 184~185, 189,
 264
 ——*Chuko* 儀礼 ...147, 151, 154~158,
 165, 174, 183, 185, 190, 264
 ——*P'go* 儀礼147, 155~158, 165,
 174, 185, 190

P

Pa Chao (仏陀)200
Pachotāh-Pobu 儀礼131~132, 140
 Padaung (パタウン族)30
Pahmeko 儀礼129
Pakanyo (カレン族の自称)28
 Parochialization186

Dapudaweh (一等親) ……70
Deu (long house の部屋) ……93
 directed change (指導された変容) ……
 226, 268
 directed socio-cultural change (指
 導された社会・文化変容) ……204, 220
 disorganization of the culture (文
 化の組織破壊) ……270
Doi (山) ……201
 —*Kham* (金の山) ……163, 190
Dopuweh (“家族”): matrilineal group
 (母系親族集団) ……55~56, 66, 70~
 72, 144, 146~147, 149~150, 153~
 155, 159, 165, 176, 178, 183, 261, 264
Dosudā (犠牲執行役) ……162
Dotkwa (二等親) ……70

E

emergent peasantry (初源的農民) ……272
 enculturation ……230
 extended family (拡張家族) ……57

F

farmer (企業的農民) ……272
 folk society (民俗社会) ……259
 from holy day to holiday (聖日か
 ら休日へ) ……197

G

Garō (ガロ族) ……55
 Gemeinschaft (ゲマインシャフト) ……258
 Gesellschaft (ゲゼルシャフト) ……258
 Gurung (グルン族) ……118

H

Hiko (宗教的指導者) ……99
Hō 族 (雲南系中国人) ……21
Ho Ko K'cha (地の神) ……139, 142
Hta (= *Uta* 歌) ……27
Hti Kani 村 ……64, 105~121, 134~144,
 233
Hti K'cha (水神) ……136, 138
Hti K'cha Ko K'cha (超自然の神:

水と大地の神) ……117, 129, 131~
 132, 142~143, 159~160, 163, 165~
 166, 177, 187, 189~190

Hti Topa 村 ……32, 64, 73~102, 129~134

I

Iban (イバン族) ……58, 95, 146
 identity ……145, 165
 individualization (個人化) ……63, 270

J

Jingpaw 族 (カチン族の一部) ……29

K

Kae Ban (村長) ……95, 99, 101~102, 119,
 124~125, 182, 216
Kae Müang Kae Pai ……136
Kamnan 地区長 ……102
Kanyo ……28
Kaophansā (入安居) ……194
Kapi (魚などの調味料) ……138
Kareang (カレン族) ……28
Karen (カレン族) ……4, 17, 19, 21, 24, 26,
 28~30, 42, 44, 46, 50, 53, 76, 90, 92~
 93, 96~97, 114~116, 118, 123~124,
 126, 132~133, 136, 147, 165, 168, 171
 ~172, 176~177, 199~200, 229, 257,
 261~262, 265, 267, 272, 275
 —*Yain* (野性のカレン族) ……38, 44
Karenni (カレンニー族) ……30, 38
Karenic (カレン語群) ……29
Karieng (カレン族) ……28
Kaya (カヤ族=カレンニー族) ……30
Khahabodi (名望家) ……42
Kha Haw (カホー族) ……17
Kha Kaw (*Khakaw*: カコー族) ……19
Kha Mu (*Khamu*: カムー族) ……17, 19,
 28
Kha Htin (*Khahtin*: カティン族)
 ……17, 19
Khon Müang (北タイ人) ……17, 20
Khon Thai (タイ人) ……20
Kichu (もしくは *Kisu*) 儀礼 ……140, 179

外国語事項索引

A

- AFPFL (反ファシズム人民自由連盟)
 ……286~287
- Akha (アカ族) ……18, 28, 73
- Alaungpaya (王朝) ……276
- Alochino* (料理の指導役) ……162
- Ambilineal(非系的:双系的) ……67, 72, 104
- American Karen ……278
- Amphoe* (郡, 郡役場) ……31, 45, 102, 124
- Apko* (儀礼用の鶏) ……136
- Aple (Puchoe-ti-sam)* ……120
- Austroasia (オストロアジア) ……8, 17, 19
- Austronesia (オストロネシア) ……8
- avatar* (化身) ……186

B

- Benchamabophit (寺院) ……213, 215
- Bernard (高等弁務官) ……283
- Bgha (Phi Punya)* (家神:祖霊) ……60, 67,
 117, 145~148, 150, 152~153, 158~
 159, 165, 174, 176, 178~183, 192, 264
 ~266, 270, 280
 —信仰 ……181, 194
 —O (家神に食べられること) ……155
- Bghai (カレン族の一族) ……30
- Bhote (ボテ族) ……89
- BIA (ビルマ独立軍) ……285
- Blaw: Blo* (集会場) ……72, 91, 183
- bilek family* ……104
- Boabu* 儀礼 ……143
- Boachi* 儀礼 ……139~140
- Bozu* 儀礼 ……129~130
- Bombay-Burmah Corporation ……45~46
- Border Patrol Police (国境警察) ……218
 ~221, 224
- Brè (カレン族の一族) ……30
- British Karen ……278

Bu K'la (稲魂) ……129, 132, 140~141,
 143

Bwè (カレン族の一族) ……30, 147

C

- Chakasi* ……148, 158, 180
 —儀礼 ……176, 178~179, 181, 183,
 185, 190, 193, 264, 267, 270
- Changwat* (県) ……105
- Chao* (王) ……95
 —*müang* (国主=地方長官) ……41
- Chaoti Chadin Chaomüang* ……191
- Che Che (Chakasi)* 儀礼 ……178
- Chedi (Tat)* (仏塔) ……40, 161, 194, 198
 ~199
- Chetri (カースト) ……118
- Chieng* (町) ……21
- Chiangmai 王朝 ……12, 17, 34
 —大学 ……209, 224
- Chin (チン族) ……29, 268~269
- Chopino (Oxe)* 儀礼の一部 ……151~
 153, 156
- Chuko (Oxe-)* 儀礼 ……154
 —*Goma* 儀礼 ……154~155, 190
 —*Oxa* 儀礼 ……157, 190
- Chulalongkon 大帝 ……21, 35~36
- clan (氏族) ……55, 118, 146
- cognatic 型 (親族組織) ……67
- corporate group (自律集団) ……55, 104,
 146, 165, 192, 264
- corporation aggregate ……58
- cultural core (文化の核) ……80, 128

D

- Dam Hua* (旧正月の行事) ……199, 202~
 203
- Damuza* (悪霊) ……142, 151, 281
- Dapo* (祭壇) ……174~178

——の品種	80
——の連作	84
裏作小麦	207
リス族 (Lisu)	16, 18, 21, 28~29, 73
リーダーシップ	124, 282
リンガフランカ	226, 231~232, 236~237, 244, 253, 269
林業労働	42
隣接村落	171
倫理規律	146, 181
——の源泉	182
倫理的秩序 (moral order)	159, 165, 266
——の維持	165
——の基礎	264
ル	
ルー族 (Lu)	21

レ

歴史資料	34, 274
歴史的展開	20, 22
レジスタンス運動	283, 287

ロ

労働投下	169
労働力	114, 123, 272
——の商品化	89, 115, 265
老齡尊重の原理	156
ロロ族 (Lolo)	21
ロング・ハウス (long house)	36, 56, 72, 90~93, 95~100, 102, 123~124, 167, 183, 261
——の解体・崩壊	98~99, 167, 262
——の社会構造	93

村神……………188～190, 192
 ——的性格……………160, 166
 ——に昇格……………191
 ——の進出……………191

メ

メ・サリアン (Mae Sarieng) ……31～51
 ——で流通していた貨幣……………34
 ——の自然条件……………31～33
 ——の社会的条件 (歴史) ……33～49
 ——の19世紀以前の状態……………34
 ——の現状……………50～51

モ

文字……………200～201, 218, 223, 268～63
 もち米……………20, 23, 25
 モールメン・ビルマ林業会社……………43
 Moulmein に設立した神学校……………279
 モン・クメール語系……………8
 モン系……………46
 文部省……………219～221, 224

ヤ

ヤオ族 (揺族 : Yao) ……16, 18, 21, 73
 焼畑 ……12, 16, 69, 75, 79, 82, 84～85, 121, 129, 168
 ——経済……………263
 ——候補地……………69, 79
 ——の収穫期……………82
 ——の準備……………80
 ——文化……………172
 ——民の定着……………296
 ——用の土地……………171
 焼畑農業 ……9, 23, 53, 73, 76, 80, 83, 91, 96～97, 106, 122, 128, 136, 168, 170, 174, 261, 265, 267, 290, 292
 ——が衰微した原因……………83
 ——に関する儀礼……………129～134
 ——の衰退……………83
 ——の停滞……………97, 262, 267
 ——の問題点……………292
 ——の類型……………73, 291
 野菜……………17, 89, 112

野性カレン族……………38, 92
 野性動物……………45
 山と平野……………53
 山の神……………79

ユ

ユアン王国……………35
 ユアン語 (北タイ語) ……45, 216
 ユアン族 (Yuan) ……35
 結 (ゆい)……………111
 結納金……………61

ヨ

洋魂洋才……………278
 養子……………132
 ——縁組……………58
 四つ足の動物……………174

ラ

ラオ人 (Lao) ……116, 201
 ラフ族 (Lahu) ……16, 18, 21, 28, 73
 ラウ語……………226, 230, 255
 ラワ族 (Lawa) ……17～18, 28, 35, 38, 42, 50, 83, 90, 106, 116, 122, 225～226
 ——の王朝……………17, 35
 ——の村……………37
 ラングーン (Rangoon) ……46
 ——放送……………46
 Lamphun (王朝) ……17, 95
 ——の年代記……………36

リ

陸稲……………17, 112, 129, 293
 ——根栽型……………76, 291
 ——栽培……………83～84, 121, 132
 ——雑穀型……………76, 291
 ——の反当収量……………293
 ——卓越型……………291
 ——卓越型焼畑農業……………71, 76
 ——と水稲の総収量……………85
 ——の収穫……………77, 132～133
 ——の播種……………80

平地文化	194
平地民	9, 19, 53, 176, 182~183, 194
——化	4, 174, 179, 187, 255
——系の行者	193
——族	18
——との密接な接触	88
——の生活空間	268
——文化	135, 202
変化のラグ	266

ホ

ポー	
——・カレン語	279
——・カレン族 (P'wo Karen)	6, 30, 38, 66, 116, 147, 157, 159~160, 189, 194, 226, 280, 282
防御 (long house の)	93
豊穰を約束する女神 <i>Pibiyo</i>	134
ホー族 (Hō)	21
母系	
——原理	149, 153, 156, 158
——原理の優先	152
——社会	99
——集団	165
——親族集団 (matrilineage: <i>Do-puweh</i>)	66, 70, 72, 149~150, 153, 155, 159, 176
——的 (matrilineal)	67, 72
母語	255
——の学習過程	253
準	232, 253
祠 (<i>Talutaphadu Da</i>)	161~163, 190
木造のしっかりした	188
補助警察官	283
ボテ族 (Bhote)	89
掘り棒	77, 80, 84
本格的行政	226
本物の仏教徒	176~177, 194, 197

マ

マイノリティー (少数派)	176
町	259
末子 (娘) 相続的傾向	69, 71

末梢の市場	123
麻薬	206
マラヨ・ポリネシア語系	8
マンダレー王朝	283

ミ

未婚の男女	60
水神 <i>Hti K'cha</i>	136, 138
水と大地の神 <i>Hti K'cha Ko K'cha</i>	117, 129, 131~132, 142~143, 159~160, 163, 165~166, 177, 187, 189~190
水祭り (<i>Songkrān</i>)	195, 197, 199, 202
身分 (status)	258
——より契約へ	258
ミャオ族 (苗族: <i>Meo</i>)	16, 18, 21, 28, 73
民族	
——移動	26
——カレン協会 (National Karen Association)	283
——集団	19~20, 116~117, 171, 199~200
——的な葛藤	38
——の地域的配置	20
——の敵	283
——分布	18
民俗社会 (folk society)	259

ム

むこ	183
娘村	263
無畜農業	167
無肥料栽培	84
村	
——氏神	191
——の社会組織	98
——の成員間の連帯性	189
——の選出した首長	124
——の総代	119, 162
——の長老	61, 91, 93, 147
——のリーダーシップ	102
——人の母語	252

—的文化……………202
 —的編成……………257
 —的要素……………268
 —の類型……………270
 豚……………71, 87, 112~113, 181
 —の犠牲……………157, 174, 177, 179, 184
 —の飼育……………59
 物価の変動……………47~48
 仏教…23, 62, 126, 174, 194, 199, 201, 214, 218, 267, 283
 —化……………176, 190, 194, 282
 —界……………212, 268
 —教育……………215
 —教義……………215
 —教義書……………215
 —教団……………215, 217, 220
 —儀礼……………49, 194, 199, 201
 —系宗教儀礼……………178
 —, 国王, 民族……………214
 —国ビルマ……………282
 —賛歌……………198
 —寺院……………46, 174, 193, 215, 268
 —的宗教生活……………176
 —的秩序……………217
 —徒…9, 29, 174, 194, 200, 214, 268, 280, 282
 —の運命……………283
 —の影響……………30
 —の祭日……………214
 —の導入……………267
 —の布教……………204, 212, 224
 —普及活動……………268
 —普及計画……………215
 —文化……………174, 176
 —文明……………200, 267~269
 仏像……………176
 仏陀……………40, 200
 —の絵……………177
 仏壇……………175~176, 194
 —状の祭壇 *Dapo*……………177
 —*Dapo* の導入……………174
 仏塔 (*Chedi* または *Tat*)…40, 161, 194, 198~199, 202

物品税……………102
 仏法……………214
 —移動布教団 (*Thamma Charik*)……………213, 215, 217, 224
 —布教……………213
 不動産……………58, 71, 114, 123
 —税……………102
 部落神……………192
 —地域神……………192
 部落連合……………99
 —の解体と消滅……………96, 99
 フランスとイギリスの植民地主義……………35
 プロレタリアート……………273
 分割統治……………276, 280, 283
 文化圏学説……………26
 文化
 —的多様性……………7~8
 —的なたが……………267
 —的媒介……………223
 —の核 (*cultural core*)……………80, 128
 —の構造的変化……………200
 —の山地型……………9
 —の深層……………147
 —の組織破壊 (*disorganization of the culture*)……………270
 —変容……………257
 分派主義……………288

△

平行現象……………192
 閉鎖的集団……………95
 平地カレン族…4~5, 24~25, 38, 71, 115, 117, 122~124, 128, 134~136, 144~145, 147, 157, 160~161, 166, 171~172, 174, 176, 182, 187, 226, 232, 253, 255, 268~269, 276
 —における言語……………229
 —の一戸当たり平均人口……………58
 —の家屋……………116
 —の社会組織……………166
 —の水田農業……………110
 —の村落……………65, 105
 平地の村……………116

バプティスト	41, 276
——派の宣教師	279
——・ミッション	281

ヒ

比較社会学的研究	259
非カレン系民族集団	116
非カレン的性格	143
ビク(僧侶)	215
被支配民族	275
非常勤の村神	190~191
非スゴー・カレン族	226
非タイ系山地民	219
非タイ系住民	30, 226
非タイ系少数民族	254
非タイ系民族(集団)	21, 205
火の神(Lume)	130~131
非閉鎖的集団	95
病気	147~149, 169
標準タイ語	213, 219, 222, 226, 231~232, 244, 269
病虫害	79
漂泊の生活様式	38, 92, 96~99, 123
漂泊の焼畑農業	261
肥沃度	293
開かれた社会	25, 66
開かれた文化	9~11
肥料	79
ビルマ	147, 195, 213, 268, 274
——化	29
——化を閉ざしてしまう	282
——側に出荷(チーク材の)	46
——側の資料	34
——軍に対するゲリラ活動	280
——独立	285, 288
——独立軍(BIA)	285
——のカレン族	5, 93, 147, 159, 274
——のジャン人	38
——の分裂	282
——年代記 Mahayazawin	275
——風の寺院	46
——風の僧院	40
——文化の衰退傾向	231

ビルマ語	45~46, 226, 230, 244, 255
——とカムー語	233
——とカムー語の相関関係	234
——と北タイ語の相関関係	237
——の仏教教義書	179
ビルマ人	28, 46, 50, 116, 225, 276, 280
——とカレン族との間の不信感	285
——とカレン族の矛盾爆発	285
——に対する劣等感(カレン族)	278
——の支配	277
——の襲撃	278
——の無慈悲な支配	276
——を牽制	283
ビルマ連邦	284
——加盟	286
——共和国	29
広い世界との接触	171
広い地域組織	189
貧富の差	144

フ

フィールド	221
——・ワーク	6, 35, 211
封鎖性(山村の)	117
夫婦家族	57, 149
夫婦型の家族形態	58
ブエ・カレン族(Bwe-Karen)	147
福祉事業	213
父系社会	99
部族(tribe)	20, 25, 146, 186, 259, 261, 270
——社会	259
——神	192
——的	4, 189
——的社会	23
——的社会体制	21
——的社会編成の解体	188
——的状态	272
——的性格	22, 271
——的タイ族	20, 23
——的秩序	266
——的伝統	20
——的统一	21

——公共福祉局植民部……………207
 ——公共福祉局山地民課……………220
 ナショナルリズム……………21, 206, 224

ニ

二次林の形成……………292
 日常生活……………146
 日常品……………48, 219
 二等親……………70
 日本軍……………121, 285
 入貢……………95, 100
 ——先……………101
 ニョー族 (Njo)……………20
 鶏……………71, 87, 113, 181
 ——の骨によるうらない……………148

ネ

熱帯(性)降雨林……………7, 76, 291
 熱帯大陸性盆地気候……………31
 熱帯林……………32, 76
 年間現金総所得……………88
 年間降水量……………32~33
 年間農業祖所得……………88
 年長者優先の原理……………152~153

ノ

農業……………272
 ——改良普及活動……………224
 ——技術……………265
 ——指導……………219
 ——所得の低下……………168
 ——生産物……………265
 ——生産力……………113, 122
 ——の技術問題……………297
 ——労働……………82
 農耕
 ——儀礼……………71, 81, 104, 128~144,
 164, 265~266
 ——形態……………106
 ——シーズン……………129
 農作業……………81, 132
 農作物……………115
 ——の騰貴……………48

農産物……………47
 ——の商品化……………265
 農繁期……………82, 199
 農民 (peasantry) ……25, 186, 200~201,
 259, 261, 270~271
 ——化……………4, 174, 176, 184, 187, 272
 ——型に再編成……………257
 ——社会……………123, 185, 201, 259~260
 ——的……………4, 189
 ——の特徴……………203
 ——的類型……………200, 270~272
 のろい……………181

ハ

ハイウェー……………33, 85
 排他的……………117
 ばくち……………25
 畑作……………50, 80
 ——物……………50, 112
 畑地 (Suan)……………112
 発展段階……………257, 261
 初穂……………141
 母方居住的……………232
 ——家族……………159
 ——結婚形態……………65
 ——夫婦家族 (matrilocal nuclear
 family)……………56
 ——母系制拡張家族 (matrilocal
 matrilineal family)……………55
 バランス・オブ・パワー……………10
 反英感情……………285
 犯罪……………181
 反政府活動……………287
 半族 (moiety)……………55
 パーター……………123
 ——一神教……………126
 半定着的独立家屋……………124
 半定着的焼畑農業……………261
 反日活動……………285
 半漂泊的生活様式……………124
 半漂泊的性質……………208
 反ファシズム人民自由連盟 (AFPFL)
 ……286~287

通時的観察4

テ

定着224

- 化123, 207, 296
- カレン族38
- 性271
- 生活208
- 村38, 44, 92

手織りの大幅布 (*Yadoti*)95, 101

出稼ぎ89, 114

出作り小屋82, 130

寺の世話役 (*Achān*)198

天水田135, 171

伝統10

- 社会と文化182, 204
- 主義10
- 的慣習67
- 的慣習の俗化63
- 的経済組織115
- 的宗教126
- 的宗教の変化173
- 的信仰生活25
- 的政策206

天の神 (*Tasē*)130, 131, 134, 143

天罰159

Hti Kani 村64, 105~121, 134~144, 233

- の気候32
- の住民の系譜225
- をめぐる諸言語226

Hti Topa 村32, 64, 73~102, 129~134

- の気候32

ト

投下労働262

統合された文化体系296

統治55

動産58, 69, 114, 123

同質の村落188

同族(祖)神192

“道徳的な”民族(集団)60, 181

道路建設47~48, 208

- の功罪49

道路工事88, 265

道路の完成48, 51

道路網86

東南アジア

- の言語8
- の作物構成の基本的類型78
- の自然と文化の多様性53
- の多様性と統一性8

得度215

独立家屋56, 92, 98

独立国274

独立ビルマ287

- に同化する政策286

土候国21

屠殺税184~185

都市33, 47, 259, 261, 270, 273

- 社会123
- 文明259

閉じた社会25, 66

閉じた文化9, 11

土壤浸食106

土壤の肥沃度79, 109

土壤有機物が分解84

土俗信仰127

土地

- 神 (the Local Lords)159~160
- 所有262
- 生産性83
- 生産性の低下168
- の原理115
- の処分権170
- の私有169
- 利用形態18

トラック便47~48, 86

トンスー・カレン族 (*Taungthu Karen*)30, 50

ナ

内婚70

内部財産 (*Taxo taxo ladapo*)69

内務省204, 220, 224, 268

- 公共福祉局206, 209, 212, 213

多年性作物の栽培207
 タブ70, 148
 田畑69
 —の所有, 占有98
 卵87
 多民族社会21
 多民族集団124, 139
 多民族との通婚65, 188
 タラット (市場)89
 単系の社会99
 —組織149
 単純再生産123, 265
 湛水現象84
 単線的発展論者257
 タンマ・チャリック (法の巡歴)218

チ

治安維持42, 219
 地位の象徴 (status symbol)113
 地域社会47, 95, 159, 165
 地域による商品価格の格差47
 地域組織198, 200
 小さな伝統186, 193
 地縁124, 267
 —原理193
 —集団173, 188
 —性115
 —組織164, 199
 —的171
 —的性格166
 チェンマイ・ジャン人38, 40
 チーク44~45, 113
 チーク材40, 43, 86
 —の伐採46, 236
 —の搬出47
 チーク産業46, 50
 地区長 (Kamnan)102
 治水189
 地税102
 地の神 (Ho Ko K'cha)139, 142
 血の原理90, 112, 124, 167
 血の純潔117~118
 チベット・ビルマ系民族21

チベット・ビルマ語族17, 29
 地方
 —機関42
 —的差異21
 —的タイ20
 —的タイ族22~23
 —的統一21
 —的な社会・経済体制21
 —都市21
 —の行政費41
 —町21
 —役場205
 茶17
 —栽培207
 仲介商業10
 中国人27, 89
 中央集権化35
 中央政府3, 12, 41, 54, 86, 101~102,
 184, 219, 269, 295
 —と属領100
 沖積平野11
 中部タイ人19~20, 28, 225
 チュラロンコーン大帝21, 35
 —時代36
 調査村31, 32, 183
 超自然(の)神 *Hti K'cha Ko K'cha*
 ...117, 129, 132, 142~143, 159~160,
 163, 165~166, 177, 187, 189~190
 —の神における社会・文化的性
 格の変化160, 187
 —の神の村神的性格への変化192
 —の神の常設の祠161
 徴税権42
 徴税組織121
 直接観察35
 地力の低下83
 賃金労働88
 チン族 (Chin)29, 298~269

ツ

妻方 (居住)63
 通婚104
 —圏65, 188

村落儀礼 (<i>Talutaphadu: Liang Phi Chaoti Chaodin Chaomüang</i>)	117, 120, 159, 161, 173, 180, 189, 266, 271
——の発生	187
村落経済	115
村落形態	56
村落社会	186, 188
——の変動	100
村落レベル	99
——以上の社会的統合	281~282
——以上の政治組織 (集団)	96, 100, 277

タ

タイ化 (<i>Thaiization</i>)	222, 254~255
——したカレン族	248
タイ・カダイ語系 (<i>Tai-Kadai</i>)	8
大家畜	85~86
大規模な生活様式の変化	208
タイ系	
——言語	231, 255
——言語の相関関係	254
——の住民	117
——の姓名	223
——平地民	62, 98, 102, 114, 128, 164, 187, 202, 266
——平地民文化	174
——民族集団	249
タイ国	45, 53, 147, 206, 212~213, 253, 268
——側の歴史的資料	34
——国民	214
——(中央)政府	204~205, 212, 221, 223~224
——政府の行政	120
——政府の社会的政治的ネットワーク	269
——西北地方	76
——とビルマとの間に締結した国境協定	219
——内務省	45
——におけるシベリア	33, 247, 253
——のカレン族	5, 29~30, 182, 274

——の国是	214
——の人文・社会関係の研究	34
——のなかでは孤立 (<i>Mae Hongson</i> 県)	54
——の輸出品	86
——北部	12, 123, 216
——北部の山岳地帯	73
タイ語	21, 215, 225, 232~233, 245~253, 255
——教育	215
——族	8, 19~20, 35
——と北タイ語の相関関係	242~243, 251
——の影響力	254
大首長	123
タイ人	20~21, 49, 222
——小学校	222
——になる (<i>Pen Khon Tai</i>)	200
——の村長	120
タイ族	19~22
——の歴史的発展	23
タイ・ターン族 (<i>Tai Khün</i>)	22
タイ・ヤイ族 (<i>Tai Yai</i>)	20~22
タイ・ユアン族 (<i>Tai Yuan</i>)	17, 22~23, 50, 83
タイ・ルー族 (<i>Tai-Lu</i>)	20~22
第二次英緬戦争	280~281
第二次世界大戦	34, 45, 121, 285
タイ風の名前	223
タイ文化	21
泰緬国境	219
——における地方史	274
田植え	110, 139~140
田おこし	84
タカリ族 (<i>Thakali</i>)	89
竹の工芸品	168
多数派 (民族集団)	64, 117
他姓他族	192
他生的かつ指導された変容	3, 4
多線的発展論者	257
脱穀	131, 134, 140, 143
——作業	132
——場	141, 143

政治

- 的危機 ……………283
- 的・経済的諸制度……………55
- 的・経済的優位……………21
- 的紐帯……………9
- 的統一性……………9
- 的統合……………101
- 的变化……………101
- 的要請……………223
- 的リーダー・シップ…99, 119, 124
- 問題……………293, 295
- 聖日から休日へ (from holy day to holiday) ……………197
- 聖書のカレン語訳……………279
- 精神界の指導者……………120
- 精神生活……………160
- 税制……………102
- 聖俗の指導者……………96, 101
 - 的機能を分離……………99
- 聖俗のリーダーシップ……………101
- 生態型 (森林の)……………32
- 性道徳……………147, 181
- 政府……………206, 214~215, 225, 255
 - 軍……………287
 - の (地方) 出先機関 ……101, 185
- 姓名……………222
- 精霊……………179
 - 信仰……………126, 279
- 世界宗教……………9, 53
- 殺生……………267
 - 戒……………174, 186
- 施肥……………80, 110
- 全外国人宣教師のビルマからの追放 ……288
- 前産業型都市 (preindustrial city) ……272
- 先祖霊……………191
- 占有 (土地の)……………71
 - 権……………69, 170

ソ

- 象……………43~44, 48, 69, 71, 85, 113
 - 使い……………48
 - の価格……………85
 - の用役権……………70

- や馬を輸送に利用……………47
- 僧院……………40, 214
- 早期独立……………285
- 双系社会……………146
- 双系的……………67, 72, 104
 - 傾向……………71, 99, 144, 146, 165
 - 原理……………72
 - 社会組織……………70, 192, 264
 - 親族組織……………104
 - な権利・義務の授受……………71
- 相互依存的 (性格)……………25
- 相互作用……………28
- 創氏改名……………223
- 総収量 (稲の)……………85
- 相続 (財産の)……………69, 170
- 僧侶 (*Tuchao*) ……40, 174, 198~199, 216, 218
- 族外婚 (exogamy)……………104
- 組織社会 (*sociétés organisés*)……………258
- 組織宗教……………7, 126
- 祖先……………94
- 俗化 (secularization)……………62, 129, 270
- 俗界の指導者的役割……………99
- 粗放的な焼畑農業……………112
- 粗放的農耕方式……………110
- 祖霊 (母系の家神)……………159
 - の後退と勧請神の進出……………191
- 村会……………120~121
- 村長 (*Kae Ban*) ……95, 99, 101~102, 119, 124~125, 182, 216
- 村内婚……………64~65
- 村内の自治……………120
- 村落……………201
 - 以上の社会的凝集力……………203
 - 外との通婚……………201
 - における社会的性格の変化 ……193
 - 内のリーダーシップ……………120
 - の境界……………171
 - の社会組織……………171
 - の成員……………171
 - の編成原理……………115, 124
- 村落構造……………73, 167
 - の変化……………167

初源的農民 (emergent peasantry) ……	272
諸神の屬性変化 ……	193
女性の司祭役 (<i>Xeko</i>) ……	156
女性の地位の高さ ……	8
除草 ……	80, 110
初等教育 ……	206, 218~220, 268
所得水準 ……	50
自律集団 (corporate group) ……	55, 104, 146, 165, 192, 264
白い兄弟 ……	278
代かき ……	84, 167
白カレン族 (White Karen) ……	30, 44
白タイ族 (White Tai) ……	21
シンクレティズム (重層信仰) ……	11
人口	
——圧力 ……	96
——過剰 ……	293
——支持力 ……	293
——増加 ……	83
新婚夫婦 ……	62
人種 ……	23
神像 (村神の) ……	188
親族 ……	55, 66, 146
——呼称 ……	67, 71
——集団 ……	55
——組織 ……	67, 71, 173
——組織の弱体化 ……	186
——の範囲 ……	70
——用語 ……	68
人頭税 ……	102
親米・親英的なカレン族 ……	281, 285
新米 ……	132~133, 143~144
森林業者 ……	40
森林資源 ……	292
森林の荒廃 ……	83, 292
神話 ……	27

ス

水牛 ……	49, 69, 71, 84, 86, 112, 122, 167~168, 181
——の導入 ……	167
水田 ……	106, 136
——化 ……	45

——の開拓 ……	168
——の灌漑 ……	164
——の総面積 ……	50
——の造成 ……	83, 169
——の破壊 ……	49, 85
水田稲作 (農業) ……	9, 23, 42, 71, 80, 83~84, 106, 111, 122, 128, 134~135, 145, 167~168, 171, 262, 267
——の導入 ……	84, 167, 169, 171~172, 262~263
水田所有面積 ……	111
水田農業 ……	50, 106, 128, 171
——に関する儀礼 ……	134
——のエコロジー ……	105
——の技術 ……	106
——の導入 ……	188
水田農耕文化 ……	164, 172
水田農耕民 ……	106
水稲 ……	84, 293
——栽培 ……	263
——の移植 ……	140
——の刈り取り ……	140
——の平均収穫量 ……	140
<i>Sue-dok</i> ……	138, 143, 161, 198
——の葉 ……	162~163
スゴウ・カレン (Sgaw-Karen) ……	6, 30, 38, 279
——語 ……	225
——語の読み書き ……	225
——族 ……	6, 30, 62, 67, 154, 189, 282

セ

生活必需品 ……	123
生活様式 ……	9, 18, 53
性関係 ……	146, 181
税金 ……	43, 184, 205
生産 ……	55
——関係 ……	257
——技術の性質 ……	8
——手段 ……	123
——の不安定性 ……	293
——要素 ……	123
——力 ……	257

- 的座標 ……………186, 200
- の再編成 (reorganization) ……266
- の組織破壊 ……………188, 266
- 類型 ……………6
- 社会・文化変容 3~4, 25, 178, 186, 189, 199, 202, 220, 225, 255, 257, 260, 264, 268, 270
 - の促進 ……………204
 - の誘因 ……………267
- シャム
 - 時代……………41
 - 人……………20, 43
 - 政府……………34, 41
- シャン
 - 系隠者……………177
 - 系の北タイ人……………50
 - 系もしくは北タイ系仏教文化……………176
- シャン系やタイ系の平地民……………197
- シャン語……………23, 143, 179, 225~226, 231, 244, 254~255
 - とカムー語……………242
 - とカムー語の相関関係……………239
 - とビルマ語……………237
 - とビルマ語の相関関係……………237~238
- シャン商人……………40
- シャン人 ……23, 38, 40, 42, 106, 175~176, 187~188, 191, 198, 225
 - の行者……………179
 - の村……………37
- シャン文化……………223, 231
- 集会場 (*Blō; Blaw*)……………72, 91, 183
- 収獲……………82, 93, 111
 - 儀礼……………82
- 就学率……………248
- 宗教……………200
 - 儀礼……………25, 71, 91, 113, 127, 165
 - 生活……………72, 80
 - 的行事の減少と世俗化……………186
 - 的指導者……………99
 - 的自足性……………271
- 集会的類型 (le type collectif) ……258
- 集団の秩序に関する儀礼……………144~163
- 住民の所得……………50
- 集約的水稲作……………53
- 集約的な土地利用形態……………106
- 主体的発展……………261
- 出生……………58
- 主婦の死亡……………67, 72
- 狩猟……………88, 174, 267
 - 経済……………267
 - 採取的な漂泊生活……………17
 - 生活……………267
- 小家きん……………87
- 小家畜……………87
- 奨学金制度……………221
- 小学校……………220~221, 223~224, 226, 248, 253
- 商業……………10
 - 活動……………115
 - 語……………237, 244
- 小乗仏教……………7, 193, 202
- 少数民族……………9, 29, 295
 - の利害……………287
 - 問題……………288
- 招婿婚……………61
- 常駐高等弁務官 (Resident Commissioner)……………100
- 消費物資……………47~48
 - の物価高……………47
- 商品……………113, 115
 - 化……………111
 - 経済……………114
 - 経済化……………115
 - 作物……………112
 - の価格差……………47
 - 流通……………114, 123
- 上部の政治的变化……………100
- 照葉樹林帯……………7, 76, 291
- 食台 (*Sabi*)……………133
- 植民地支配者への協力……………283
- 食物に関するタブー……………181
- 食邑 (*Kin Mūang*)……………41
- 食糧……………123
 - 不足……………147, 293
- 諸言語の相関関係……………226, 233

——の考え方	170
——の村落	73
——の村落の定着化	168
——の農業	85
——の村	56
——の焼畑農業	110
山地における焼畑農業	291
山地農業	16
山地民	9, 11, 13~15, 18, 37, 45, 179, 204~205, 209, 214, 219, 221, 224
——課	207, 224
——対策	206, 224
——対平地民の関係	276
——の垂直分布	18
——の水平分布	18
——の間の政治的統一性	53
——の開化	288
——の教育問題	220
——の社会・経済調査	209
——の社会・文化変容	213, 218
——の占める割合	50
——の福祉施設 <i>Nikhom</i>	207
——の仏教化計画	216
——の分布	19
——族	18, 256
——問題	212, 224
——や少数民族の福祉	219
三等親	70

シ

寺院 (<i>Wat</i>)	194, 201, 267
自家醸造税	121
識字運動	213
自給経済	73
自給自足的	90
——経済	113, 123
——性格	122
自己完結性	4, 113, 122, 125, 188, 224
自己完結的な生産活動	139
死罪	182
司祭役	91, 141, 149, 151
——の <i>Xeko</i>	153, 154, 156
持参金	61

市場	114~115, 123
——経済	47, 89, 111, 113~114, 122~123, 204, 264, 272~273
紙上行政 (<i>paper administration</i>)	95, 101, 124, 226
自生的変化	3~4
自然条件	31
自然信仰	126
自然的・文化的孤立	33
氏族 (<i>clan</i>)	55, 118, 146
自治	120
七圃式 (農業)	170
疾病	93
私的占有 (土地の)	169
指導された社会・文化変容 (<i>directed socio-cultural change</i>)	204, 220, 222, 224, 268
シナ・チベット語系	8, 29
司法・行政機構	184
社会	258
——構造 (<i>social structure</i>)	127
——集団	97
——組織	55, 58, 90, 115, 123~124, 114, 267
——秩序	171
——発展	22, 257~258
——問題	293
社会的	
——移動性	236
——基礎集団の秩序	145
——凝集力	183, 200
——自己完結性	271
——政治的ネットワーク	268
——制約	174
——接触	201
——相互関係	201
——統合	95, 146
——統制	101~102, 120, 124
——流動性	66
社会・文化	
——秩序の再編成 (<i>reorganization</i>)	271
——的環境	255

——の水準の評価方法 ……………229
 ——の年齢層別理解力 ……………227
 ——の問題 ……………217, 225
 県庁所在地 ……………45
 権利・義務関係 ……………70

コ

交換 ……………55
 後期農民 (post-peasantry) ……………272
 耕作技術 ……………112, 122
 抗日活動 ……………285
 交通事情 ……………213
 行動様式 ……………146
 国王 ……………195
 穀倉 ……………134, 143
 国内の国境 ……………213
 国民 ……………21, 205
 ——意識 ……………21
 ——会議 ……………285
 ——感情 ……………21
 ——形成 ……………3, 49, 54, 102, 176, 184,
 204, 206, 213, 223~225, 254~256,
 288, 295
 ——形成の指導 ……………225
 ——形成の象徴 ……………231
 ——国家 ……………3, 295
 ——総人口 ……………30
 ——的タイ ……………20
 国連調査団 ……………208
 個人 ……………261
 ——化 (individualization) ……………63, 270
 ——主義的傾向 ……………80
 ——的類型 (le type individual) ……………258
 古代の王国 Yunzaleen ……………36
 国家形成 ……………19
 国家との政治的紐帯 ……………53
 国家レベルの文明 ……………268
 国教 ……………218
 国境 ……………31, 47
 ——警察 (Border Patrol Police)
 ……………218~221, 224
 ——問題 ……………295
 個別経営間の共同作業 ……………110

個別の家族経営 ……………171
 コミュニケーション ……………65, 204, 216, 265
 米の二期作 ……………40
 古老 ……………91
 コロニアリズムの走狗 ……………281
 コロニアリズムの本質 ……………284
 婚姻 ……………116, 171
 根栽型焼畑 ……………76, 78, 291
 婚出 ……………58
 婚入 ……………65
 コン・タイ (Khon Thai) ……………20
 コン・ムアン (Khon Muang) ……………20, 23
 ——社会 ……………21

サ

災害 ……………147~148
 財産 ……………67, 93
 ——権 ……………58
 ——相続 ……………69
 採取民的性格 ……………17
 最小拡張家族 (minimal extended
 family) ……………56, 71
 祭政一致 ……………99, 102
 最大の自律集団 ……………144
 祭壇 (Talú) ……………142
 裁判 ……………281
 債務奴隷 ……………277
 作物 ……………79
 雑穀卓越型 (焼畑) ……………76, 291
 サバンナ化 ……………292~293
 差別意識 ……………10
 サマーネン (少年僧) ……………215
 サンガ (仏教僧団) ……………212, 214, 217
 山村 ……………102, 183
 散村 ……………11
 山地カレン族 ……4~5, 24~25, 38, 56, 67,
 71, 74, 88, 90, 92, 96, 100, 117, 121~
 124, 128~129, 140, 144, 147, 157,
 160, 165, 167~169, 171~172, 174,
 190, 197, 263, 265, 267, 276, 280
 ——的生活様式 ……………106
 ——と平地カレン族の差異 ……………65
 ——の家屋 ……………75

教師	221, 224
行商	112, 115, 123
共同作業	80, 82, 110~111, 261, 265
共同組織	261
共有	71
——財産	104
強力な指導者	96
強力な排他性	282
極限概念	258~259
キリスト教	126, 148
——化	176, 190, 281~282
——徒	149, 176, 283
——徒の指導者	282
——に帰依	181, 279
——の宣教師	44, 276~281
——の宣教師の扇動	280
——の布教	44, 214, 276~282, 288
——の布教活動の政治化	280
行政	204~205
——官	205
——機関	137
——的支配	206
——的措置	212
儀礼	25, 126
——集団	148, 156, 183, 265
——の選択的採用	161
——の俗化と簡易化	158
——の reinterpretation	161
近代化	21, 224
近代教育	282
近代国家	100, 206, 222
——建設	295
近代産業の勃興	272
近代的な国民国家	213
金の山 Doi Kham	163, 190
均分相続	69~70
——的原理	58

ク

草むしり (焼畑の)	82
供物	132
クリスチャン・カレン	176
黒タイ族 (Black Tai)	21

郡 (<i>Amphoe</i>)	31, 45
郡長 (<i>Nai Amphoe</i>)	45
郡役場 (<i>Amphoe</i>)	31, 102, 124
——支所	205

ケ

経営単位	111
鶏骨によるうらない	103, 169
経済生活	71, 80, 84, 88, 113, 122~123, 128, 217, 282
警察	25, 42, 184~185, 206
形質人類学	23
系譜	10, 94
——図	98
けし	16~17, 206
——栽培禁止令	293~294
——栽培の収益	294
——に代わる代替作物	294
化身	177
ゲゼルシャフト (<i>Gesellschaft</i>)	258
血縁	124, 171, 189, 193, 267
——原理	193
——共同体	264
——集団	94, 97
——組織	98, 199
——的結合	117
——的編成原理	115
結婚	58~59, 61~63, 265
——形態	232
——後の (基本的) 居住形態	62, 64
——式	60~62
——適齢期	59
月収	50
ゲマインシャフト (<i>Gemeinschaft</i>)	258
県 (<i>Changwat</i>)	105
限界地	136
現金収入源	87
言語	225
——学	29
——グループ	30
——習得能力	232
——生活	229
——的同質性	19

—のゲリラ部隊 ……285
 —の社会 ……144, 202
 —の社会組織 ……67, 72
 —の社会・文化変容 ……173, 190, 263
 —の宗教儀礼 ……129
 —の首長 ……93, 205
 —の将来 ……289
 —の政治史 ……281, 282, 288
 —の説話 ……132
 —の祖先 ……27, 28
 —の血を血で洗う闘争 ……278
 —の地下活動 ……285
 —の伝説 ……26, 277
 —の伝統的服装 ……141, 150, 155
 —のナショナリズム ……282
 —の反乱 ……282
 —の年齢 ……229
 —の分布 ……26, 28~30
 —の北方起源説 ……27
 —の民族の祈り ……280
 —の歴史 ……274~275
 —の劣等感 ……282
 —の焼畑農業 ……79
 カレン独立州 ……284
 カレン民族防衛軍 (KNDO) ……286~287
 カレン暦 ……79, 109
 ガロ族 (Garo) ……55
 灌漑 ……42, 169, 189, 262
 —溝 ……40, 137, 139
 —水 ……83~84, 109~110, 135
 —水路 ……49, 136
 —治水 ……171
 —堤の神 ……131
 乾季 ……109, 208, 213
 官憲 ……42, 184
 官選村長 ……96
 環節社会 (sociétés segmentaires) ……258
 姦通 ……181~182
 カンボジャ人 ……116, 225

キ

機械的な集合体 ……258
 企業的農民 (farmer) ……272

気象 ……32
 技術的秩序 (technical order) ……266
 犠牲 ……130, 147, 154, 162
 —執行役 (*Dosudā*) ……162
 —動物 ……87
 —は無効 ……157
 —用の豚 ……152~153
 基礎経済 ……18
 基礎集団 ……127, 145
 —の秩序維持 ……165, 173
 —の秩序に関係する宗教儀礼 ……164
 北タイ化 (*Yuanization*) ……254~255
 北タイ系とジャン系の住民 ……161
 北タイ語 (*Kha Müang*) ……45, 143, 150, 225~226, 231~232, 245~255, 269
 —とカムー語の相関関係 ……240
 —とジャン語 ……244
 —とジャン語の相関関係 ……241
 —とタイ語 ……244
 —とタイ語の相関関係 ……250
 —とタイ語の理解力 ……250
 —とビルマ語 ……236
 —とビルマ語の相関関係 ……235
 —の水準 ……236
 —やビルマ語の資料 ……274
 北タイ人 (*Khon Müang*) ……20, 23, 28, 35, 42, 73, 106, 116, 122, 136, 141, 175~176, 187~188, 191, 198~199, 225~226, 265
 —の僧侶 ……202
 北タイ風とジャン風の平地民的服装 ……180
 北タイ風もしくはジャン風の風俗 ……180
 北タイ文化 ……223
 機能主義 ……258
 規模 (scale) ……65
 義務教育 ……269
 客室 ……97
 客体的, 他生的な変化 ……268
 求愛 ……59
 教育 ……204, 207, 221, 223, 278
 —の発展 ……282, 284
 共餐 ……141, 181, 189

欧文の資料	34
オストロアジア (Austroasia) 語系	8, 19
——山地民	17
オストロアジア語族	17
オストロネシア (Austronesia) 語系	8
親子の間の共餐	280
織物	168

カ

外界	200, 223~225
——の関係	100
——の文化	229
外国からの援助	210
外国人アドヴァイザー	210
外国人 (の) 宣教師	213, 218, 280
外国政府	210
階層分化	111, 268
開発福祉センター	209
外部から任命された村長	99
外部からの衝撃	184
外部権力	95
外部財産 (<i>Talo taklelesukukō</i>)	69
外来言語	255
家屋	72, 97, 98, 151
華僑	30
下級労働者	114
核家族	56, 71
拡張家族 (extended family)	57
家計	87
カースト	118, 119
“家族” (<i>Dopuweh</i>)	55~56, 66, 70~72, 144, 146~147, 149~150, 153~154, 165, 176, 178, 183, 261, 264
——全員の宿泊	155
——の最年長の女性 (<i>Xeko</i>)	150
——の成員	180
家族儀礼 (<i>Oxe</i>)	72, 117, 142, 145~148, 150, 154~155, 159, 165, 173, 176, 178, 180~182, 184~185, 189, 264
——などの俗化	185, 190
——の中止	176, 179
——の変化	174

——を受け継ぐ時の方法	158
——を行なう儀礼集団は母系親族集団	149
家族形態	57, 59
——構成	58
——構造	8
家族労作型	111
価値基準	10
家畜	102, 112, 184, 207
学校教育	208, 215, 222, 226, 246, 248, 253
カトリック	7, 158, 279
家内工業の育成	207
貨幣	45, 111, 114~115, 123
貨幣経済	89
カムー語	226, 230, 255
——語と北タイ語	242
カムー族 (Khamu)	116, 225
カレニー族 (Karenni)	30, 38
カレン語 (スゴー)	143, 151, 162, 180, 216, 226, 278, 279
カレン族 (Karen)	4, 17, 19, 21, 24, 26, 28~30, 42, 44, 46, 50, 53, 76, 90, 92~93, 96~97, 114~116, 118, 123~124, 126, 132~133, 136, 147, 165, 168, 171~172, 176~177, 199~200, 229, 257, 261~262, 265, 267, 272, 275
—— (名称)	
<i>Kareang</i>	28
<i>Karieng</i>	28
<i>Nyang</i>	28
<i>Ya</i>	28, 73
<i>Yan</i>	28
<i>Yang</i>	28
——出身の行者	178
——全体の人口	29~30
——定着村	37
——になる	117, 124, 171, 188
——の identity	264
——の創氏改名	222
——の虐殺事件	285
——のキリスト教化	279
——の口伝	26

事項索引

ア

赤カレン族 (Red Karen)	30
アカ族 (Akha)	15, 18
悪霊 (<i>Damuza</i>)	142, 281
圧制と搾取	275
アニミズム	23, 126, 177, 193, 217, 268
アノミー	266
アメリカの宣教師	44, 278, 279, 288

イ

家	147
家神	60, 67, 72, 117, 145~148, 150, 152 ~153, 158~159, 165, 174, 176, 178~ 183, 192, 264~266, 270, 280
家神 <i>Bgha</i> からの解放	179
家神の後退傾向	191, 192
イギリス	
——軍に直接協力	278, 280
——人	278~279
——政府	283, 284, 288
——の植民地官吏	276
——の植民地支配	277, 280, 282
生ける有機体	258
遺産相続	86
異質化	87
異質な生産様式の導入	167
異質な住民	226
異質的要素	117, 188
一日の収入	114
一等親	70
田舎の水祭り	197
稲魂 (<i>Bu K'la</i>)	129, 132, 140, 141, 143
稲の成育期間	129
稲の播種	110, 132
いのしし	26, 27
イバン族 (Iban) の long house	58, 95, 104, 146

異民族 (集団)	21, 255
いや地	83~84, 293
姻戚関係	112
インテリゲンチヤ	222
インド人(現在のパーキスターン人)商 人	106
インド・ルピー	34, 45

ウ

雨季	32, 199, 208, 213
氏神	192
失われた本	277
産土神	192
うらない	62, 103, 157
うるち米	25

エ

英文資料	275
英緬戦争	276, 278
英領時代以前のカレン族とビルマ人 の関係	275
英領ビルマ時代のカレン族	284
役畜	167
エコロジ	65, 121, 135, 164, 172
——の変化	204
エコロジカルな適応	117, 128, 135, 145
エスキモー型 (親族組織)	67, 71
エロジョン	292
園芸的農業	16
遠方の都市	156

オ

王 (<i>Chao</i>)	95
大型家畜	69
大きな伝統	62, 176, 186, 193, 199~200, 202, 222~224, 267
黄金時代	276, 284
王朝の盛衰	12

事 項 索 引

外国語事項索引

人 名 索 引

地 名 索 引

著者略歴

1932年 横浜生まれ。1955年 東京教育大学卒業。京都大学大学院。インド、アメリカ留学を経て京都大学助手、助教授（アジア経済研究所）ロンドン大学客員講師
現在 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助教授

【カレン族の社会・文化変容】

東南アジア研究会双書 5

昭和四十六年十一月三十日 第一刷印刷
昭和四十六年十二月五日 第一刷発行

定価 二〇〇〇円

著者 飯島茂

発行者 久保井理津男
東京都千代田区一番町一七二三

印刷者 中内佐光
東京都文京区大塚六一一五



発行所

東京都千代田区
一番町一七二三

株式会社

創文社

〒102 電話〇三(二)六三(三)七二〇二
振替東京 九二四七二

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

晝印刷・橋本製本

3336-896020-4226